

芦屋市

六条遺跡

2003年3月

藤氏時安
家

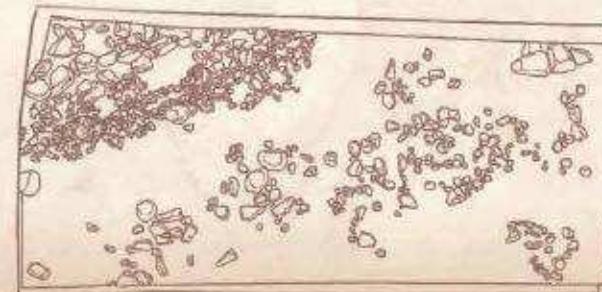
強室

未

本様室

民
特
天

跡



六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号 出土地・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法	他	形態の特徴	備考
	980223									
1	6トレンチ 黒シルト	縄文土器	浅鉢	(39.1)	(9.2)	(37.9)	ナデ'整形・調整のちヨコナデ'			
2	6トレンチ 黒シルト	縄文土器	浅鉢	(36.3)	(6.1)	(40.1)	ナデ'調整		2段に屈曲する口縁部、端部大きく肥厚、リボン状突起	
3	6トレンチ 黒シルト	縄文土器	浅鉢	—	(2.7)		ヨコナデ'		内湾する体部から直立する口縁部に、端部尖りぎみにならか	表面磨滅
4	6トレンチ 黒シルト	縄文土器	鉢	(33.1)	(7.0)		クシリ、条痕のちヨコナデ'、外面紙様の刺突文		口縁部肥厚する	
5	6トレンチ 黒シルト	縄文土器	深鉢	—	(5.6)		ナデ'仕上げ、外面下半削り		外反する口縁部で、端部丸い	
6	11トレンチ 黒シルト	縄文土器	深鉢	—	(4.95)		ナデ'仕上げ		口縁部外反する、端部各張りぎみ	
7	6トレンチ 黒シルト	縄文土器	深鉢	(31.5)			ナデ'		外反する口縁部で、端部丸い	
8	6トレンチ 黒シルト	縄文土器	深鉢	(23.05)	(4.5)		ヨコナデ'、頸部に1条の沈線、外面下半はケスリ		外反する、端部は角張るが丸い部分もある	
9	11トレンチ 黒シルト	縄文土器	深鉢	(23.75)	(6.8)		ヨコナデ'		内湾する体部から、口縁部は直線的に延びる端部は丸い	
10	10トレンチ 黒シルト	縄文土器	深鉢	(43.1)	(5.3)					
11	11トレンチ 黒シルト	縄文土器	深鉢	—	(3.6)		ヨコナデ'		下向きの把手がつく、鋸剥離	
12	6トレンチ 黒シルト	縄文土器	深鉢	(23.5)	(5.8)		ヨコナデ'、粘土の擦ぎ目明瞭		直線的で突端状の段を有する	
13	6トレンチ 黒シルト	縄文土器	深鉢	—	(15.5)		ヨコナデ'		内傾する口縁部で端部は丸い	
14	8トレンチ 灰褐色土	須恵器	杯身	(12.9)	(2.9)		ヨコナデ'		長卵形の胴部から、遼かな頸部となり端部へ外反して微く	
15	7トレンチ 洗水砂	須恵器	杯身	(1.7)	(14.1)		クロロナデ'		直線的な体部から外反して尖った端部になる	
16	10トレンチ 黒色シルト	石器	剥片	5.3	3.6	0.6	背面から剥離		高台は内外へ肥厚する	
		990233								
17	A-1 灰褐色砂	白磁	碗	(16.1)	(4.3)		全体に施釉		内湾し、端部は玉縁になる	
18	A-3 SK02	土師器	皿	(9.3)	(1.6)		エビ'成形のち端部付近のみヨコナデ'		口縁部ひずみあり、内面裏付着	
19	A-3 SK02	土師器	皿	(9.4)	(1.7)		エビ'成形のち端部付近のみヨコナデ'		口縁部ひずみあり	
20	A-3 SK02	須恵器	楕	(16.2)	(4.6)	(5.5)	ヨコナデ'、底節糸切り		内湾し、端部は丸く箇かに肥厚	
21	A-3 SK02	須恵器	楕	(28.6)	(4.9)		ヨコナデ'		直線的で端部は内外に肥厚	
22	A-3 SK02	須恵器	楕	(29.8)	(7.0)		ヨコナデ'		やや内湾ぎみの直線的な体部で、端部は肥厚	
23	A-3 SK04	土師器	皿	(9.2)	(1.7)		エビ'成形のち端部周辺のみヨコナデ'、内面ナデ'		体部途中で屈曲し、端部は内湾する	
24	A-3 SK04	土師器	皿	9.8	1.8		エビ'成形のち端部周辺のみヨコナデ'、内面ナデ'		緩やかに内湾する	
25	A-3 SK04	土師器	皿	9.9	1.6		エビ'成形、端部周辺のみ強いヨコナデ'、内面ナデ'		ての字口縁で屈曲する。底部は内湾する	
26	A-3 SK04	土師器	皿	9.5	1.7		エビ'成形のち端部周辺のみヨコナデ'、内面ナデ'		ての字口縁で、底部は平坦	
27	A-3 SK04	土師器	皿	(14.2)	2.2		ナデ'整形のち、端部はヨコナデ'		緩やかに内湾する	
28	A-3 SK04	土師器	皿	(15.5)	(2.5)		ナデ'整形、端部はヨコナデ'、体部に少しきずれ		平坦な底部からやや外反する。薄手に仕上げる	
29	A-3 SX01	土師器	皿	(8.8)	1.8		ナデ'整形のち、端部はヨコナデ'、粘土緑色目明瞭		緩やかに内湾し、端部は丸く厚い	

数値の（ ）は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法		形態の特徴	備考
							他			
30 A-3 SX01	出土地・土層	土師器	皿	(8.9)	1.2	エビ成形のち端部周辺のみヨコナデ、内面ナデ	緩やかに内湾し、端部は丸い			内面に有機質付着
31 A-3 SX01	土師器	碗			(1.9)	5.2 ヨコナデ、高台貼り付け	外反する高台部			
32 A-3 SX01	須恵器	碗			(2.2)	5.5 ヨコナデ、底部糸切り、内面仕上げナデ	底面平坦で、体部内湾する			
33 A-3 SX01	瓦器	碗			(3.3)	(5.0) ハビ整形、内面ミガキ	断面三角形の輪高台、体部内湾			
34 A-3 SX01	瓦器	碗		(1.4.6)	4.8	4.2 ハビ整形、内面ミガキ	断面方形の輪高台、体部内湾			
35 A-3 SX01	瓦器	碗			2.1	(9.0) ハビ整形、内外面ミガキ	断面三角形の輪高台、体部内湾			
36 A-3 SX01	木器	木箆		21.2	1.8	0.3 頭部圭頭に、先尖らず				「はり口口」
37 A-3 SX01	黒色シルト木器	栓？		(12.7)	2.8	2.7 心持材、全体に工具痕跡	頭部削り出して作る			
38 A-3 SX01	黒色シルト木器	木鍤		(14.0)	5.2	3.9 側面に加工痕	細い歯形になる			
39 A-3 SX01	土師器	壺		(32.5)	(28.8)	(31.6)	エビ成形からハビ整形、ナデ調整	体部直立込み、端部両端とも角張る		
40 A-3 SX01	土師器	壺		(11.6)	(15.1)	ハケ整形、鋸部ナデ	湾曲する体部			
41 A-3 暗褐色砂	土師器	皿		(10.4)	(1.7)	エビ整形のち口縁部ヨコナデ	ての字口縁で凹曲する。底部は内湾する			
42 A-3 暗褐色砂	土師器	皿			9.8	1.8	エビ成形のち端部周辺のみヨコナデ、内面ナデ	平坦な底部から内湾する体部		
43 A-3 暗褐色砂	土師器	皿		(8.3)	1.6	エビ整形のち口縁部ヨコナデ	平坦な底部から直線的に広がる短い体部			
44 A-3 暗褐色砂	須恵器	皿		8.5	2.0	5.2 ロクナデ、底部糸切り	やや上げ底で内湾する体部			
45 A-3 暗褐色砂	土師器	羽釜			(5.3)	ハビ整形のちヨコナデ				
46 A-3 暗褐色砂	須恵器	壺		(16.6)	(3.5)	ロクナデ	直線的な体部で端部は丸い、			
47 A-3 暗褐色砂	須恵器	壺		(16.5)	(4.4)	ロクナデ	やや内湾する体部で、端部は丸い、			
48 A-3 暗褐色砂	灰釉陶器	皿		(9.7)	(1.9)	ロクナデ、底部近くに鉗胎	口縁部は直線的に延び、端部は細く丸い、			
49 A-3 暗褐色砂	白磁	碗		(14.5)	5.5	(6.3) 剥り出し高台、ロクロスリのちロクロナデ、底部縫胎	内湾する体部で端部は玉縁になる、高台は断面台形			
50 A-3 暗褐色砂	須恵器	杯身		(15.1)	(3.2)	ロクロスリのちロクロナデ	内湾する体部、たちあがり部は器肉厚い、			
51 A-3 黒褐色砂	須恵器	蓋			(3.8)	(10.1) ロクロスリのちロクロナデ、貼り付け高台	断面台形でやや肥厚する、底部・体部は直線的			
52 A-3 黒褐色砂	須恵器	碗		(16.0)	(5.3)	(4.9) ワロナデ、底部糸切り	底部小さく、直線的な体部との接線不明瞭			
53 A-3 黒褐色砂	須恵器	碗		(16.2)	(4.8)	(4.1) ワロナデ、底部糸切り	接線不明瞭で、内湾する体部、端部は丸くやや外へ開く			
54 A-3 碑層下	土師器	壺		(14.5)	(2.8)	エビ整形のちヨコナデ、内面ナデ仕上げ	頸部から外反し、端部は内側に肥厚する			
55 A-3 碑層下	須恵器	壺			(4.0)	(12.3) ワロナデ、底部ペラ切り、貼り付け高台	平坦な底部から内湾する体部となる、高台はやや外へ開く			
56 B-3 暗渠	木器	下駄		23.0	11.1	2.2 齧削り出す	一部欠損			
57 C-1 SK03	土師質	七厘		(19.8)	(9.9)	ナデ仕上げ	外反する、口縁部厚く角張る、内面に4箇所の突起	No.58と同一個体		
58 C-1 SK03	土師質	七厘			(11.7)	(14.0) ナデ仕上げ、底面未調整	底部からほぼ直立した体部になる、	No.57と同一個体		
59 C-1 SK03	瓦質	壺			(4.9)	(17.6) ヨコナデ、一部ナデ仕上げ	3箇所の脚部を貼り付ける、体部直線的			
60 C-1 SK03	瓦質	壺		(18.7)	(3.7)	ロクナデ	内湾し、端部大きく肥厚する			

数値の（ ）は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法	他	形態の特徴	備考
	出土地・土層									全体に煤付着
61 C-1 SK03		土師質	蓋	(26.2)	4.9		型作り、外面丸状		浅く内湾し、端部は肥厚する	
62 C-1 SK03		瓦質	壺	(24.2)	(12.5)		型作り、布の痕跡、外面丸状		外反し、端部は面を持つ、端面に金具を巻いたか	
63 C-1 SK03		瓦質	壺		(16.3)	(18.3)	内面ハサ仕上げ、ヨコナ'		底面平坦、体部直立しキャリバー状に湾曲する、脚部付加	
	2000109									
64 B-7 SX01		弥生土器	壺		(9.2)		ハサ形、摩滅		内湾する体部、竹管文	
65 B-7 SX02		弥生土器	(底部)		(2.8)	(6.7)	磨滅		底やや上げ底	
66 B-7 SX02		弥生土器	壺(底部)		(3.3)	(7.7)	磨滅		内湾ぎみになる体部	
67 B-7 SX02 SX03		弥生土器	壺	(22.6)	(13.4)		内外面ともにハサ形、外面沈熱・竹管文・刻み		内湾ぎみの体部からし字形の口縁部になる	
68 B-7 SX03		弥生土器	壺	(18.3)	(4.7)		ハサ形のちヨコナ'仕上げ、4条の沈線		直線的に延びる体部で、口縁部折曲げる	
69 B-7 包含層		弥生土器	壺		(8.4)	4.2	磨滅、ナ'仕上げか		上げ底で体部は算盤玉状になる	
70 B-7 黒褐中砂上面		弥生土器	壺(底部)		(3.8)	9.1	磨滅		厚い器肉	
71 B-7 包含層		弥生土器	壺(底部)		(4.8)	(7.0)	ナ'仕上げ		直線的に外へ延びる	
72 B-7 黒褐中砂		弥生土器	壺(底部)		(6.9)	(0.8)	磨滅		やや外反する体部	
73 B-7 包含層		弥生土器	壺(底部)		(9.7)	(12.2)	外面ハサ形、ガ'仕上げ		直線的に外へ延びる体部、やや上げ底	
74 B-7 包含層		弥生土器	壺		(19.6)	(7.0)	磨滅、口縁部ヨコナ'、刻み目		湾曲して外へ開いて口縁部に続く、端部は丸い	
75 B-7 包含層		弥生土器	壺		(19.6)	(6.9)	ハサ形、刻み目		湾曲して外へ開いて口縁部に続く、端部は角張る	
76 B-7 黒褐中砂上面		弥生土器	壺		(23.1)	(0.4)	磨滅		やや内湾する体部	
77 B-7 包含層		弥生土器	壺		(26.8)	(4.6)	磨滅、4条の沈線、刻み目		直線的な体部	
78 B-7 包含層		弥生土器	壺		(26.4)	(0.3)	磨滅、3条の沈線、細い刻み目		外へ湾曲しながら広がる	
79 B-7 包含層		弥生土器	壺		(30.0)	(0.2)	ハサ形、磨滅		湾曲して広がる、端部丸い	
80 B-7 包含層		弥生土器	壺		(22.0)	(7.7)	磨滅、4条の沈線、刻み目		直線的に広がり、口縁部折り曲げる、端部丸い	
81 B-7 包含層		弥生土器	壺		(37.5)	(6.8)	板ナ'、ガ'整形・調整、口縁部ヨコナ'		内傾し、口縁部外方に短く曲げる	
82 B-7 包含層		弥生土器	底部		(3.6)	5.2	底部再成形、内面ナ'		内湾ぎみに体部延びる	
83 B-7 包含層		弥生土器	壺		(8.8)	(6.8)	磨滅、内面にも有機質あり		内湾ぎみに体部延びる	
84 B-7 SD01 東側		弥生土器	壺		(15.2)	(4.6)	内面とヨビ成形のち板ナデ		内湾ぎみに体部延びる	
85 B-7 SD01 中央部		弥生土器	底部		(5.2)	(8.9)	ヒ'成形のちガ'、ヨコナ'		端部丸く納める	
86 B-7 SD01 西側		弥生土器	壺		(10.3)	(10.4)	外面ハサ形、内面ナ'		底部から大きく開く、直線的に延びる	
87 B-7 SD01 西側		弥生土器	壺		(10.3)	(10.4)	外曲ナ'のちハサキ、内面ナ'		球形の体部、底部やや突出する	
88 B-7 南枕張		弥生土器	壺		(36.0)	(6.5)	ガ'整形・調整、口縁部ヨコナ'		内傾し、口縁部外方に稜線を持たずに曲げる、端部丸い	
89 B-7 南枕張 SD01		弥生土器	壺		(19.7)	(6.7)	磨滅しているが、内外面ともガ'調整		折り曲げた口縁部で、端部は丸い	
90 B-7 SD01 中央部		弥生土器	壺		(17.2)	(11.3)	磨滅、2条の沈線		堅く曲げた口縁部で、端部は丸い	

数値の（ ）は後原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号		種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法	他	形態の特徴	備考
	出土地	土層									
91	B-7 SD01	東側	弥生土器	壺						彫形のちば'仕上げ、4条の在線	
92	B-7 SD01	中央部	弥生土器	甕				(7.7)	(7.0)	磨滅	縦かに内湾するが直線的
93	B-7 南拡張 SD01	弥生土器	こしき					(13.4)	(6.7)	磨滅、底部に1.5cmの穿孔	内湾きみの体部
94	B-7 南東黒色中砂	木器	武具 弓	(45.6)	1.7	1.8	1.7	先端加工、部分的に使用痕		縦かに内湾するが直線的	
95	B-7 南東黒色中砂	木器	農具 平歛	32.3	12.3	2.5	剛りだして作る			一部欠損、変形している	
96	B-7 南東黒色中砂	木器	柄?	62.1	3.0	1.7	自然部分残す			直線、穿孔あり	
97	B-7 南東黒色中砂	木器	建築材	23.8	13.8	5.7	側面中央に加工痕			ねずみ返し?	
98	B-7 南東黒色中砂	木器	蓋?	14.3	9.9	2.3	再加工しているか、4又で1つをカット				
99	B-7 南東黒色中砂	木器	板村	18.2	2.0	0.8					
100	B-7 南東黒色中砂	木器	棒状	27.6	1.5	1.0	加工痕				
101	B-7 南東黒色中砂	木器	付け木	11.1	0.7	0.7	先尖らず			曲がっている	
102	B-7 南東黒色土上	木器	付け札	15.7	4.1	0.7				頭平坦で両側に削り込みあり、	
103	B-7 面精査	鉄器		(2.1)	(0.6)					曲がっているが、本来直線か、断面隅円方形	
104	B-7 面精査	石器	石包丁	(3.8)	6.3	0.6	両面から穿孔、細かい擦痕			両端折れ	
105	B-7 面精査	石器			6.2	3.5	0.8	自然面多く残る、両面から剥離			
106	B-7	須恵器	环	(16.1)	(3.9)					内湾しながら、端部は外反する	
107	B-7	須恵器	环A	(13.8)	3.1	11.7	ヨウロケテ、底部はへう切りの1方向の方			縦線不明瞭で、内湾する体部、端部は丸い	
108	B-7 南拡張 包含層	須恵器	环		(3.1)	(4.8)	ヨウロケテ、底部は糸切り			内湾する対部	
109	B-8 旧河道	弥生土器	壺(口縁)	(21.8)	(2.8)					やや外湾する口縁部で、端部は角張りぎみ	
110	B-8 SD01	弥生土器	壺	(16.9)	(5.4)					外反する口縁で、端部角張る	
111	B-10 SD01	弥生土器	壺(底部)			(5.8)	9.9			突出平底、底面平坦で湾曲する体部	
112	B-10 旧河道	土師器	鐵口鉢	(31.3)	(8.0)					直線的な体部で、くの字になり端部は丸く肥厚する	
113	B-10 旧河道	土師器	壺	(8.6)	(3.2)					くの字の口縁部で、端部丸い	
114	B-10 旧河道	土師器	壺	(17.4)	(4.9)					くの字の口縁部で、端部尖りぎみで丸い	
115	B-11 SD03	弥生土器	壺	(20.7)	(5.0)					し字形で水平に曲げる	
116	B-11 SD03	弥生土器	甕		(5.4)					端部を僅かに如意状に折り曲げる、端部丸い	
117	B-11 SD03	土師器	壺	(23.1)	4.4					外反する口縁で、端部角張り内面肥厚	
118	B-11 SD03	弥生土器	壺		(2.8)	3.3	外縁のちば'鑿形			ドーナツ状の上げ底	
119	B-11 SD03	須恵器	壺(身)	(13.2)	(3.9)					立ちあがり直線的に上に延びる端部尖る	
120	B-11 SD03	土師器	壺	11.8	4.1	3.2	ヨウロケテ			縦やかな体部、端部幅かに内側に肥厚する	
121	B-11 包含層	須恵器	壺	(8.2)	(3.5)		ヨウロケテ			外反する短い口縁部で、端部肥厚する	

数値の（ ）は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法 他		形態の特徴	備考
							直立する短い口縁部、体部は丸みを有する	蓋の痕跡		
122	B-11 包含層	須恵器	壺	(11.4)	(3.9)	ヨコナギ*				
123	B-11 包含層 深木石	須恵器	壺蓋	(14.9)	5.3	~	ヨウカスリからヨウカナガ*	内面は1方向のけが*	丸みのある天井部で縫隙不明瞭、端部外側のみ尖る	
124	B-11 包含層 深木石	須恵器	壺身	(12.2)	(4.6)	~	ヨウカスリからヨウカナガ*		丸みのある底部で、立ちあがり内径し、端部外側のみ尖る	蓋破片接合
125	B-11 包含層 深木石	須恵器	壺生土器	(13.2)	(3.8)	~			縫隙の甘い二重口縁で、端部角張る	
126	B-11 包含層 深木石	須恵器	壺	(15.7)	(6.2)	~			外方へ直線的に延びる二重口縁で端部は角張りぎみ	
127	C-9 SX01	土師器	羽釜	(23.2)	(5.3)	~	ヨコナギ*		内湾する口縁部、鋸は水平	塗付着
128	C-9 SX01	陶器					(8.7)	(7.0) ヨウカスリのちひ状工具で整形	削り出し高台で内湾する	
129	C-9 SX01	瓦器	碗	(14.8)	4.7	(4.6)	ヒ*成形のちか*	ヨコナギ*	断面三角形の小さい輪高台、端部丸くやや反る	
130	C-9 SX01	瓦	平瓦	長(9.3)	幅(8.3)	厚2.0	端面はカバリのちか*			
131	C-9 SX01	瓦	平瓦	長(10.4)	幅(9.8)	厚1.9	凹面布目、凸面縄目で、端面はケツリからナガ*			
132	C-11 第2面包含層	須恵器	糸				(7.9)	(11.0) ヨコナギ*	平坦な底部から湾曲する体部へ続く	
133	C-11 第2面包含層	瓦	平瓦	長(11.1)	幅(6.9)	厚1.7	凹面布目、凸面縄目			
134	C-11 第2面包含層	瓦	平瓦	長(10.7)	幅(8.7)	厚	凹面布目（櫻骨模）、凸面縄目			
135	C-11 第2面包含層	瓦	平瓦	長(10.9)	幅(8.7)	厚3.0	凹面布目			
	2000206									
136	A-7 SP01	土師器	碗	(13.8)	(2.2)	~	ヨコナギ*		直線的で端部丸い、	
137	A-7 SP01	須恵器	壺	(14.8)	3.9	~	ヨウカナガ*		外反し、端部内面に肥厚	
138	A-7 SP02	土師器	小皿	(9.0)	1.7	~	ヨコナギ*	ヒ*調整	縫隙を持たずに緩やかに曲がる	
139	A-7 SP11	瓦器	碗	(13.7)	(3.3)	~	ヒ*成形からヒ*調整、ヨコナギ*	ヨコナギ*	僅かに内湾し、端部は丸い	
140	E-7 SP01	木器	まじない舟	(17.5)	3.7	0.5	木裏に墨書き		僅頭で、両側に切り込み	
141	E-7 SP01	木器	まじない舟	(18.3)	3.8	0.4	木裏に墨書き		主頭で、両側に切り込み	
142	E-7 SP01	木器	まじない舟	(18.3)	3.4	0.4	木裏に墨書き		主頭で、両側に切り込み	
143	A-7 SK01	土師器	灯明皿	(9.8)	1.4	(4.0) ヨコナギ*	ヨコナギ*	のち、仕上げげ*	底面平たく、端部は丸くなる	
144	A-7 SK01	土師器	环	(14.4)	4.4	~	ヒ*成形からヒ*	ヨコナギ*	縫やかに湾曲し、端部は尖る	内面有機質付着
145	A-7 SD01	土師器	皿	14.7	2.6	6.7	ヨウカナガ*	ヒ*調整、底部未調整	縫やかに湾曲し、端部は尖る	歪
146	A-7 SD01	須恵器	杯(底鉢)				(2.9)	(0.12) ヨウカナガ*	内湾する体部、ややへふんばる高台	
147	A-7 SD01	須恵器	壺	(25.0)	(6.1)	~	ヨウカナガ*	ヒ*調整、内面ナガ*	短く外反する口縁部	
148	A-7 SD01	瓦器					(4.6)	ヨコナギ*	内湾し、端部丸い	
149	A-7 SD01 下層	瓦	丸瓦	長(4.6)	幅(4.15)	厚2.35	凹面布目、端面ケツリ			
150	A-7 SD01 下層	瓦	平瓦	長(7.83)	幅(6.45)	厚1.55	凹面布目、凸面縄目、端面ケツリ			
151	A-7 SD01	瓦	平瓦	長(13.4)	幅(7.35)	厚2.3	凹面布目、凸面縄目、端面ケツリ			

数値の（ ）は後原・渡存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法		形態の特徴	備考
							他			
152	A-7 SD02	土師器	小皿	(10.1)	1.2		ヨリ成形のうち口縁部ヨリナガ、底部ナガ		底面は平坦で「ての字」に屈曲する、端部つまみあげ	
153	A-7 SD02	土師器	小皿	(9.1)	2.3		ヨリ成形のうち口縁部ヨリナガ、底部ナガ		底部は上げて、口縁部は直線的、端部丸い	
154	A-7 SD02	土師器	小皿	(10.7)	1.8	(4.0)	ヨリ成形のうち口縁部ヨリナガ、底部未調整		内湾する体部で端部丸い	
155	A-7 SD02	土師器	小皿	9.8	2.1		ヨリ成形のうち口縁部ヨリナガ、底部ナガ		内湾する体部で端部丸い	
156	A-7 SD02	土師器	小皿	10.1	1.8		ヨリ成形のうち口縁部ヨリナガ、底部ナガ		内湾する体部で端部丸い	
157	A-7 SD02	土師器	小皿	(8.8)	(1.4)	(5.1)	ヨリ成形のうち口縁部ヨリナガ、底部糸切り・		底部平坦で体部直線的、端部丸い	
158	A-7 SD02	土師器	碗	(14.8)	3.0		ヨリ成形のうち口縁部ヨリナガ、底部未調整		底部との接線不明瞭で内湾する、端部丸い	
159	A-7 SD02	土師器	皿	(14.6)	(3.1)	(3.2)	ヨリ成形のうち口縁部ヨリナガ、底部ナガ		内湾する体部で水平に開く	
160	A-7 SD02	土師器	碗	(13.8)	3.9		ヨリ成形のうち口縁部強いヨリナガ、底部ナガ		内湾する体部で、外面ヨリナガによつて凹線状に、端部丸い	
161	A-7 SD02	土師器	碗	15.5	2.7		ヨリ成形のうち口縁部ヨリナガ、底部未調整		湾曲する体部で、端部丸くやや反る	
162	A-7 SD02	土師器	碗	(16.7)	(3.5)		ヨリ成形のうち口縁部強いヨリナガ、内面ナガ		内湾し、端部丸い、口縁部は水平に開く	
163	A-7 SD02	土師器	甕	(35.2)	(17.9)		ハ整形、口縁部ヨリナガ		内湾する体部で直線的に広がる口縁部、端部角張る	
164	A-7 SD02	須恵器	甕	(25.6)	(12.6)		外面部、口縁部ヨリナガ		煤付着	
165	A-7 SD02	須恵器	碗	(15.8)	(3.9)		ヨリナガ		重ね焼きの痕跡	
166	A-7 SD02	須恵器	碗	(15.5)	5.3		ヨリナガで底部糸切り		有機質付着	
167	A-7 SD02	須恵器	小皿	8.9	2.6	4.6	ヨリナガで底部糸切り、煤付着		重ね焼き、光明皿	
168	A-7 SD02	須恵器	甕(口縁)	(16.6)	(3.4)		ヨリナガ		盤底	
169	A-7 SD02	瓦器	碗	(15.1)	(5.3)		ヨリ成形・整形ののちヨリナガ		内湾する体部で、端部丸い	
170	A-7 SD02	瓦器	碗	(1.6)	4.8		ヨリナガからガビ仕上げ		底部平坦く、台形の輪高台	
171	A-7 SD02	木器	祭祀具	高	(24.9)	1.8	0.4		主頭	
172	A-7 SD02	木器	棒状	14.5	0.9	0.3	先尖らす			
173	A-7 SD02	木器	付け木	19.0	1.3	0.7	ヨリナガののち、仕上げナガ		端部内側に肥厚する	
174	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	9.1	1.6		ヨリナガののち、仕上げナガ		端部平坦で、体部屈曲し、端部上方へつまみ上げる	
175	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(9.6)	(1.5)		ヨリナガののち、仕上げナガ		2次焼成	
176	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	9.4	1.6		ヨリナガののち、仕上げナガ		底部丸く、端部屈曲し、端部上方へつまみあげる	
177	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(9.7)	(1.3)		ヨリナガ		底部から体部にかけて屈曲し、端部上方へつまみ上げる	
178	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(10.0)	(1.4)		ヨリナガののち、仕上げナガ		底部平坦で、体部屈曲し、端部上方へつまみ上げる	
179	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(8.4)	2.1		ヨリナガののち、仕上げナガ		底部丸く、端部屈曲し、端部上方へつまみあげる	
180	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(9.0)	2.1		ヨリナガののち、仕上げナガ		底部丸く、体部屈曲し、外へ開く、器肉厚い	
181	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(9.1)	(1.6)		ヨリナガののち、仕上げナガ		有機質付着、歪	
182	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	9.3	(1.6)		ヨリナガののち、内面仕上げナガ、底部未調整		内湾し、端部丸い	

数値の（ ）は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法	他	形態の特徴	備考
	出土地・土層									
183	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(9.1)	1.9	1.9	ヨコガ"、仕上げげ"、斜め方向の粘土維ぎ目		内湾し、端部丸い	
184	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	10.1	1.6	1.6	ヨコガ"ののち、内面仕上げげ"、底部未調整		底部平坦で、体部内湾する、端部丸い	
185	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	9.3	1.8	1.8	ヨコガ"ののち、内面仕上げげ"、底部未調整		内湾し、端部丸い	
186	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	10.0	1.6	1.6	ヨコガ"ののち、内面仕上げげ"		底部平坦で、体部内湾する、端部丸い	
187	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(9.7)	1.9	1.9	ヨコガ"ののち、内面仕上げげ"、底部未調整		内湾し、端部丸い	歪
188	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(9.1)	1.7	1.7	ヨコガ"ののちが"、底部未調整		内湾し、端部丸い	
189	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(10.1)	(1.7)		ヨコガ"ののち、内面仕上げげ"、外面部痕		底部平坦で、直線的に外へ開く、端部丸い	
190	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿		9.6	1.9	ヨコガ"ののち、内面仕上げげ"		底部やや上げ底で湾曲し、端部丸い	
191	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(9.6)	1.6	1.6	ヨコガ"ののち、仕上げげ"		底部平坦で、直線的に外へ開く、端部丸い	
192	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(9.4)	1.4	1.4	ヨコガ"ののち、仕上げげ"		底部やや上げ底で湾曲し、端部丸い	
193	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(9.0)	(1.4)		ヨコガ"ののち、仕上げげ"		底部平坦で、体部内湾する、端部丸い	
194	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(10.7)	1.3	(9.3)	ヨコガ"ののち、仕上げげ"		底部平坦で、体部直線的に近び口縁部は外反、端部丸い	
195	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	9.7	(1.8)		ヨヒ"成形後、ヨコガ"整形し、口縁部ヨコガ"		口縁部付近で僅かに屈曲、端部丸い	歪
196	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	小皿	(9.1)	2.0	4.9	ヨヒ"成形し、ヨコガ"、底部糸切り		底部平坦で厚く、体部内湾する、端部丸い	
197	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	14.9	2.9		ヨヒ"成形ののち口縁部強いヨコガ"、外面部"ア"		丸底で湾曲し、端部丸い	
198	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	(14.8)	(2.9)		ヨコガ"ののち、仕上げげ"		内湾し、端部丸い	2次焼成
199	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	14.6	2.7		ヨコガ"ののち、仕上げげ"		内湾し、口縁部屈曲し、端部丸い	2次焼成
200	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	15.3	2.8		ヨコガ"ののち、不定方向の仕上げげ"		内湾し、端部丸い	2次焼成
201	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	(14.6)	(2.7)		ヨコガ"ののち、内面仕上げげ"、底部未調整		内湾し、端部丸い	
202	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	(14.4)	(2.9)		ヨコガ"ののち、内面仕上げげ"		内湾し、端部尖りぎみで丸い	
203	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	15.1	3.0		ヨヒ"成形し、ヨコガ"、仕上げげ"		底部平坦で緩やかに屈曲する体部に、端部丸い	有機質付着
204	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	(14.1)	(3.1)		ヨコガ"、仕上げげ"、斜めの縫ぎ目		内湾し、端部丸い	灯明皿
205	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	14.5	3.0		ヨヒ"成形し、ヨコガ"、仕上げげ"		底部平坦で斜め方向の縫ぎ目	歪
206	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	15.1	2.6	2.6	ヨコガ"ののち、仕上げげ"		底部平坦で緩やかに屈曲する体部に、端部丸い	
207	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	(15.0)	3.6		ヨヒ"成形し、強いヨコガ"、仕上げげ"		体部直線的で、口縁部付近で僅かに屈曲、端部丸い	2次焼成、有機質付着
208	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	(15.2)	2.4		ヨコガ"ののち仕上げげ"、斜め方向の粘土維ぎ目		端部尖りぎみで丸い	磨滅
209	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	16.2	2.3		ヨヒ"成形ののちヨコガ"、内面"ア"		上げ底で湾曲し、端部尖る	
210	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	(14.8)	2.5		口縁部ヨコガ"、体部はげ仕上げ		上げ底で湾曲し、端部尖る	灯明皿、歪、磨滅
211	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	皿	(14.6)	(2.8)		ヨヒ"成形し、ヨコガ"、仕上げげ"		内湾し、口縁部厚く、端部丸い	2次焼成、歪
212	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	碗	14.2	4.4		ヨコガ"ののち、仕上げげ"		内湾し、端部尖りぎみで丸い	磨滅
213	A-7 小疊混じり黒砂	土師器	碗	(1.3)	6.1	6.1	ガ"仕上げ		台形の高台、底部平壠	2次焼成、底部に穿孔

数値の()は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器體	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法		形態の特徴	備考
							他	他		
214	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	(15.6)	(3.3)	ロクロナデ*			直線的な体部で、端部丸い	
215	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	(15.6)	(4.2)	ロクロナデ*			直角に内湾し、端部肥厚ぎみに丸い	
216	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	(15.9)	(3.0)	ロクロナデ*			直線的な体部で、端部角張る	
217	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	(16.4)	(4.4)	ロクロナデ*			直角に内湾する体部で、端部内側に肥厚	有機質付着
218	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	16.1	5.4	ロクロナデ*、底部糸切り			直角に内湾する体部で、端部直線的、端部丸い	有機質付着
219	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	(16.5)	(5.1)	ロクロナデ*、仕上げナデ*			直角に内湾する体部で端部丸い	有機質付着
220	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	(16.2)	(4.2)	ロクロナデ*			直角に内湾し、端部肥厚ぎみに丸い	
221	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	(16.9)	5.0	(5.0)	ロクロナデ* の仕上げナデ*、底部糸切り		直角に内湾し端部肥厚ぎみに丸い	
222	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	15.0	5.6	ロクロナデ*、底部糸切り			直角に内湾する体部、端部肥厚し丸い	有機質付着
223	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	(1.0)	4.2	ロクロナデ*、底部糸切り			直角が凹凸あり	
224	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	(15.3)	(5.4)	(5.1)	ロクロナデ* から仕上げナデ*、底部糸切り		直角が凹凸する体部で端部直角に肥厚し丸い、横線甘い	
225	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	(1.8)	5.3	ロクロナデ*			直角が凹凸する体部	墨書き「小」
226	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	16.3	5.1	ロクロナデ*、底部糸切り			直角が凹凸し、端部肥厚ぎみに丸い	自然釉付着
227	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	碗	(16.1)	4.9	(6.1)	ロクロナデ* から仕上げナデ*、底部糸切り		直角が凹凸する体部で端部直角に肥厚し丸い、底部との横線甘い、横線甘い	
228	A-7 小縫混じり黒砂	須恵器	壺	(16.5)	(4.2)	ロクロナデ*、外面糸網（横→縦）			直角が凹凸する体部	墨書き「小」
229	A-7 小縫混じり黒砂	磁器	碗	(10.9)	(2.2)		全面輪軸		直角が凹凸し、端部尖る	
230	A-7 小縫混じり黒砂	瓦器	碗	(14.9)	(3.6)		丸* 整形から口縁部はヨコナデ*、内外ヨコナキ		直角が凹凸し、端部尖る	
231	A-7 小縫混じり黒砂	瓦器	碗	(4.4)	6.3	丸* 整形のちヨコナキ			直角が凹凸する体部で端部直角に肥厚する高台を貼り付ける	
232	A-7 小縫混じり黒砂	土師器	壺	(12.8)	(7.0)		丸* 整形		直角が凹凸する体部から屈曲して直線的に広がる口縁部	
233	A-7 黒色シルト	土師器	十鍤	長 3.23 幅 0.94 厚 0.96			丸* 整形		直角が凹凸する体部が細い管状	
234	A-7 黒色シルト	土師器	皿	(9.7)	1.7	丸* 整形のち、口縁部ヨコナデ*			直角が凹凸し、端部丸い	
235	A-7 黒色シルト	土師器	皿	(13.7)	2.4	丸* 整形のち、口縁部ヨコナデ*			直角が凹凸し、端部尖りぎみに丸い	
236	A-7 黒色シルト	白磁	碗	(15.6)	(2.2)		全面施釉		直角が凹凸し、端部玉緑状になる	
237	A-7 黒色シルト	白磁	碗	(17.3)	(4.9)		全面施釉		直角が凹凸し、端部直角に肥厚する	
238	A-7 機械掘削	土師器	小壺	(10.0)	(1.4)		丸* 整形のち、口縁部ヨコナデ*		直角が凹凸し、端部直角に肥厚する	
239	A-7	土師器	小壺	(9.8)	1.8		丸* 整形のち、口縁部ヨコナデ*		直角が凹凸し、端部直角に肥厚する	
240	A-7	土師器	壺	(14.7)	(3.7)		丸* 整形のち、口縁部ヨコナデ*		直角が凹凸し、端部直角に肥厚する	
241	A-7	須恵器	橈底部	(0.1)	(6.0)	ロクロナデ*			直角が凹凸し、端部直角に肥厚する	2次焼成
242	A-7 SD-02	須恵器	蓋		(1.7)		ロクロナデ*		直角が凹凸し、端部直角に肥厚する	自然釉付着
243	A-7	須恵器	环身	(12.1)	(2.3)	ロクロナデ*			直角が凹凸し、端部直角に肥厚する	
244	A-7	須恵器	环身	(12.6)	(3.2)	ロクロナデ*			直角が凹凸し、端部直角に肥厚する	

数値の（ ）は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法		形態の特徴	備考
							他			
245	A-7	陶泥じり黒褐色砂	木器	棒状	10.7	1.3	0.5	先尖らず		
246	A-7	陶泥じり黒褐色砂	木器	直串	16.0	1.7	0.8	先尖らず		
247	A-7	陶泥じり黒褐色砂	木器	直串	21.9	1.7	0.9	先尖らず		
248	A-7	陶泥じり黒褐色砂	木器	板材	(27.4)	5.6	1.1			
249	A-9	陶泥色粗砂上層	土師器	壺	(20.0)	(2.4)	3.9テ	外反し、端部丸い		
250	A-9	須恵器	碗	(14.8)	(2.6)	2.6	ワコナデ*	直線的に延び、端部丸い		
251	A-9	須恵器	壺		(5.5)	5.5	ワコナデ*、斜めのち描き点文	直線的に内傾する		
252	A-9	灰褐色砂上面	長颈壺		(7.7)	(11.8)	ワコナデ*	底部平たく、湾曲する体部、高台は内外に肥厚		
253	A-9	須恵器	环身	約12.5	(2.7)	2.7	ワコナデ*からワコナデ*	縦やかにS字状の体部に外反する立ち上がり		
254	A-9	埴輪?	円筒埴輪	+	(5.4)	3.9テ		僅かに外反する		
255	A-9	土師質	土錐		(3.4)	3.4	コビ成形、ガ*			
256	A-10 SD01	陶器	擂鉢		(5.5)	(9.8)	ワコナデ*、内面彫り目	平たい底部で、外へ開く体部	丹波焼	
257	A-10 SD01	陶器	擂鉢	(26.3)	(9.9)	9.9	ワコナデ*、内面彫り目	玉縁状の口縁部	明石焼	
258	A-10 SD01	土製品	土錐	絶3.65	横0.85	厚0.85	コビ整形	中央部が太く両端が細い管状		2.6g
259	B-12SD02 暗灰シルト	弥生土器	壺	(14.6)	(1.5)	3.9テ	内面彫り目、沈線1条	僅かに外反する直線的で水平に開く		
260	B-12SD02 暗灰シルト	弥生土器	壺	(19.2)	(4.3)	3.9テ	内面彫り目、外面彫り目	外反して端部は角張る		
261	B-12SD02 暗灰シルト	弥生土器	底部のみ		(3.1)	(10.0)	コビ成形からナデ*	平たい底部で外反する体部		
262	B-12SD02 暗灰シルト	弥生土器	底部のみ		(4.8)	10.4	コビ成形からナデ*	やや上げ底で、体部は外へ広がる		
263	B-12SD02 暗灰シルト	弥生土器	壺	(39.3)	(11.4)	11.4	コビ成形からナデ*、外面彫、口縁部3才打*	内湾する体部から如意状の短い口縁部に、端部丸い		
264	B-12SD02 暗灰シルト	弥生土器	壺		(10.4)	8.2	コビ成形からナデ*、外面彫、	平坦な底部で直線的に広がる体部		
265	B-12SD02 暗灰シルト	弥生土器	底部		(4.1)	(7.9)	コビ成形、ガ*	平坦な底部で直線的に広がる体部		
266	B-12SD02 暗灰シルト	弥生土器	壺	(34.2)	(3.0)	3.0	コビ整形で口縁部はココナデ*	直立する体部から大きく曲げる口縁部、端部角張りぎみ		
267	B-12SD02 暗灰シルト	弥生土器	壺	(27.8)	(12.1)	12.1	ガビ整形で口縁部はココナデ*、7条の沈線	直立する体部から如意状の字形の短い曲げる口縁部		
268	B-12SD02 暗灰シルト	弥生土器	底部		(2.9)	(8.3)	コビ成形、ガ*	やや上げ底で外反する体部		
269	B-12 SD06 暗灰シルト	弥生土器	壺	(31.6)	(11.6)	11.6	ガビ整形、口縁部ヨコハ*、外面彫整形、刻み目	内湾する体部に如意状の短い口縁部、端部丸い、	2次焼成、磨滅	
270	B-12 包含層 ベース直	弥生土器	壺	(23.6)	(11.3)	11.3	外面彫整形、3条沈線、端部刻み目	直立する体部に短い如意状の口縁部、端部角張る		
271	B-13 SK01 若干上か須恵器	壺B			(1.2)	(8.6)	ワコナデ*、底部へラ切り	直立する体部に方形の高台付く		
272	B-13 SK02	陶器	面子	長(4.75幅(1.32	厚1.32	1.32	捕鉢の転用 (ワコナデ*)	回り打ち割って円形にする	偏前焼	
273	B-13 SK04	弥生土器	壺		(4.3)	4.5	ワコナデ*	不安定な底部で外反する	磨滅	
274	B-13 SK04	弥生土器	底部		(4.5)	(8.2)	ガビ整形	平たい底で内湾する体部	磨滅	
275	B-13 SK04	弥生土器	壺		(8.0)	(8.8)	ガビ整形で外面彫り	平たい底で僅かに内湾する体部	磨滅	

数値の（ ）は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法	他	形態の特徴	備考
276	B-13 SD02	須恵器	蓋	(10.0)	(1.3)		「ロコナ」、天井部凹凸有り		天井部平坦で厚く、断面三角のかえりを持つ、端部丸い	
277	B-13 SD02	木器	杭	14.0	3.5	(3.4)	心持材、加工痕			
278	B-13 SD03	弥生土器	底部			(8.5)	「ガ」整形		平たい底で僅かに内湾する体部	
279	B-13 SD03	須恵器	环B		(1.7)	(9.7)	「ロコナ」		明瞭な稜線を持たない体部でやや肥厚する高台	
280	B-13 SD03	弥生土器	蓋		(5.8)		6条の沈線		やや内湾する	
281	B-13 SD03	弥生土器	壺		(3.1)		口縁部「ココナ」、3条の沈線		外反する如意状の口縁部、端部丸い	
282	B-13 SD03	弥生土器	壺		(3.0)	(6.8)	「ガ」整形、外面ハセ形、		平たい底部	
283	B-13 SD03	弥生土器	底部		(4.0)	(9.2)	「ヒ」成形、ガ		平たい底部で厚い	
	2000238									
284	A-10 洪水砂	土師器	小皿	9.4	1.9		「ココナ」、ガ・仕上げ		上げ底で棱線を持たずに内湾する、端部丸い	
285	A-10 第1面下	土師器	皿	(14.8)	2.6		「ココナ」、ガ・仕上げ		内湾する体部で、端部丸い	
286	A-10 第1面下	須恵器	壺	(32.2)	(3.2)		「ロコナ」		屈曲する口縁部で底部内外へ肥厚	自然釉付着
287	A-10 第1面下	須恵器	鉢			7.1	「ロコナ」		直線的で口縁部近くで変化、片口か、	
288	A-10 第1面	須恵器	鉢			(2.5)	「ロコナ」		直線的で口縁部角張る	
289	A-10 洪水砂	須恵器		(4.3)			「ロコナ」、波状文、沈線		直線的に広がる	
290	A-10 洪水砂	弥生土器	底部		(3.3)	(5.3)	「ガ」整形から「ガ」整形		やや上げ底で外へ広がる	
291	A-11 旧河道	土師器	小皿	(10.8)	1.6		「ヒ」成形のち「ココナ」、ガ・仕上げ		湾曲する体部、端部丸い	
292	A-11 旧河道	須恵器	碗	(16.0)	(3.9)		「ロコナ」		直線的に開き、端部丸い	
293	A-12 旧河道	須恵器	鉢		(4.2)	(12.3)	「ロコナ」、底部「ガ」		湾曲した底部から体部に続き、段を持つ萬台を付ける	
294	B-14 黒色シルト	弥生土器	壺	(19.1)	(2.3)		「ココナ」		外反する縁部、端部丸い、穿孔あり	
295	B-14 亂倒木①	弥生土器	壺	(19.5)	(3.5)		「ココナ」		外反する縁部、端部丸い、	
296	B-14 亂倒木①	弥生土器	壺	(16.4)	(1.7)		「ココナ」、端部に刻み目		外反する縁部、端部丸い	
297	B-14 亂倒木①	弥生土器	壺	(21.6)	(1.9)		「ココナ」、端部に刻み目		外反する縁部、端部丸い	
298	B-14 黒色シルト	弥生土器	底鄭		(2.7)	(7.4)			平たい底部で外反する体部	
	2000314									
299	A-13 SX01	土師器	小皿	9.4	1.8		「ヒ」成形のち「ココナ」、ガ・仕上げ		なんだ丸感で口縁部はS字に屈曲する、端部上へつまむ	歪、鉛付着
300	A-13 SX01	土師器	小皿	9.5	1.5		「ココナ」から仕上げ		平たい底部で湾曲する短い口縁部、端部丸い	歪、磨滅
301	A-13 SX01	土師器	小皿	(8.9)	(1.0)		「ココナ」		平たい底部から直線に延びる端部丸く約める	磨滅
302	A-13 包含層 南半	須恵器	杯	(12.4)	(3.5)		「ロコナ」、底部へ切り		平たい底部から外方へ直線的に延びる、端部丸い	
303	A-13 包含層 南半	灰釉陶器	小皿	(10.3)	(2.8)		「ロコナ」、底部糸切り		内湾する底部から外反する口縁部へ、高台端部も丸い	
304	A-13 包含層 南半	白磁	碗	(15.2)	(0.9)		施釉		やや内湾し、口縁部玉縁になる	

数値の（ ）は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法	他	形態の特徴	備考
	出土地・土層									
305	A-14 池面上下層	土師器	小皿	10.1	1.6	(9.0)	ヨコナデ*から仕上げた*、底部へ切り		平底から直線的な口縁部、端部丸い、	
306	A-14 池面上下層	土師器	小皿	9.6	1.3	(1.3)	ヨコナデ*から仕上げた*、底部へ切り		平底からやや外反する口縁部、端部丸い、	
307	A-14 池面上下層	土師器	小皿				ヨコナデ*から仕上げた*、底部へ切り		平底から直線的な口縁部、端部丸い、	煤付着
308	A-14 池面上下層	土師器	皿				ヨコナデ*、底部糸切り		平たい底部で内湾する体部	
309	A-14 池面上下層	土師器	底部 高台						平たい底部で内湾する体部	焼成
310	A-14 池面上下層	土師器	碗	(14.9)	3.5	7.9	ヨコナデ*		直線的な高い高台、端部やや肥厚ぎみで丸い、	
311	A-14 池面上下層	須恵器	蓋	(8.4)	(1.9)	(3.6)	天井部ヨコナデ*、ヨコナデ*、内面仕上げた*		弯曲する体部、端部丸い、反りは内傾し尖る	
312	A-14 池面上下層	灰釉陶器	碗	(13.6)			ヨコナデ*		やや内湾し短部は反り、丸い、	
313	A-14 池面上下層	瓦質土器	碗	(15.9)	4.8	(6.1)	ヨコナデ* 成形からけ*、内外面ともヨコナデ*で仕上げる		内湾する体部で、端部丸い、端部は外反する、高台低い、	
314	A-14 包含層(下層)	土師器	小皿	(9.4)	(1.4)	(2.7)	ヨコナデ*、底部が*		内湾する体部で、端部丸い、	
315	A-14 包含層(下層)	土師器	小皿	9.3	1.8		ヨコナデ*、底部が*、内面不定方向の仕上げた*		内湾する体部で、端部丸い、	
316	A-14 包含層(下層)	土師器	小皿	(15.8)			ヨコナデ*、底部が*		内湾する体部で、端部外反する	
317	A-14 包含層(下層)	瓦質土器	碗						内湾する体部で、底は平たい、	
318	A-14 包含層(下層)	土師器	小皿	(9.7)	0.9	(7.0)	ヨコナデ*、底部は強い工具を使つたナデ*		断面三角形の底面譜文(格子)	
319	A-14 包含層(下層)	土師器	小皿	9.1	1.7		ヨコナデ*、底部が*、		内湾する体部で、端部丸い、	
320	A-14 包含層(下層)	須恵器	二ね鉢	(29.8)	(6.6)		ヨコナデ*、底部は強い工具を使つたナデ*		断面三角形の高台で、底は平たい、	
321	A-14 包含層(下層)	磁器	碗	(15.6)	(2.3)		ヨコナデ*、底部は平たい底から屈曲して口縁部に、端部丸い		内湾する体部で、端部丸い、	
322	A-14 包含層(下層)	瓦器	碗	15.2	5.4	5.1	ヨコナデ* 成形後仕上げ、ヨコナデ*、ヨコナデ*		内湾する体部で、端部丸い、	灯明皿
323	A-14	木器	板材	8.8	3.3	0.9	ヨコナデ*、外面不定方向の、内面1方向のナデ*		内湾する体部で、端部丸い、	
324	A-14	木器	板材	7.0	3.0	0.6	ヨコナデ*、内面下半はナデ*		内湾する体部で、端部丸い、	
325	A-14	木器	板材	(8.1)	3.1	0.4	ヨコナデ*、内面下半はナデ*		内湾する体部で、端部丸い、	
326	A-14	木器	板材	(8.8)	3.6	0.8	ヨコナデ*、内面下半はナデ*		内湾する体部で、端部丸い、	
327	A-14	木器	板材	(8.5)	2.0	0.4	ヨコナデ*、内面下半はナデ*		内湾する体部で、端部丸い、	
328	A-14	木器	板材	(24.8)	3.5	0.8	ヨコナデ*、内面下半はナデ*		内湾する体部で、端部丸い、	
329	A-14	木器	板材	(13.0)	3.5	0.7	ヨコナデ*、内面下半はナデ*		内湾する体部で、端部丸い、	
330	A-14	木器	曲物底板	(27.0)	5.0	0.4	2次焼成		内湾する体部で、端部丸い、	
331	A-14 包含層(下層)	石製品	?盤(丸輪)	長3.8	幅2.75	厚0.43	丁寧に仕上げる		内湾する体部で、端部丸い、	未製品
332	A-16	土師器	小皿	(8.6)	(1.8)		ヨコナデ*、ナデ*		内湾し、端部丸く内傾する	
333	A-16	土師器	小皿	(9.5)	(2.0)		ヨコナデ*、ナデ*		内湾し、端部外反し尖りぎみに丸い、	
334	A-16	土師器	壺	(28.3)	(3.4)		内面凹整形、ヨコナデ*		多くの字で内側に勢い腰錐、端部角張る	
335	A-16	須恵器	碗	(2.9)	(5.3)		ヨコナデ*、底部糸切り		平たい底で直線的に延びる	

数値の（ ）は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法		形態の特徴	備考
							他			
336	B-15 SD01 (近世溝青磁)	碗		(2.2)	5.8	3.8	断面方形の高台で、底は平たい、外面縦井文、内面圓線			
337	B-15 SD01 (近世溝)	陶器(天日运用面子)		(1.3)	4.1	3.8	断面方形の高台で直立する高台付加、高台部を円板に転用			
338	B-16 SD01	弥生土器	蓋	(11.7)	3.0	3.0	外反する体部で、端部上方へ肥厚、つまみ部中央穿孔			
339	B-16 SD01	弥生土器	壺	(16.1)	(3.4)	3.2	外反し端部角張る			
340	B-16 SD01	弥生土器	(底部)		(6.4)	7.2	やや厚い底盤から直線的に外へ開く、底部焼成後に穿孔			
341	B-16 SD01	弥生土器	(底部)		(6.9)	(7.3)	やや厚い底盤から大きく外へ直線的に開く			
342	B-16 SD01	弥生土器	壺		(6.4)	9.4	浅いドーナツ状の底盤からやや内凹する体部になる			
343	B-16 SD01	弥生土器	(底部)		(5.5)	10.2	平たい底部で上方に直線的に延びる			
344	B-16 SD01	弥生土器	壺		(20.0)	8.0	平整形、内面板打、ヨコナギ、さき、刻み目			
345	B-16 SD01	弥生土器	壺		(23.4)	(8.7)	内湾し、短い如意状の口縁部、端部丸い、有機質付着			
346	B-16 SD01	弥生土器	壺		(27.0)	(14.5)	外側が整形、内面板打、口縁部ヨコナギ、刻み目			
347	B-16 SD01	弥生土器	壺		(29.2)	(9.9)	内湾し、短い如意状の口縁部、端部角張る、直立ぎみの体部から短い口縁部、端部角張る			
348	B-16 SD01	弥生土器	底部		(5.2)	8.4	直立ぎみの体部から広がる体部に、端部丸い、直線的に広がる体部			
349	B-16 SD01	弥生土器	底部		(8.6)	(7.7)	直立ぎみの体部から広がる体部、直線的に広がる体部			
350	B-16 SD01	弥生土器	壺		(8.0)	7.2	直立ぎみの体部から広がる体部、直線的に広がる体部			
351	B-16 SD01	弥生土器	壺		(7.5)	(7.7)	直線的に広がる体部、直線的な体部			
352	B-16 包含層	弥生土器	蓋		(19.5)	(4.4)	直線的に広がる体部、直線的な体部			
353	B-16 包含層	弥生土器	壺		(8.2)	7.2	直線的に広がる体部、直線的な体部			
354	B-16 包含層	弥生土器	ニチヨウ壺		(4.7)	4.4	直線的に広がる体部、直線的な体部			
355	B-16 包含層	弥生土器	壺		(5.7)	(7.4)	直線的に広がる体部、直線的な体部			
356	B-16 包含層	弥生土器	底部		(2.5)	(7.2)	直線的に広がる体部、直線的な体部			
357	B-16 包含層	弥生土器	底部		(2.5)	(7.9)	直線的に広がる体部、直線的な体部			
358	B-16	弥生土器	壺		(18.5)	(0.7)	直線的に広がる体部、直線的な体部			
359	B-16	弥生土器	壺		(19.6)	(4.1)	直線的に広がる体部、直線的な体部			
360	B-16	弥生土器	壺		(20.0)	(5.4)	直線的に広がる体部、直線的な体部			
361	B-16	弥生土器	壺		(18.3)	(7.3)	直線的に広がる体部、直線的な体部			
362	B-16	弥生土器	壺		(25.2)	(6.1)	直線的に広がる体部、直線的な体部			
363	B-16	弥生土器	壺		(36.6)	(7.8)	直線的に広がる体部、直線的な体部			
364	B-16	弥生土器	壺		(32.9)	(10.0)	直線的に広がる体部、直線的な体部			
365	B-16	弥生土器	壺		(5.7)	7.2	直線的に広がる体部、直線的な体部			
366	B-16	圓文土器	突唇壺		(24.8)	(4.3)	直線的に広がる体部、直線的な体部			

数値の（ ）は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法	他	形態の特徴	備考
367 B-16		赤生土器	底部		(4.0)	(7.2)	ガ'整形		平坦な底面部から外へ広がる体部	
368 B-16		赤生土器	底部		(10.2)	(7.3)	ヒ'成形、板ナギ仕上げ		やや突出する底部で内湾する体部	傳誠
369 B-16		赤生土器	底部		(8.3)	(9.4)	板ナギ		外へ直線的に聞く体部	切腹、黒斑
370 B-16		赤生土器	底部		(6.8)	(6.9)	板ナギ		外へ直線的に聞く体部	脣城
371 B-16		赤生土器	臺底部		(6.4)	6.6	ユ'整形、ハラガキ		厚めの平底で湾曲する体部	
372 B-16 SD01		木器	壺	17.0	12.7		削り抜きで作る			
373 B-16		石器	敲石	10.7	7.0	6.0	中央と側面部に敲打痕			
374 B-16		石器	剥片	6.3	3.8	1.5	両面から剥離			
375 B-16		石器	剥片	4.6	3.6	0.7	大剝離面のみ			
	2000347									
376 A-22 SB01-17		須恵器	碗	15.9	5.0	6.3	タコナギ、底部糸切り		内湾する体部から平坦な底部	
377 A-22 SB01-17		須恵器	碗	15.5	5.3	5.7	タコナギ、底部糸切り		直線的な体部から平坦な底部	重ね焼
378 A-22 SB01-17		瓦器	碗	(15.7)	(4.0)		ヒ'成形後ナギ、ヨコナギ		直線的な体部から平坦な底部	重ね焼
379 A-22 SB01-05		瓦器	碗	(14.4)	(4.4)		ヒ'成形後ナギ、ヨコナギ		内湾する体部	
380 A-22 SB01-17		瓦器	碗		(1.3)	(5.7)	ナガ		平たい底面部に、外面に踏ん張る高台が付く	
381 A-22 SB01-05		白磁	碗	(15.8)	6.5	(5.4)	底部削り出し高台、露胎		湾曲する体部、口縁部は玉様に、高台形	
382 A-22 SB01-17		鉄器	釘?	5.9	0.8	0.8			折れ曲がっている、断面方形	
383 A-22 SP05		須恵器	碗	(15.6)	5.5		タコナギ、底部糸切り		内湾する体部から平坦な底部	
384 A-22 SP08		須恵器	碗	(15.5)	4.5	(5.2)	タコナギ、底部糸切り		直線的な体部から平坦な底部、端部丸い	
385 A-22 SK02		瓦器	小皿	9.6	2.1		ナガ、口縁部ヨコナギ		上げ底で複数を持たず直立する口縁部に、	
386 A-22 SK02		瓦器	碗	(14.9)	(4.5)		タコナギ、口縁部ヨコナギ、内外面ともヨカキ		内湾する体部で、端部丸い	
387 A-22 SK03		土師器	小皿	(8.9)	1.7		タ'整形、口縁部ヨコナギ		平坦な底面部から直線的な口縁部に、端部丸い	2次焼成
388 A-22 SK04 (東半)		土師器	小皿	9.6	1.5	7.9	ヒ'成形後ナギ、底部未調整、口縁部ヨコナギ		底部は歪で口縁部は外へ開く、端部丸い	
389 A-22 SK04 (東半)		土師器	小皿	(9.6)	1.8		タ'整形、口縁部ヨコナギ		湾曲する底だから体部へ、端部肥厚ぎみで丸い	
390 A-22 SK04 (東半)		土師器	碗	(13.4)	(3.9)		タ'整形、口縁部ヨコナギ		内湾する体部で、端部肥厚ぎみで丸い	
391 A-22 SK04 (東半)		須恵器	鉢		(2.6)		タコナギ		端部内外に肥厚	
392 A-22 SK04 (東半)		瓦器	碗		(1.2)	5.6	ナ'整形、調整		平坦な底面部で、三角形の輪高台を付ける	
393 A-22 SK04 (東半)		瓦器	碗		(1.5)	(5.4)	ナ'整形、調整		外方へ踏ん張る高台	
394 A-22 SK04 (東半)		土師器	土盤		4.4		ヒ'成形、調整		表面やや歪	
395 A-22 SK04 (東半)		土師器	土盤		5.1	1.3	ヒ'成形、調整		細身で長い、	
396 A-22 横乱		土師器	小皿	8.7	1.7		ナ'整形、口縁部ヨコナギ		底部歪で内湾する体部	歪

数値の（ ）は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法		形態の特徴	備考
							他			
397 A-22 挖乱		土師器	小皿	(9.7)	1.2	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"			湾曲する体部で、端部丸い、	
398 A-22 II-3		土師器	小皿	(9.5)	1.7	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"			湾曲する体部で、端部丸い、	
399 A-23 潟 墓土		土師器	皿	9.0	1.6	5.2	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"、底部糸切り		平坦な底部から屈曲して外へ開く口縁部、端部丸い、	
400 A-23 潟 墓土		土師器	皿	(8.4)	1.6	4.0	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"、底部糸切り		平たい底盤から、やや内湾する口縁部、端部丸い、	
401 A-23 潟 墓土		土師器	皿	9.8	1.6	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"			平たい底盤から屈曲する口縁部、短く立ち上がり端部は丸い、	灯明皿
402 A-23 潟 墓土		土師器	皿	(9.6)	1.6	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"			丸底から短く2段に屈曲し、端部は短く上へつまみ丸い、	2次焼成
403 A-23 潟 墓土		瓦器?	碗		(1.6)	(5.1)			湾曲する体部	焼成していない、
404 A-23 潟 墓土		須恵器	皿		(2.0)	(12.1)	ナロナナ"		平坦な底で体部へ緩く内湾する体部で端部は角張り内側に肥厚	
405 A-23 SP01		須恵器	片口	(24.2)	(9.4)		ナロナナ"		直線的に外方へ開く、端部尖る	
406 A-23 包含層 II-1層		土師器	小皿		(9.4)	1.5	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"		底部から体部にかけて湾曲し、端部内側につまみ上げる	
407 A-23 包含層 II-1層		土師器	小皿		9.4	1.7	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"		平たい底から僅かに内湾する口縁部で、端部丸い、	
408 A-23 包含層 II-1層		土師器	小皿		(9.9)	1.8	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"		湾曲する体部、端部丸い、	
409 A-23 包含層 II-1層		土師器	小皿		(8.9)	1.6	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"		湾曲する体部、端部丸い、	
410 A-23 包含層 II-1・2層		土師器	小皿		(9.8)	1.3	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"		湾曲する体部、端部丸い、	
411 A-23 包含層 II-1層		土師器	皿		(16.0)	(2.5)	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"		湾曲する体部、端部丸い、	
412 A-23 包含層 II-1層		土師器	壺		(14.8)	3.2	(5.2) ナガ"整形、口縁部ヨコナ"		平たい底から内湾する体部に、口縁部は外反し縫剖丸い、	
413 A-23 包含層 II-1層		須恵器	小皿		8.9	2.6	ナロナナ"、底部糸切り		平底で内湾する体部、端部肥厚し丸い、	
414 A-23 包含層 II-1層		須恵器	高壺			(3.2)	(7.0) ナロナナ"		外湾する体部で端部屈曲する	
415 A-23 包含層 II-1層		黒色土器	壺		(14.3)	4.8	(6.6) ナガ"整形、口縁部ヨコナ"、ヨカキ		内湾する体部で端部つまみ上げる	
416 A-23 包含層 II-1層		瓦器	环		(15.8)	(3.7)	ナガ"整形、ヨカキ		内湾する体部で端部丸い、	
417 A-23 包含層		灰釉陶器	小皿		(9.0)	2.3	(5.5) ナロナナ"		縦やかに屈曲する体部で端部外反する、端部丸い高台	直立焼、内面繊維
418 A-23 包含層 4層		須恵器	蓋		(13.5)	1.1	ナロナナ"、天井部ハリ丸い		口縁部屈曲し、端部下へつまみ上げる	
419 A-23 南半 II-1層		木器	板材		(14.5)	2.9	0.7	先端を縛くしている	蓋串?	
420 A-23 南半 II-1層		木器	角材		(22.6)	4.5	3.6 加工痕			
2000348										
421 C-19		土師器	壺		(3.8)		ヨコナ"		屈曲する口縁部	
2001073										
422 A-26 土坑 (pit)		土師器	小皿		8.9	1.5	3.8 ナガ"整形、口縁部ヨコナ"		平たい底から直線的に開き、端部上へつまみ上げる	
423 A-26 土坑 (pit)		土師器	小皿		8.9	1.5	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"		湾曲する体部、端部丸い、	
424 A-26 pit3		土師器	小皿		9.5	2.0	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"		平底から直線的に開く、端部丸い、	
425 A-26 pit3		土師器	小皿		9.8	2.1	ナガ"整形、口縁部ヨコナ"、内面仕上げげ"		湾曲する体部、端部丸い、	

数値の（ ）は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法	他	形態の特徴	備考
	出土地・土層									
426	A-26 pit3	土師器	小皿	10.0	1.7	7.4	整形、口縁部ヨコナデ、内面仕上げテ		平底から直線的に開く、端部丸い、	
427	A-26 pit3	土師器	小皿	9.5	1.8	7.4	整形、口縁部ヨコナデ		湾曲する体部、端部丸い、	
428	A-26 pit3	土師器	小皿	(10.0)	2.5	7.4	成形後口縁部のみヨコナデ、一部が'整形		湾曲する体部、端部丸い、	
429	A-26 pit3	土師器	杯	(15.7)	(2.5)	7.4	整形、口縁部ヨコナデ		内湾する体部で端部つまみ上げる	
430	A-26 pit13	瓦器	碗	(14.0)	(3.5)	7.4	整形、ヨカナデ		内湾する体部で、端部肥厚ぎみで丸い、	2次焼成
431	A-26 pit16	土師器	皿	(15.2)	2.3	(6.2)	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	湾曲する体部で端部で開き端部丸い、	
432	A-26 pit19	土師器	小皿	8.7	1.7	5.9	ウロコナデ、底部糸切り		底部厚く体部外へ開き端部丸い、	
433	A-26 pit19	土師器	小皿	8.8	1.2	7.4	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	備かに内湾する体部で端部つまみ上げる	
434	A-26 pit24	土師器	小皿	9.6	1.9	(3.8)	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	平底で直線的に外へ開き端部丸い、	
435	A-26 pit25	土師器	小皿	9.9	1.2	7.4	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	湾曲する体部、端部丸い、	
436	A-26 第1遺構上面	土師器	小皿	(8.9)	(2.0)	7.4	成形後口縁部のみヨコナデ、内面仕上げテ		湾曲する体部、端部丸い、	
437	A-26 第1遺構上面	土師器	小皿	9.6	1.5	7.4	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	湾曲する体部、端部丸い、	
438	A-26 第1遺構上面	土師器	小皿	(9.3)	1.7	7.4	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	湾曲する体部、端部丸い、	
439	A-26 第1遺構上面	土師器	小皿	(9.1)	1.8	7.4	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	湾曲する体部、端部丸い、	
440	A-26 第1遺構上面	土師器	小皿	9.7	1.6	3.9	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	湾曲する体部、端部丸い、	
441	A-26 第1遺構上面	土師器	小皿	(9.2)	1.4	(5.8)	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	平底から直線的に開く、端部丸い、	
442	A-26 第1遺構上面	土師器	小皿	(9.4)	1.4	(3.6)	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	湾曲する体部から2段に屈曲して端部は上へつまみ上げる	
443	A-26 第1遺構上面	土師器	小皿	9.5	1.7	7.4	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	湾曲する体部から2段に屈曲して端部は上へつまみ上げる	
444	A-26 第1遺構上面	土師器	小皿	(10.0)	(1.1)	7.4	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	歪な底で端部つまみ上げ丸く肥厚する	
445	A-26 第2遺構上面	土師器	小皿	(9.4)	(1.3)	7.4	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	平底から2段に屈曲して端部は上へつまみ上げる	
446	A-26 第2遺構上面	土師器	小皿	(10.2)	(1.5)	7.4	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	湾曲する体部から2段に屈曲して端部は上へつまみ上げる	
447	A-26 pit20	土師器	小皿	(9.9)	1.4	7.4	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	横線を持たない体部で口縁部はやや外反する	2次焼成
448	A-26 第1遺構上面	土師器	皿	(15.1)	2.7	7.4	7.4	整形、口縁部ヨコナデ	湾曲する体部、端部丸い、	
449	A-26 第1遺構上面	須恵器	小皿	(7.8)	2.0	7.4	ウロコナデ、底部糸切り		湾曲する体部、端部丸い、	
450	A-26 第1遺構上面	陶器	小皿	(11.2)	2.2	7.4	施釉、底面のみ露胎、ケスリ		上げ底で内湾する口縁部に、端部丸い、	
451	A-26 第1遺構上面	陶器	碗	(11.0)	(2.7)	7.4	施釉、底面のみ露胎、ケスリ		上げ底で内湾する口縁部に、端部丸い、	
452	A-26 第1遺構上面	須恵器	碗	(15.8)	4.4	(5.7)	ウロコナデ、底部糸切り		湾曲する体部、端部肥厚し丸い、	
453	A-26 第1遺構上面	須恵器	碗	(20.5)	8.3	9.5	ウロコナデ、底部糸切り		平底で直線的な体部、端部角張り肥厚する	
454	A-26 第1遺構上面	磁器	蓋	(3.8)	(1.3)	(2.9)	ウロコナデ、底部のみケスリ		湾曲する体部で端部つまみ上げる	
455	A-26 第1遺構上面	瓦	丸瓦	(12.3)	(7.4)	3.1			蓋	
456	A-26 第1遺構上面	鉄器	釘	11.9	1.3	1.1			2本の同形の釘が接着している	

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	形態の特徴			備考
							技法	他		
457	A-24 包含層1	瓦器	碗	(15.2)	4.3	5.4	打・整形、口縁部ココナツ、ヨコナギ		湾曲した体部で端部丸い、台形の小さい高台を付ける	
458	B-20 近世漢	瓦	丸瓦	(8.4)	1.5					
459	B-20 近世石継溝 塙	瓦	丸瓦	(13.0)	(4.9)	1.5				
	2001126									
460	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	壺	(17.5)	(5.4)		打・整形、ヘテナギ、口縁部ヨコナツ、2条突槽ヨコナツ、ウラナギ、3条削り出し突槽		外反する頸部で端部肥厚する	
461	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	壺	17.3	(7.9)				外反する頸部で端部角ばる	
462	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	壺		(15.8)		打・成形、外面ハガキ、内面板ナギ		湾曲する体部	
463	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	底部		(6.8)	(7.2)	外面ハガキ、内面板ナギ		平底から内湾する体部	
464	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	底部		(2.4)	(8.0)	打・成形、		平底	
465	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	壺	12.2	3.6		打・整形後ヘテナギ		外湾する、中央に穿孔	
466	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	壺	(5.4)	2.9	(5.2)	打・成形後、ナギ		平底で外へ直線的に延びる	黒斑
467	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	壺	(23.7)	(5.8)		打・整形、口縁部ヨコナギ、3条沈線		直線的な体部から短く折り曲げる、端部丸い	
468	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	壺	(28.4)	(5.2)		打・整形、口縁部ヨコナギ、刻み目		直線的な体部から短く折り曲げる、端部丸い	
469	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	壺	(24.2)	(16.9)		打・整形、口縁部ヨコナギ、2条沈線		僅かに内湾する体部で短く外反する口縁部	
470	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	壺底部		(3.4)	5.8	打・整形		僅かに上げ底で、外へ開く	
471	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	壺(底部)		(5.0)	(5.2)	打・整形、内面板ナギ		平たい底で、直線的に開く	
472	B-23 黒色砂質シルト	弥生土器	壺(底部)		(6.0)	6.5	打・整形、板ナギ		平たい底で、直線的に開く	
473	B-23 黒色砂質シルト	石器	敲石	11.4	6.1	3.2	端部に敲打痕			
474	B-23 黒色砂質シルト	石器		8.2	3.1	2.7	片側に自然面残る			
	20011044									
475	B-24 旧河道	須恵器	壺蓋	12.4	4.2		ワロタスリカラヨコナギ、1方向の仕上げげ		天井部平たく内湾する体部、口縁部は外反し端部丸い	
	20011227									
476	B-25 P-14	綠釉陶器	碗		(1.4)		施釉		外反する口縁部	
477	B-25 P-9	土師器	小皿	(10.3)	1.4				湾曲する体部で端部尖る	
478	B-25 P-22	黒色土器	碗	(15.8)	(3.4)		打・整形、口縁部ヨコナギ、ヨコナギ		直線的に延び、端部内側に肥厚	
479	B-25 P-17	黒色土器	碗	(16.6)	4.5	(8.8)	打・整形、口縁部ヨコナギ、ヨコナギ、小さい高台		湾曲する体部で端部丸い、丸い小さな高台	
480	B-25 灰色中砂	須恵器	碗		(1.6)	(7.4)	ヨコナギ、底部系切り		湾曲する体部	
481	5層 包含層	須恵器	碗		(2.8)	(9.7)	ヨコナギ、底部に鍛鑄時の工具痕		湾曲する体部で端部丸い三角形の高台	
482	⑤脣面下 南端	須恵器	壺		(3.8)	(5.1)	ヨコナギ、底部系切り		僅かに内湾する体部	
483	包含層(灰色中砂)	須恵器	壺		(2.3)		ヨコナギ、		端部内外に肥厚	
484	④層	土師器	羽釜		(3.9)		ヨコナギ		直線的な体部に上向きの鶲が付く	

数値の（ ）は復原・残存値

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法		形態の特徴	備考
							施釉	他		
485	包含層（灰色中砂）	青磁	碗	15.9	4.2				直線的な体部で端部尖る	
486	5層 包含層	瓦	平瓦	(6.4)	(4.6)	1.6	縄目、カツリ			
487	B-24 西半 横乱	木器	服飾具 下	22.0	9.0	2.8	使用痕あり、左足用、齒は削り出し			488と一対
488	B-24 西半 横乱	木器	服飾具 下	21.6	8.6	2.6	使用痕あり、右足用、齒は削り出し			一部欠損、一対
489	B-24 東半	石器	石鎚	3.4	0.8	中央部には自然面多く残す			切妻大形品	
490	B-24 西半 横乱	銅製品	鈴	3.6	4.4		表面には面取りの跡、型作り			
	2001235									
491	B-25 黄色土	瓦器	焼			(0.7)	(5.4)ナガ"せ上げ		平たい底部、小さい高台	質感
492	B-25SSD-02埋土中	須恵器	壺B			(1.8)	(8.5)ロコテ"		外へ踏ん張る高台、体部直線的に延びる	
493	B-25包含層	石器	剥片	5.8	6.0	0.9	下側に自然面残る、両端には御かい剥離			
	2002057									
494	B-27 SK01	弥生土器	甕	(33.9)	(21.8)		ヒ"成形からせ整形、口縁部ヨコナギ"、刻み目		僅かに内湾する体部から短く外反する口縁部、端部丸い	
495	B-27 SK01	弥生土器	甕			(10.8)	(8.0)サ"整形後行"		僅かに内湾する体部	494と同一個体
496	B-27 SK02	弥生土器	甕	(18.0)	(3.0)		ナ"		直線的に開く口縁部	
497	B-27 SB01 P1	弥生土器	高杯脚			(6.7)	内面カヌ"		直線的な脚部	
498	B-27 P7	土師器	鉢	(29.1)	(8.0)		板ナ"、口縁部ヨコナギ"		上面平滑で軽用か	
499	B-27 P7	土師器	羽釜			(2.7)	(28.3)ヨコナギ"		僅かに内湾する体部、鋸端部は角張る	
500	B-27 P7	土師器	羽釜	(30.3)	(6.9)		板ナ"、口縁部ヨコナギ"		直線的な体部で端部尖る、鋸上向き	
501	B-27 P7	黒色土器	焼	(13.8)	(3.8)		スリ"、ナガ"、ヨコナギ		内湾する体部、端部丸い	
502	B-27 P7	黒色土器	焼	(15.2)	(4.4)		ナ"、ヨコナギ		内湾する体部、端部丸い、内面口縁部下に沈線	
503	B-27 P7	木器	付け木	-12.1	1.2	0.9			曲がっている	
504	B-27 P10	弥生土器	甕	(31.3)	(5.3)		ナ"、1条沈線		直線的な体部で短く外反する口縁部	
505	B-27 P10	土師器	皿	(12.8)	2.0	(6.0)	ナ"、口縁部ヨコナギ"		僅かに外反する端部	
506	B-27 P10	須恵器	焼	(15.7)	(3.4)		ロコテ"		直線的な体部で、底部板厚	
507	B-27 SD01	須恵器	碗?	(13.7)	(2.2)		ロコテ"		弓曲する体部、端部丸い、	
508	B-27 SD01	須恵器	碗?	(16.9)	(5.3)		ロコテ"		弓曲する体部、底部平たい	
509	B-27 SD01	須恵器	焼			(4.2)	(5.3)ロコテ"、底部糸切り		弓曲する体部、底部平たい	
510	B-27 SX01	弥生土器	甕	(23.0)	(5.1)		ナ"、口縁部ヨコナギ"		直線的な体部で短い口縁部、端部丸い	
511	B-27 SX01	弥生土器	臺			(3.2)	3条の沈線の間に竹管文		内湾する体部	
512	B-27 SX02	土師器	小皿	(7.8)	1.3	(2.7)ナ"、口縁部ヨコナギ"			内湾する体部で2段に屈曲する口縁部、端部つまみ上がる	
513	B-27 SX02	土師器	羽釜			(4.1)	ナ"		僅かに外反する、鋸上向き	2次焼成

六条遺跡 遺物観察表

番号	調査番号 出土場・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法 他		形態の特徴	備考
							ナガ	、口縁部ヨコナギ		
514 B-27 SX02	瓦器	环	(16.8)	2.9	(1.9)	(3.8)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	内湾する体部	ミニチュア
515 B-27 SX03	弥生土器	底鉢	(12.4)	(3.6)	(3.6)	(3.8) ナガ	ナガ	、口縁部ヨコナギ	上げ底で直線的な体部	2次焼成
516 B-27 遺構面清掃時	土師器	壺	(13.7)	(3.1)	(3.2)	(7.2) クヌリ、ナガ	ナガ	、口縁部ヨコナギ	くの字の口縁部で端部内側に肥厚	
517 B-27 遺構面清掃時	黑色土器	碗	(21.7)	(5.4)	(22.8) クヌキ、ロウナギ	(4.1)	0.9	アマナギ、内面丸滑用	内湾する体部で、断面三角形の臺台付く	
518 B-27 遺構面清掃時	黑色土器	碗	(16.8)	2.5	(2.4)	(4.2) クヌリ、ナガ	ナガ	、口縁部ヨコナギ	内湾する体部で、端部丸い	
519 B-27 遺構面清掃時	須恵器	鉢	(16.8)	2.5	(2.4)	(4.2) クヌリ、ナガ	ナガ	、口縁部ヨコナギ	内湾する体部で、短く外反する、端部丸い	
520 B-27 遺構面清掃時	須恵器	転用鏡	(16.8)	2.5	(2.4)	(4.1)	0.9	アマナギ、内面丸滑用	直線的な底部、高台部分の内側割分	
521 B-27 遺構面清掃時	灰釉陶器	碗	(16.8)	2.5	(2.4)	(5.6)	施釉		直線的な底部、高台部分の内側割分	
522 B-30	土師器	小皿	(8.1)	1.3	(5.6)	(5.6)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	端部付近で外反する、端部丸い	
523 B-30	土師器	小皿	(9.4)	1.6	(4.0)	(4.0)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	端部付近で外反する、端部丸い	
524 B-30	土師器	碗	(15.3)	2.0	(4.0)	(5.3)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	端部付近で外反する、端部丸い	
525 B-30	須恵器	碗	(15.9)	2.0	(3.3)	(4.1)	ロウナギ		端部付近で外反する、端部丸い	
526 B-30	須恵器	碗	(15.1)	2.0	(3.3)	(4.6)	ロウナギ	、底部糸切り	直線的で端部肥厚する	
527 B-30	瓦器	碗	(14.9)	2.0	(4.3)	(4.3)	ナガ	、成形、ナガ	直線的で端部肥厚する	
528 B-30	須恵器	环身	(12.7)	2.0	(2.4)	(4.1)	ロウナギ	、ナガ	直線的で端部肥厚する	
529 B-30	瓦	平瓦	(7.3)	2.0	(9.9)	(9.9)	ナガ	、ナガ	直線的で端部肥厚する	
530 B-31	土師器	小皿	(8.6)	1.6	(4.0)	(4.0)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	
531 B-31	土師器	小皿	(8.7)	1.7	(4.0)	(4.0)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	
532 B-31	瓦器	小皿	(9.6)	1.8	(4.0)	(4.0)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	
533 B-31	瓦器	小皿	(9.2)	2.0	(4.0)	(4.0)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	
534 B-31	土師器	皿	(16.9)	1.6	(4.0)	(4.0)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	
535 B-31	瓦器	碗	(14.4)	1.8	(4.0)	(4.0)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	
536 B-31	瓦器	碗	(14.9)	2.0	(4.2)	(4.2)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	
537 B-31	瓦器	碗	(14.5)	2.0	(4.1)	(4.1)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	
538 B-28 SD01	石器	石繖	(14.4)	1.5	(3.4)	(3.4)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	
539 B-27 SK02	石器	石繖	(14.9)	1.5	(3.4)	(3.4)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	
540 C-38	黒色土器	碗	(14.5)	2.5	(4.3)	(5.1)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	
541 C-32 黒色土	石器	剥片	(14.5)	2.5	(4.3)	(4.3)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	
542 C-39	鉄器	釘	(2.8)	1.1	(1.1)	(1.1)	ナガ	、口縁部ヨコナギ	直線的で端部肥厚する	

数値の（ ）は復原・残存値

芦屋市

六 条 遺 跡

—芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—



2003年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会



SX01と土石流



A-3区 第3面全景（東から）

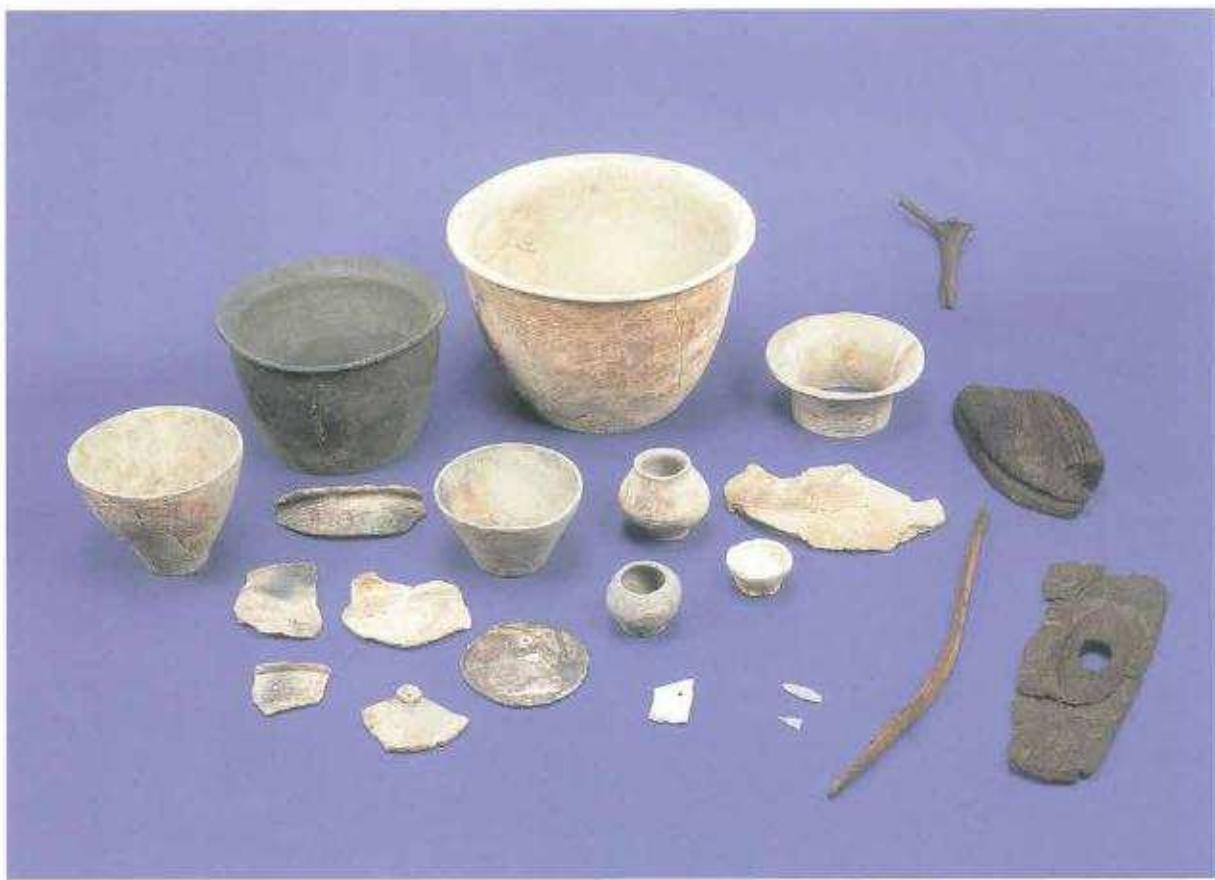


36

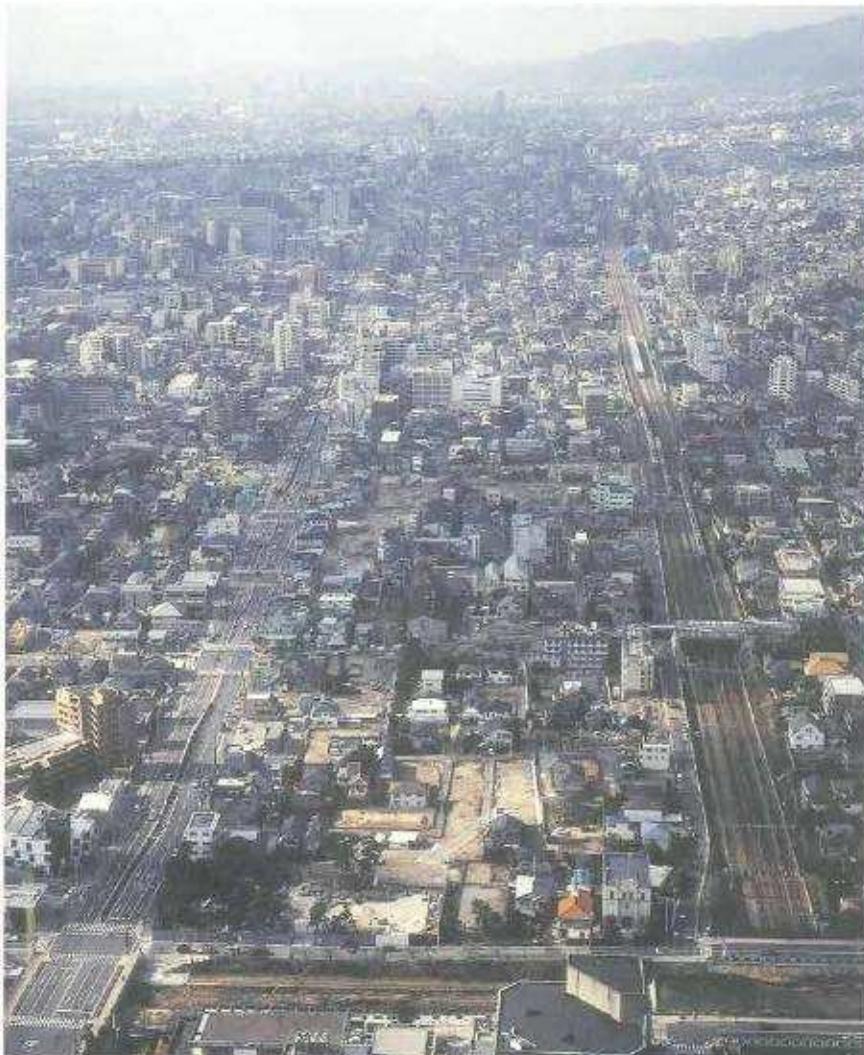
SX01 出土木箇



B-7区 方形周溝（西から）



B-7区 出土遺物



空中写真（東上空から）



A-7区 SG01 全景



140

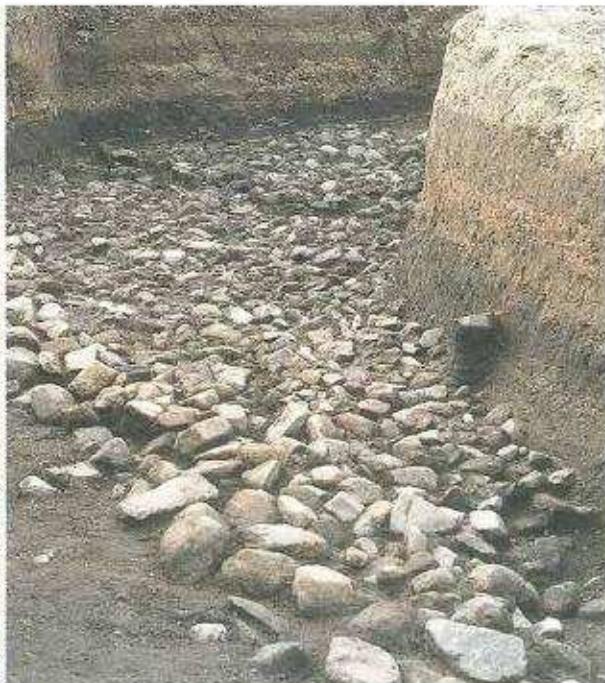


141



142

A-7区 出土遺物



A-14区 SG01 全景



B-12区 北壁



B-11区 旧河道



A-26区 東壁（地震痕跡）

例　　言

1. 本書は兵庫県芦屋市清水町・前田町に所在する六条遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、1995年1月17日に発生した兵庫県南部地震の震災復興事業（芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業）の遺跡調査である。
3. 確認調査は、平成9・10年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が震災復興の埋蔵文化財国庫補助金で実施した。平成9年度は岡田章一・三輪晃三（岐阜県支援）が、平成10年度は小川良太・中川渉・深江英憲が担当し、遺跡の調査範囲の確定を行った。
4. 全面（本発掘）調査は、平成11年度から平成14年度にかけて順次実施している。担当者も多数で、調査次数も15次を越えるものである。調査面積は次数によって様々である。調査は、すべて兵庫県教育委員会が調査主体となって行った。平成11年度のみ住宅都市整備公団（のち都市基盤整備公団と改称）と委託契約を交わして事業を行ったが、それ以外の年度は都市基盤整備公団の直接執行で調査員を派遣した形態を探っている。
5. 調査で使用した方位は国土座標第V系を使用した。また、水準は都市基盤整備公団設定のB, M. を使用した。
6. 現地での写真は各調査担当者が撮影したものである。図版1・2の空中写真は国土地理院撮影のものを、カラー図版3の空中写真はジオテクノ関西撮影のものを使用した。
7. 整理作業は、平成13・14年度に都市基盤整備公団と委託契約を交わして兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。
8. 執筆は各担当者が行い、文責は本文中に記している。編集は八木和子の協力を得て渡辺が行った。
9. 本書にかかる遺物や図面・写真などの記録資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）ならびに同魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。ご活用下さい。
10. 発掘調査・整理調査にあたって、下記の方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。
(敬称略) 寒川 旭・森岡秀人・竹村忠洋・芦屋市教育委員会・都市基盤整備公団

本文目次

I はじめに	1	2 第2次確認調査の結果	
1 調査に至る経緯		3 平成11年度全面調査の結果	
2 確認調査の経過		4 平成12年度本発掘調査の結果	
3 全面（本発掘）調査の経過		5 平成13年度本発掘調査の結果	
4 整理作業の経過		6 平成14年度本発掘調査	
II 位置と環境	5	IV 地震痕跡	92
III 調査結果	8	V おわりに	97
1 第1次確認調査の結果			

I はじめに

1. 調査に至る経緯

1995年1月17日、兵庫県南部を襲った阪神淡路大震災によって大きな打撃を受けた。六条遺跡の所在する芦屋市清水町・前田町は、芦屋市域の中で最も大きな被害を受けた地域である。震災後、芦屋西部地区として再開発事業が計画された。震災復興事業として認可され、当該地を第一地区として住宅都市整備公団（調査中の平成11年度から都市基盤整備公団と改称）が施工し、国道2号線以南の津知町を芦屋西部第二地区として芦屋市主体で事業が実施されることになった。

芦屋西部第一地区震災復興土地区画再開発事業は、芦屋市西部で西側を神戸市と接している。北側はJR神戸線（東海道本線）に、南側は国道2号線に、東側は芦屋川に囲まれた地域である。周知の六条遺跡が存在することから、計画段階から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所と住宅都市整備公団の間で協議が行われた。まず、遺跡の広がりを把握することが第一と考え、確認調査から実施することとなり、1997年8月から調査可能な地点に限って確認調査を実施した。（渡辺）

2. 確認調査の経過

① 第1次確認調査の経過（平成9年度）

確認調査の対象地点は芦屋市清水町・前田町に位置する東西約580m、南北約180m、面積約10.4haに及ぶ住宅地である。平成9年度に、兵庫県阪神・淡路大震災復興事業として、当該地に芦屋西部第1震災復興土地区画事業が計画された。しかし、事業予定地周辺には西側に六条遺跡、北側に寺田遺跡などの周知の遺跡が隣接しており、当該地に遺跡の広がることが予想された。

このため、県教育委員会では、住宅・都市整備公団と協議の結果、遺跡の有無及び範囲を確認するため、同公団の依頼を受け、事前の確認調査を実施した。

② 第2次確認調査の経過（平成10年度）

芦屋西部第一地区では阪神・淡路大震災後、住宅・都市整備公団による震災復興土地区画整理事業が計画された。そのため兵庫県教育委員会では平成9年度に埋蔵文化財の確認調査を行い、事業予定地のI～IIIブロック（西部）とV・VIブロック（東部）の一部に遺跡が存在することを把握し、周知の遺跡である「六条遺跡」が、この範囲にまで広がっていることを確認した。しかし、昨年度の調査ではIII・IVブロックの大半とVブロックの一部について、遺跡の存否を判断するだけの資料が得られなかった。そこで、今回はその範囲について、平成10年11月30日付、おは41-106の依頼に基づき、第2次の確認調査を実施した。

（深江）

3. 全面（本発掘）調査の経過

（1） 平成11年度の経過

確認調査の結果、遺跡の広がりがほぼ確認された。その結果を元に市道をはじめ街路部分の拡幅部分を対象として全面調査を実施することとなった。事業の性格上早急の再開発施工が必要であったことから、用地解決地点から順次調査を行うこととした。そのため、調査地点は広範となり、調査面積は狭小となっている。今調査は受託事業で行った唯一の調査となった。調査は確認調査結果から、大きく4地点に分けられた（A～D地点と呼称）。その地点ごとに調査順に調査トレンチNoとした（例えば、A-1、B-4

など)。今年度はD地点の調査ではなく、3地点の調査を実施した。A地点は7箇所(A-1~7)、B地点も7箇所(B-1~7)、C地点は3箇所(C-1~3)の調査を行った。ただ、合計しても調査面積は495m²と狭い対象面積である。調査は原則的に西側から東側に向けて実施した。平成11年10月27日から12月20日までの実働28日間を費やして調査を行った。

調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
事務担当 総務課 課長 岩澤重則
企画調整班 調査専門員 山本三郎
主査 深井明比古
復興調査班 調査専門員 小川良太
調査担当 復興調査班 主査 渡辺 昇
補助員 伊福千加子・野原夏子



調査風景

作業委託 西本建設株式会社

(2) 平成12年度の経過

平成12年度も昨年度と同様に用地が解決した地点から順次調査を実施していった。年間を通して断続的に調査員を配置することは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所として調査計画が立てられないことから困難であった。しかし、震災復興事業の性格上速やかな対応が必要であることから、調査箇所がある程度集まった段階で調査を実施することとなった。今年度は7回の調査を行った。調査当初は、街路部分を対象としてきたが、年度途中から擁壁工事部分も立会い調査を実施することとなった。さらに第4四半期からは地耐力の弱い住宅地の地盤改良が必要な地域もあることが明らかになってきた。この事業についても都市基盤整備公団が主体となることから、調査を兵庫県教育委員会が担当することとなった。

今年度は早い段階に調査地点を確定することが困難で、早急な対応が迫られたことから、都市基盤整備公団の直接執行で行われ、調査員の派遣を兵庫県教育委員会が行って調査を行った。本体工事の入札も終了しており、各地点の施工業者が発掘調査を受けて調査を行った。3地区に分かれ西半のA~C(I~III)街路を大豊建設株式会社が、東半西側のD(N~V)街路を株新井組が、東半東側のE(VI)街路を名工建設株式会社が担当した。(街路については暫定的なもので、その後街区として細かく分けられている。)埋蔵文化財は確認調査結果から、4地区に分けられており、区画整理の分け方とは異なっている。各地区的調査担当者・面積等は表の通りである。(以下同じ)

調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
事務担当 企画調整班 調査専門員 山本三郎
主査 吉誠雅仁
調査第4班 調査専門員 西口和彦
調査担当 企画調整班 甲斐昭光・山本 藏・多賀茂治
調査第4班 渡辺 昇・村上泰樹・川村慎也
調査補助員 永野 香



調査風景

(3) 平成13年度の経過

平成13年度も昨年度と同様に調査可能な地点から順次調査を行った。調査方法や体制・形態なども同じである。街路部分・擁壁工事部分は1ヶ所だけで、地盤改良に伴う調査が多くかった。調査面積は狭い地点が多い。調査地点は各区にまたがっており、集中しているわけではない。

調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
事務担当 企画調整班 主任調査専門員 井守徳男、主査 吉識雅仁
調査第1班 調査専門員 吉田 昇 調査第2班 調査専門員 小川良太
調査第3班 調査専門員 山本三郎 調査第4班 調査専門員 西口和彦
調査担当 調査第1班 別府洋二 調査第2班 小川良太
調査第3班 大平 茂・村上泰樹 調査第4班 渡辺 昇

(4) 平成14年度の調査経過

昨年度に引き続いて解決した部分について調査を実施した。今年度は地盤改良に伴う調査が多くを占めている。

調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
事務担当 企画調整班 主任調査専門員 井守徳男
主査 深井明比古
調査第1班 調査専門員 吉田 昇
調査担当 調査第1班 渡辺 昇

4. 整理作業の経過

整理作業は発掘調査の中途から行った。事業が復興事業で予算年度が限られていることによるもので、平成13・14年度の2年度に渡って報告書作成までの作業を行った。一部水洗い作業のみ六条遺跡の現場事務所で行った。それ以外の水洗い作業と注記作業は魚住分館で平成13年度に実施した。

平成14年度はそれ以降の作業を兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。

(渡辺)

調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
事務担当 総務課 課長・森 俊雄 事務職員・上野良輔
整理保存班 主任調査専門員・池田正男 主査・村上泰樹 主任・深江英憲
嘱託員 八木和子・伴 悅子・島田留里・村上京子・前川悦子・川村由紀・岡田祥子
香川フジ子・西口由紀・島村順子・木村淑子・前田千栄子・鈴木まさ子
中西睦子・宮野正子



調査風景



整理作業風景

六条遺跡調査一覧表

No.	調査番号	期間	調査地点				面積 (m ²)	主な遺構	備考
	調査種別	担当者	A地区	B地区	C地区	D地区			
平成9年度									
	970296	9.8.20~9.5					132		
	確 認	岡田・三輪						弥生土器・白磁	
平成10年度									
	980223	11.1.18~2.17					337		調査範囲の確定
	確 認	中川・深江						縄文土器	
平成11年度									
	990233	11.10.27~12.20	1~5	1~5	1~3		495	土坑・門・土石流	
	全 面	渡辺						木簡・須恵器・土師器	
平成12年度									
①	2000109	12.4.10~5.19	6	6~11	4~12		634	掘立柱建物跡・方形周溝	
	本発掘	渡辺						弥生土器・木器・須恵器	
②	2000206	12.6.5~7.6	7~9	12~13	13		456	圓池・溝・土坑	
	本発掘	渡辺・川村						弥生土器・土師器・蘇民将来札	
③	2000238	12.8.28~9.6	10~12	14	14	1	192		
	本発掘	多賀						弥生土器・瓦器	
④	2000314	12.10.30~11.29	13~19	15~17	15~18		1008	圓池・掘立柱建物跡	擁壁工事立会含
	本発掘	渡辺						土師器・須恵器・瓦器	
⑤	2000347	13.1.9~2.9	20~23				670	圓池・掘立柱建物跡	擁壁工事立会含
	本発掘	甲斐						土師器・須恵器・瓦器	
⑥	2000348	13.1.15~16			19		90		
	本発掘	山本						縄文土器・サヌカイト	
⑦	2000376	13.3.13~3.19		18~19	20~23		132	水田	工事立会
	立会	村上						土師器	
平成13年度									
①	2001011	13.4.12~4.17			24~27		38		擁壁工事立会含
	立会	大平							
②	2001046	13.4.18~5.7	24	20~22			19	近世溝	
	確認	大平						瓦	
③	2001073	13.4.23~4.27	25~26				81	掘立柱建物跡	
	本発掘	大平							
④	2001125	13.7.2			28~29		96		
	立会	小川							
⑤	2001126	13.7.13~14	27	23			58		
	確認	小川						弥生土器	
⑥	2001044	14.2.18~19		24			24	旧河道	
	本発掘	渡辺						須恵器・土師器	
⑦	2001227	14.2.26~3.8		25			245	掘立柱建物跡・溝	
	本発掘	別府						土師器・瓦器・綠釉	
⑧	2001235	14.3.18~25		26			57	溝	
	本発掘	村上						土師器	
平成14年度									
	2002057	14.5.16~12.10		27~33	30~42	2~4	895	掘立柱建物跡・土坑・溝	工事立会含む
	本発掘	渡辺						弥生土器・石器・須恵器	

II 位置と環境

六条遺跡は、芦屋市清水町・前田町に位置する遺跡である。芦屋川右岸に位置し、神戸市と市境を接している。遺跡から神戸市方向に向かって地形は徐々に低くなっている。調査を実施した芦屋西部第一地区震災復興土地区画再開発事業用地は、西側は神戸市東灘区森南町1丁目に、南側は国道2号線に、北側はJR神戸線に、東側は芦屋川に囲まれた地域である。

遺跡は六甲山南麓に位置している。六甲山は992mを最高峰とする神戸市・芦屋市・西宮市の背後に屹立する山塊である。南西から北東方向に主軸を持ち、その方向に多くの断層が認められる。断層による擦れや地滑りなどによって山麓部分は強く影響を受けている。さらに基盤層である花崗岩の風化した土層が流されやすいことも加わって大きな地形の改変が見られる。洪水や地震の被害を多く受けていることが、発掘調査でも明らかになっている。地形変換線が大きく阪急電鉄神戸線と国道2号線付近に2ヶ所あり、この間が兵庫県南部地震の被害を強く蒙った地域である。六条遺跡周辺は芦屋川によって運ばれた堆積物で形成された扇状地である。緩やかな傾斜面で平坦にみえるが、細かく観察すると一律ではなく変化がある。国道2号線付近には段丘崖があり、1m未満の標高差が認められる。これは縄文海進による波食崖とも言われている。芦屋川は天井川になっており、標高は最も高くなっている。大局的には芦屋川堤防を最高所として西側に向かって低くなっている。

旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡は丘陵から山麓部に多く立地している。以前から知られている遺跡は、岩ヶ平遺跡や朝日ヶ丘遺跡などの遺跡であった。国府型ナイフが多く採集されている。六甲南麓の周辺部も同じ状況を示している。最近の調査で低地にまで遺跡が存在することが判明してきた。早くは山芦屋遺跡など山麓部の遺跡が調査され、多くの遺構を検出している。津知遺跡や堂ノ上遺跡でも旧石器が出土している。旧石器を確認している大半の遺跡で、縄文時代の遺物も確認されている。縄文時代になって新たに活動が認められるのは、扇状地から沖積地にかけての遺跡である。最近の調査では若宮遺跡で晩期の土器がまとまって出土しており、堂ノ上遺跡でも多量の植物遺体とともに土器・石器が出土している。六条遺跡でも確認調査で、晩期の土器が出土しており、上方の芦屋廃寺遺跡・寺田遺跡・三条岡山遺跡でも土器の出土が知られている。東灘区の本庄町遺跡や本山遺跡も同時期の遺跡である。西岡本遺跡で早期の住居跡が調査されている。古い時期の遺跡は山麓部に集中し、山芦屋遺跡も早期から生活をはじめ前期にかけて盛行した遺跡である。住居跡など調査されている。後期になると扇状地部分に遺跡は拡大し、本庄町遺跡では貯蔵穴が確認されている。晩期になるとさらに低い部分に生活圏を広げており、六条遺跡や若宮遺跡、東灘区北青木遺跡で土器が出土している。

弥生時代の前期になつても遺跡の広がりに大きな変化はない。晩期からの継続遺跡が多く存続している。本庄町遺跡では、弥生時代の象徴である稻作文化の遺構である水田跡が調査されている。地点を変えて集落を継続させている。北青木遺跡は前期で集落を廃棄した単純遺跡であるが、地点を変えて後期に集落を営んでいる。前期の平鐵などの木製品や多くの土器を出土している。六条遺跡も前期の遺跡が確認され、前期で終息する集落である。東側には西宮市北口町遺跡があり、武庫川を越えた尼崎市には多数の遺跡の存在が知られている。平野の広さや可耕地の手軽さなどを考えても武庫川によって開拓された平地が弥生時代の集落として好まれたのであろう。田能遺跡は拠点集落であり、上ノ島遺跡は北青木遺跡とともに弥

生時代初頭の開拓ムラと位置付けられ、東武庫遺跡は朝鮮半島の無文土器が出土したことと方形周溝墓群で著名である。



六条遺跡遠景

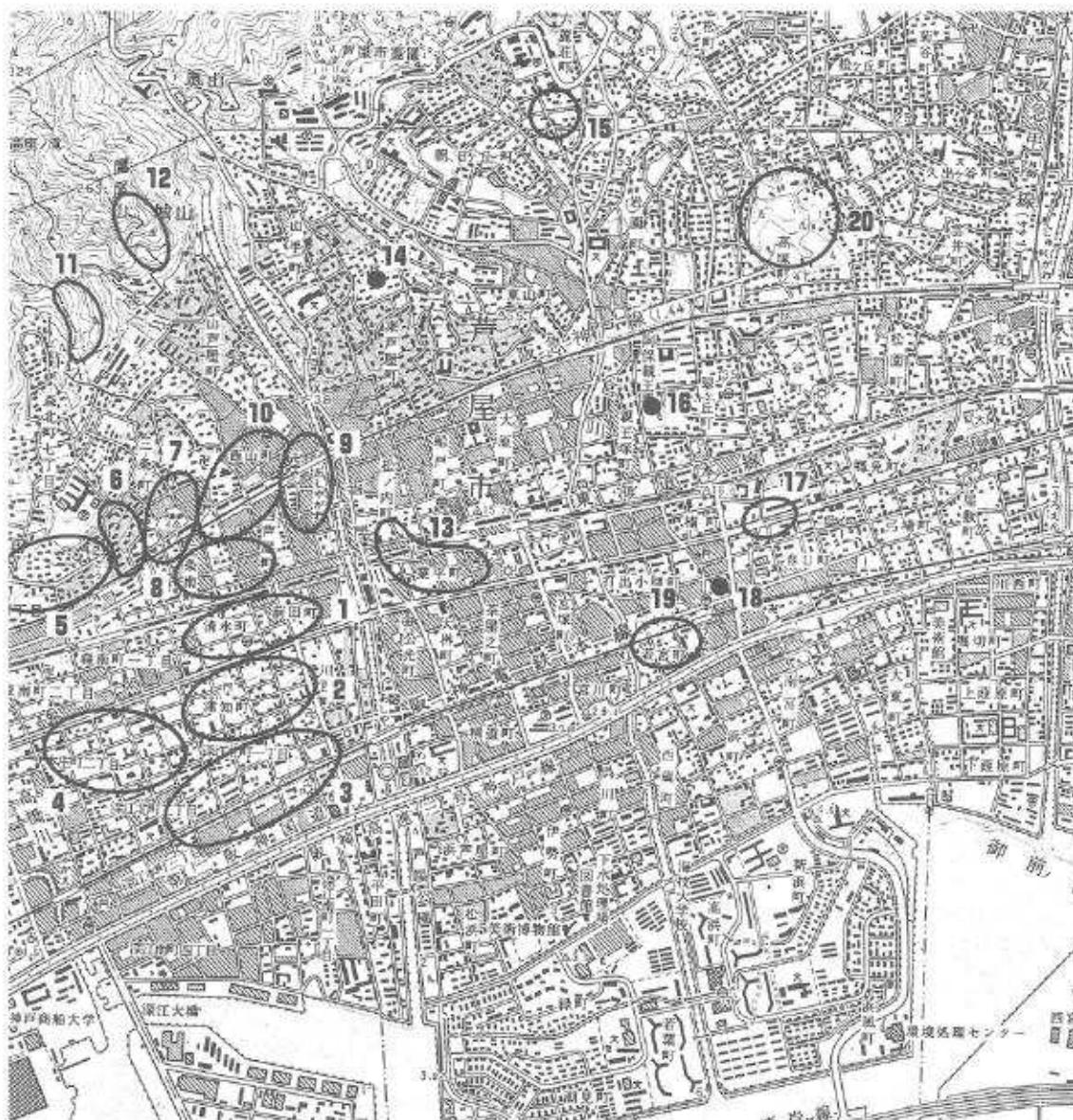
芦屋市周辺には拠点集落は認められないが、芦屋を代表する遺跡の種別として高地性集落がある。兵庫県の史跡指定第1号となった会下山遺跡で代表される丘陵上に存在する集落で、東に城山遺跡、西に丸山遺跡・金鳥山遺跡・保久良山遺跡（神戸市東灘区）が立地している。高地性集落は中期後半の短期間の集落と考えられていたが、会下山遺跡は後期まで存続する代表的な遺跡である。最近では淡路島や明石川流域など後期の高地性集落の方が一般的になっている。会下山遺跡は銅鐸や磨製石器など特殊な遺物も保有しており、狼煙場という高地性集落の性格を示す遺構も検出されている。現在、遺跡整備がなされており、芦屋市立山手中学校の裏山であり、六条遺跡をはじめ多くの遺跡を視界に納めることができる眺望の良好な遺跡である。六条遺跡では中期から後期にかけての明確な遺構は検出されていない。

遺物も磨滅した破片が出土しているだけである。この時期は寺田遺跡・芦屋廃寺遺跡は集落を増大させており、堅穴住居跡なども質量ともに増している。両遺跡以外にも月若遺跡・三条九ノ坪遺跡・三条岡山遺跡や東灘区の森北町遺跡が同じ時期の遺跡である。六甲南麓は銅鐸の稠密地帯である。北西側では生駒銅鐸と森銅鐸（東灘区）が、東側では堂ノ上遺跡から出土している。西側約1.3kmには発掘調査で銅鐸が出土した本山遺跡がある。若宮遺跡は中期初頭の堅穴住居跡が検出されており注目される遺跡である。縄文晩期の土器もあり、早くに営まれた集落ながら継続しない。

弥生時代後期の周溝墓は周辺で比較的多く確認されている。住吉宮町遺跡（東灘区）で方形周溝墓があるが、円形周溝墓の多い地域である。東灘区では深江北町遺跡で12基、住吉宮町遺跡で2基、郡家遺跡で5基、中央区では雲井遺跡で7基確認されている。古墳時代になると、周溝墓が造られた地域周辺に前期古墳が築造されている。旧海岸線沿いに万葉集や伊勢物語・謡曲などの悲恋伝承となった処女塚・東西求女塚の3基の前期古墳が著名である。中央の前方後方墳である処女塚古墳が南を向き、東西にある求女塚古墳が中央の処女塚古墳の方を向いていることによって生まれた伝承である。ただ、築造時期は僅かにずれている。処女塚古墳は全長66mを測り、遺跡整備されている。墳頂には歌碑も立てられている。墳裾に小型の箱式石棺があり、墳丘から丹後型の特殊器台が出土している。東求女塚古墳は西を向く前方後円墳であったが、前方部はすでに削平されている。三角縁神獣鏡が出土しているが、3基の中では新しいと考えられている。西求女塚古墳は公園整備に伴って古墳の調査が継続的に実施され、三角縁神獣鏡を含む13面と兵庫県で最多の鏡を保有する堅穴式石室を内部主体とした前方後円墳である。全長110mで東を向いている。伏見地震で石室が崩壊したもので、地震被害の好例として使われることが多い事例である。他の前期古墳はやや高い位置にある。芦屋市阿保親王塚古墳と東灘区福保曾塚古墳で、ともに鏡を出土している。この時期の集落は六条遺跡周辺に多く存在し、最近調査例が増加している。寺田遺跡・芦屋廃寺遺跡・三条岡山遺跡などの芦屋市の遺跡と住吉宮町遺跡・郡家遺跡などの東灘区の遺跡と西宮市高畠遺跡である。六条遺跡では住居跡はないが、旧河道から土師器・須恵器が出土している。

歴史時代になると、遺跡北側に芦屋廃寺が創建される。今まで塔心礎の存在から寺域が想定されていたが、近時の調査で金堂などが調査され、多くのことが明らかになってきた。寺院は六甲山麓では長田区房王寺まで存在しない。六条遺跡の北側の寺田遺跡や南側の津知遺跡・深江北町遺跡では和同開珎・木簡や墨書き土器など律令期の中心地域を示す遺物が出土しており、大型建物も検出されている。兎原郡衙は郡家遺跡が考えられていたが、当遺跡周辺も可能性の残る地域である。また、深江北町遺跡の木簡・墨書き土器によって芦屋驛家の比定地から確定に昇格したように思う。山陽道が遺跡群のどこかを通過していたことは確実で、郡衙は推定の域を出ないが、芦屋驛家については六条遺跡周辺に位置していたことはほぼ間違いないであろう。律令期にはじまった莊園はその後も継続して営まれている。古代中世そして現代にかけて洪水に遭いながらも、遺跡（生活）を継続させている。

(渡辺)



1 六条遺跡	2 津知遺跡	3 深江北町遺跡	4 本庄町遺跡	5 森北町遺跡	6 三条岡山道路
7 三条九の坪遺跡	8 寺田遺跡	9 月着遺跡	10 芦屋麻寺遺跡	11 会下山遺跡	12 城山遺跡
13 菜平遺跡	14 芦屋神社古墳	15 朝日ヶ丘遺跡	16 阿保親王塚	17 竜ノ上遺跡	18 金津山古墳
19 若宮遺跡	20 高塚古墳群				

図2 六条遺跡の位置と周辺の遺跡

III 調査結果

1. 第1次確認調査の結果

確認調査は10.4haと広大な事業予定地内に点在する住宅・都市整備公団の所有地のうち、調査可能な33ヵ所に、2m×2mのグリッドを設定して実施した。各グリッドの名称は調査地を南北に走る道路によつて6地区（I～VI区）に分け、それぞれの地区ごとに、1～10の番号を付けた。

調査の結果、II-1・4・6、III-6・7、V-1、VI-2グリッドの7ヵ所でピット、土坑、溝などの遺構が検出され、また、I-1、II-1・2・3・4・5・6・7・8・10、III-5・6・7・8、IV-3、V-4、VI-2・3グリッドの18ヵ所で近世の陶磁器、中世の土師器、須恵器、白磁、黒色土器、古墳時代の須恵器、弥生土器などの遺物が出土した。

これらの遺構・遺物の検出状況及び土層の堆積状況から、当該調査地点では3ヵ所の旧河道（河道1・2・3）と2ヵ所の微高地（微高地1・2）の存在が確認された。すなわち、

1 II-7グリッドでは旧河道の堆積物が検出され、旧河道1ないし自然堤防の名残がII-7グリッドに隣接する市道である可能性が高い。

2 III-8グリッドでは東に向かって傾斜する旧地形が確認でき、III-3やIII-8グリッドで見られた河道堆積物がII・IV両地区で検出されなかったことから、III-3からIII-8グリッドに向かって流れる旧河道2の存在が指摘できる。

3 III-4・2、IV-1グリッドの3ヵ所でほぼ同様の層序が見られ、旧地形がそのまま現地形に反映されていることが窺われる。すなわち、III-2グリッドを頂点とする微高地1の存在が考えられる

4 VI-1グリッドの北壁で確認された河道堆積物はV-3グリッドでも見られたが、VI地区では芦屋川の河道の堆積と考えられるVI-5グリッドでの堆積を除くと全く認められない。このことから、VI-1グリッドからV-3グリッドに向かう旧河道とVI-2・3グリッド以南に微高地2の存在が考えられる。

以上の結果から、調査対象地では、I～IIIブロックで、III-7グリッドを中心として弥生遺跡が、またI-1とII-4・5・8グリッドを結ぶ広範囲にわたって、中世遺跡が存在し、河道2がその東限にあたる可能性が推定された。

（岡田）

2. 第2次確認調査の結果

確認調査は、当初の予定ではIII～Vブロックの9箇所に9本のトレンチを設定していたが、掘削を取り止めた地点とトレンチを追加した地点が生じたため、最終的には8箇所で11本のトレンチを掘削した。トレンチ番号は西から順に1～8トレンチとし、6トレンチの周辺に9～11トレンチを追加設定した。トレンチの幅は2m、延長は場所に合わせて5～20mの長さで設定した。

調査の結果、調査対象地内は大きく4つの基本的な層の堆積で構成されていることが分かった。1層は盛土・表土、2層は中・近世以降の比較的新しい土壤層、それ以下は砂礫混じりの黒色シルト層（3層）と土石流性の砂礫層（4層）が交互に現れるパターンである。この内、1・2層までは摩滅した須恵器片等の出土があるものの、明確な遺構やそれに伴う遺物は認められなかった。3層は固くしまったシルト質砂層と粘質感のあるシルト層の2種類があり、後者からは遺物が若干出土している。また、4層には全く

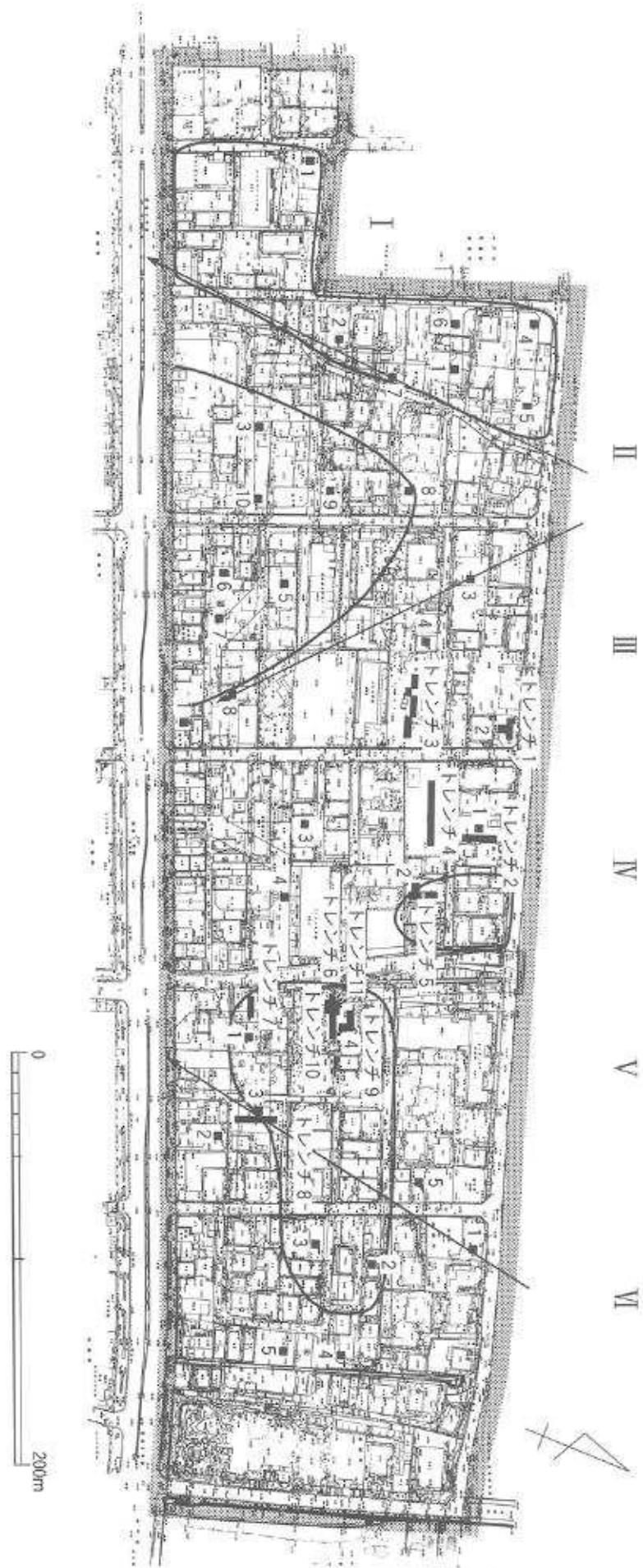


図3 確認調査グリッド・トレンチ配置と遺跡の範囲

遺物は含まれていなかった。

各トレンチの状況は以下の通りである。

1～4・8 トレンチ

1～4・8 トレンチでは、②層から少量の遺物が出土したのみで、遺構等は確認できなかった。特に、1・2 トレンチ周辺は強く削平の影響を受けている。また、2 トレンチから 4 トレンチにかけては北から南へ、4 トレンチから 3 トレンチにかけては東から西へ下る地形が観察できる。

6 トレンチ

3 層から遺物がまとめて出土した。6 トレンチでは西から東へ傾斜する地形が観察でき、その中に 3・4 層が繰り返し現れている。遺物が出土したのは、3a 層（図 5）で、トレンチ西よりの低く落ち込んだ所の水分を多く含む黒色シルト層から、28L 入りコンテナ 1 箱分の土器片が出土した。出土した土器は、表面の遺存状態が非常に良好で、遠くから流されてきたものではないことを示している。また、3a 層は土石流性の堆積（2 層）でバックされており、後世の混入も考えられない。3a 層は一旦高まった後、また東へ向かって低くなり、遺物も殆ど含まれなくなる。3a 層西端の最も高い部分は削平されている。

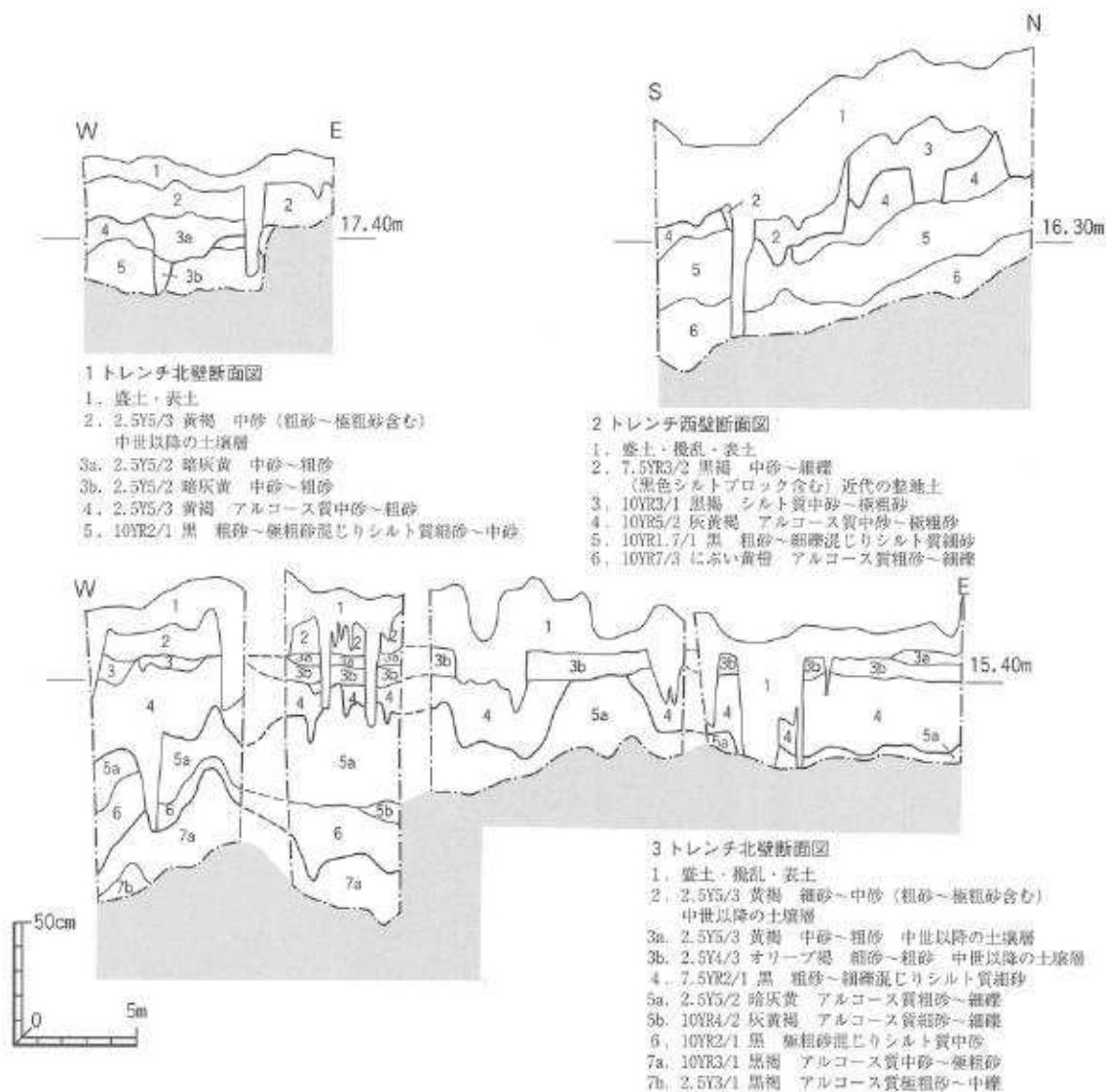
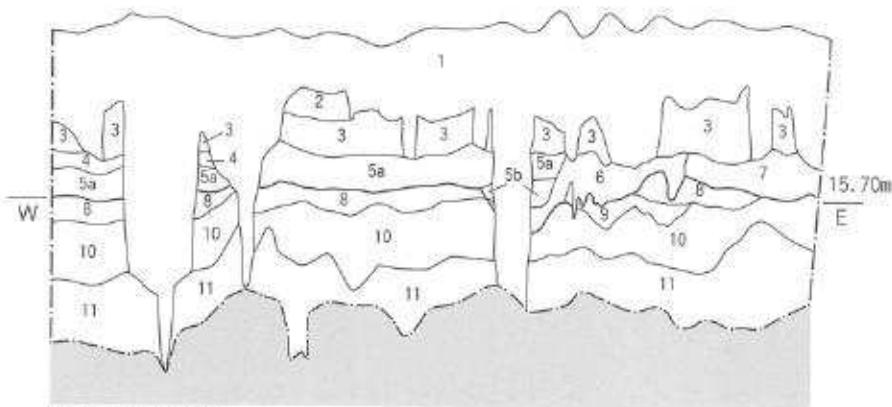
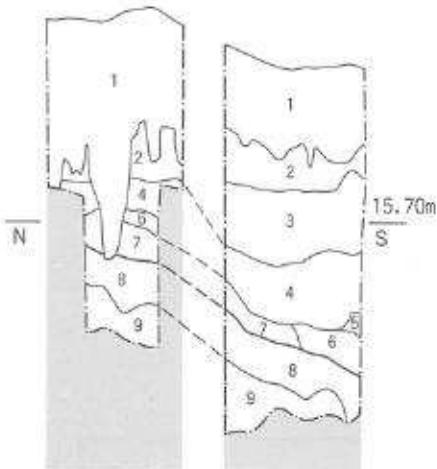


図 4 第 2 次確認調査土層断面図（1）



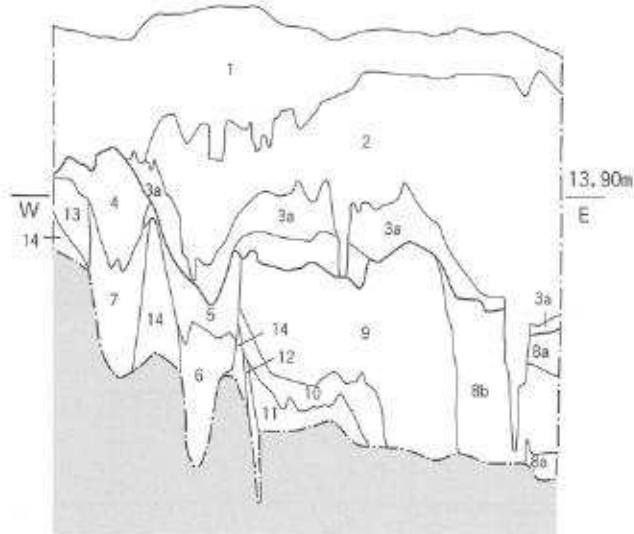
4 トレンチ北壁断面図

1. 塵土・擾乱・表土
2. 2.5Y 3/2 黒褐・粗砂
3. 2.5Y 4/2 暗灰黄 中砂～粗砂 現代の土壤層
4. 10YR 4/2 暗灰褐 中砂～粗砂 (黒色シルトブロック含む) 近代の整地土
- 5a. 10YR4/2 灰黃褐色 中砂～粗砂 (細砂含む) 中塗以前の土壤層
6. 2.5Y5/3 黄褐 中砂～粗砂 (極細砂含む)
7. 2.5Y7/1 灰白 細砂～粗砂 ラミナ
7. 10YR3/1 黒褐 シルト質中砂 (粗砂～極粗砂含む) Soil
8. 2.5Y6/3 にぶい黄 アルコース質細砂～中砂 (粗砂含む)
9. 10YR3/1 黒褐 粗砂混じりシルト質細砂 Soil
10. 10YR2/1 黒 極粗砂～細砂混じりシルト質粗砂
11. 10YR7/3 にぶい黄褐 アルコース質極粗砂～中砂



5 トレンチ東壁断面図

1. 塘土・擾乱・表土
2. 2.5Y 4/2 暗灰黄 中砂～粗砂 現代の土壤層
3. 2.5Y 4/3 オリーブ褐 中砂～極粗砂 (黒色シルトブロック含む) 近代の整地土
4. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 粗砂～極粗砂 ラミナ 頸窓器
5. 7.5YR 1.7/1 黒 粗砂混じりシルト質粗砂 (細砂含む) 土器
6. 2.5Y 5/2 暗灰黄 アルコース質細砂～粗砂
7. 10YR 2/2 黒褐 シルト混じり細砂 繩文土器
8. 10YR 3/1 黒褐 中砂～粗砂混じりシルト質粗砂
9. 2.5Y 3/1 黑褐 シルト混じり粗砂 (細砂～中砂含む)



6 トレンチ北壁断面図

1. 塘土・擾乱・表土
2. アルコース質細砂～大疊 流法悪い
- 3a. 10YR 1.7/1 黒 極細砂～極粗砂混じりシルト 繩文土器
- 3a'. 10YR 3/1 黑褐 シルト混じり極粗砂～粗砂
4. 2.5Y 4/2 暗灰黄 粗砂～中砂 しまり良い
5. 10YR 2/1 黒 シルト～粗砂混じりシルト 白色シルトがバンド状に入る ラミナ
6. 2.5Y 2/1 黒 粗砂混じりシルト～粗砂
7. 2.5Y 3/1 黑褐 細砂～細砂 ラミナ
- 8a. 2.5Y 2/1 黑 極粗砂混じりシルト質極粗砂 植物遺体
- 8b. 2.5Y 3/1 黑褐 極粗砂質シルト～粗砂
- 8c. 2.5Y 4/2 暗灰黄 極粗砂質シルト ラミナ 植物遺体
- 8d. 5GY 7/1 明るいオリーブ灰 極粗砂 (大疊含む)
9. アルコース質細砂～大疊 ラミナ 流法悪い
10. 10YR 2/1 黒 シルト～極粗砂 ラミナ 植物遺体
11. 10YR 3/1 黑褐 シルト混じり細砂～細砂
12. 10YR 1.7/1 黑 細砂混じりシルト質極粗砂
13. 2.5Y 2/1 黑 粗砂混じりシルト しまり良い
14. アルコース質細砂～中疊 (大疊含む) 流法悪い しまり良い



図5 第2次確認調査土層断面図(2)

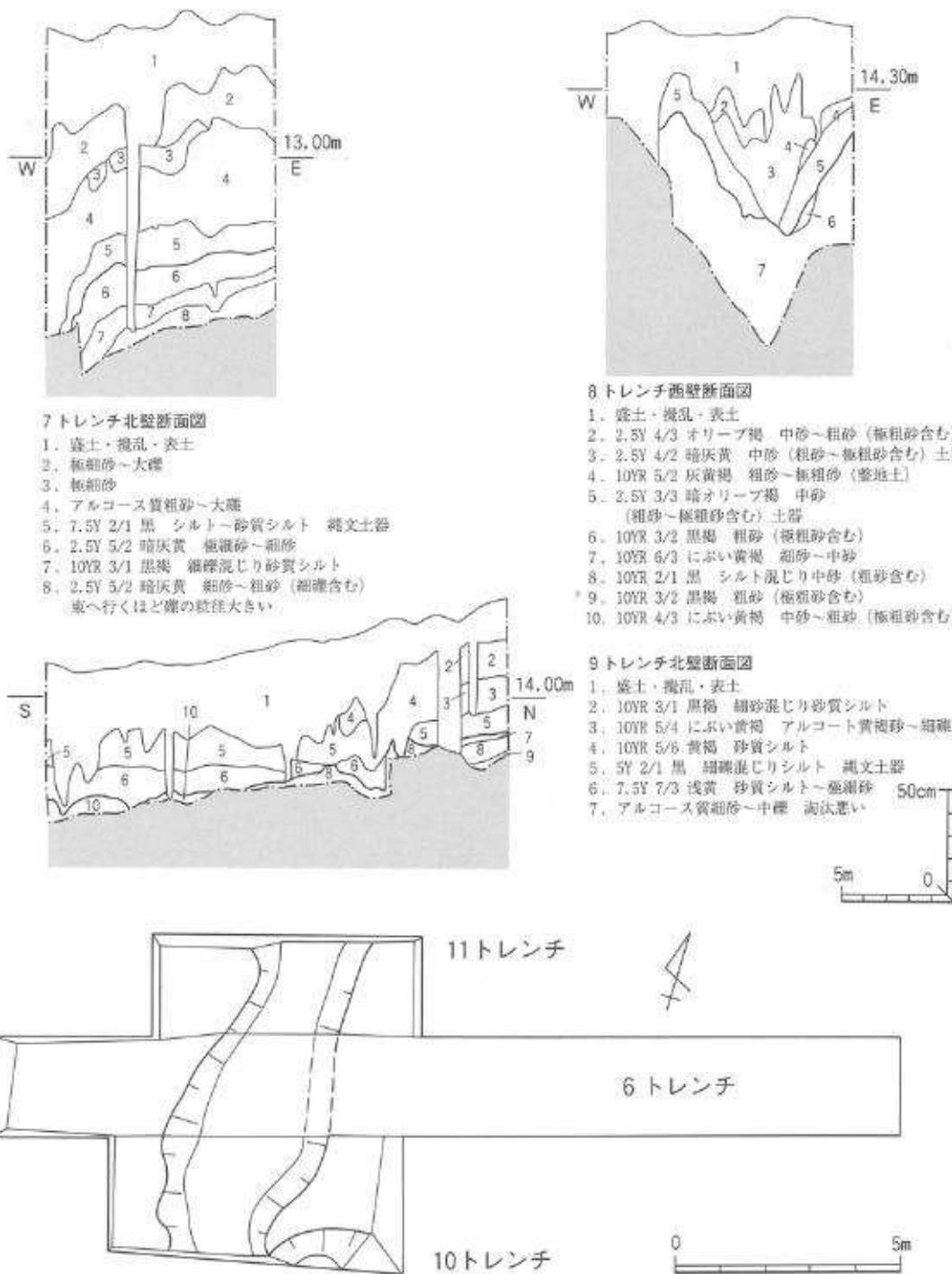


図6 第2次確認調査土層図 (3)・6・10・11トレンチ平面図

9～11トレンチ

6トレンチの遺物が集中する範囲の南北両側に10・11トレンチを設定し、さらに28ℓ入りコンテナ1箱分の土器片を探集した。また、北側約10mに9トレンチを設定し、同じ層位（5層）が続くことを確認した。なお、5層の直下では、立木の根株を検出した。

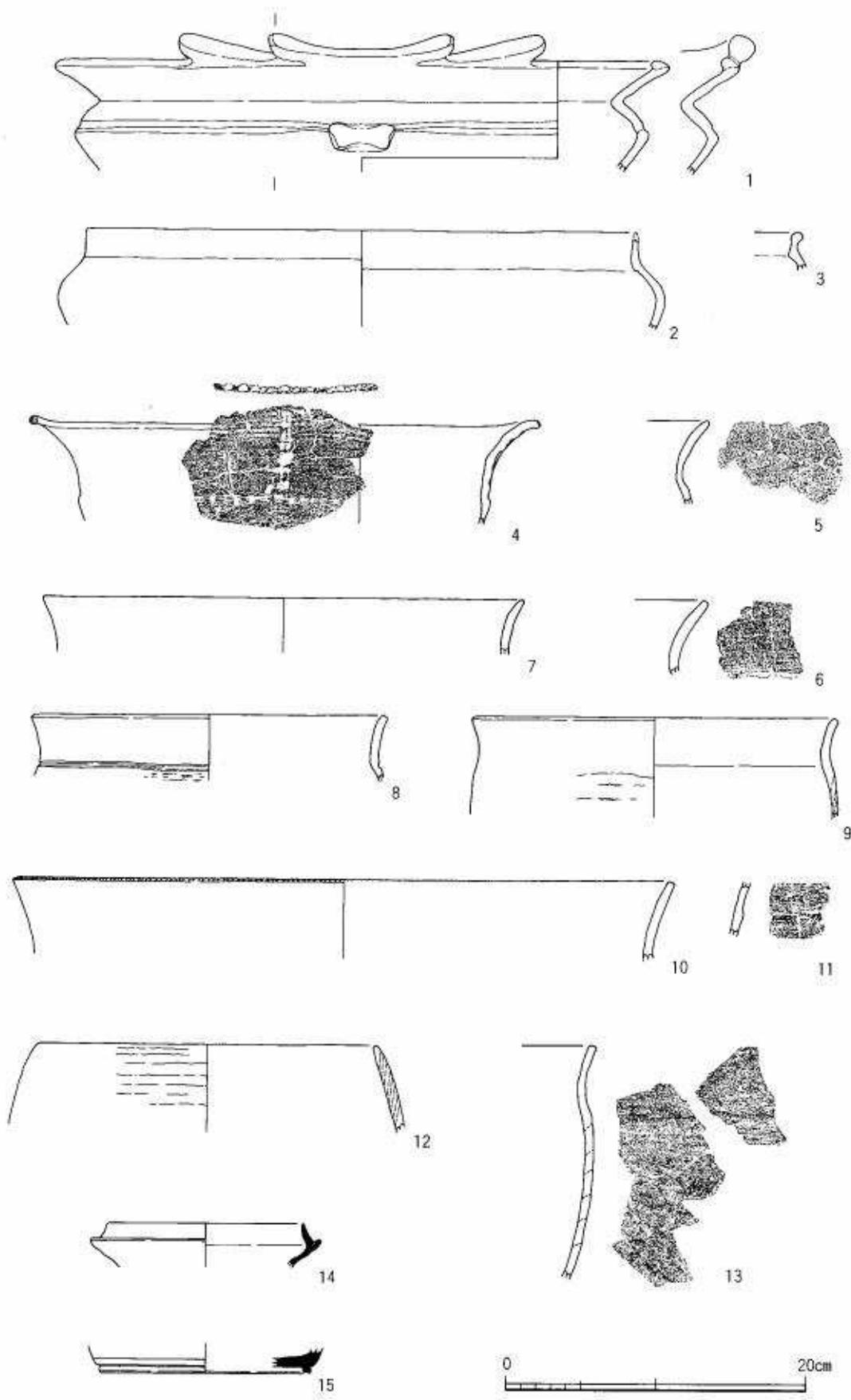


図7 第2次確認調査出土遺物実測図

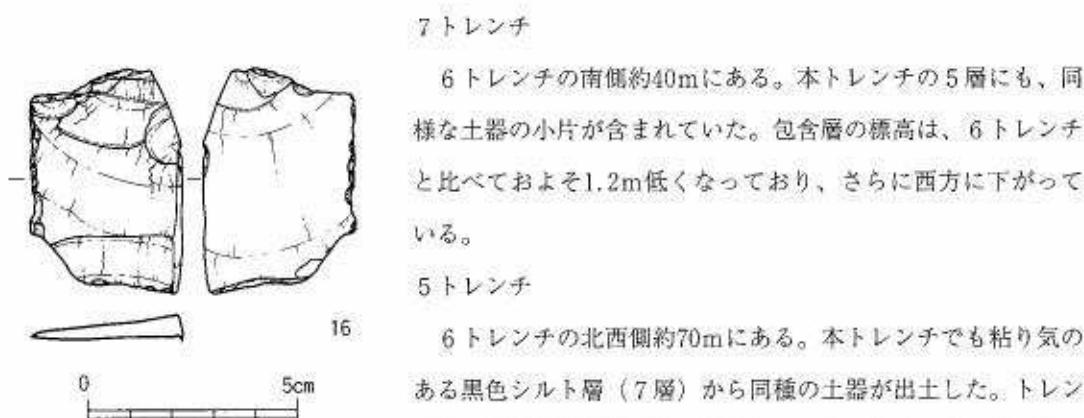


図8 第2次確認調査出土石器
6トレンチの北西側約70mにある。本トレンチでも粘り気のある黒色シルト層（7層）から同種の土器が出土した。トレンチ内では土層が北から南へ下がっている。また、4～6トレンチの関係では、西から東に向かって下る傾斜がある。包含層の標高は6トレンチより1.3m程高い。なお、4トレンチでは、本トレンチの8層に対応する10層が認められるものの、遺物包含層（7層）やそれをバックする4層の延長がないため、削平されたものと考えられる。

以上の調査の結果、各トレンチ共に明確に遺構と判断できるものは検出できなかったが、6トレンチの落ち込みやその周辺の遺物の出土状況を考えると、6トレンチを中心とする一帯に遺構の存在が期待できよう。

また、遺物については、5～11トレンチにおいて出土しており、その内6トレンチ出土の縄文土器（1～5・7・12・13）、10トレンチ出土の縄文土器（8・10）、11トレンチ出土の縄文土器（6・11）、7トレンチ出土の須恵器（15）、8トレンチ出土の須恵器（14）で、10トレンチではサヌカイト剥片（16）を図化した。特に、6・10・11トレンチで出土した縄文土器は、口縁部にリボン状突起といった特徴的な装飾を施すもの（1）をはじめとする浅鉢（2・3）や粗製の深鉢（4～13）など、縄文時代晩期前半と考えられる良好な資料である。

上記のことから、調査対象範囲の内、6・7・9～11トレンチを中心とする市道川西線より東側、5トレンチからJR神戸線までの市道川西線より西側の両区域に、縄文時代の遺跡の存在を想定することができた。

（深江）

3. 平成11年度全面調査の結果

確認調査で調査必要とされた地域で損壊を受ける部分について、用地が解決した部分の調査を実施した。結果的には街路部分を対象としている。確認調査の結果、調査必要な範囲が絞られ、4つの地区に分けられた。A～D地区と呼称した。A地区で5ヶ所、B地区で5ヶ所、C地区で3ヶ所の計13ヶ所の調査を行った。今年度はD地区の調査は行っていない。調査は原則的に遺構面上面まで機械掘削し、その下面について面精査とともに人力掘削を行った。各壁面と遺構面の検討を行った。掘削深度は各トレンチによって異なっている。排土は横置きし、調査終了後埋め戻し作業も実施した。

細かくは地点ごとに異なっているが、基本的には①盛土 ②近現代・近世の耕作土（地点によっては盛土） ③近世の土壤化した黒色土 ④砂礫層 ⑤黒色シルト層 となる。

A-1区

A地区の北東部にあたる約4×8mの南北トレンチである。新しい街路（23号線）部分に相当する。上層は盛土とやや厚い洪水堆積物に覆われている。遺構面は2面検出しているが、レベル的には大きな差はない、数cmの差だけである。上面の遺構は耕作痕と溝と一部の土坑である。また、上の面から掘り下げられた井戸・ピットも存在する。遺構面は中世末から近世にかけての遺構と思われる。上面からの遺構は近現代の遺構で調査していない。同一面で確認したが、耕作痕と土坑には時期差がある。土坑の方が古い時期で、その上に耕作痕が認められる。耕作痕は調査区南半で認められたが、明瞭に検出できたのは西壁沿いの部分だけであった。細長い楕円形から半月形に近い痕跡になっている。南北方向に痕跡が認められる。



C地区 空中写真

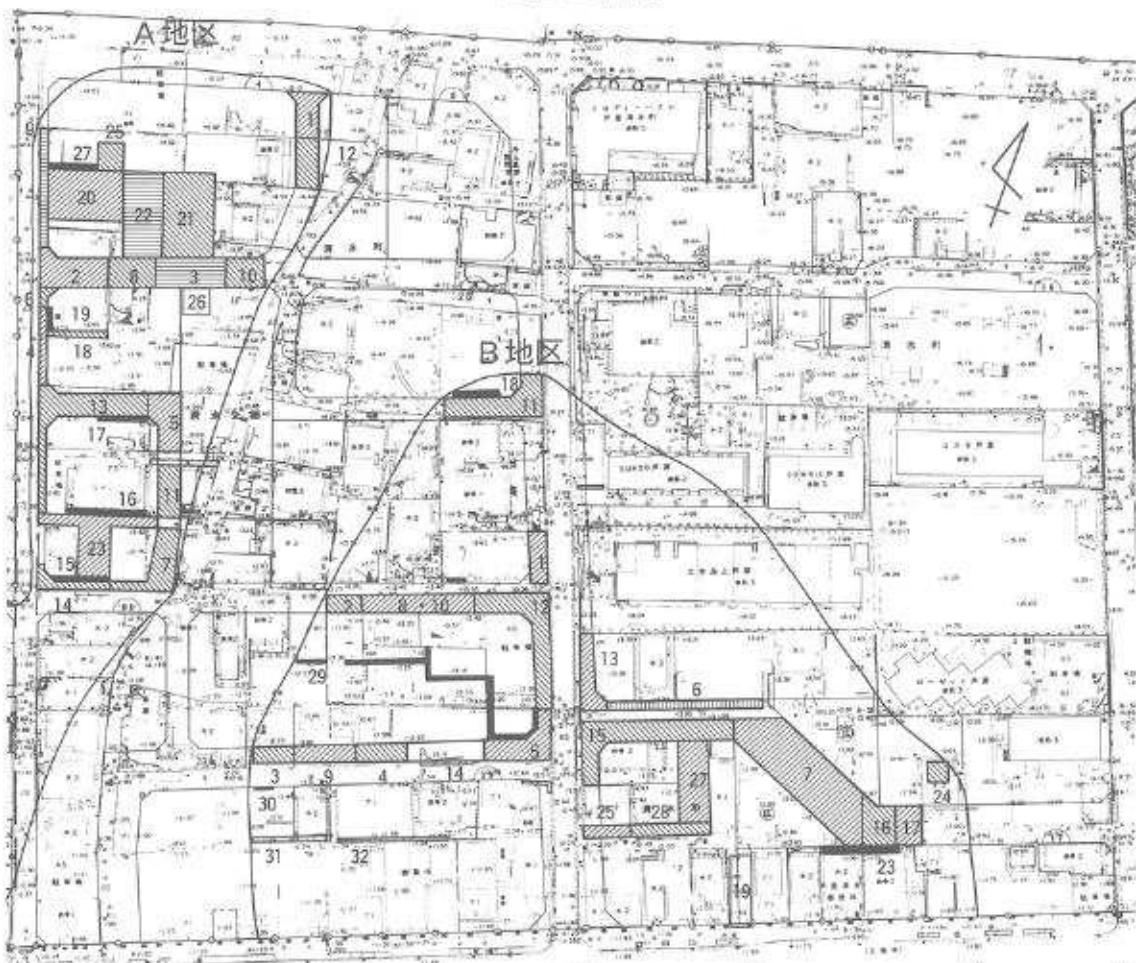


図9 A・B地区調査区位置図

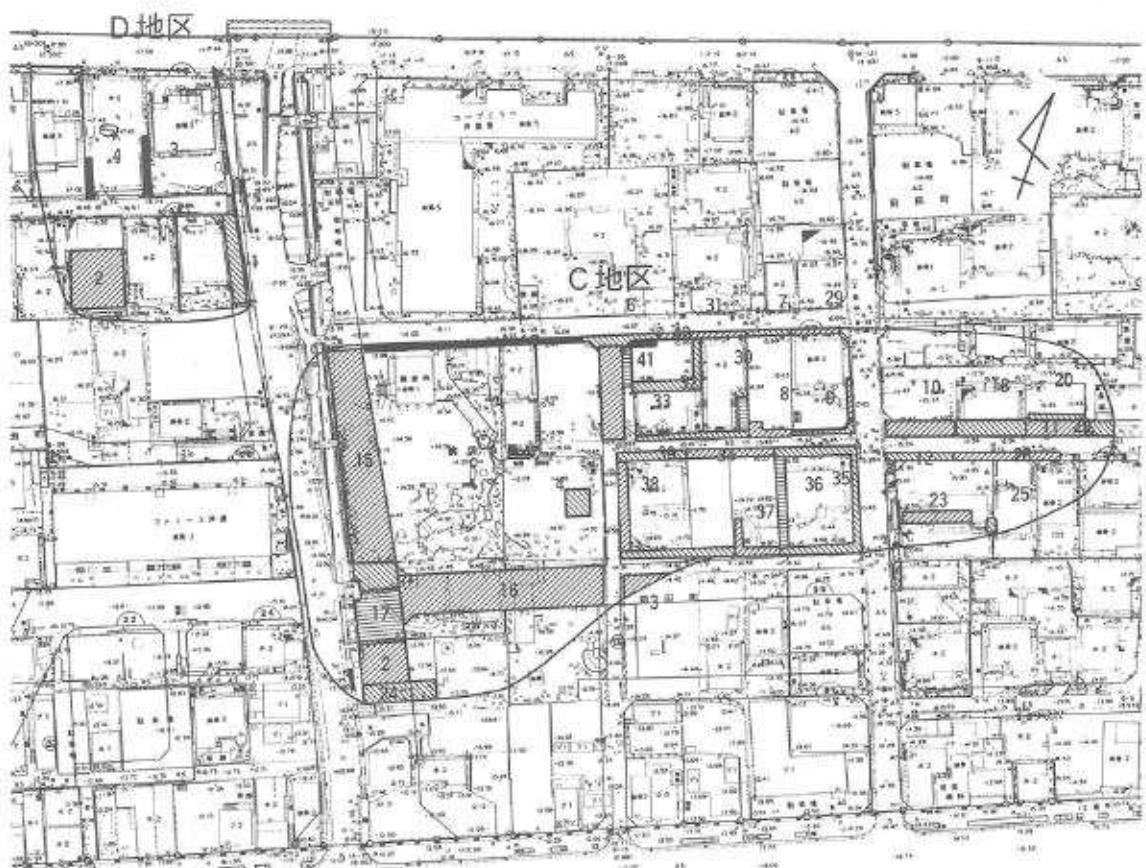


図10 C・D地区調査区位置図



図11 A-1区 平面図

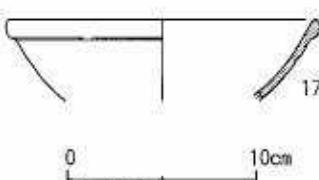


図12 A-1区 出土遺物

溝（SD01）は東西方向に延び、検出面では幅0.40~0.55m、深さ0.10~0.15mを測る。調査区内を東西に貫いている浅い溝で、断面形状は幅広のU字形である。ただ、溝は上面から掘り下げられたもので、西壁の観察からは幅0.9m、深さ0.4mを測ることが確認されている。溝内の堆積土は1層で暗灰黄（2.5Y4/2）粗砂である。井戸・ピットが営まれた面よりは下面にあたるが、時期は近代に入る可能性が高い。

土坑は6基検出しており、そのうち2基が上面の遺構である。SK04とSK05が該当する。ともに方形プランで調査区外へ延びている幅1m足らずの似た形状を示している。SK05は検出面では削平を受けているが、上層の影響を受けて色調が変化している範囲を土坑の範囲と推定した。SK04も深さ4~6cmと僅かしか残っていない。

以下の遺構は、土坑4基を検出している。SK01は南壁沿いの方形の土坑で僅かに調査区外へ延びている。土坑下端が変化していることから、ほぼ全体を検出したものと考えられる。1辺0.4mで深さ0.1mを測る。中央やや北側に径8cmの小ピットが存在する。SK02は調査区南西の東壁沿いの半円形部分を検出した土坑である。東側に続いており、最大長0.6mを測る。SK03は南東隅にあり調査区西側に延びている。SK01と0.3mと近接している。歪んだ方形で断面も不定の形状を示している。2段に掘りこまれた土坑で中央近くの0.15~0.2mの部分でステップが認められる。全体の深さは0.4m前後である。SK06は調査区中央やや北側に位置している。南北長0.85mの瓢形に近い台形の平面である。南辺が広く0.6mである。深さは0.1m余りと浅い。東播系須恵器と土師器の小片が出土している。

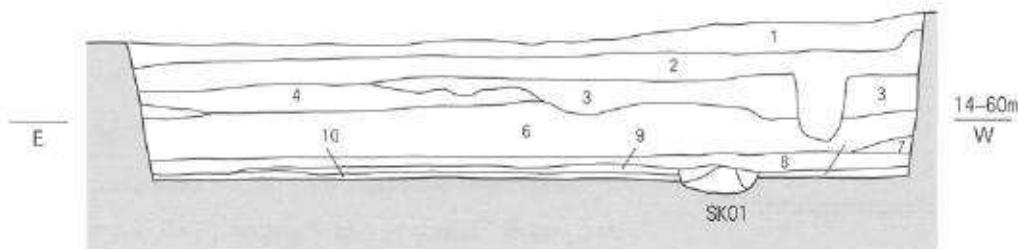
図化した土器は1点で、口径16.1cmで玉縁状の口縁部の白磁碗で全体に施釉されている。

A-2区

事業地の北西隅で、西側は市境で神戸市東灘区森南町である。街路（西部11号線）の西端部分で東西に長いT字形をしている。幅5mで長さ12mのトレンチで西端は現道拡幅部分の隅切り部分が付加されている。不定形の落ち込みは検出したが、自然地形と考えられ明瞭な遺構は検出されなかった。洪水堆積物が堆積している。地表下1.4mで黒色シルト層が認められたが遺物は出土していない。この層はC区で縄文土器が出土した層と同一かと思われるが縄文土器は出土していない。古墳時代の土器が上面で出土していることから、低湿地の一部は新しい時期まで残っていた可能性が考えられる。現在の地形でも西側に低くなっていることから、当時の地形も西側に下がっていたであろう。平面では明確に確認できなかったが、断面では噴砂を確認した。層的に慶長の地震による液状化現象と考えられる。

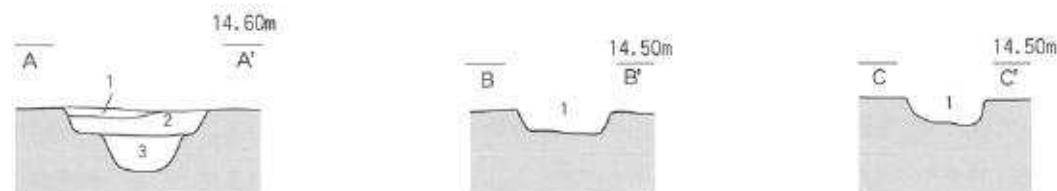
A-3区

A-3区はA-2区の東側に位置する。隣接するのではなく、約12m開いている。この部分は次年度のA-9区に相当する地区で、同じ西部11号線部分である。5×12mの東西に長いトレンチである。今回の調査で最も多くの遺構・遺物が確認された地区である。調査区内を北東から南西方向に向かって、人頭大から拳大の礫を主体とする土石流が堆積している。北西部の調査区全体の5分の2近くが土石流となっている。大きく2面に分けられ、上面は厚い洪水堆積物の上に耕作痕と地震痕跡を確認している。A-1・2区と同じ状況で、両痕跡が本トレンチでは検出されている。耕作痕はスキ溝で、三日月形の耕作痕は検出していない。地震痕跡は東西方向に延びる砂脈で、6条以上確認している。西側には土石流があること



A-1区 土層断面図

- | | |
|---|--------------------------|
| 1. 塗土 | 5. 4層と同質だが色調暗い |
| 2. 2.5Y3/1 (黒) 中砂と2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) シルト | 6. 2.5Y3/2 (黒褐) 中砂 (耕作土) |
| 質中～細砂が混ざった層 (焼土・炭含む) | 7. 2.5Y5/6 (黄褐) シルト |
| 3. 2.5Y4/2 (暗灰黄) 中砂 (小砾・粘土ブロック含む) | 8. 2.5Y4/1 (黄灰) シルト質細砂 |
| 4. 2.5Y6/2 (灰黄) 粗砂 (マンガン含む) と10YR6/6 (明黄) 褐 | 9. 2.5Y4/2 (暗灰黄) 中～細砂 |
| 褐) 粗砂の混ざった層 | 10. 2.5Y5/6 (黄褐) シルト質細砂 |



SK03 土層断面図

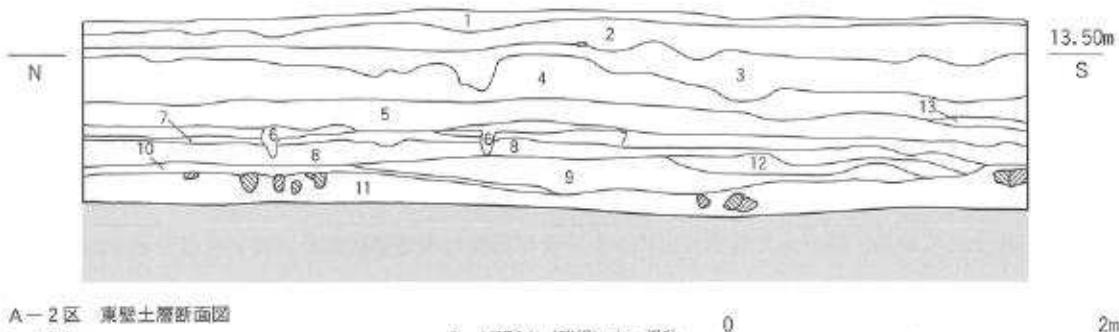
1. 2.5Y5/1 (黄灰) 中砂に2.5Y5/4 (黄褐) 中砂が混じる
2. 2.5Y4/1 (黄灰) 中砂
3. 2.5Y3/2 (黒褐) 中～細砂

SK06 断面図

1. 2.5Y4/2 (暗灰黄) 中砂 (底にマンガン堆積)

SD01 断面図

1. 2.5Y4/2 (暗灰黄) 粗砂



A-2区 東壁土層断面図

- | | |
|--|----------------------------|
| 1. 塗土 | 7. 10VR3/4 (暗褐) 中～粗砂 |
| 2. 塗土 (真砂) | 8. 10YR2/2 (黒褐) シルト |
| 3. 耕土 | 9. 10YR3/3 (暗褐) 粗砂 |
| 4. 10YR6/3 (にぶい黄橙) 中砂と10YR5/2 (暗灰黄) 中砂の混じった層 | 10. 10YR3/3 (暗褐) 粗砂 |
| 5. 10YR4/4 (褐) 中砂 | 11. 10YR4/3 (にぶい黄褐) 中～粗砂 |
| 6. 10YR3/1 (黒褐) シルト質細砂 | 12. 10YR2/2 (黒褐) 中砂 (小砾含む) |
| | 13. 10YR5/3 (にぶい黄褐) 中砂 |

0 2m

図13 A-1・2区 土層断面図

から地震痕跡は認められず、噴砂は東側に限られている。1.6mの長さまで平面的に確認している。下の黄褐色粗砂が噴出している。最大幅で6cmを測る太めの砂脈である。上に近世の堆積土が存在することから、やはり慶長地震による地震痕跡と思われる。

下面の遺構は上下2回に分けて調査したが、大きな時期差は認められなかった。北西部分は土石流があり、明確な遺構は存在しない。南東部分で3基の土坑を検出している。SK01は、土石流端部に20数cmと近接した位置に築かれた長方形の土坑である。東西1.7m、南北0.9mの隅円方形のプランである。プランは箱型になり、確實に主体部であるとは断定しがたいが、可能性は十分に考えられる。深さは15cmを測り、小口穴などの底面の遺構はない。底面は平坦でなく、緩やかな擂鉢状となっている。土坑底から須恵器梳

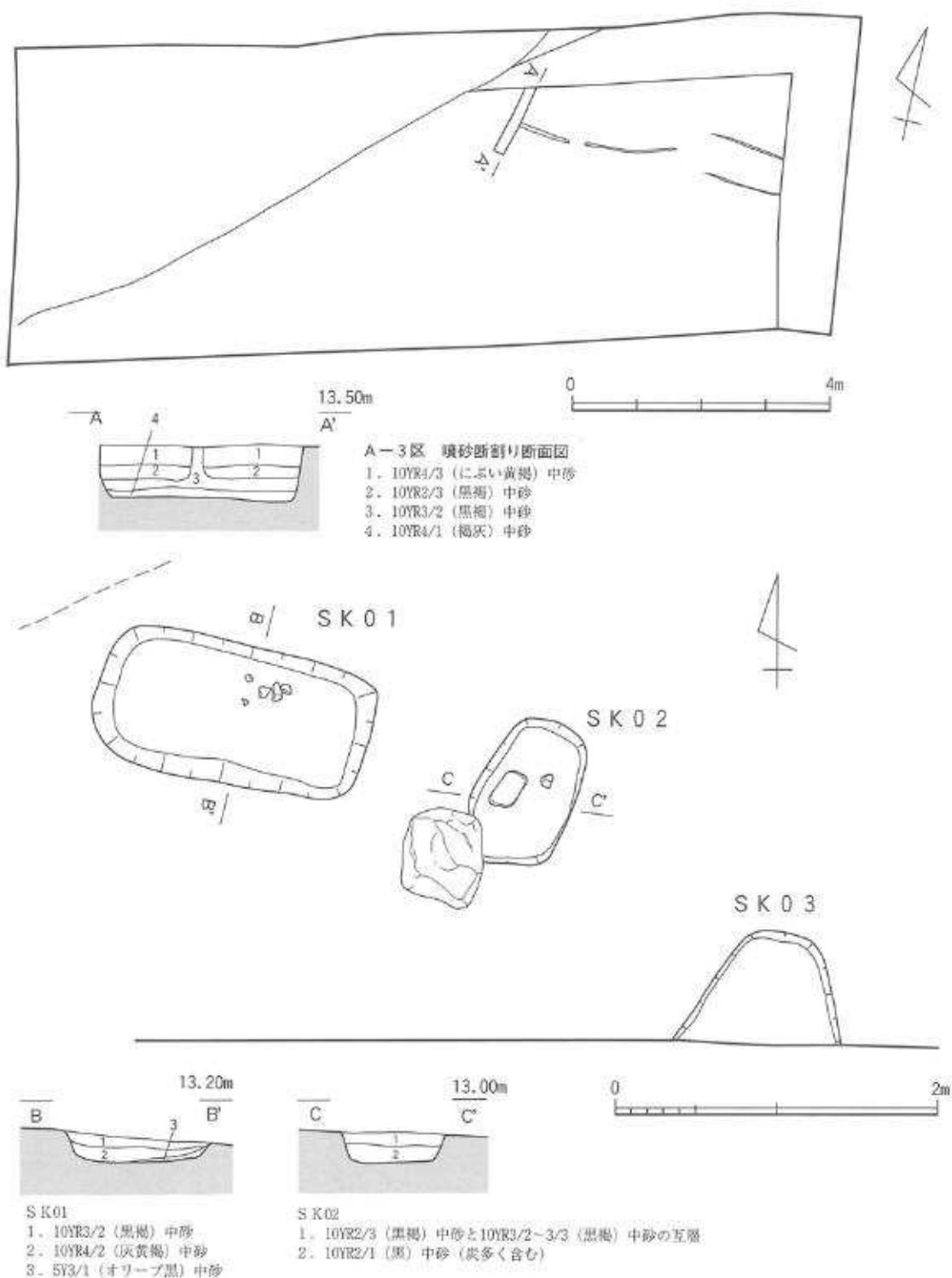


図14 A-3区 上面遺構実測図

が隣とともに出土している。SK02は、SK01の東側に0.7m離れて存在する南北0.95m、東西0.6m、深さ0.2mを測る土坑である。底面に礫が2石あり、底面は平滑である。SK03は南壁沿いにある不定形の土坑である。最大長1mを測るが、深さは7~10cmと浅い遺構である。南側に延びている。

下面の下層の遺構は上層から10cm前後下がっただけである。遺構は中央部分が窪んでおり、その段状のものと、落ち込み、土坑が1基ずつ確認されている。土坑（SK04）は、土石流の端部近くにあるやや大

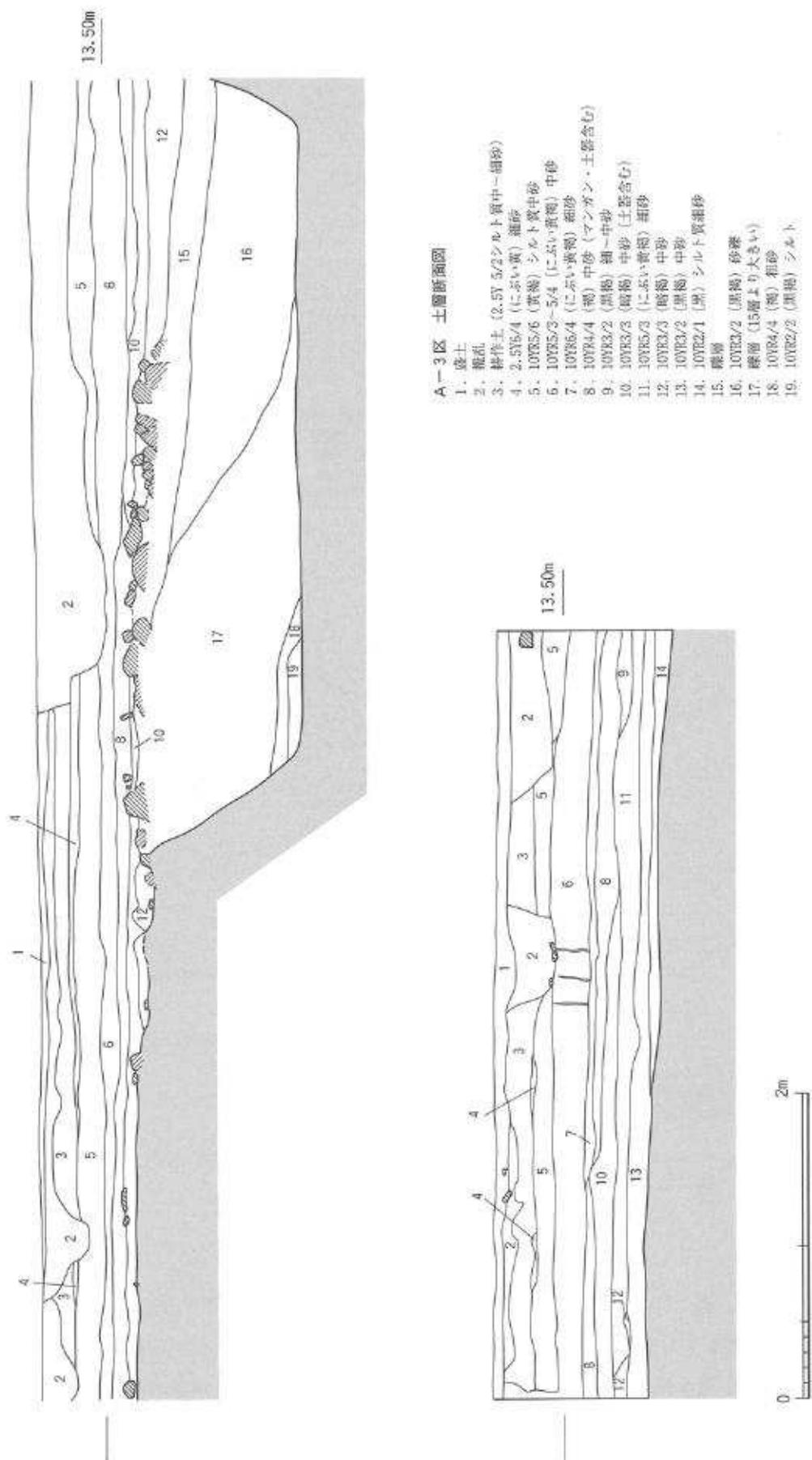


図15 A-3区 土層断面図

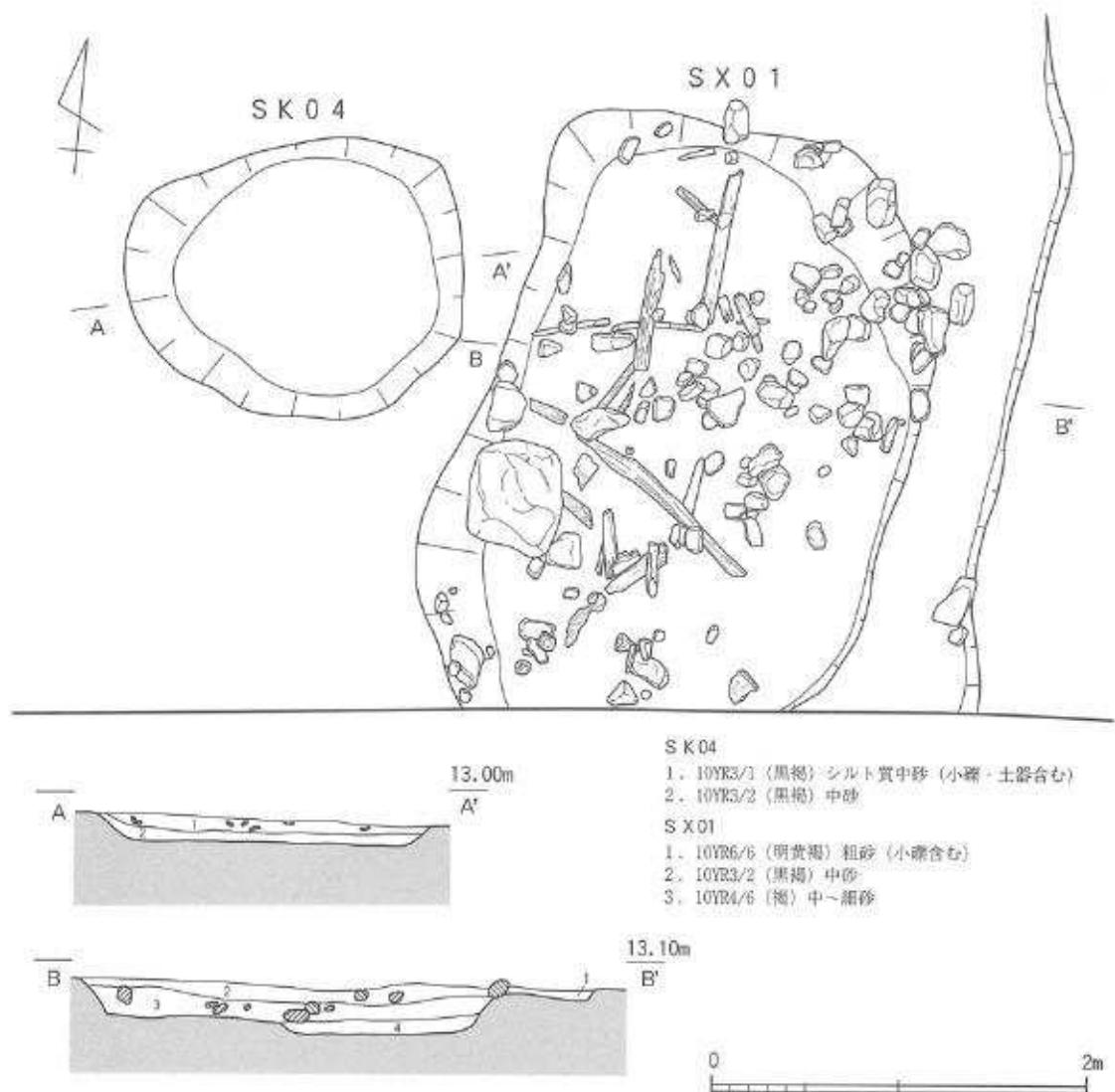


図16 A-3区 下面遺構実測図

きめの不定円形の平面プランである。東西方向が長く1.8mを測る。南北は1.6mで深さは15~20cmである。底近くは砂層で上部はシルト質の土層である。須恵器・土師器・瓦器が出土している。段状遺構と落ち込みは一体の遺構と思われる。SX01として合わせて報告する。SK04とは0.3mしか離れていない。段状の落ち込みは東側に認められ、5~10cmの段差がある。南側には直線的に調査区外へ延びていき、北側は内湾して終息している。調査区内で3.8mの長さがある。この段の湾曲した内側に落ち込みがある。南に延びているが、あと僅かで南側の肩部になろうかと思われる。東西2.2m、南北3.4mの方形になる。深さは最大で25cmを測る。底の深い部分に黒色シルト質土が溜まり、その上に礫とともに土器・木器が出土している。遺物を含む層は互層の自然堆積となっている。須恵器・土師器・灰釉陶器・瓦器があり、墨書き土器も出土している。木製品は多いが、加工した材や杭が多く、製品はむしろ縄に使う木鍤(38)と木筒(36)が各1点出土しているだけである。木筒は付札で先を鋭利にしている。平仮名で『□はり□□』と記されている。

A-4区

市境の道路である市道15号線の拡幅部分に相当する。A-2区の南側に位置しており、幅0.8m、長さ6mの狭長な南北トレンチである。現代の擾乱を大きく受けており、現道であることから深く掘り下げる

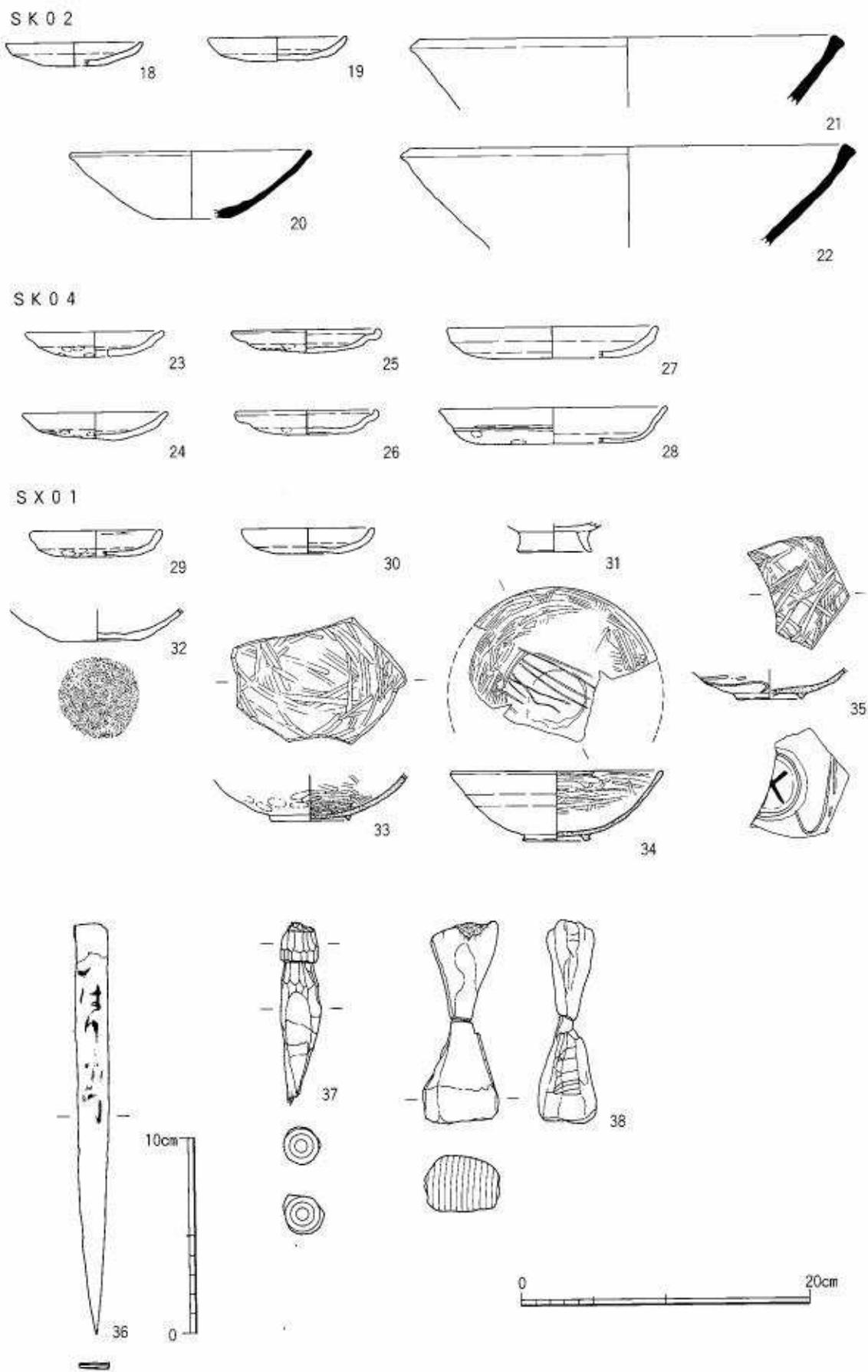


図17 A-3区 出土遺物実測図(1)

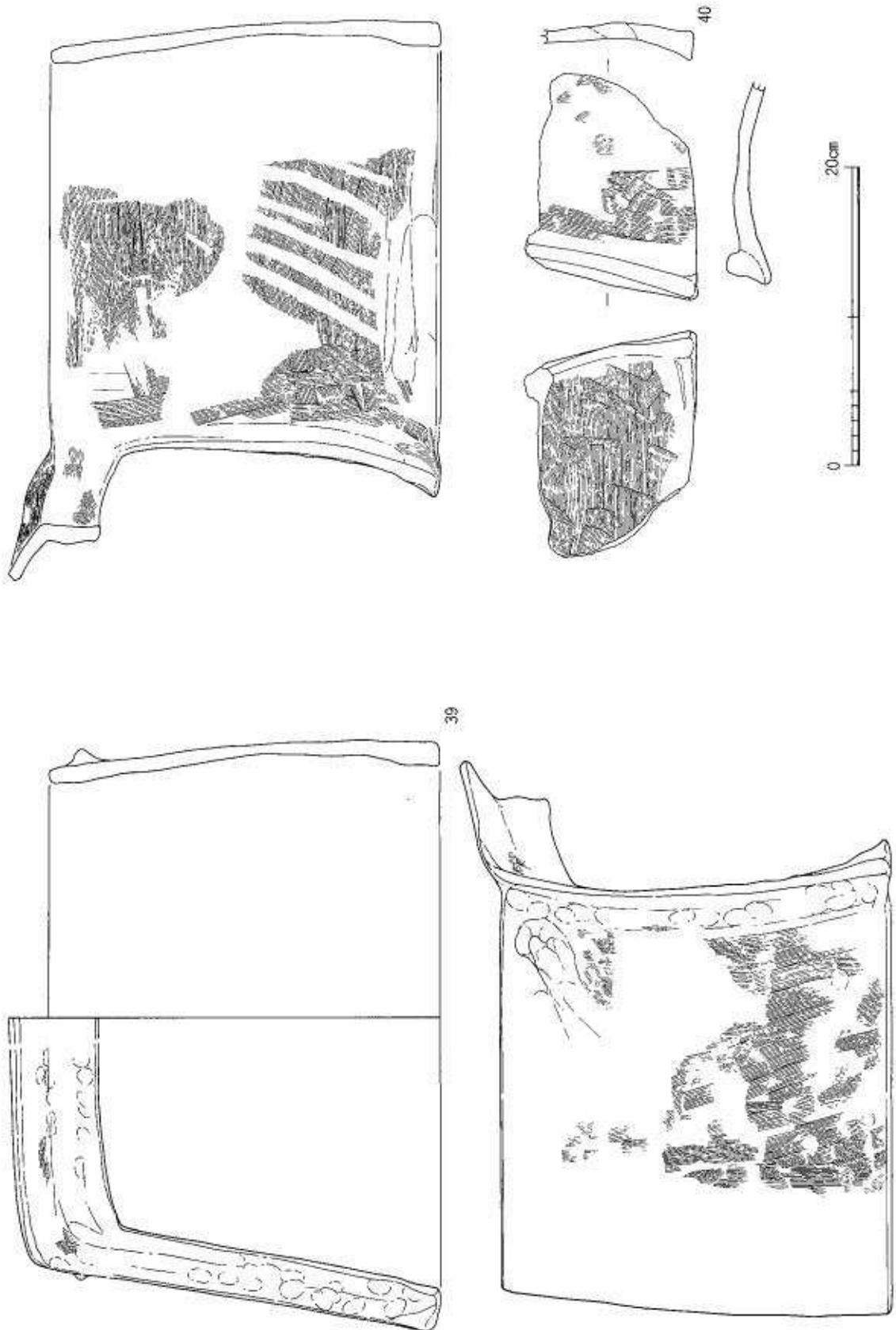


図18 A-3区 出土遺物実測図（2）

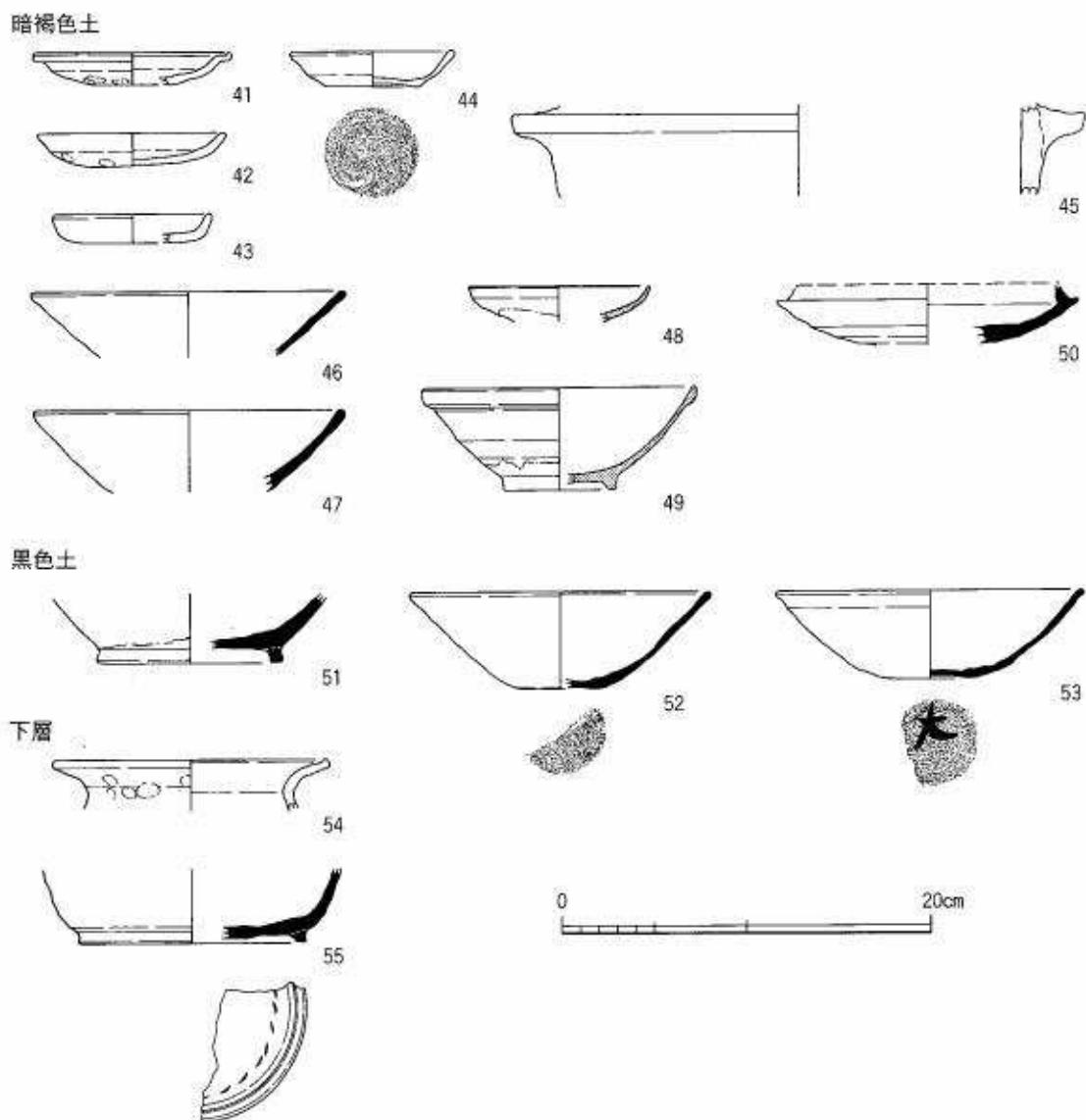


図19 A-3区 出土遺物実測図（3）

ことは危険と思われたため、1mの深度で調査を終えている。遺構・遺物は確認していない。

A-5区

A-4区の南東に位置し、9街区の北東部にあたる幅4mの逆L字形のトレンチである。街路部分にあたる東西6m、南北11mの規模である。現代の基礎などによる搅乱も少なからずあったが、それ以上に洪水の影響を強く受けている。ピット状の遺構を2基確認しているが、洪水堆積物が厚く明確な遺構は確認されなかった。遺物も土師器の小片が数点出土しただけである。図化可能な土器は出土していない。

B-1区

清水線西側の拡幅部に相当する。2.5×9.5mの南北トレンチである。2面の遺構面を想定して調査を実施した。上面の遺構は暗渠と水田面と土坑を検出している。暗渠は石組のもので東西方向に延びている。近世～近代の遺構で、土坑も耕土を埋土とするものである。下面の遺構面では洪水堆積物が広がり、明瞭な遺構は検出されなかった。

B-2区

B地区の遺跡範囲の西端に位置する西部10号線部分の3×6mの東西トレンチである。建物基礎で損壊を受けている。それ以外は、厚く洪水堆積物が存在し、遺構は確認されなかった。遺物も土師器が数点出土しているだけである。

B-3区

B-2区と同様に遺跡の西端に位置している。1本南側の西部5号線に相当する3×10mの東西トレンチである。一部浄化槽などがあり、調査区から除外している。全体的に建物基礎の影響を受けているが、明確な遺構は検出されなかった。

B-4区

B-3区の東側に20m離れた3×8mの東西トレンチである。上面の遺構は近世～近代の石組の暗渠がある。地元で採取される六甲花崗岩を主体に築かれている。その下層は洪水堆積層で、旧河道が確認されている。土師器・須恵器が出土している。

B-5区

清水線と西部5号線の交わった地点でL字形のトレンチである。B-4区の東側、B-1区の南側の延長線上に位置する。東西部分は幅3mで長さ14m、南北部分は幅2.5mで長さ4mを対象とした。旧河道かと思われる遺構以外は検出されなかった。遺物は磨滅した土師器片が少量と上層で陶磁器が出土している。

C-1区

C調査区の北西に近い地域で、26街区と27街区の間の南北街路部分に相当する。4×20mの南北トレンチである。調査地が現道に面していないことから排土を持ち出すことができず、さらに用地が狭いことから排土を置くスペースがないことから、南北に2分して排土置き場として利用して排土を置き分けて調査を実施した。

2面の遺構を確認している。上面の遺構は近世～近代にかけての遺構である。南壁沿いで調査した2基の土坑（柱穴）はセットで門跡になる遺構である。柱穴底面に礎盤としての石材を据え置いている。石材は地元産の六甲花崗岩と普通呼ばれる黒雲母花崗岩である。西側の柱穴の石材には盤によって中央に「十」の刻印を彫り込んでいる。柱を据えるためのアタリかもしれない。上面は当然ながら平滑にした平石である。柱穴は70cmを越える深さを下げる立派な構造である。西側の柱穴の堆積状況を観察すると、柱痕跡が

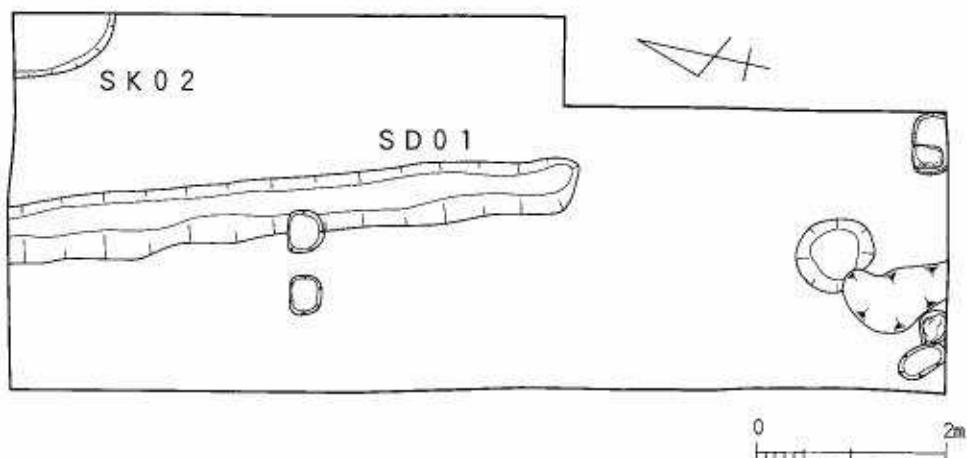


図20 C-1区 上面平面図

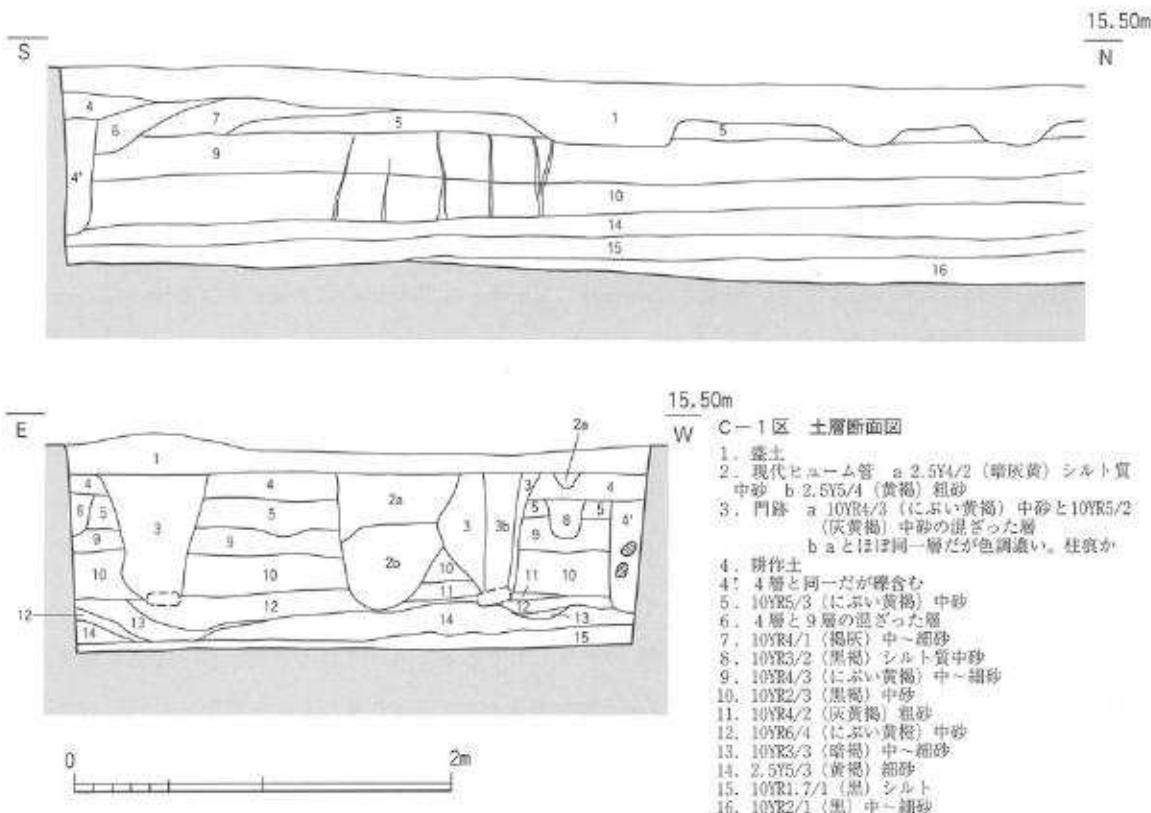


図21 C-1区 土層断面図

看取された。地上で腐った柱を切断し、下部は埋め殺したものと思われる。柱痕跡は下で14cm、上で18cmを測る。心々間の距離は1.8mの1間である。この面では他に浅い(10cm未満)ピットを数基検出したが、明確な遺構にはならない。

建物になる前は耕作地だったようで、耕土が存在する。時期により変化しており、畠から水田へとなっている。耕土の下は洪水堆積物(にぶい黄褐中～粗砂・黒褐中砂)が存在し、この2層に噴砂が認められる。下層の黄褐細砂が吹き上げている。耕土に及んでいないことから、慶長の地震痕跡と思われる。上面の遺構は北半では検出されていない。地震痕跡は検出されているが、検出状況は良好とはいえない。

下面の遺構はピット・土坑・溝を調査している。ピットは新しい時期のものが多く、柱痕跡は認められなかったことから、建物跡の柱穴とは思われない。土坑は2基検出している。SK01は南壁近くで検出している。径0.9m、深さ0.25mの土坑である。遺物は出土していない。SK02は東壁沿いの大型の土坑である。最大長2.2mあり、東側に延びている。埋土は1層で、深さは0.25mを測る。溝(SD01)は調査区内中央をほぼ南北に走っている。南側は途中で削平されている。幅0.6～0.7mで深さは最大値で12cmを測る。溝に切られて耕作痕跡がある。幅10cm前後の鋤溝である。

さらに下層について調査を行ったところ、黑色シルト層は認められたが、遺物は出土していない。出土遺物は第1面上層から瓦質土器(火鉢)と下駄が出土している。

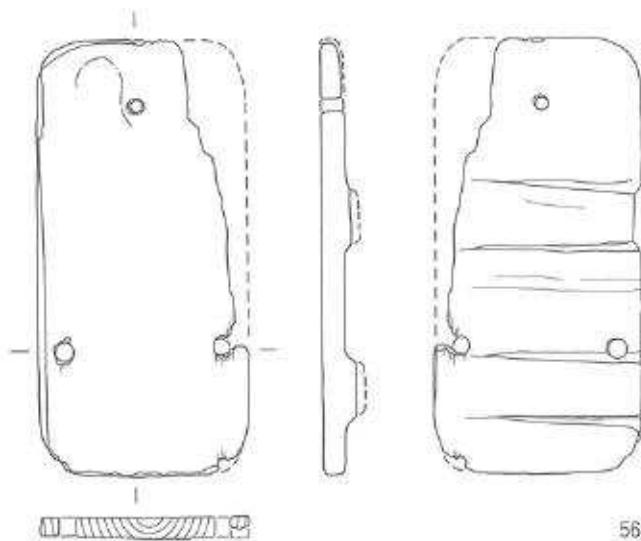
C-2・3区

2区は川西線拡幅部分で隣接地に確認調査トレンチを設定している。屋敷地の中で建物基礎や移設に伴う掘削で遺構面は残っていなかった。そのため、機械掘削と断面観察だけ行った。下層で黑色シルトを検

出しているが、やはり縄文土器は出土しなかった。C-3区は調査区の南端にあたり西部2号線部分である。10m×5mの三角形の部分である。調査したが、建物基礎によって遺構面は残っていなかった。

(渡辺)

B-3



56

C-1 (SK 03)

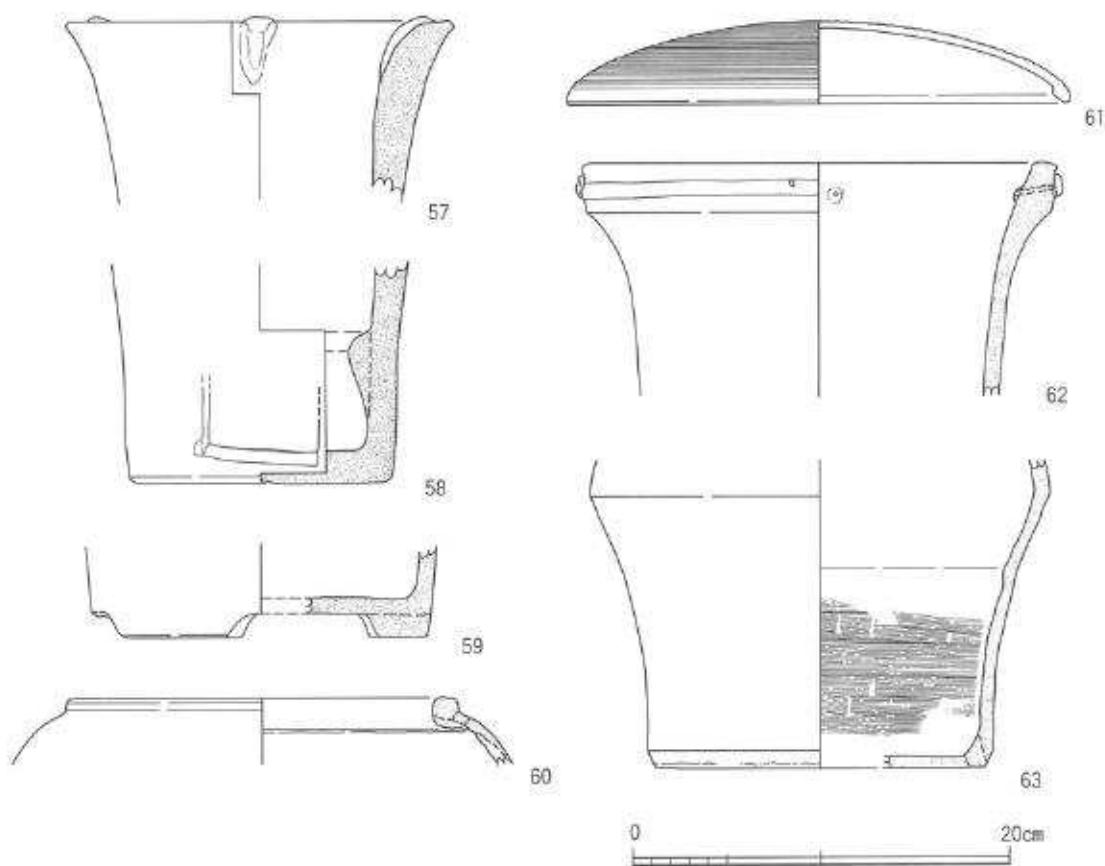


図22 B-3区・C-1区 出土遺物実測図

4. 平成12年度発掘調査の結果

震災復興の土地区画整理事業という性格上、他事業にも増して早急な本体工事が要求されることもあって、今年度からは委託契約を結ばずに、調査可能な個所から順次調査を実施することとした。他事業にも調査員が従事しているので、調査可能な時期である程度調査個所が集約された時点で7回に分けた調査となった。隣接地点ではあるが異なった時期に調査していることから、調査次数ごとに報告する。

(1) 第1回調査の結果

調査番号 2000109

年度当初の調査で、A地区1ヶ所、B地区5ヶ所、C地区9ヶ所の計16ヶ所の調査を実施した。

基本的な層序は、①盛土 ②近代・近世の耕作土（地点によっては盛土） ③近世の土壤化した黒色土 ④砂疊層 ⑤黒色シルト層（疊混じり）である。遺構面は③層の上下面と⑤層上面である。砂疊層の堆積状況は複雑で、部分的に変化がある。間に遺構面が存在する地点もある。

A-6区

昨年度調査したA-2区の南側に接した部分である。調査結果もほぼ同一で明確な遺構は確認されなかった。近代以降の手が加わっており、残存状況は悪い。新しい掘削が及んでいない部分で浅い溝と土坑が検出されたが、時期は近世以降と思われる。土器小片しか出土していない。

B-6区

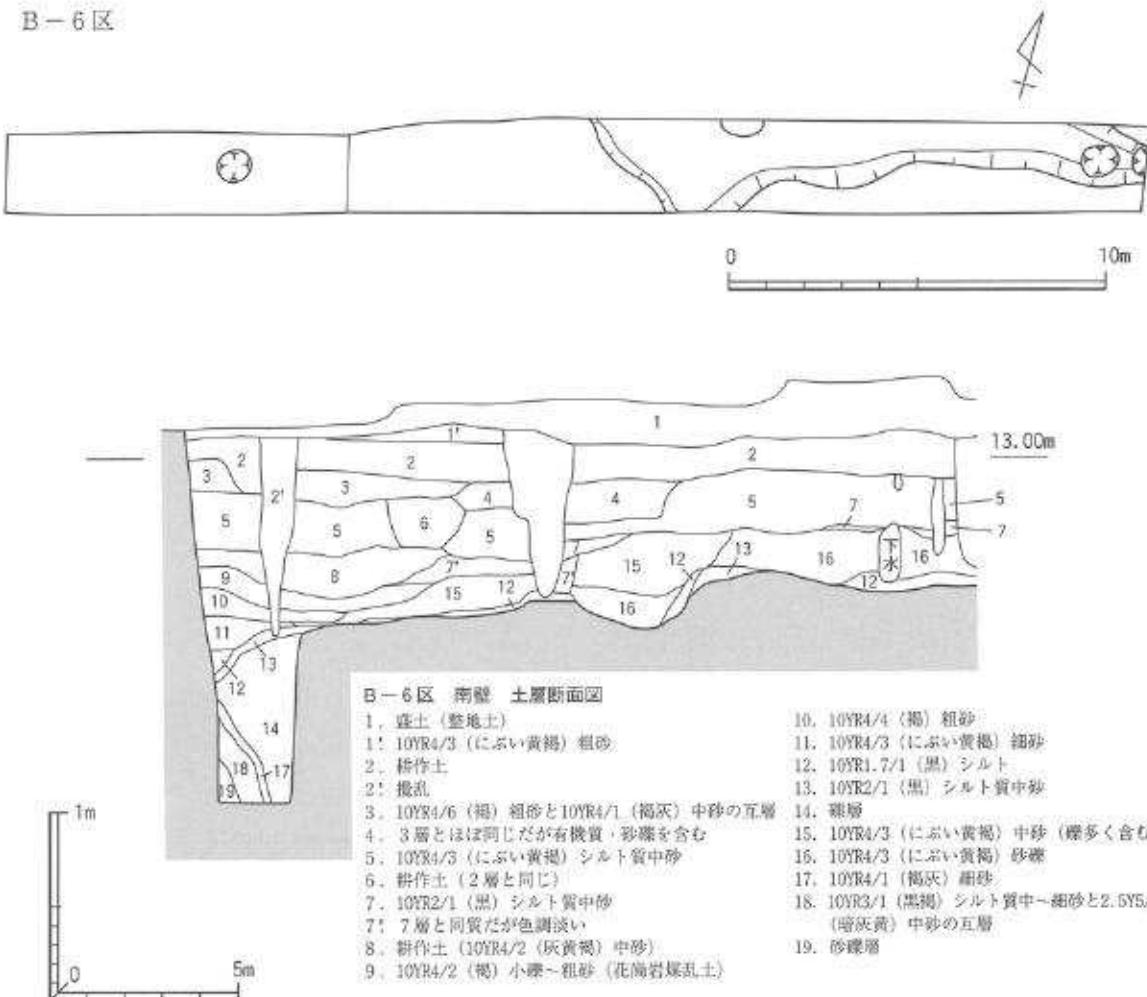


図23 B-6区 実測図

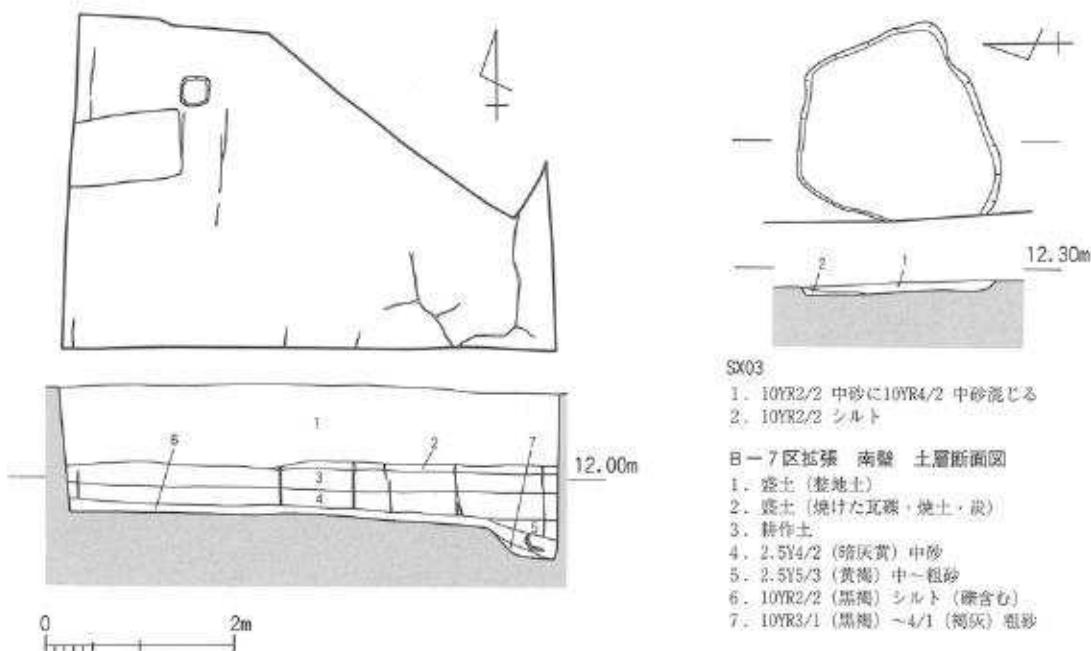


図24 B-7区 第1面実測図

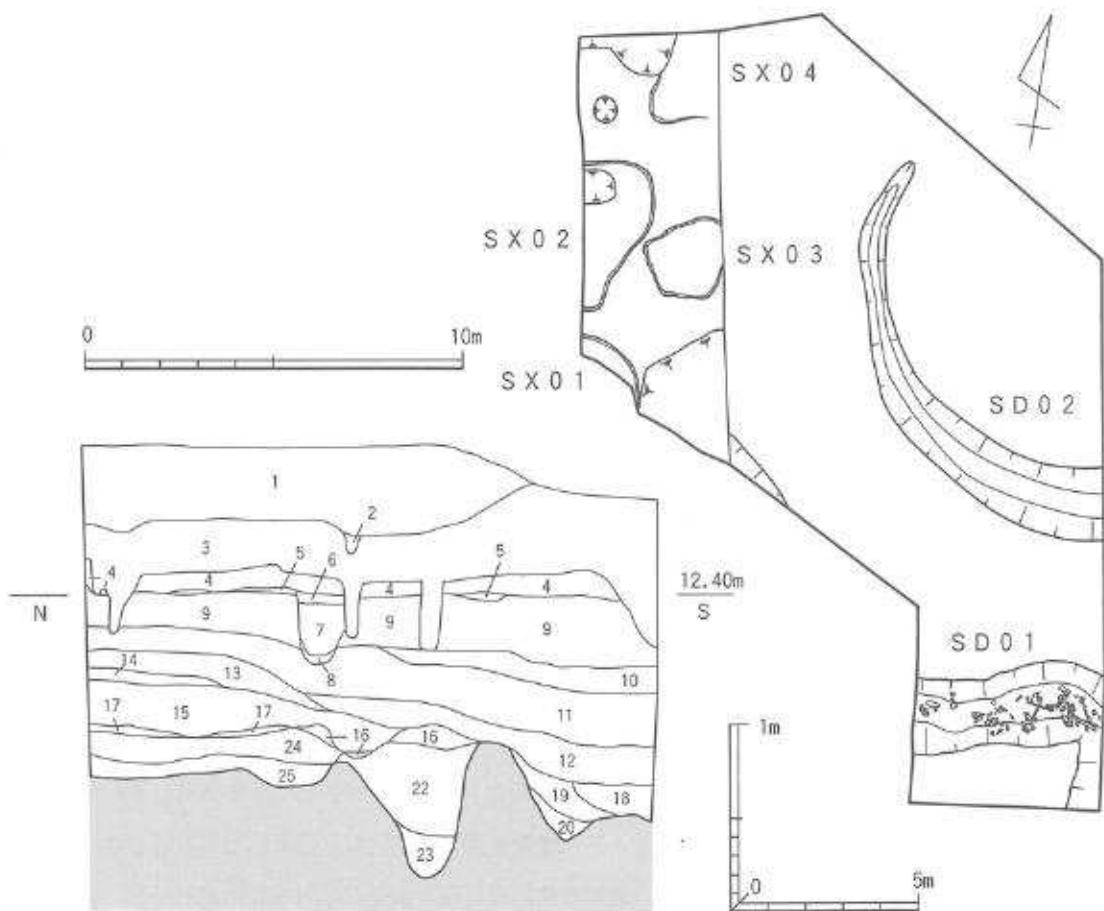
清水線東側の街路拡幅部分に相当する東西トレンチである。南東部分にB-7区が位置している。近代前後の遺構面が上面で検出されており、そこで4基の埋桶を調査している。通常の木製のものではなく、底が鉄製の桶である。残存していなかったが、底部の鉄部分に錆と木質が認められたことから、木製の側部が続いていたと考えられる。直径90cmを測るもので、底は平坦でなく中央部分がやや低く下がった形態である。

下の面では、古墳時代の旧河道が検出されただけである。洪水堆積物が厚く堆積しており、それ以外に明瞭な遺構は確認できなかった。B-7区で確認された弥生時代前期の遺構は、この地区まで広がっていなかったと考えるより、後世の削平を受けたと考えた方が妥当かと思われる。

B-7区

B-6区の南東部分に位置する調査区である。街路新設部分であることから、調査面積は広くなっている。現道の拡幅でないことから、水道管やガス管などの影響も強く受けていなかった。排土の都合から一氣に行うことは出来ず、3回に分けて実施している。場所によって変化はあるが、遺構面は3面確認している。第1面は近世の遺構面で土坑などを調査しているが、明瞭な遺構は検出していない。第1面の堆積土である暗褐色中砂に地震痕跡である噴砂を確認している。面的に確認したのは南側に限られている。

第2面は弥生時代前期の遺構面である。ただ、後世の削平により遺構面の保存状態は良好とはいえない。溝などの深度のある遺構以外は数cmしか残っていない。搅乱坑も多くこの面まで及んでいる。この面では溝2条と土坑2基、落ち込み3基を検出している。SD01は調査区南端で検出しており、南側と西側に延びている。溝内から多くの木器・弥生土器が出土している。溝は隅円方形となる方形周溝状の遺構で方形周溝基の可能性も十分に考えられる。土器は甕が多く壺が続いている。高杯は認められず、鉢は存在するかもしれない。甕には如意状口縁が多いが逆L字の口縁部もある。沈線は1本ずつ描いており、竹管文の装飾もみられる。河内からの搬入品も含まれている。石器は石包丁が出土している。木器は残存長44cm



B-7区 東壁 土層断面図

- | | |
|--------------------------------|---|
| 1. 盛土(整地土) | 14. 10YR4/2(灰黄褐)粗砂 |
| 2. 漆喰 | 15. 2.5Y4/1(黄灰)砂礫に10YR2/3(黒褐)シルトの薄い層が入る |
| 3. 盛土(焼けた瓦礫・焼土・炭) | 16. 10YR2/1(黒褐)中砂 |
| 4. 耕作土 | 17. 2.5Y4/1(黄灰)細砂と10YR2/2(黒褐)中砂のラミナ |
| 5. 2.5Y4/2(暗灰黄)中砂 | 18. 10YR3/1(黒褐)粗~中砂 |
| 6. 2.5Y5/3(黄褐)中~粗砂 | 19. 10YR2/1(黒)シルト |
| 7. 2.5Y4/4(オリーブ褐)中砂 | 20. 10YR4/3(にぶい黄褐)粗砂 |
| 8. 2.5Y5/2(暗灰黄)シルト | 21. 10YR1.7/1(黒)中~粗砂 |
| 9. 10YR5/4(にぶい黄褐)中砂(マンガン・小礫含む) | 22. 10YR2/1(黒)シルトと同色中砂のラミナ |
| 10. 2.5Y5/4(黄褐)中~粗砂 | 23. 10YR2/2(黒褐)中砂 |
| 11. 10YR2/3(泥褐)シルト質中砂(小礫含む) | 24. 5Y4/2(灰オリーブ)粗砂 |
| 12. 10YR2/2(黒褐)シルト(礫含む) | |
| 13. 10YR2/2(黒褐)中砂 | |

図25 B-7区 第2面実測図

の弓(94)と平鉗(95)の製品と蓋状の木製品(98)ネズミ返しの可能性の高い建築材(97)と板材・付け木が出土している。後世になるが第1面下から付札状の木器(102)も1点出土している。鉄器も1点(103)認められる。釘状の曲がったものと思われる。

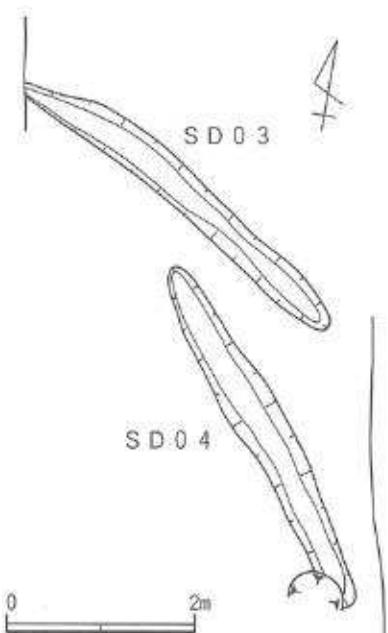
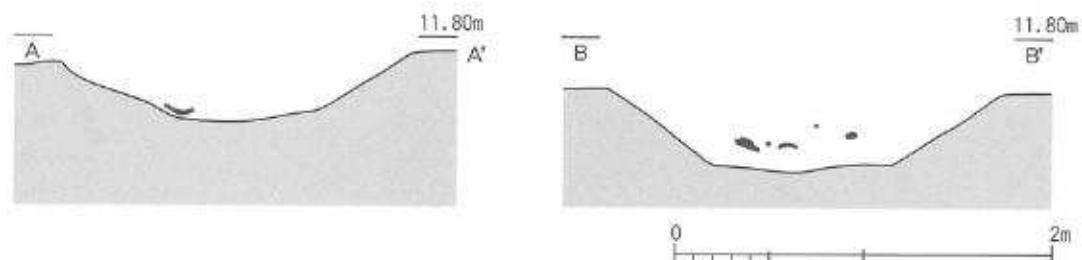
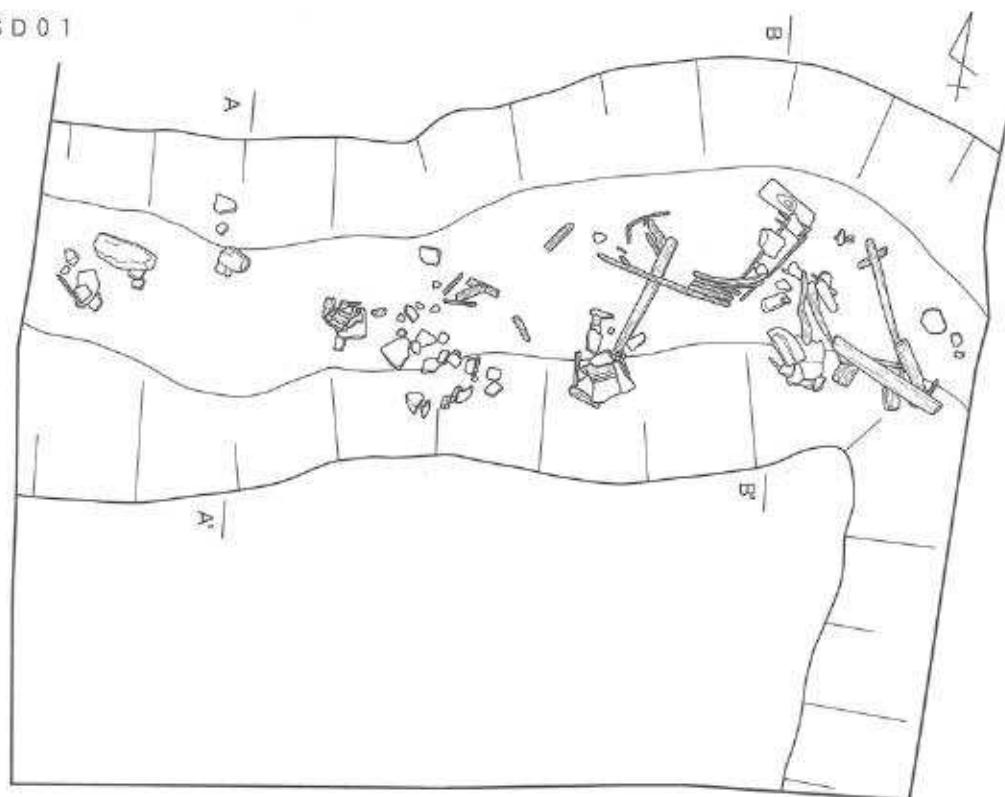
B-8・9・10区

各地区ともに2時期の旧河道を調査している。古い時期の河道には弥生後期の土器が含まれている。B-10区は直線的でなく蛇行している。遺構と思われるものに旧河道に挟まれた部分で溝が確認されている。

B-11区

B区の北端に設定した調査区である。145m²とやや広い面積を調査したことから、旧河道の底まで掘り下げることができた。第1面では近世の遺構を検出している。溝は耕作痕の掘溝数条と溝2条である。掘

SD 01



溝は東西方向に主軸を持つ。溝は鋤溝より古く、SD 01は幅を描く幅50cm、深さ15cmを測る。SD 02は南東隅で検出されている。土坑には鉄釜を掘えた土坑もある。柵跡は鋤溝と同じ主軸を持つ。1m間隔の5基のピットである。第2面は古墳時代後期の遺構面で、旧河道と溝がある。SD 03は旧河道の西側に沿って検出されており、幅60cm、深さ20cmを測る。旧河道は規模の大きなもので幅8mを超える。底や肩部に足跡が残されている。人が大半であるが、動物・鳥も認められる。

C-5~8区

同じ状況で明確な遺構は検出されなかった。道路に面していることから水道・ガス管が認められた。土壤化した面は検

図26 SD 01・03・04 実測図

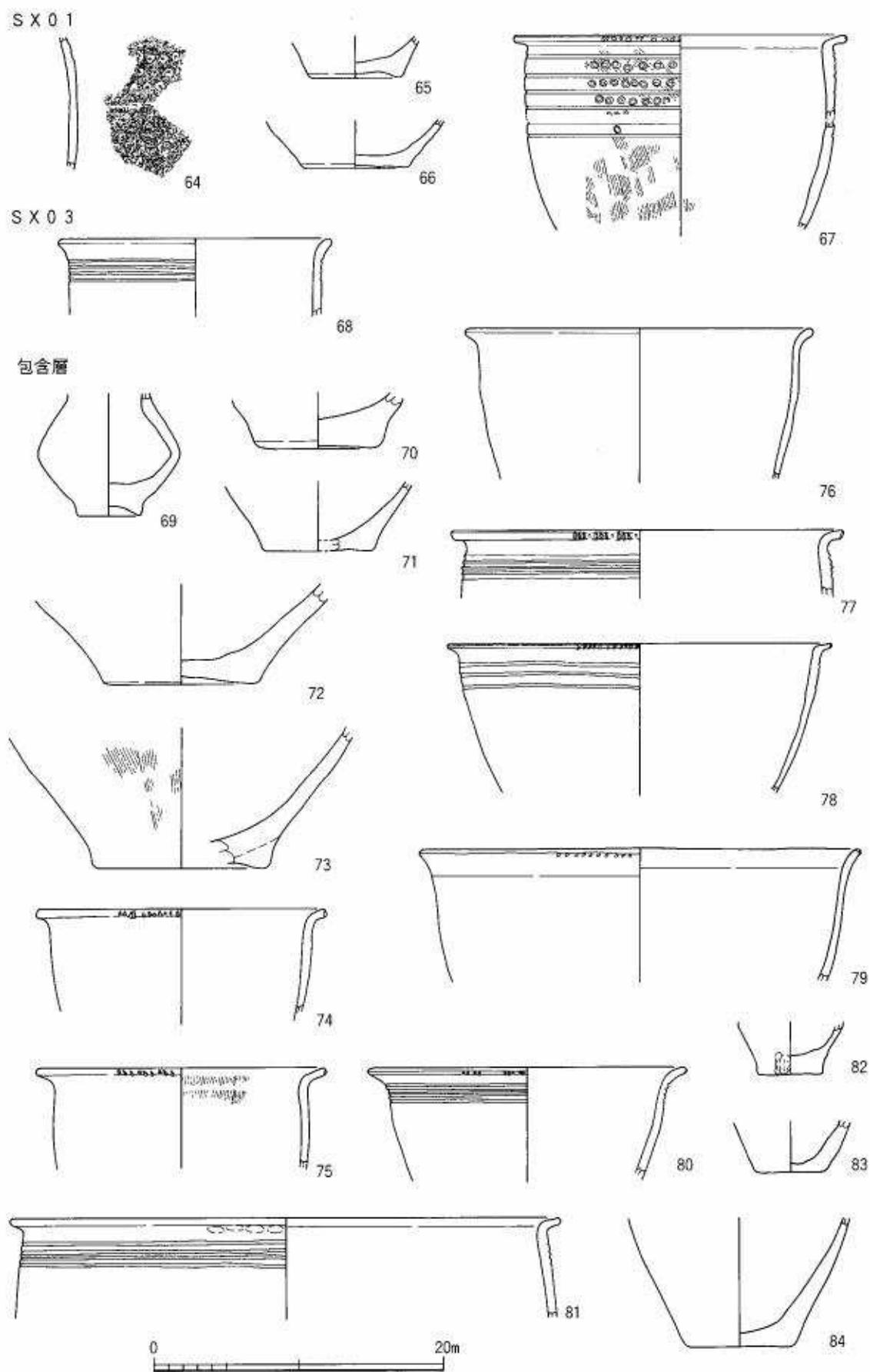


図27 B-7区 出土遺物実測図(1)

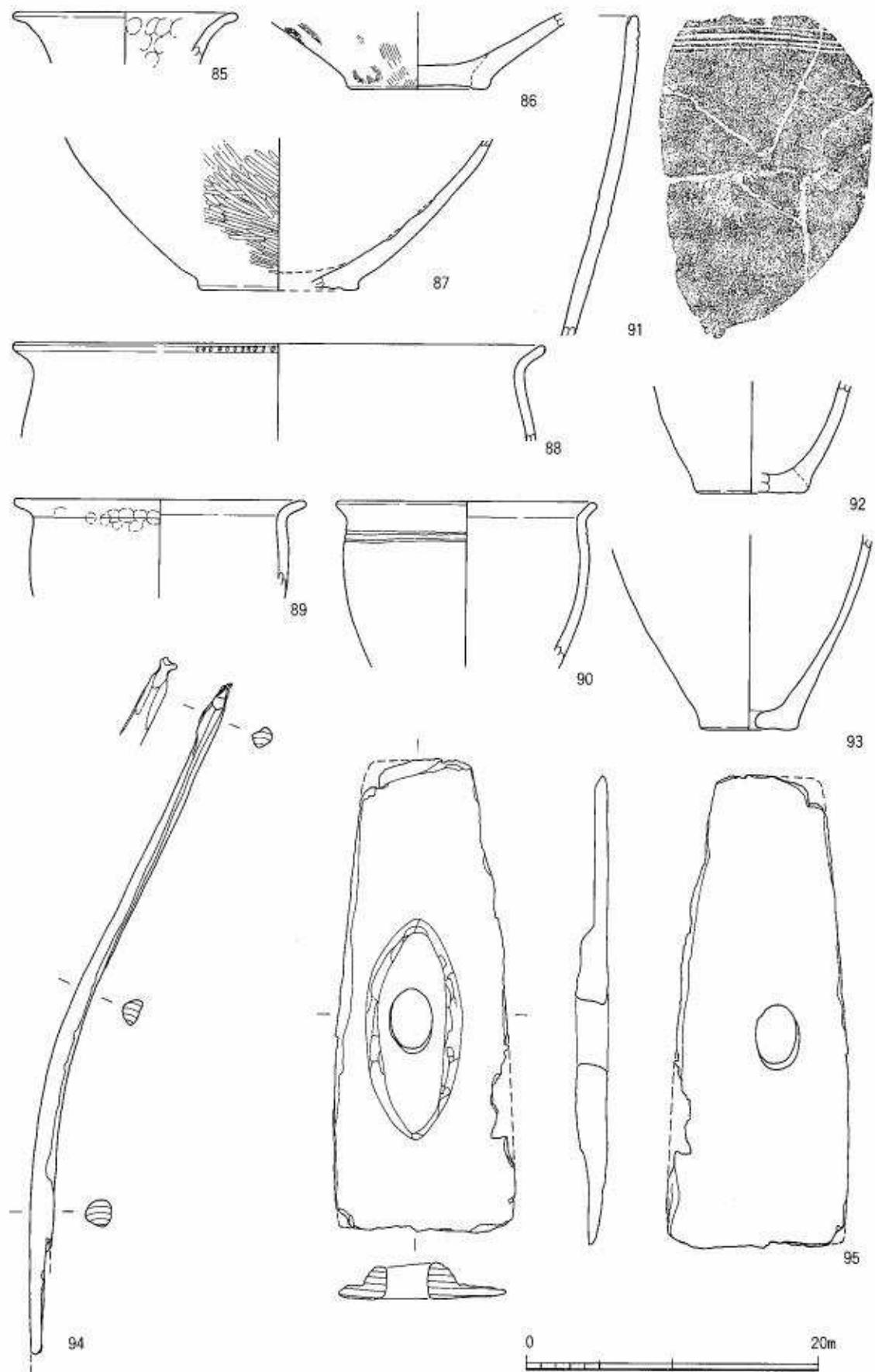


図28 B-7区 出土遺物実測図 (2)

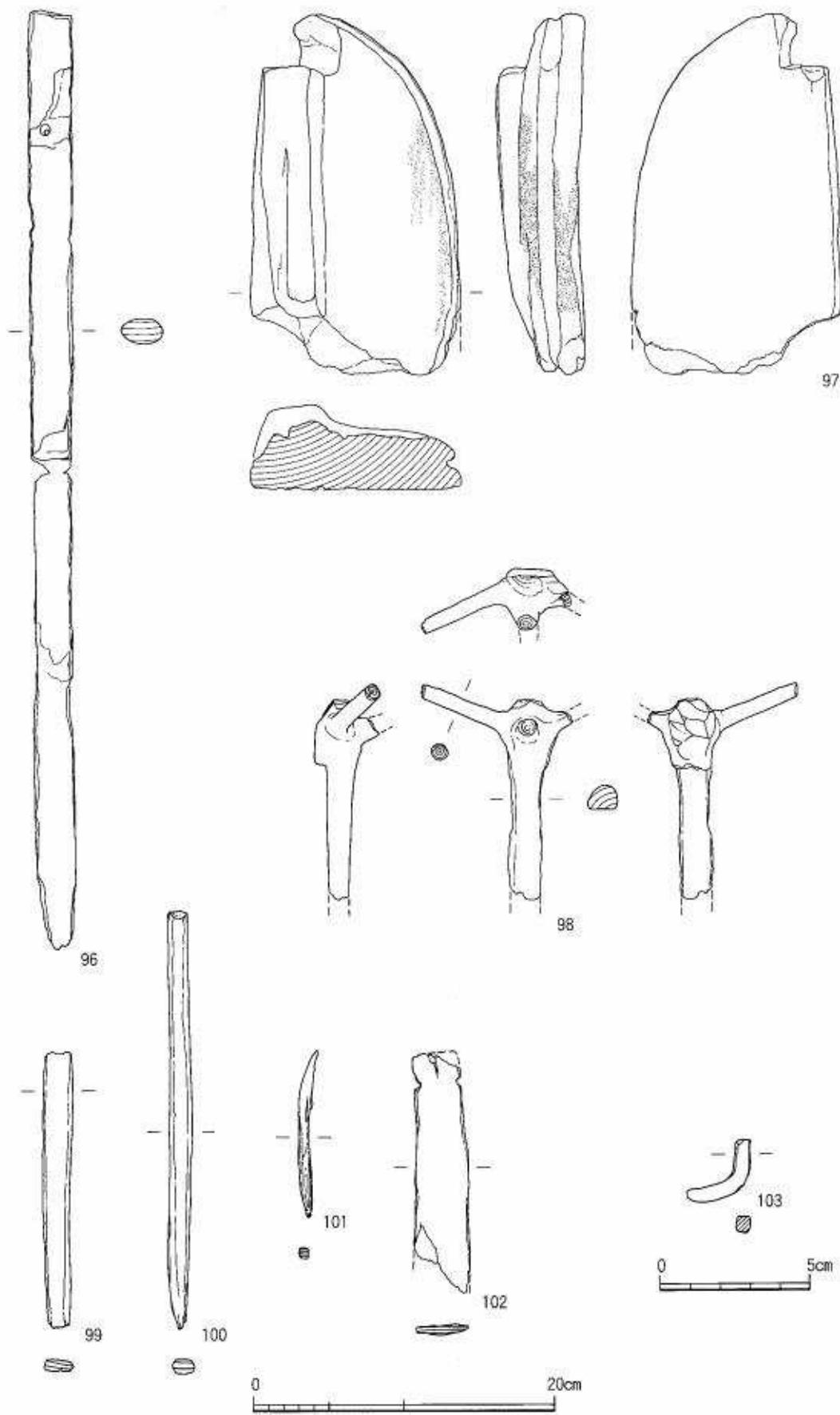


図29 B-7区 出土遺物実測図(2)

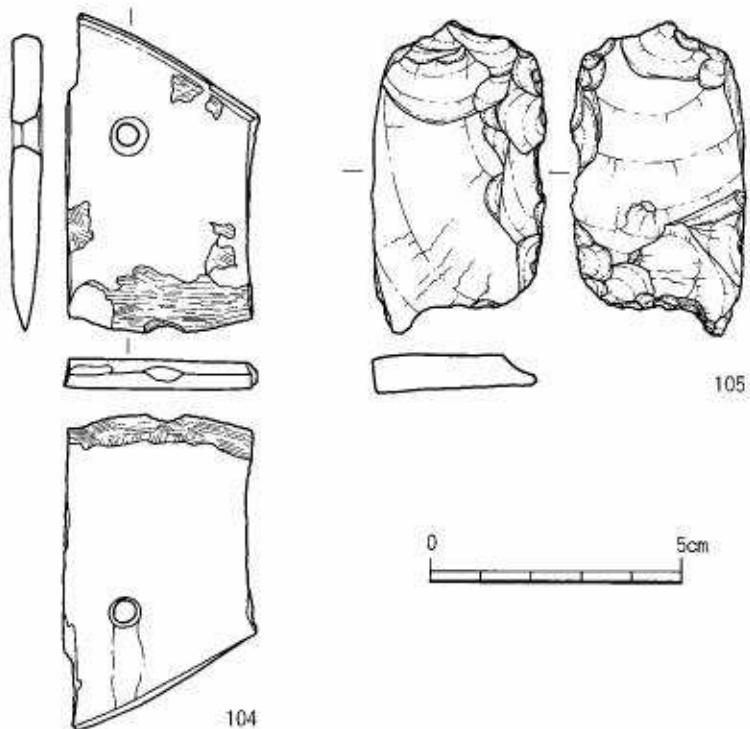


図30 B-7区 出土遺物実測図（4）

出されず、シルト層が広がっている。縄文土器はなく、須恵器・土師器が出土している。
C-10区

西部1号線の北側で、下位段丘面の変化点付近にあたる。遺構面は比較的安定しており、中世の時期の集落跡である。ピットは9基調査しており、そのうち4基は直交している。主軸は西へ12°振っている。心々間の距離は南北が1.2mで、東西が西から1.4m、2.8mである。

C区の東側で比較的安定した面を確認している。耕土下

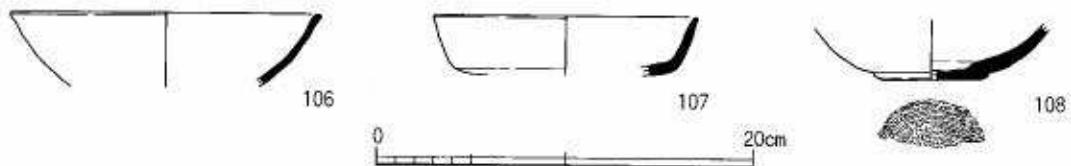


図31 B-7区 出土遺物実測図（5）

に洪水堆積物があるものの東西部分よりも浅く僅かに高い部分であったようである。掘立柱建物跡と考えられるが、規模は不明である。

C-11区

3面の遺構面を調査しており、第1面は暗渠・土坑で近代の可能性が高い。第2面は洪水層の下で井戸と思われる石組と大型のピットを確認している。井戸は調査区外へ続いていることから未調査である。大型のピットは礎盤を有する柱穴であることから、3基だけの確認であるが掘立柱建物跡と思われる。第3面は奈良時代から平安時代前期の面で、礎石建物存在の可能性も高い。芦屋廃寺と同じ瓦も出土している。鉄滓・須恵器・土師器が出土している。

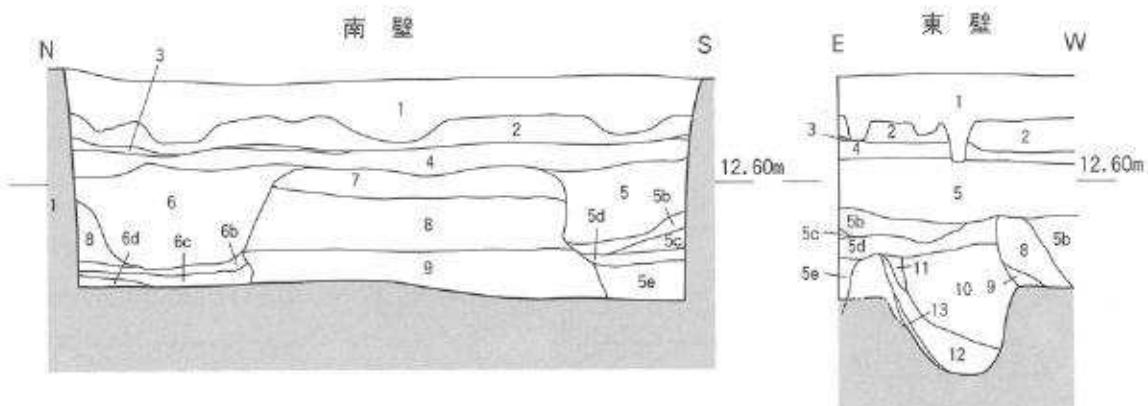
C-12区

C-10区の南側の調査区で調査結果も同じである。ピットは9基あり、径も小さいが掘立柱建物跡の一部であろう。

(渡辺)

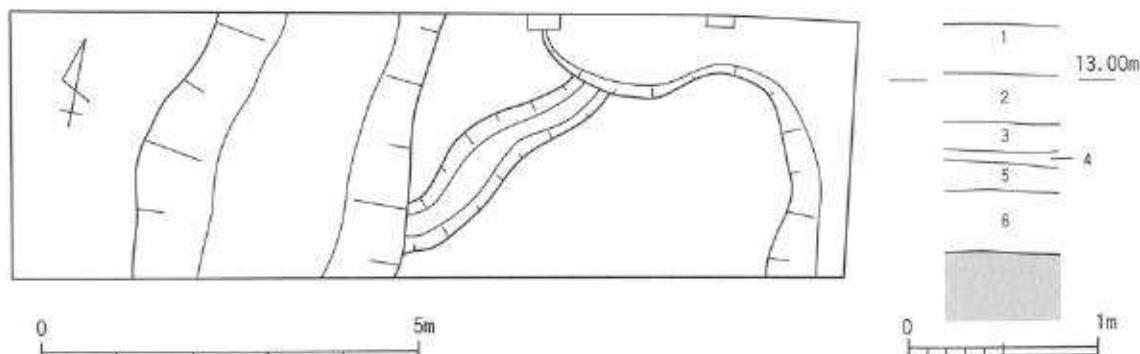
(2) 第2回調査の結果

調査番号 2000206



B-8区 東壁・南壁 土質断面図

- 1. 盛土
- 2. 稲作土
- 3. 2.5Y5/3 (黄褐) シルト質中～細砂 (底土)
- 4. 10YR5/3 (にぶい黄褐) 中～細砂
- 5. 10YR5/3 (にぶい黄褐) 粗砂と10YR3/1 (黒褐) シルトの互層 (洪水堆積物)
- 6. 2.5Y4/1 (黄灰) シルトと2.5Y5/2 (暗灰黄) 中砂の互層
- 6c. 2.5Y6/1 (黄灰) 粗砂から小礫
- 6d. 2.5Y5/2 (暗灰黄) 中砂と2.5Y4/1 (黄灰) シルトの互層
- 7. 7.5Y3/2 (黒褐) 中砂
- 8. 10YR1.7/1 (黒) シルト質細砂
- 9. 10YR2/1 (黒) シルトと2.5Y5/2 (暗灰黄) 中砂の互層
- 10. 2.5Y6/1 (黄灰) 粗砂 (黒シルト部分的に入る)
- 11. 10YR5/4 (にぶい黄褐) 粗砂 (鉄分を多く含む)
- 12. 2.5Y6/2 (灰黄) 中砂と10YR5/6 (黄褐) 粗砂の互層
- 13. 砂層



B-10区 土層柱状図

- 1. 盛土
- 2. 稲作土
- 3. 稲作土 にぶい黄褐色 中砂、同色
シルトの混ざった層 (人工)
- 4. 暗黄シルト質中砂と褐色中砂の
互層 (自然)
- 5. 暗赤褐色レキ
- 6. 暗黄粗砂

図32 B-8区 遺構実測図

A-7区

A区の南端に位置する調査区である。当初は東西方向に長い3×6mであったが、遺構が街路予定部分にも広がっていることが明らかとなった。そのことから、東端から北側へ逆L字形のトレンチとなるよう、4×10mの南北方向に拡張した。遺構面は4面確認している。

第1面の遺構は暗渠と足跡である。時期は中世から近世にかけての面である。暗渠は調査区の北端を東西方向に存在している。現在の地形と同じ方位で近世の石組みの暗渠である。円礫を主体としたもので、暗渠部分の内法で25cmを測る。遺構面は黒色シルト層で、その上に洪水堆積物が溜まっている。遺構面に

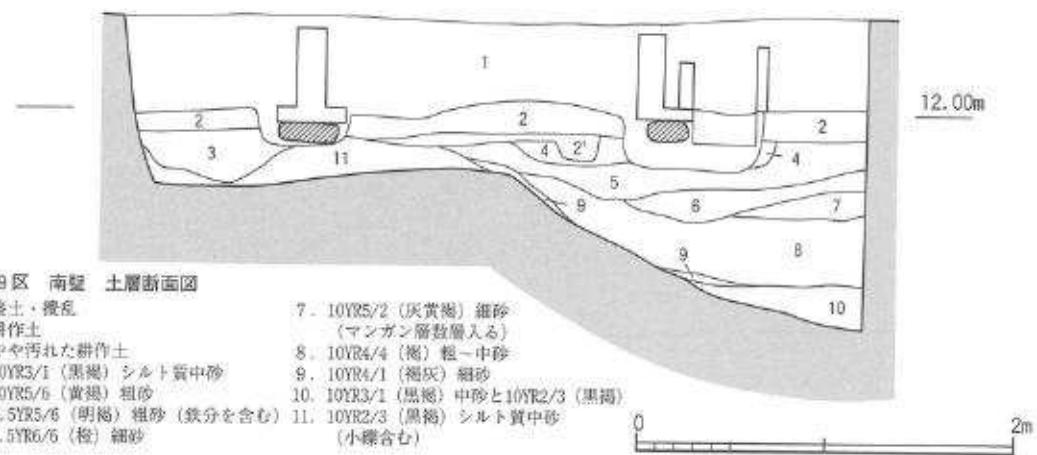
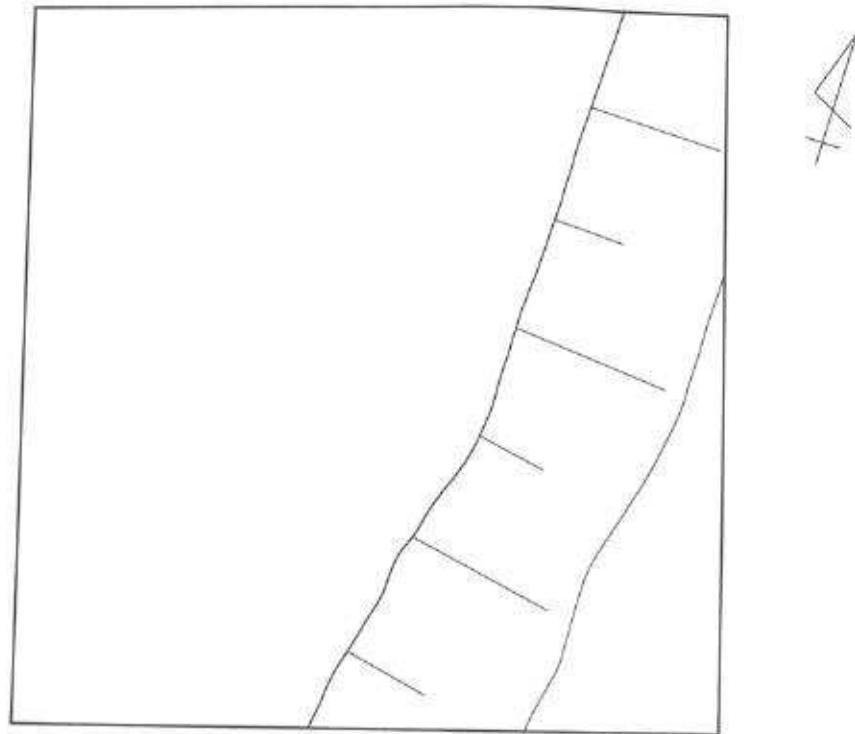


図33 B-9区 遺構実測図

B-8

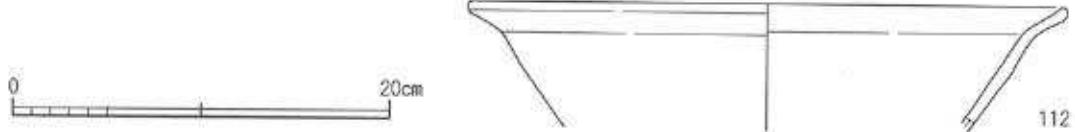


109

B-10



113 114 115



112

図34 B-8~10区 出土遺物実測図

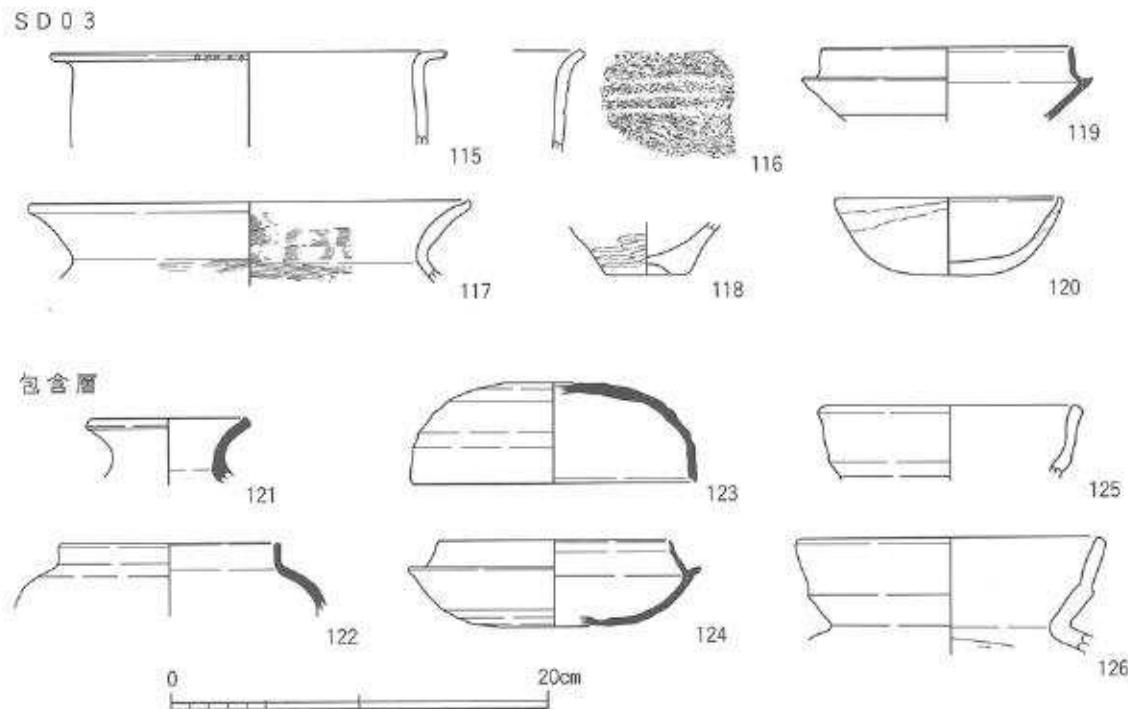


図35 B-11区 出土遺物実測図

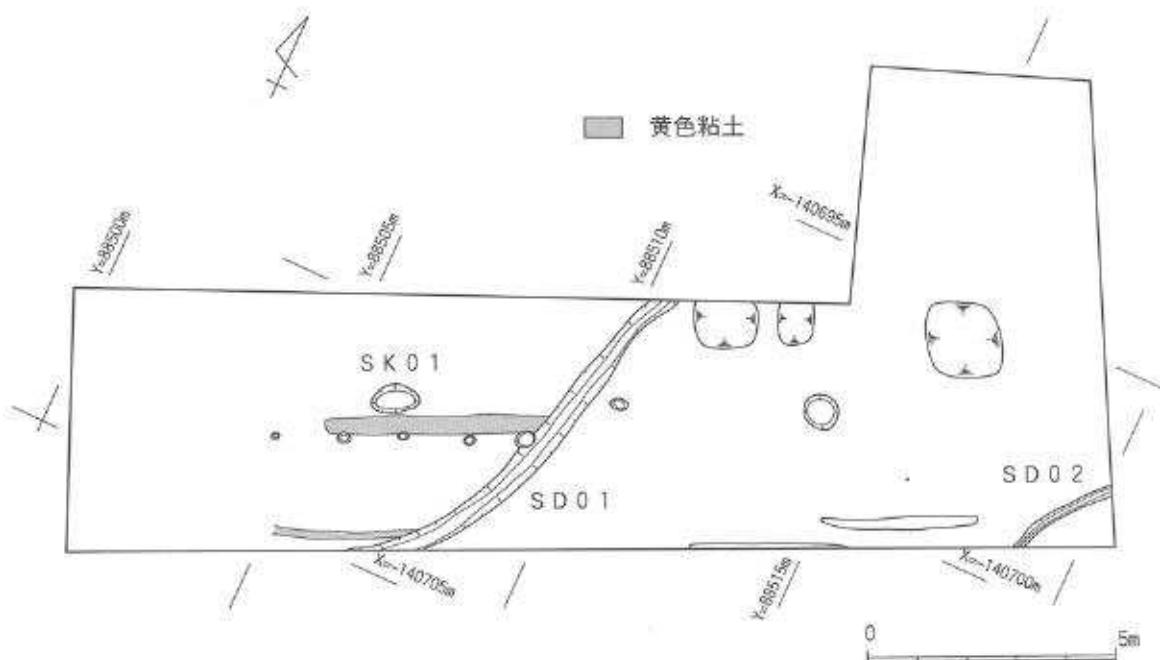


図36 B-11区 上面造構実測図

足跡が検出されている。北西方向に向かうものと北側に向かう足跡が確認されている。造構面となる黒色シルト層には土師器・瓦器などが包含していることから、13世紀以降の洪水と考えられる。

第2面は包含層下面で、土坑1基とピット12基を検出している。土坑は西側で検出され、最大長1.8mを測る。深さは12cmと浅く、皿状の堆積を示している。土師器小片が出土している。ピットは12基検出しており、東側は掘立柱建物跡に復元できる。2間×2間以上で北西方向にへ延びている。掘立柱建物跡

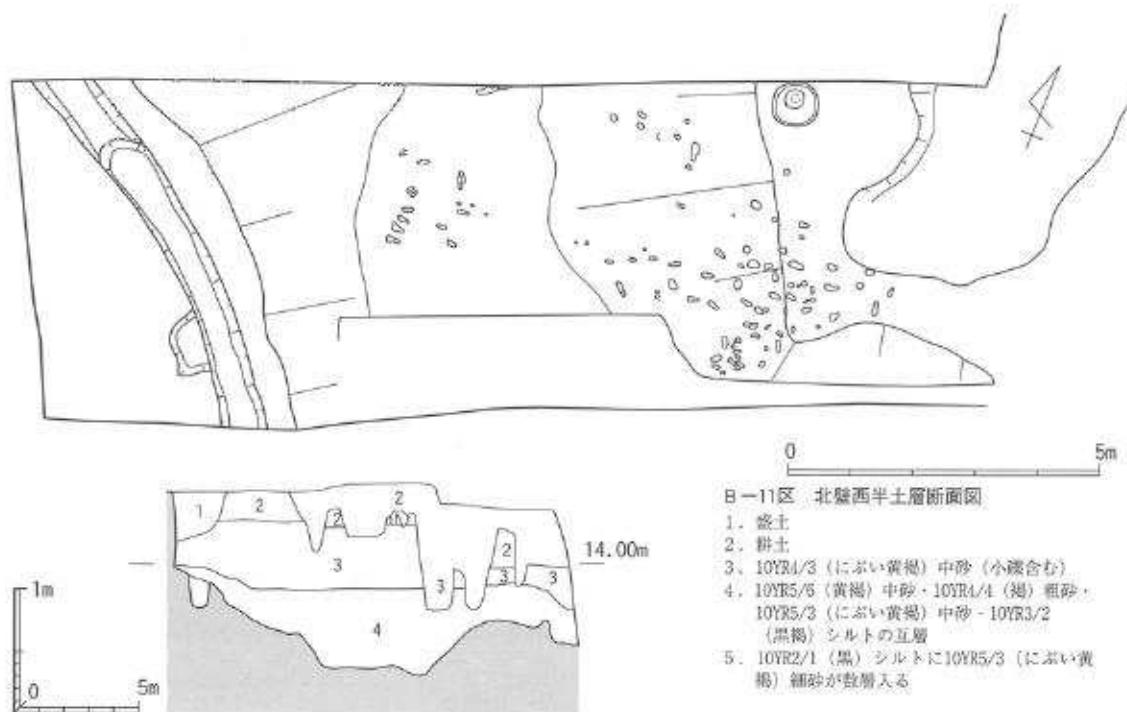


図37 B-11区 下面遺構実測図

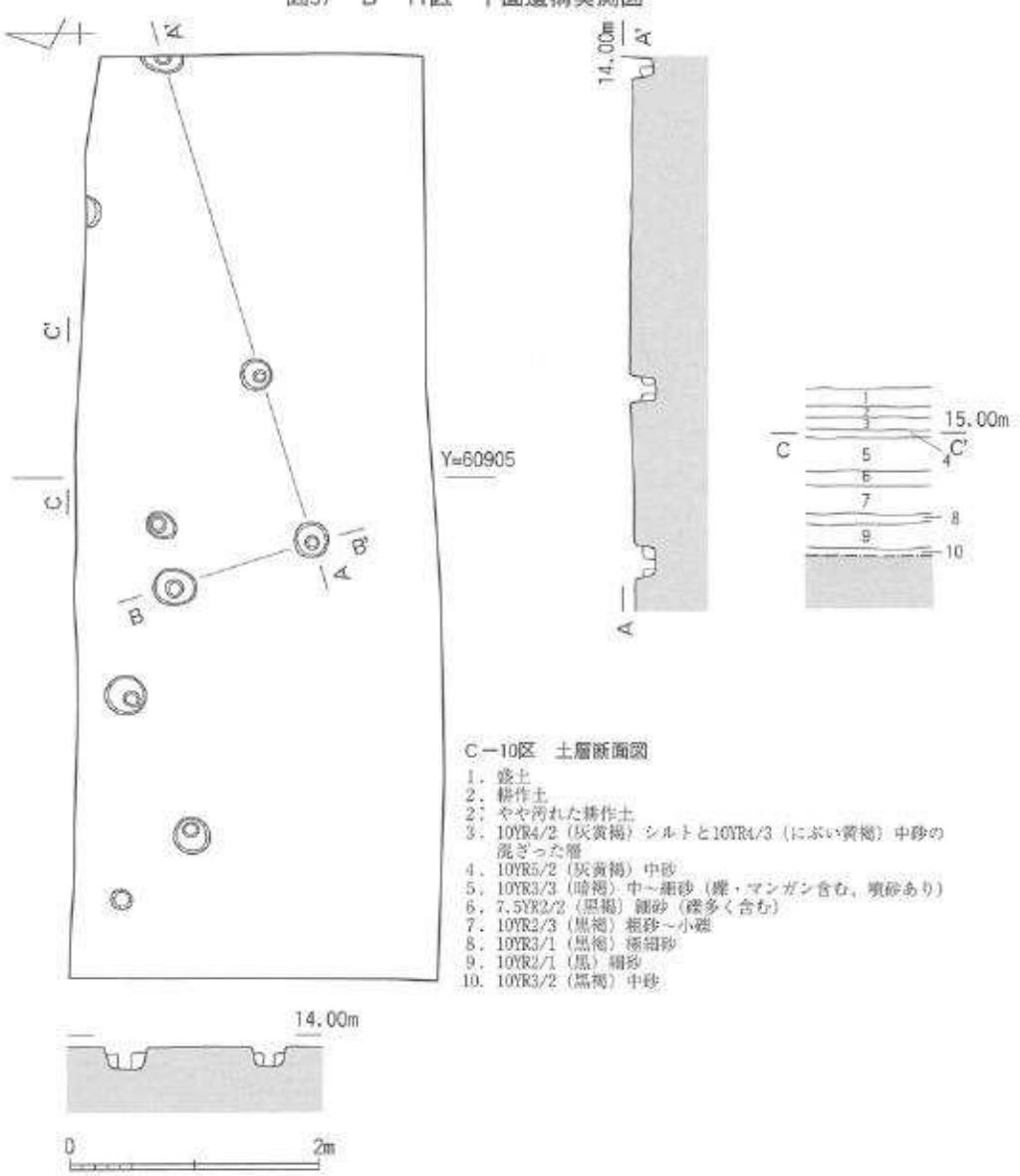


図38 C-10区 実測図

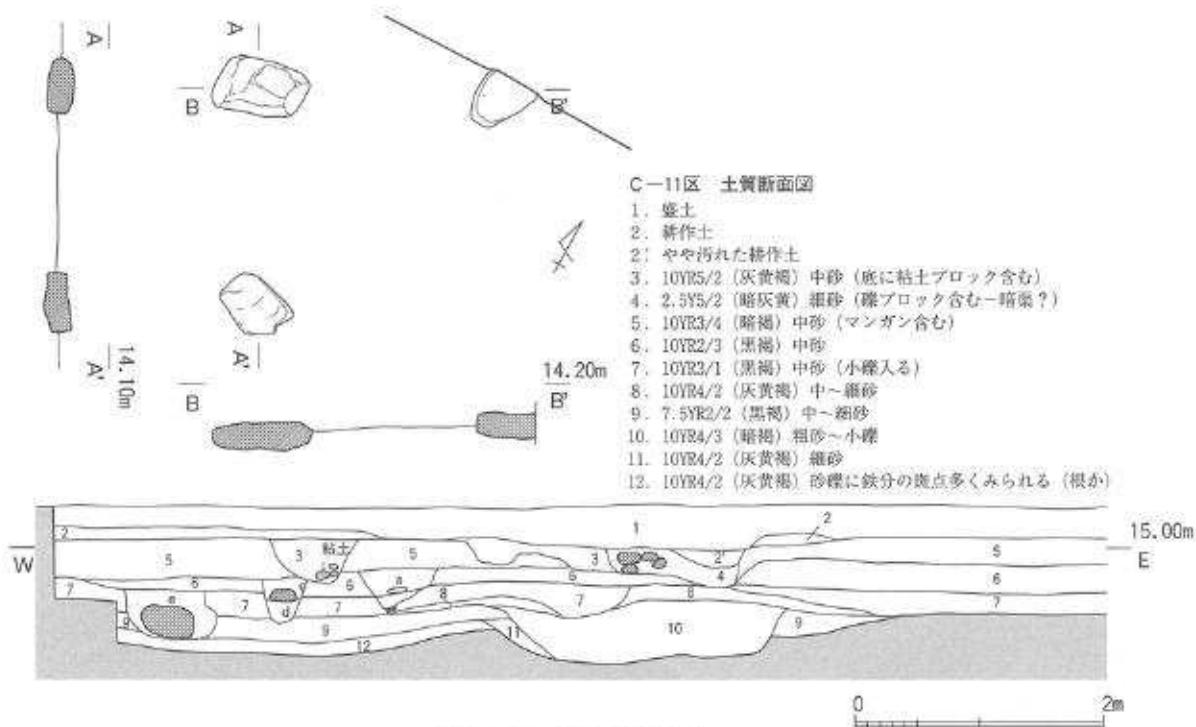


図39 C-11区 実測図

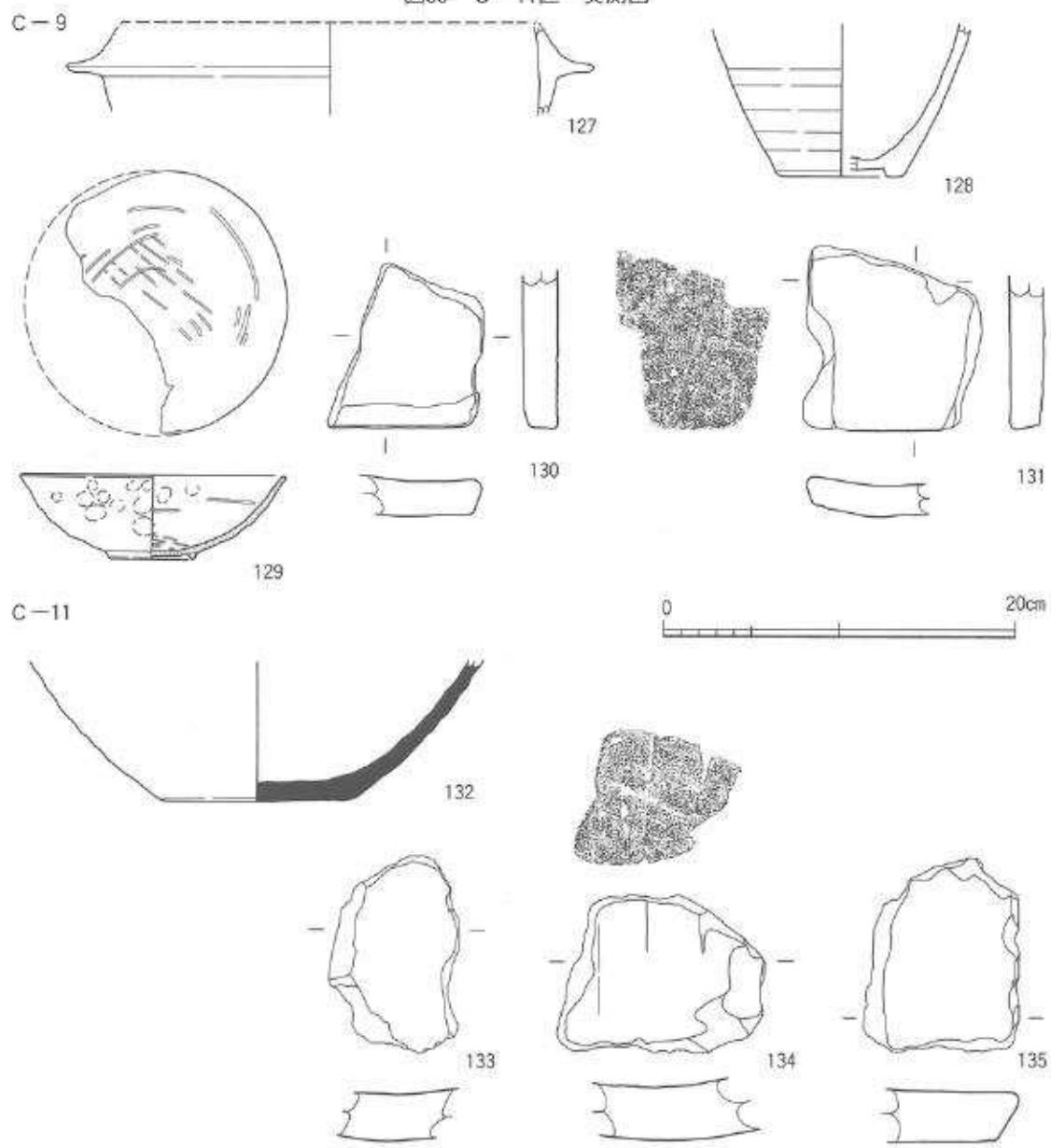


図40 C-9・11区 出土遺物実測図

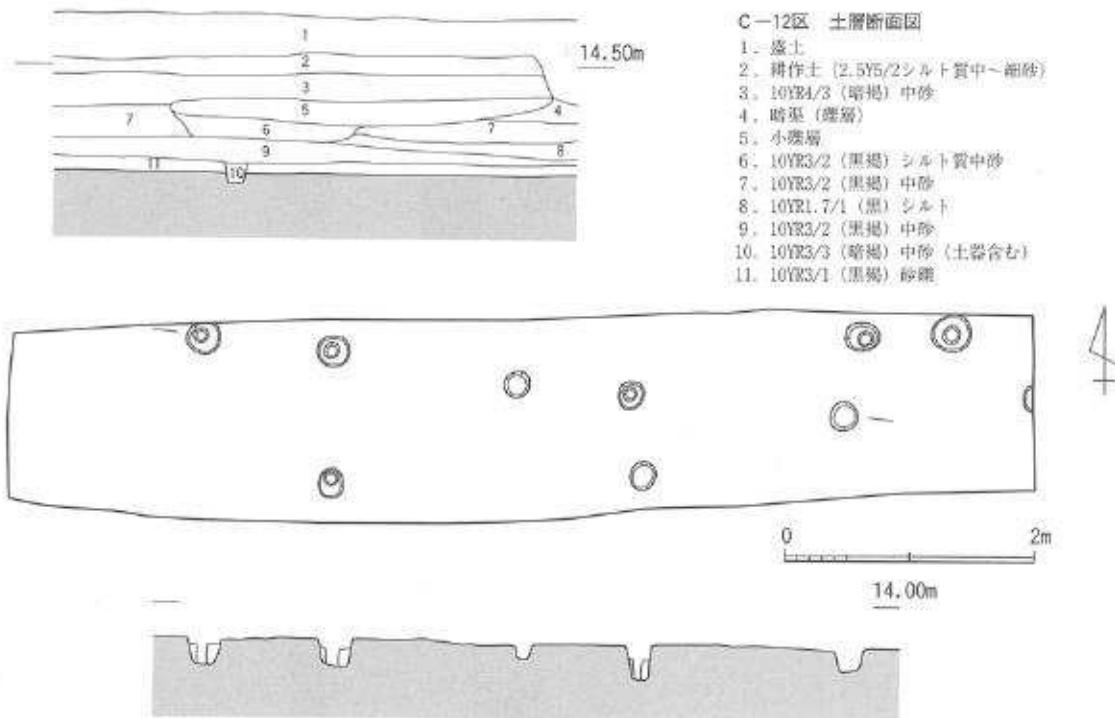


図41 C-12区 実測図

に復原はできなかったが、西側で調査したS P01から蘇民将来札が3点出土している。SK01の下層で検出されている。蘇民将来札は3点とも同一句が記されているものと思われる。2点は重なって出土しており、他の1点は掘方に沿うように出土している。同形であることからも、3点セットで埋置された可能性が高い。

第3面では、溝を2条検出した。幅1.5~2.0mではほぼ平行して北東ー南西方向に延びている。調査区と平行した状況で、ほぼ調査区内全体に位置している。北側にあるSD01は深さ15~20cmの逆台形の断面をしている。北西部には礫群が検出されており、溝の肩部に施されていたと思われる。北側部分では遺構面は残存していない。

第4面では圓池遺構を調査している。池の南側部を調査したもので、礫敷きである。礫は拳大を中心とした円礫が主体で、一部角礫や人頭大の石材も使用されている。北西コーナー部は礫が大きめのものがかたまっており、その南側は礫が小さくなっている。東側の方は全体的に小形の石材が敷かれている。池に使われた石材を兵庫県立人と自然の博物館先山 徹氏に鑑定戴いたところ、古生層の礫層中のもので、東お多福山などに存在している花崗閃緑岩や泥岩などである。芦屋川上流域に存在する石材であることから、少量ながら芦屋川にも存在しているが、大量にあるものではない。黒色や青みがかった石材を意図的に選択して使用していることは明らかである。地山中に多く存在する花崗岩は余り使われていないことからも明らかである。

遺物は、包含層を中心に多く出土している。須恵器・土師器・瓦器・白磁・土錘・木器が出土している。第4面上層では土師器・瓦器の皿が多数廃棄されたような状況で出土している。ての字口縁の京都系の皿が主体である。

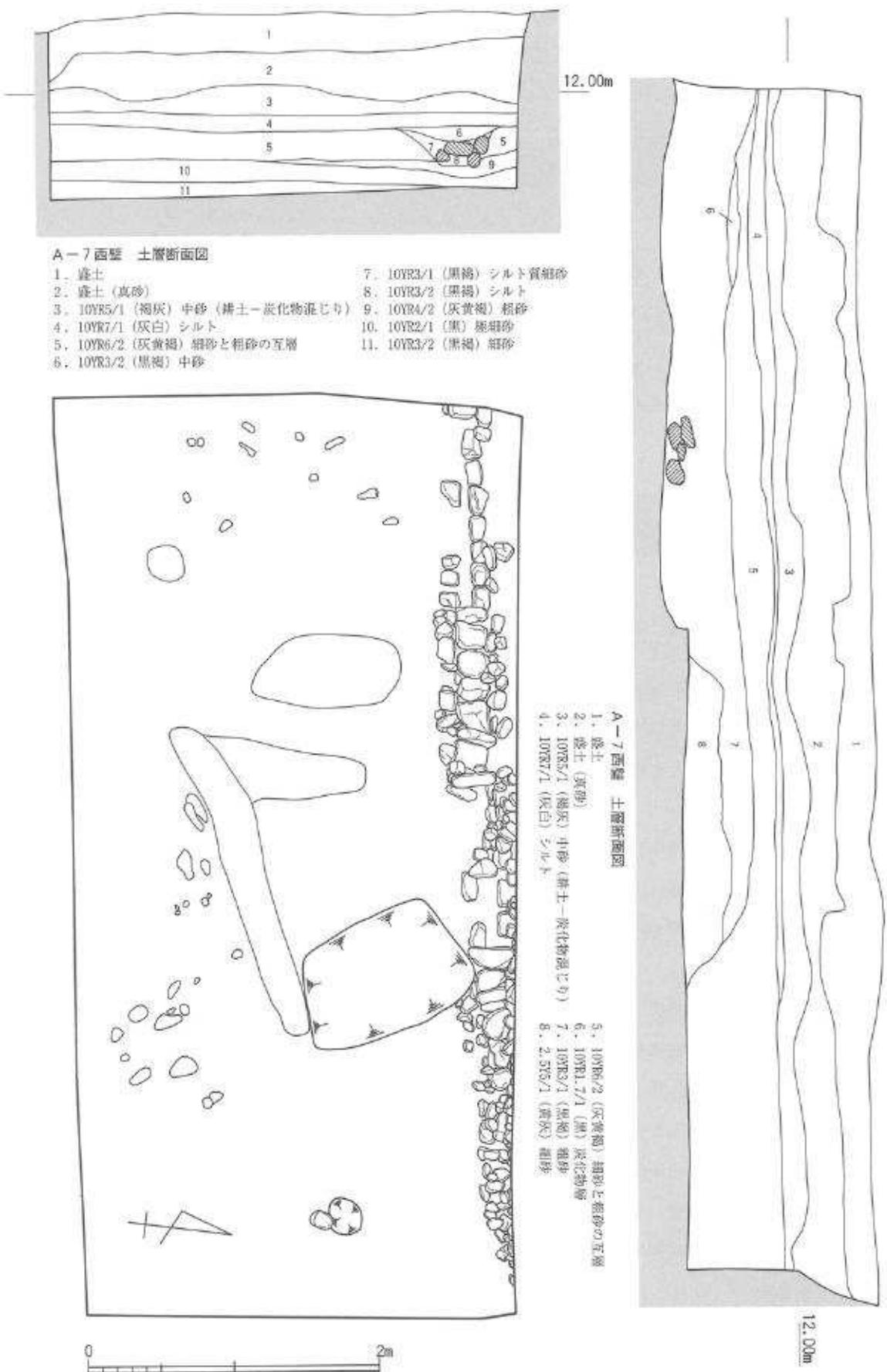


図42 A-7区 第1面実測図

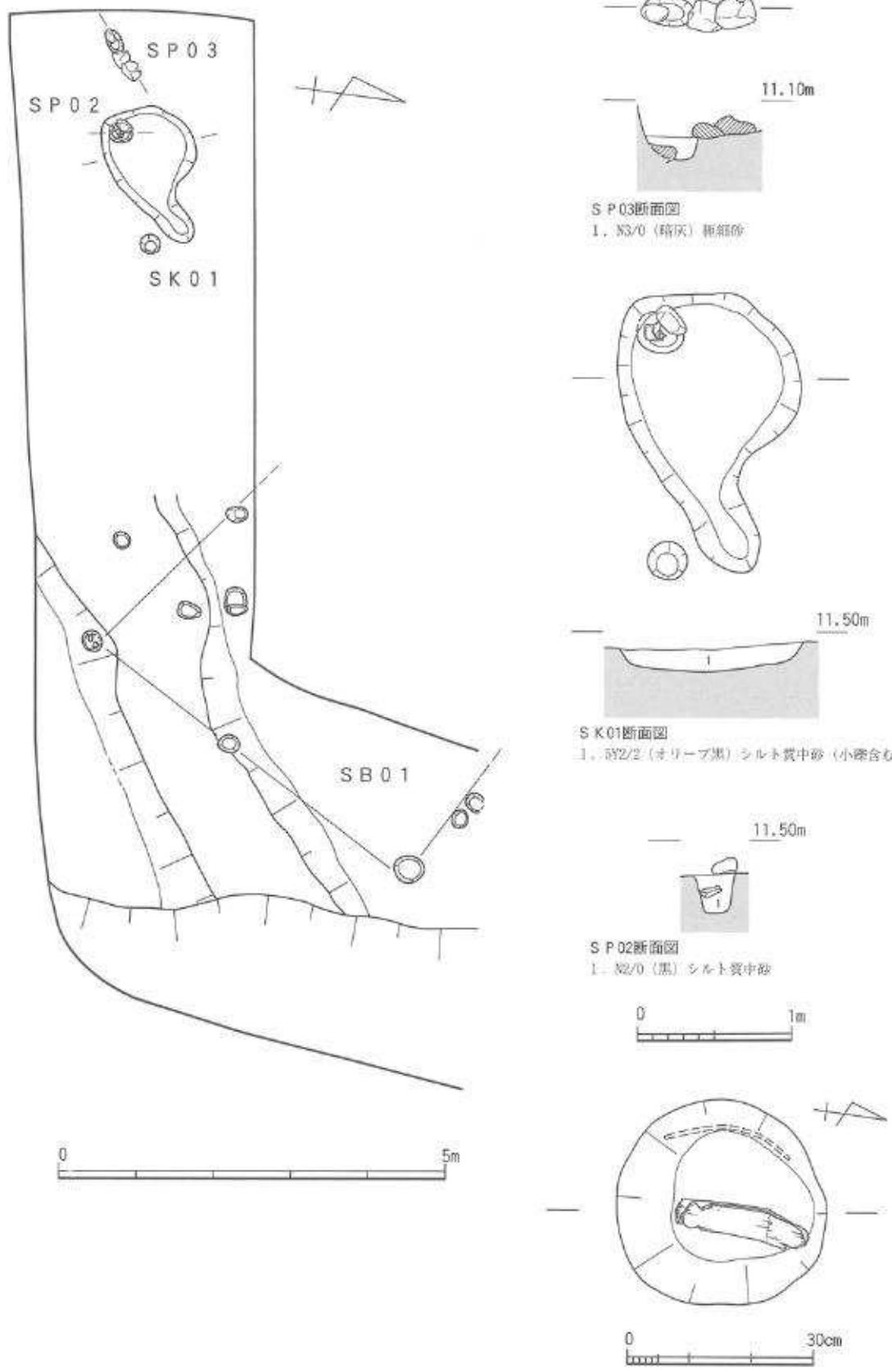


図43 A-7区 第2面実測図

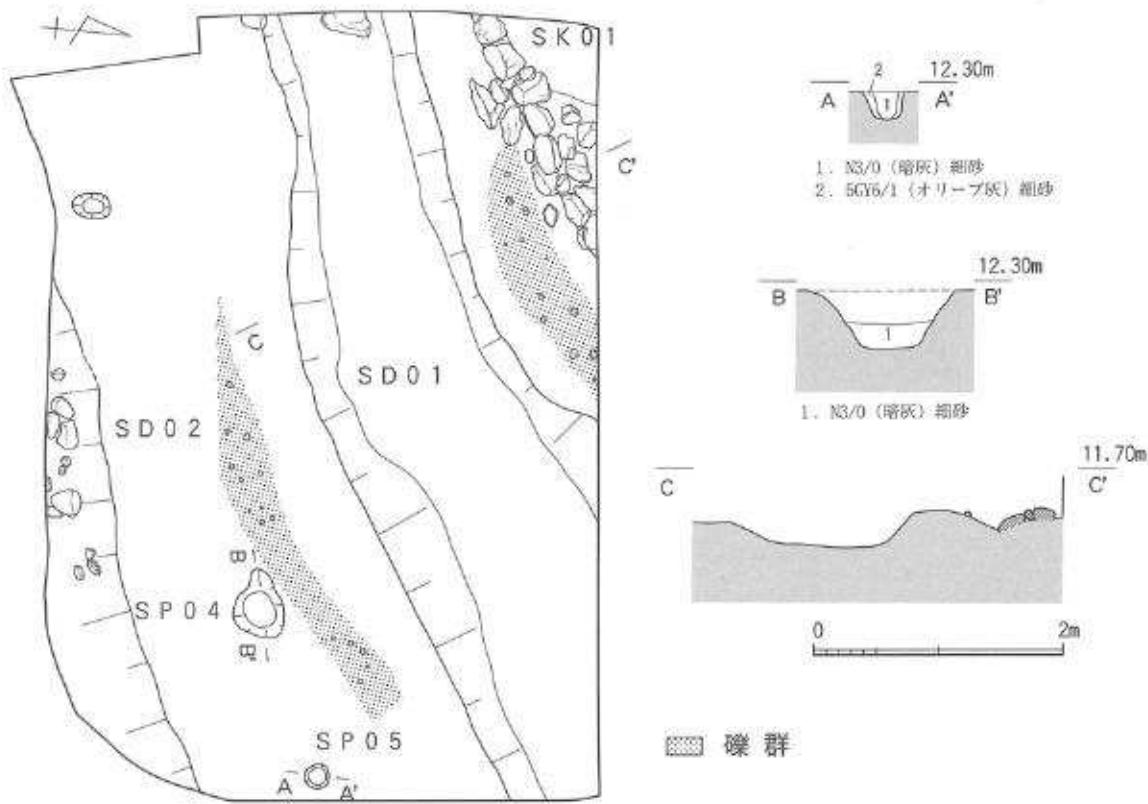


図44 A-7区 第2面SD01・02実測図

須恵器は東播磨産の土器で、墨書「小」もみられる。椀が主体で、皿・甕が含まれる。土師器が出土遺物の多くを占める。体部に段を有するものや、ての字口縁が多いのが特徴である。胎土は地元のものと思われ、精製された胎土の大型の皿も比較的多く出土している。古墳時代に遡る須恵器・土師器も出土していることから、今回は遺構は確認されていないが、当時の遺構も近くに存在したと思われる。木器は付け木が最も多く、他は板材である。明確なものは柱穴から出土した蘇民将来札で、3点重なって出土した。文字は「蘇民将来公子孫宅也」と記されている。同形の札に同文が書かれている。蘇民将来札は尼崎市で2例、宝塚市で1例、神戸市で1例、出石町で1例出土しており、県下では6遺跡目となるものである。

A-8区

南北5m、東西11mの調査区である。昨年度調査した土石流をこの地区でも検出している。調査区の東側約3分の1まで、北東方向から流れきっている。北西部はやや高くなっているよう、土石流が及んでいない。この土石流内に磨滅した土器片が含まれていたが、遺構は検出されなかった。また、北壁を精査したところ、噴砂が確認されている。

A-9区

神戸市との市境となる道路（市道15号線）の西側側溝（括幅）部分に設定した調査区である。昨年度調査したA-2区の南側になる。幅2m、南北方向に長さ25mを測る。ガス・水道管などで大きく搅乱を受けている。特に北側は全体的に手が加わっており、遺構面は残存していなかった。溝7条とピット4基を調査している。溝は耕土を埋土とするものもあり、近世の耕作痕と考えられる溝が多い。ただ、現在の地



図45 A-7区 SG01実測図

割りと異なった主軸をとり、埋土に耕土を含まない溝は中世の可能性もある。ピットは周辺の調査区と同じく中世の遺構と考えられるが、時期を確定できる遺物は出土していない。また、掘立柱建物跡として復原できるような配置をしていない。

B-12区

街路のコーナー部にあたり、68m²とやや広めの調査区である。洪水によって埋没した自然流路と溝・ピットを検出した。

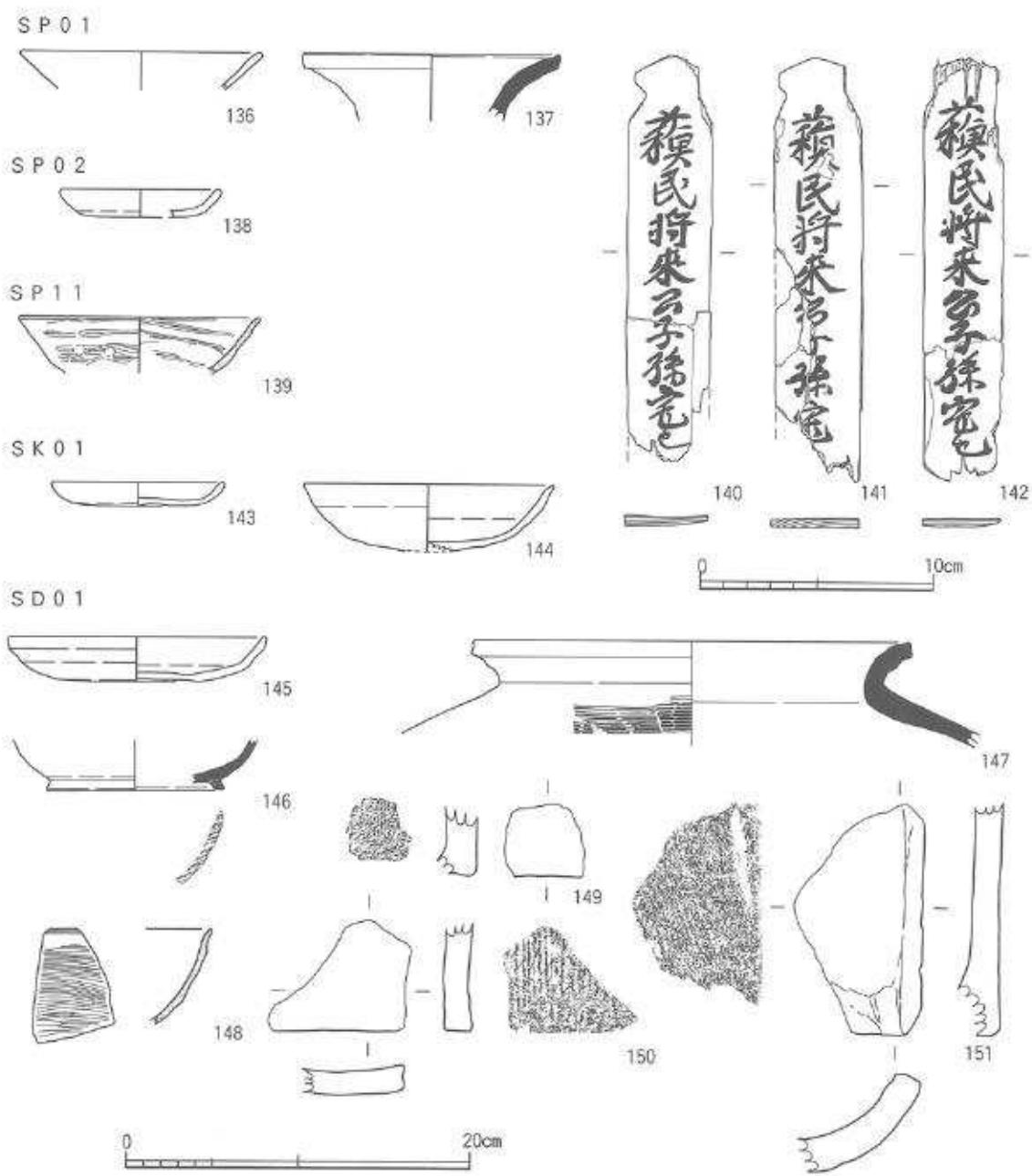


図46 A-7区 出土遺物実測図（1）

SD 01は北東から南西方向へ流れる幅約10m、深さ約1.8mの自然流路である。大別して2度の大きな洪水堆積によって埋没している。洪水の間には黒色シルトが堆積し、溝肩口のシルト層には弥生前期の土器が含まれている。したがって、流路は弥生前期以前から存在していたものと推測できる。土器量は多くなく、それ以外の遺物は出土していない。

SD 02はSD 01が埋没する最終段階に掘削された溝である。幅1~2mで北西—南東方向に延びている。SD 02も洪水に伴う粗砂によって埋没しており、埋土からは古式土師器が出土している。検出しているのは、調査区の北東隅部分の一部分だけであり、同時期と考えられる遺構も確認されていない。

全体的に遺物は少なく、ピットからも時期を明確にできる遺物は出土していない。しかし、各遺構の埋

S D 0 2

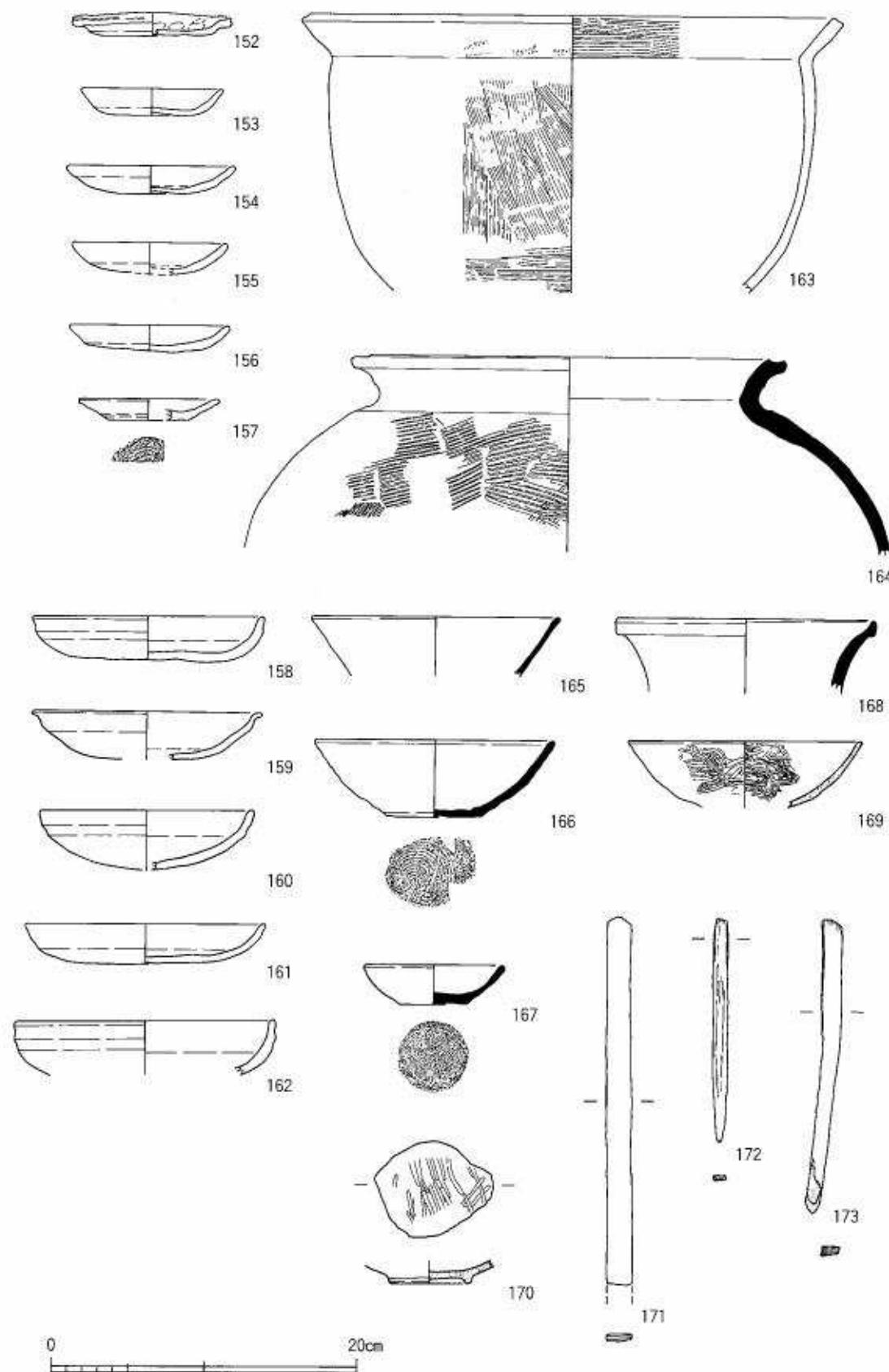


図47 A-7区 出土遺物実測図(2)

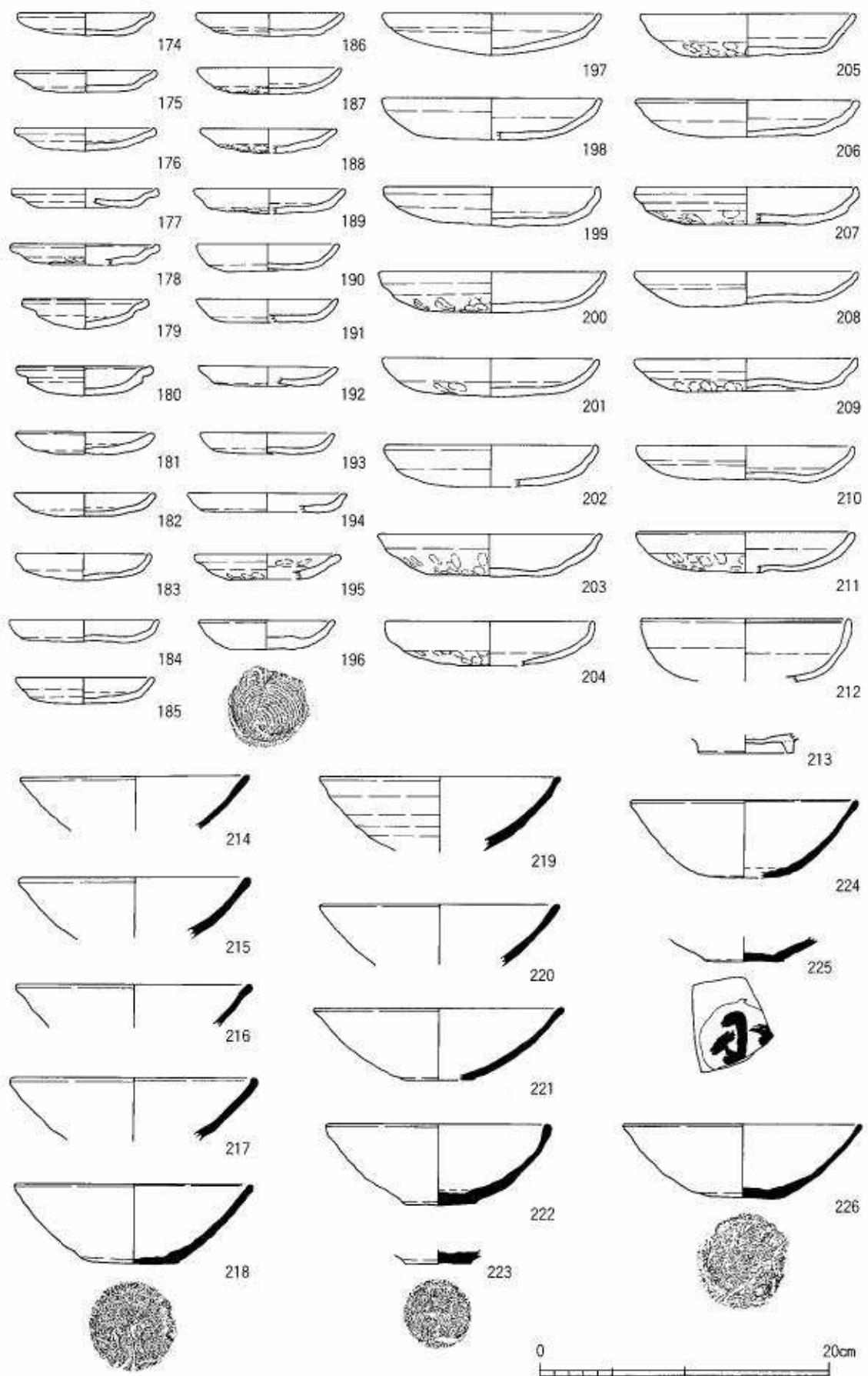


図48 A-7区 出土遺物実測図(3)

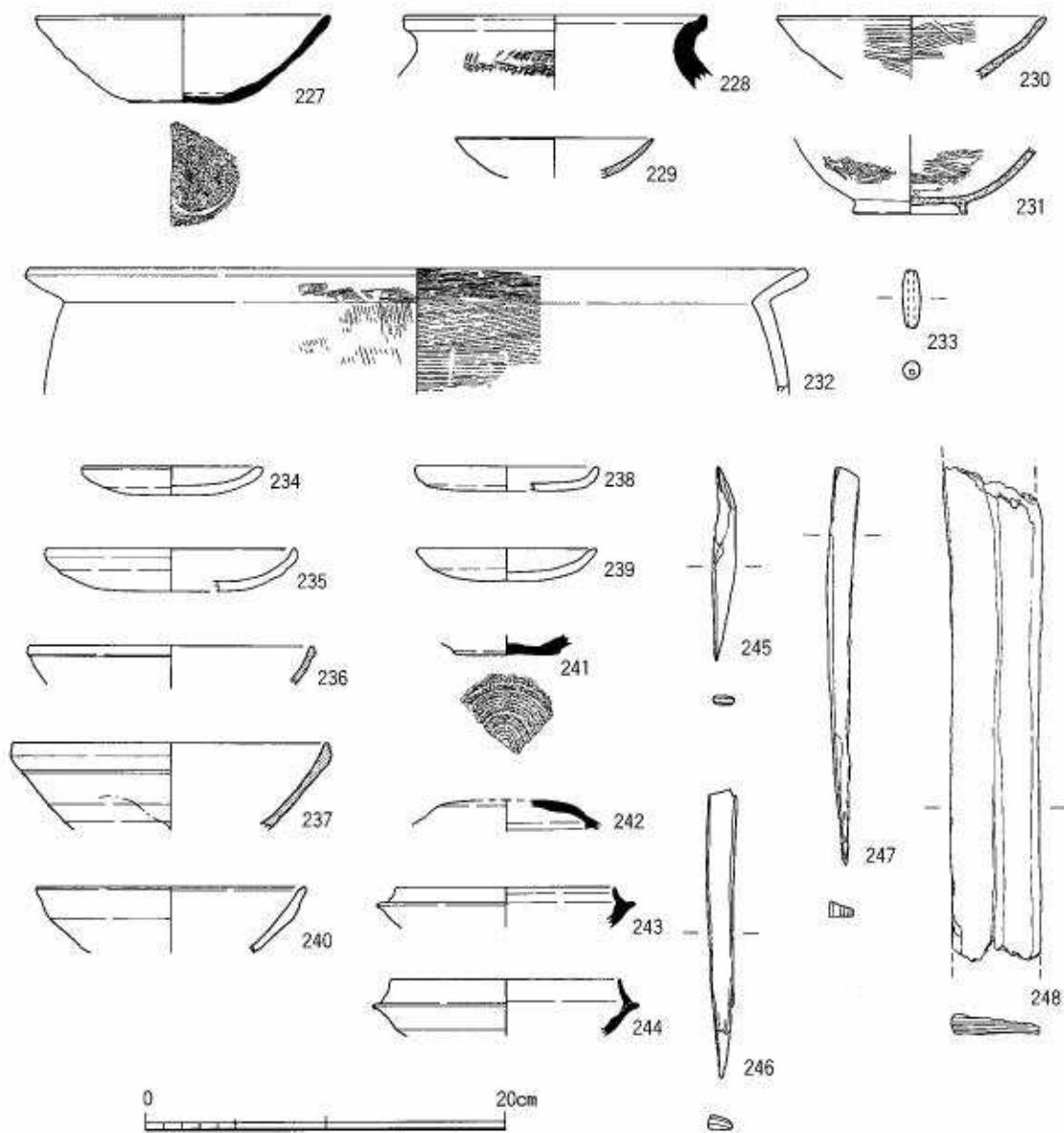


図49 A-7区 出土遺物実測図(4)

土は基本的にSD01の黒色シルト層と同一であると思われることから、調査区北西隅のSD03や南側のピットは弥生時代前期の可能性が高い。

図化した土器は弥生前期の土器に限られる。SD02出土の土器は壺4点と甕3点を図化している。他遺構に比べて壺の割合が高い。(259)は端部に沈線を施している。内面は(260)もヘラミガキで丁寧に仕上げている。(262)の内面には有機質が付着している。SD03・06出土の甕は大型品である。煤が付着している。甕は如意形口縁が主体である。沈線は7条(267)1条(269)3条(270)と奇数の沈線が施されている。黒斑が壺に多いのも特徴かもしれない。

B-13区

B-12区とは道路をはさんだ向かい側に位置している調査区である。やはり街路のコーナー部にあたるため、L字形の調査区で65m²の調査面積である。弥生時代から近代に至る各時期の遺構を検出している。

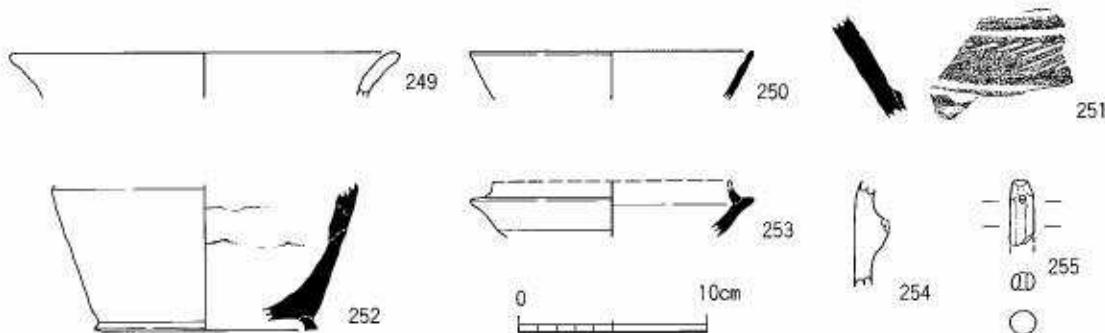


図50 A-9区 遺物実測図

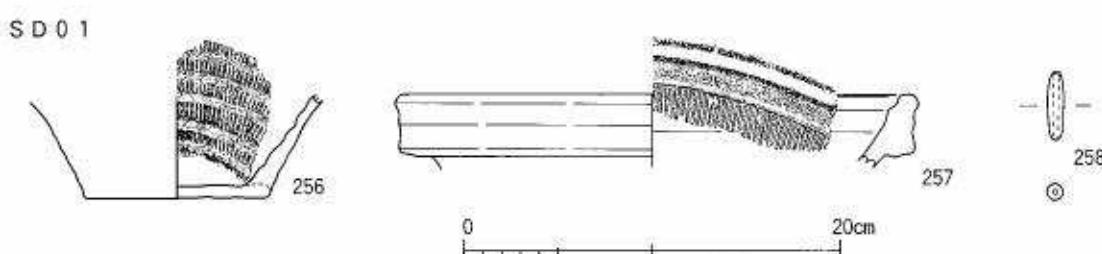


図51 A-10区 出土遺物実測図

近代の遺構は調査区西端を南北に走る S D01である。暗渠で、部分的にではあるが、人頭大の碟が並べられている。杭や胴木も僅かに残存している。暗渠の石材上に間地石を使用した石列が認められる。暗渠より新しい現在の道の地割りになってからの側溝の石組かと思われる。暗渠は近くで採取される石材を使っている。主に円碟を使っているが、角碟も含まれている。大型の石材は利用していない。胴木は腐朽しているが、元々部分的に碟も並べていたようである。

S D02は調査区南部を北西—南東方向に走る幅30cm前後の溝である。南下するにしたがって浅くなり、調査区南壁付近では肩も不明瞭になる。遺構の時期を特定する遺物は乏しいが、奈良～平安時代の遺物が出土する SK01より新しく、S D01に切られていることから、鎌倉～近世の遺構と推測される。埋土から古墳時代末の須恵器壺蓋（276）が出土している。つまみ部は欠損しているが、かえりは僅かに残っているタイプである。六条遺跡では出土遺物の少ない時期の遺物である。また、倒れた状態で杭（277）が出土している。径5cmの丸杭で先は削り出している。

SK01は最大長3.5mの不定形な土坑である。S D01・02によって西半部が失われており、全体の形状は明確でない。奈良～平安の土器が出土している。図化したのは須恵器壺Bの底部（271）である。底部はロクロケズリのちナデで仕上げている。やや外へ肥厚する高台を付けている。

SK02は不定円形の深い土坑である。近世の遺構で、図化したのは円板（面子）（272）で備前焼搖鉢の転用で内面に彫り目が残っている。

弥生時代前期の遺構は溝2条である。S D03とS D04で、平行して南北方向に延びる幅約1～1.5mの溝で、調査区南側で他の遺構に切られて残存していない。出土遺物の量は少なく、磨滅を受けている。

B-12区で検出された自然流路はB-13区では検出されていないことから、市道部分で流路の方向を変えているものと思われる。

（渡辺・川村）

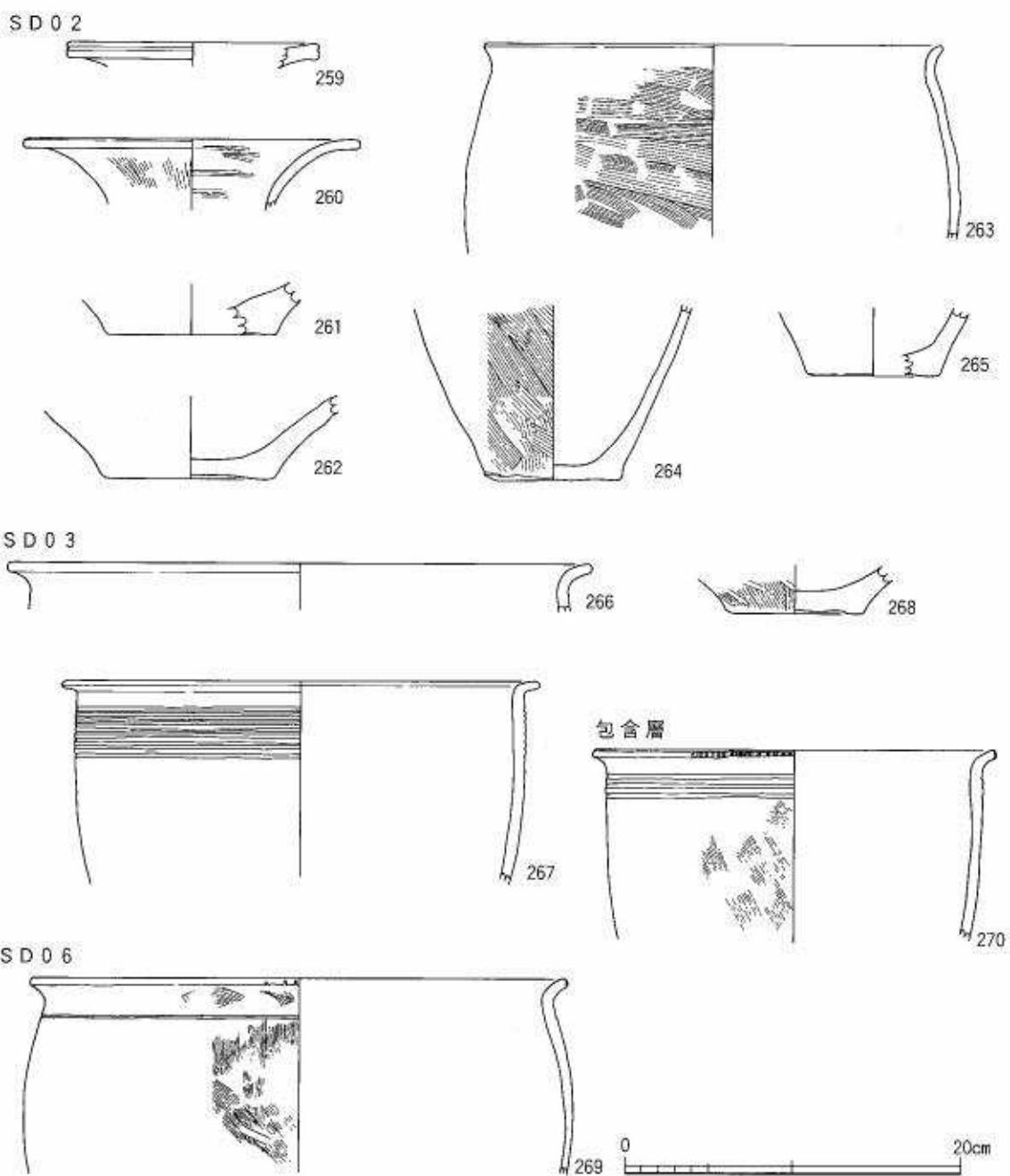


図52 B-12区 出土遺物実測図

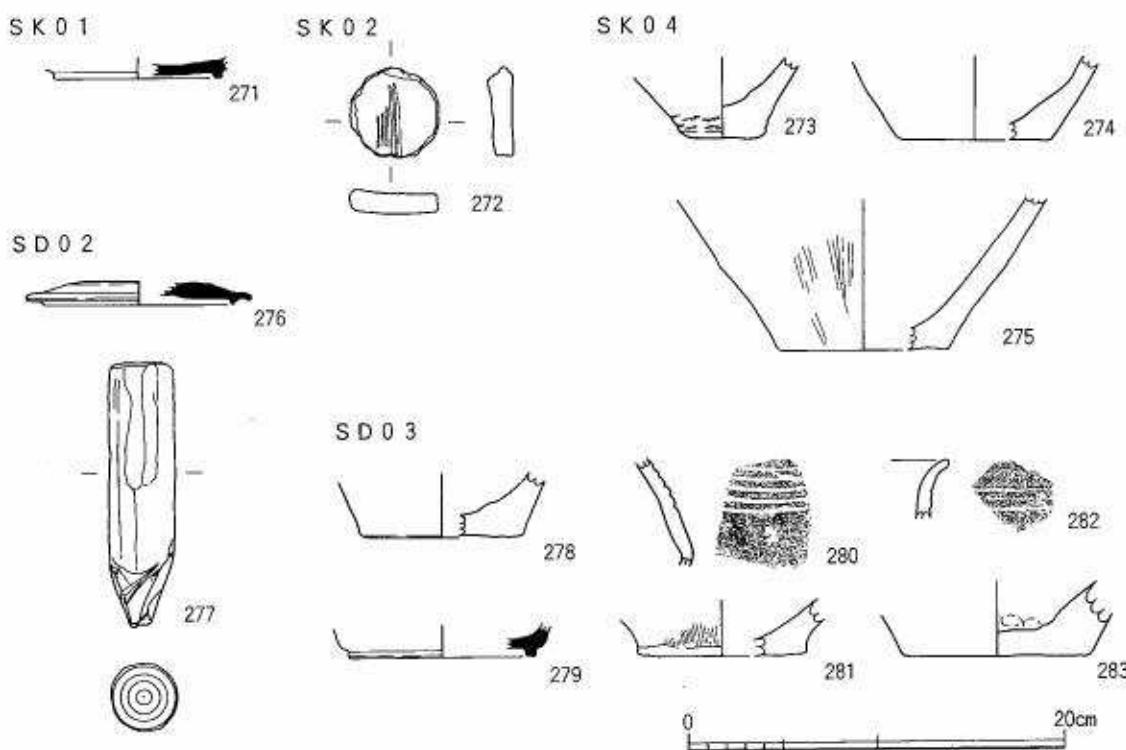


図53 B-13区 出土遺物実測図

(3) 第3回調査の結果

調査番号 2000238

6ヶ所について本発掘調査を実施した。A地区は3ヶ所、B・C・D地区は各1ヶ所の調査である。

A-10区

A地区の東端部にあたる 6×6 mの調査区である。上から第1層盛土・第2層旧耕作土・第3層灰色粗砂・第4層暗灰色粗砂・第5層褐色粗砂・第6層暗灰色粗砂・第7層褐色粗砂の順に堆積する。第4層には12~13世紀の遺物(須恵器・土師器)が入る。

調査区の南半部には粗砂で埋まった流路(土石流によるものか)がある。第4層の下層で遺構検出を行ったが、明確な遺構は認められなかった。

A-11区

A地区の南東部にある 4×10 mの調査区である。上から第1層盛土・第2層旧耕作土・第3層黄灰粗砂・第4層暗灰色粗砂・第5層灰色粗砂・第6層暗灰色粗砂・第7層灰色粗砂・第8層灰黒色粗砂・第9層褐色粗砂の順に堆積する。

堆積状況から旧流路の中であると判断できる。第6層から中世の遺物が少量出土したのみである。

A-12区

A地区の北東部にある 3×10 mの調査区である。上から第1層盛土・第2層旧耕作土・第3層黄褐粗砂・第4層灰色粗砂・第5層暗褐色中砂・第6層灰色砂礫・第7層暗灰色粗砂・第8層褐色粗砂の順に堆積する。

堆積状況から旧流路の中であると判断できる。第6層から瓦器碗が、第7層から須恵器小片・布目瓦小片が出土している。

B-14区

B地区の中央部にある $5 \times 12\text{m}$ の調査区である。上から第1層盛土・第2層旧耕作土・第3層黒褐色粗砂・第4層褐色粗砂の順に堆積する。

調査区の東端部には流路があり、砂・砂礫で埋没する。調査区中央部は耕作土直下が安定した遺構面となっており、第3層上面で遺構検出を行った。不整形の土坑2基を検出したが、形状・埋没状況から人為的な遺構ではなく、風倒木であると判断する。このうち風倒木1の黒色シルト内から弥生時代前期新段階の土器の小片が出土している。

C-14区

C地区の西端部にあたる $1 \times 4\text{ m}$ の調査区である。上から第1層盛土・第2層盛土・第3層黄褐色粗砂・第4層黒褐色シルト・第5層灰色粗砂の順に堆積する。第5層上面で遺構検出をおこなったが、遺構は検出されず、遺物も出土していない。

D-1区

D地区の東端部にある $2 \times 8\text{ m}$ の調査区である。上から第1層盛土・第2層旧耕作土・第3層暗褐色粗砂・第4層暗灰色粗砂・第5層淡灰色粗砂・第6層黒色シルト・第7層黒褐色粗砂・第8層褐色粗砂の順に堆積する。

土層は北から南に向けて傾斜しており、調査区南端で大きく落ち込む。この落ち込みは旧流路によるものと思われる。

遺物は第4層から須恵器の小片が出土している。

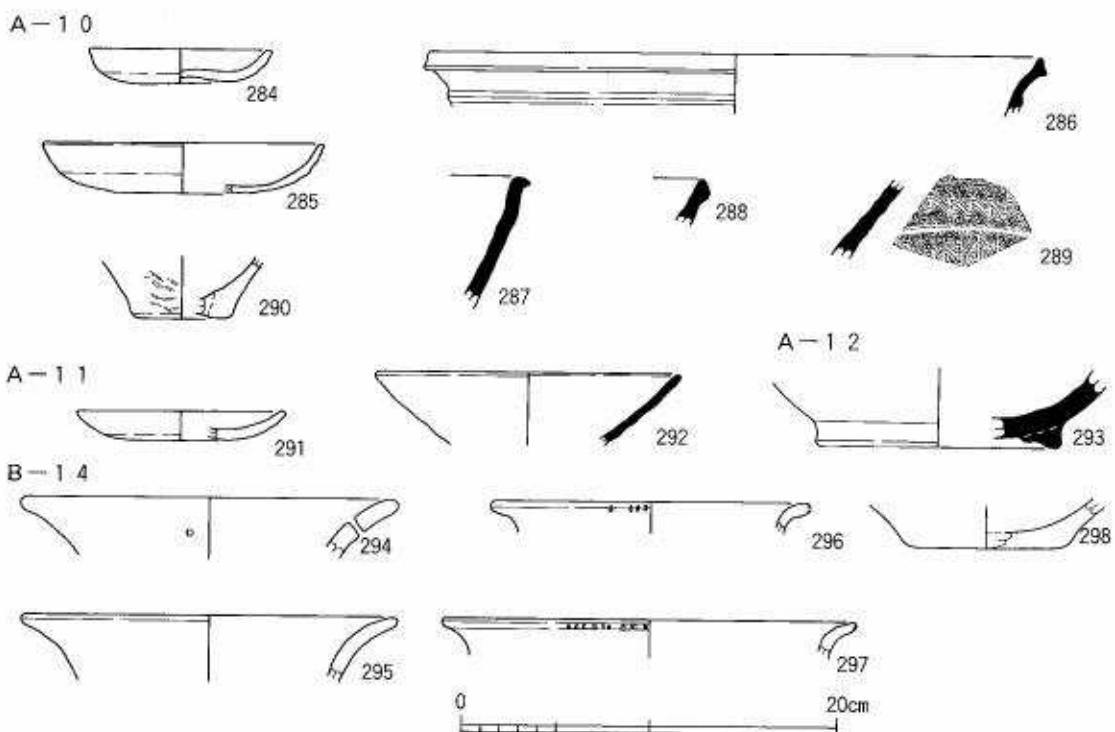


図54 A-10~12区・B-14区 出土遺物実測図

小 結

今回の調査ではA地区で旧流路、B地区で風倒木、D地区で流路の肩を検出した。A地区は西側の微高地上に遺構がのり、今回検出した流路が東端を区切るのであろう。

B地区は今回調査した地区のさらに東側（B-7区）において弥生時代前期の周溝墓が調査されており、この付近の弥生時代前期の集落が存在することは確実である。今回B-14区では遺物が出土したのみで、明確な遺構は検出できなかったが、近接した場所に遺構が存在することが予想できる。

C・D地区については調査範囲が狭かったために全体の状況は明らかではないが、今回調査した個所は微高地の縁辺部にあたるため遺構が検出できなかったと思われる。

(多賀)

(4) 第4回調査の結果

調査番号 2000314

14ヶ所について本発掘調査を実施した。内訳はA地区7ヶ所、B地区3ヶ所、C地区4ヶ所の調査である。基本土層は同じである。調査方法等も従前の調査を踏襲している。

A-13区

L字形の平面形で神戸市との市境に位置している。南北部分はA-2・6区と同じ調査結果で攪乱が多く、近代の遺構しか確認されていない。東西部分では東半で洪水に伴う土石流が確認されている。土石流の南側で遺構が検出されている。土坑と溝で、ともに性格は明らかでない。

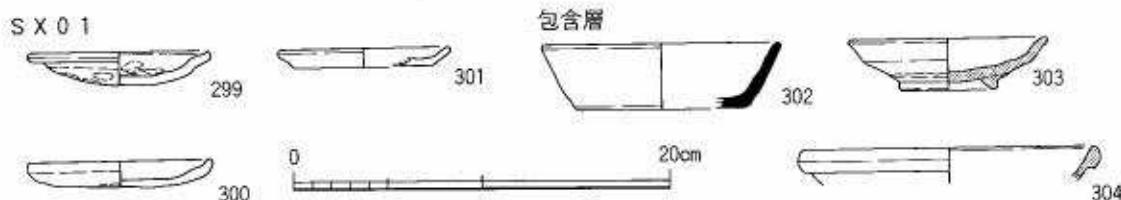


図55 A-13区 出土遺物実測図

A-14区

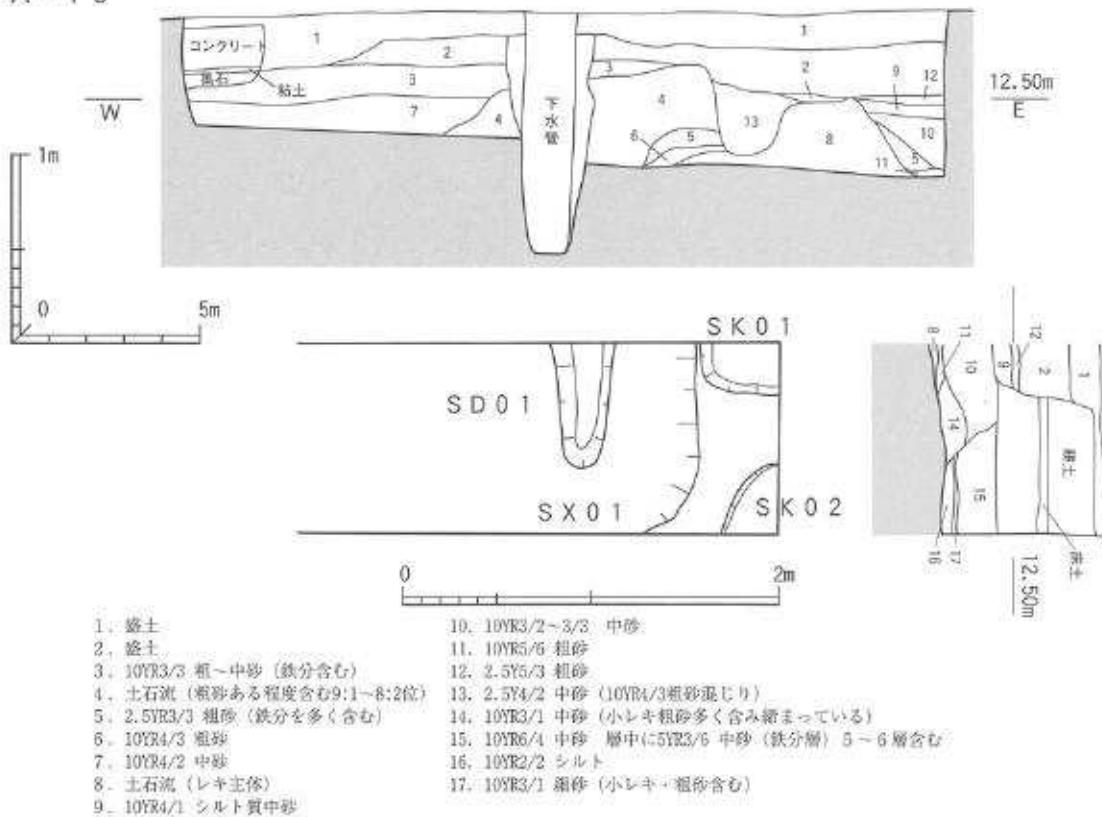
A-7区の西側に位置しており、同様の園池遺構が確認された。3面の遺構面が確認されている。

第1面の遺構は水田面かと思われる。足跡が多数検出されている。

第2面の遺構は、溝とピットで、ピットには柱根が残っているものもあり、確實に柱穴であるが、調査区内で掘立柱建物跡として復原することはできなかった。

第3面では園池遺構を検出している。A-7区の石組とは直線的にはならず弧状を描く外形ラインのようである。弧でも正円ではなく、橢円形や瓢箪形などの平面形態になるようである。池の南北方向の断面は皿状だが、西側にいくほど斜度が強くなっていく。平面形態もすさまじくことから、池の排水口に近い位置に当たるものと思われる。今回の調査区では12mの長さを調査している。端部の石はやや大きめの石が使われている。池の東部分で石組の溝を検出している。遺水と考えられる遺構である。池の石材は古生層の砾で花崗閃綠岩や泥岩などの円砾を使用している。花崗岩も少量使用されているが、占める割合は低い。ただ、遺水と考えている遺構部分は花崗岩主体で構築されている。出土遺物はA-7区と同様で、土師器・須恵器・瓦器・白磁・木器・石器がある。前代の古代の遺物も認められる。石器(331)は鉄器の未製品かと思われるもので、丸柄の潜り孔がないものであろう。

A-13



A-14 第1面

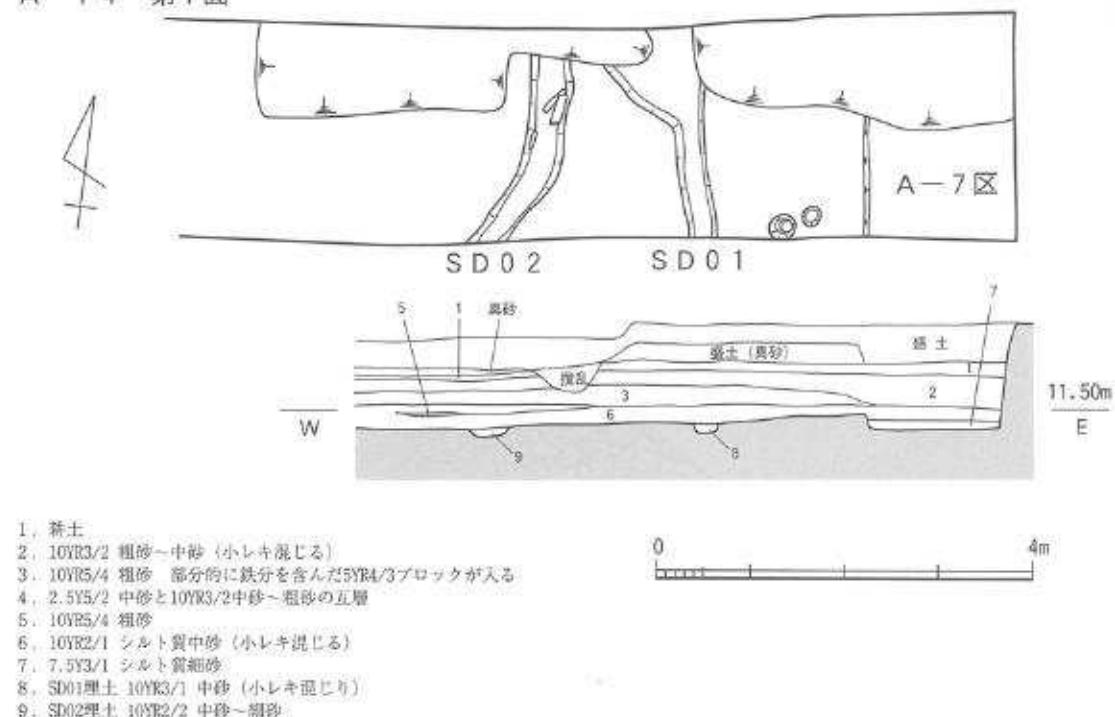


図56 A-13・14区 第1面 実測図

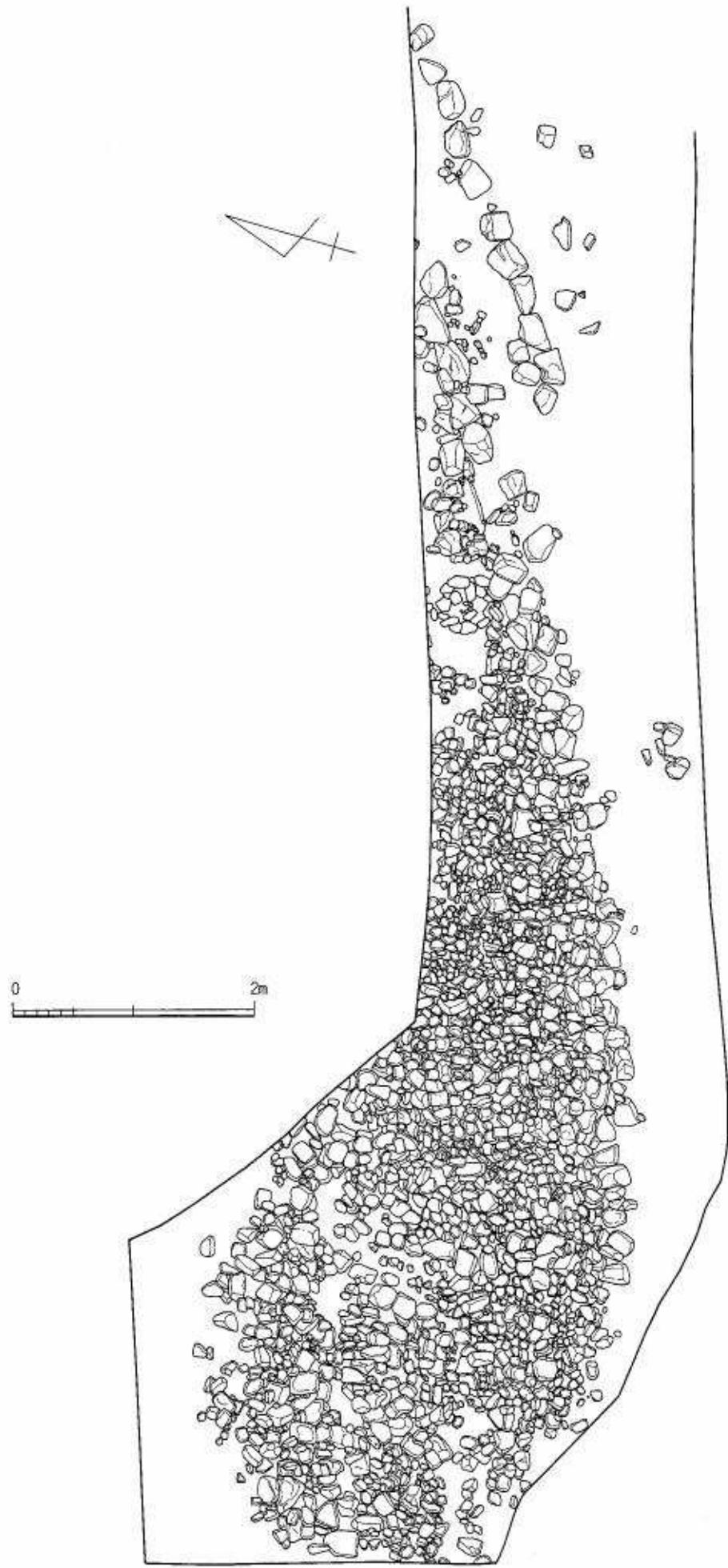


図57 A-14区 第2面 実測図

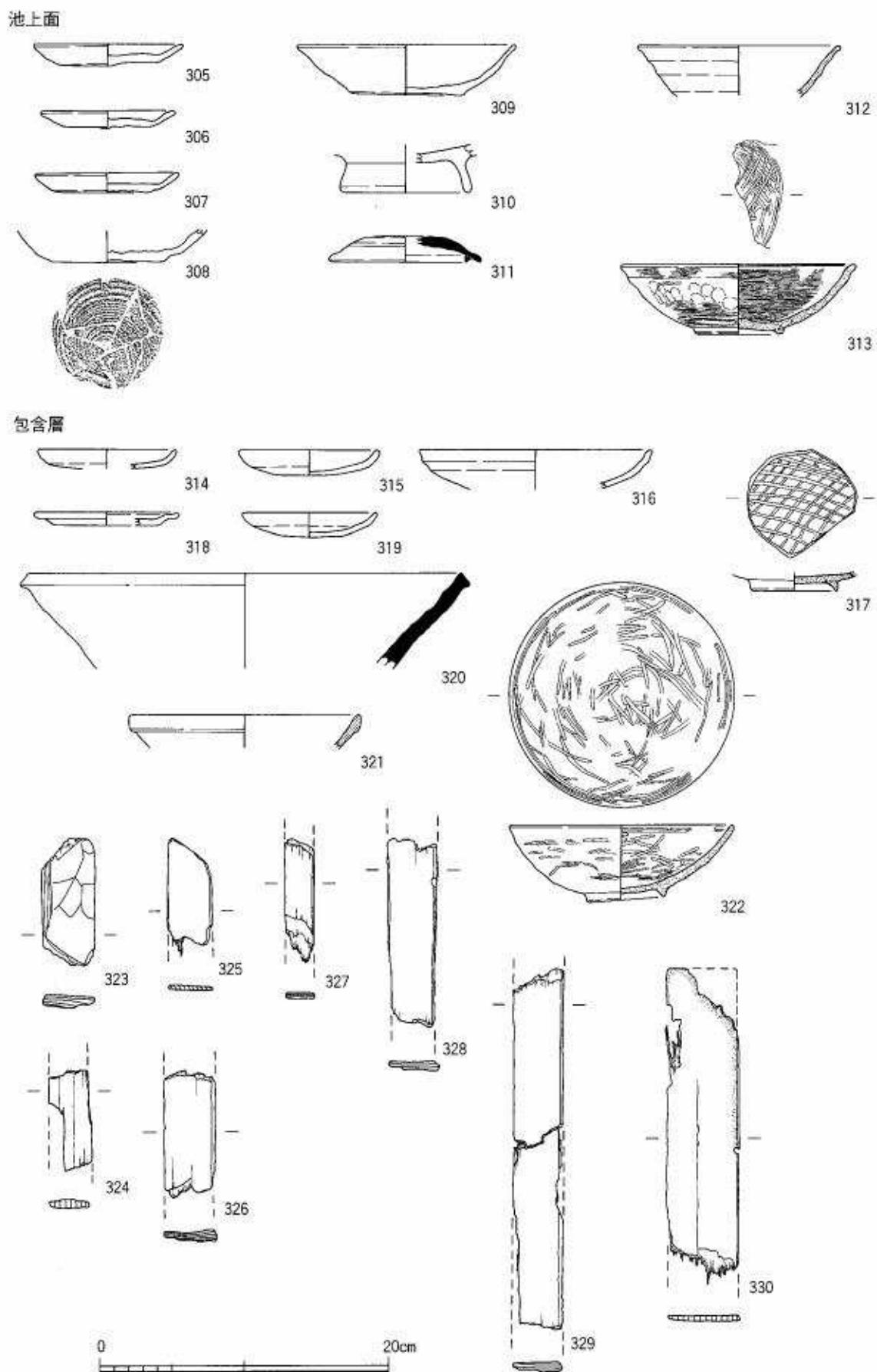


図58 A-14区 出土遺物実測図



図59 A-14区 出土石製品

A-15~19区

6地点は街路部分の擁壁工事に伴う部分で、掘削部分について立会調査を実施したが、どの調査区でも遺構は確認されなかった。遺構面まで達していないか擾乱によって削平されているかである。西側のA-18・19区は擾乱が激しく、遺構は残存しないものと思われる。

B-15区

市道清水線の東側に位置している。全体的には2面の遺構を確認しているが、面として全体に存在するわけではない。下面遺構は東側だけに限られて

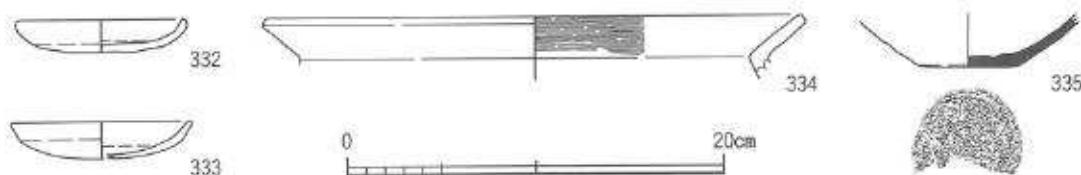


図60 A-16区 出土遺物実測図

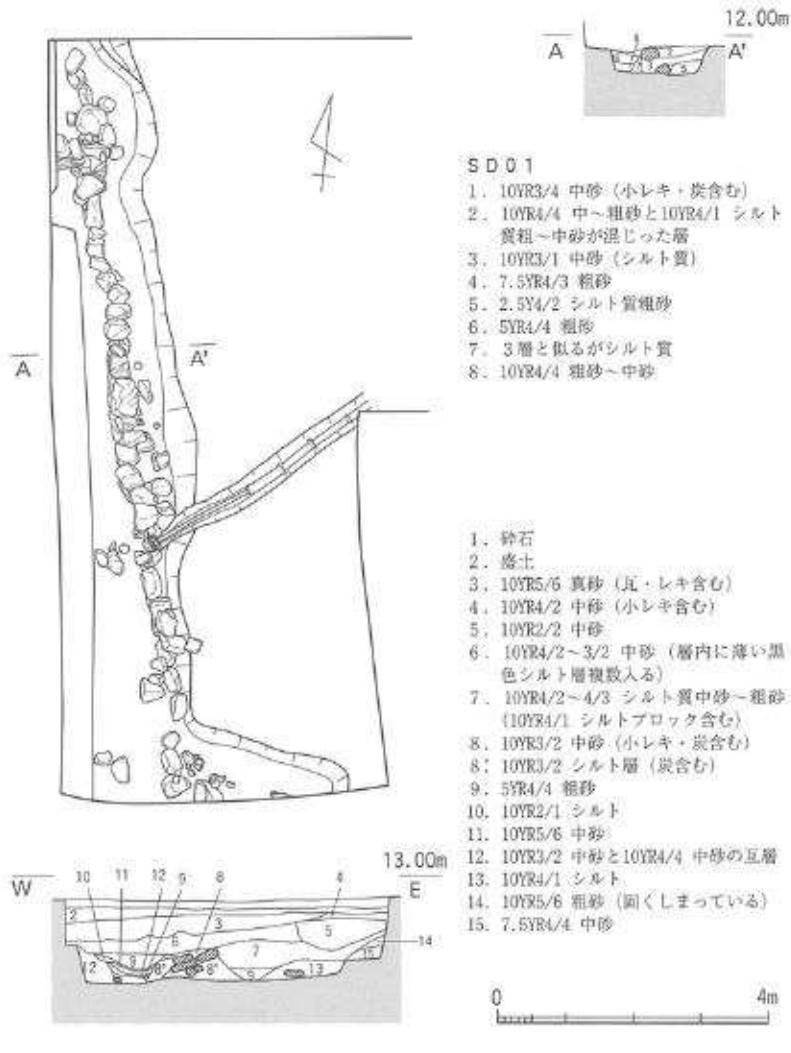


図61 B-15区 実測図

いる。上面遺構は暗渠とそれより古い溝である。暗渠は花崗岩を主に利用して石列を築いている。一部河原石も使われている。人頭大前後を主体にそれ以上の大型の石材が使われている。現在の道とは僅かに東へ3°主軸がずれている。遺物は土師器と陶磁器が出土している。この溝に注ぎ込むような暗渠も存在する。直交せず、斜め方向に入っている。竹と土管（常滑焼）を使っており、当初は土管で、先だけ竹に変えたもの

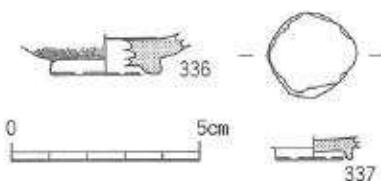


図62 B-15区 出土遺物

S D O 1

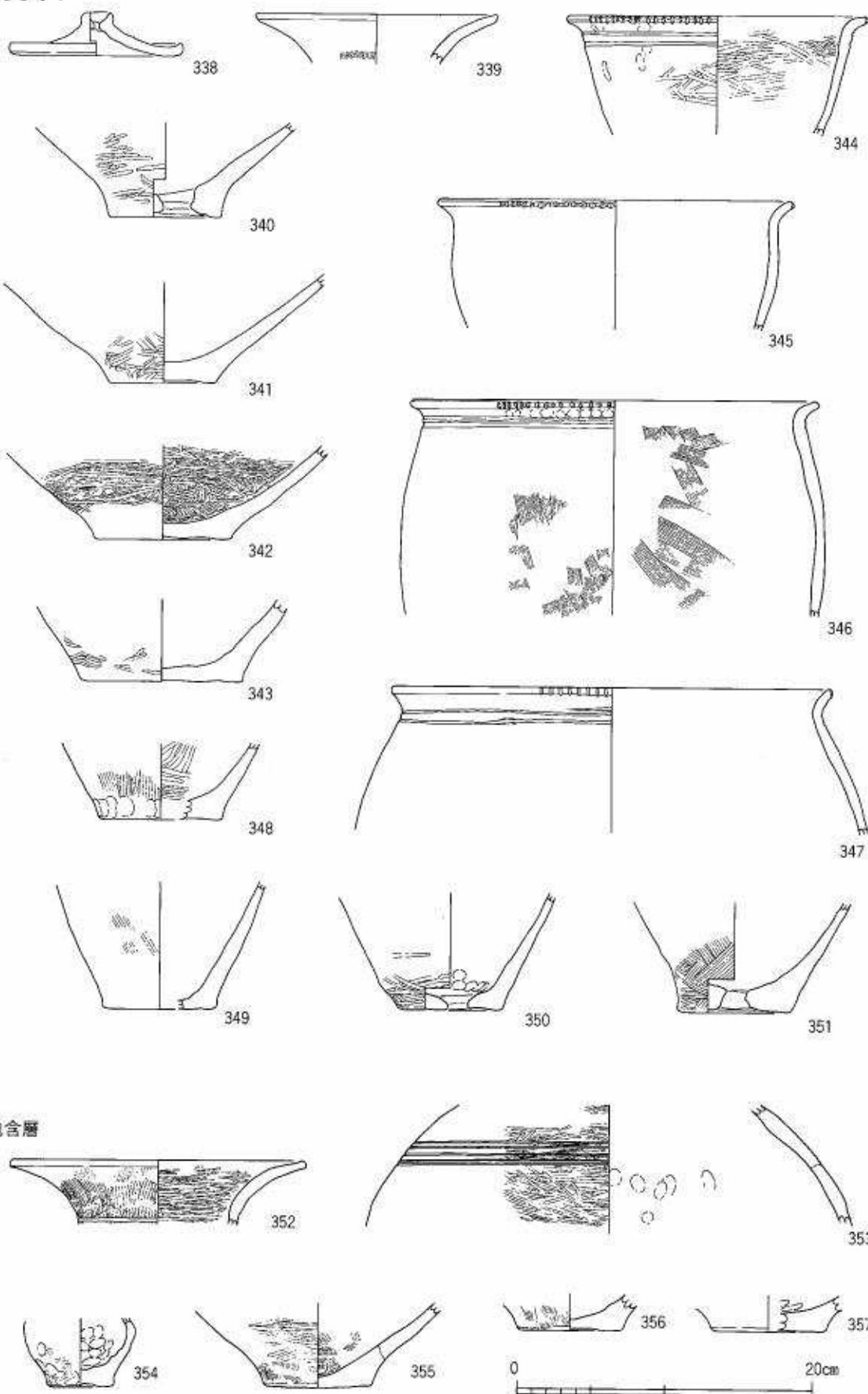


図63 B-16区 出土遺物実測図 (1)

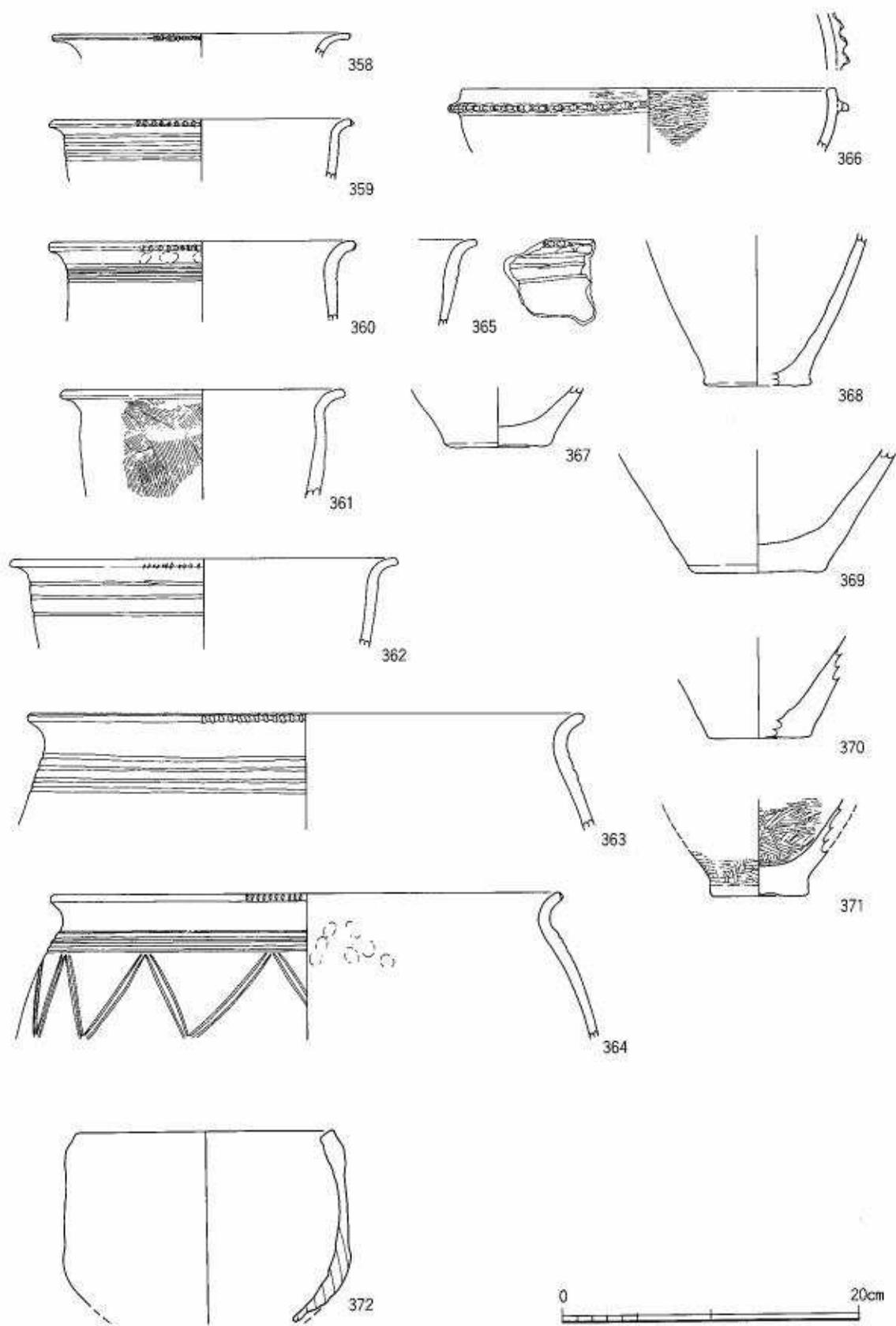


図64 B-16区 出土遺物実測図（2）

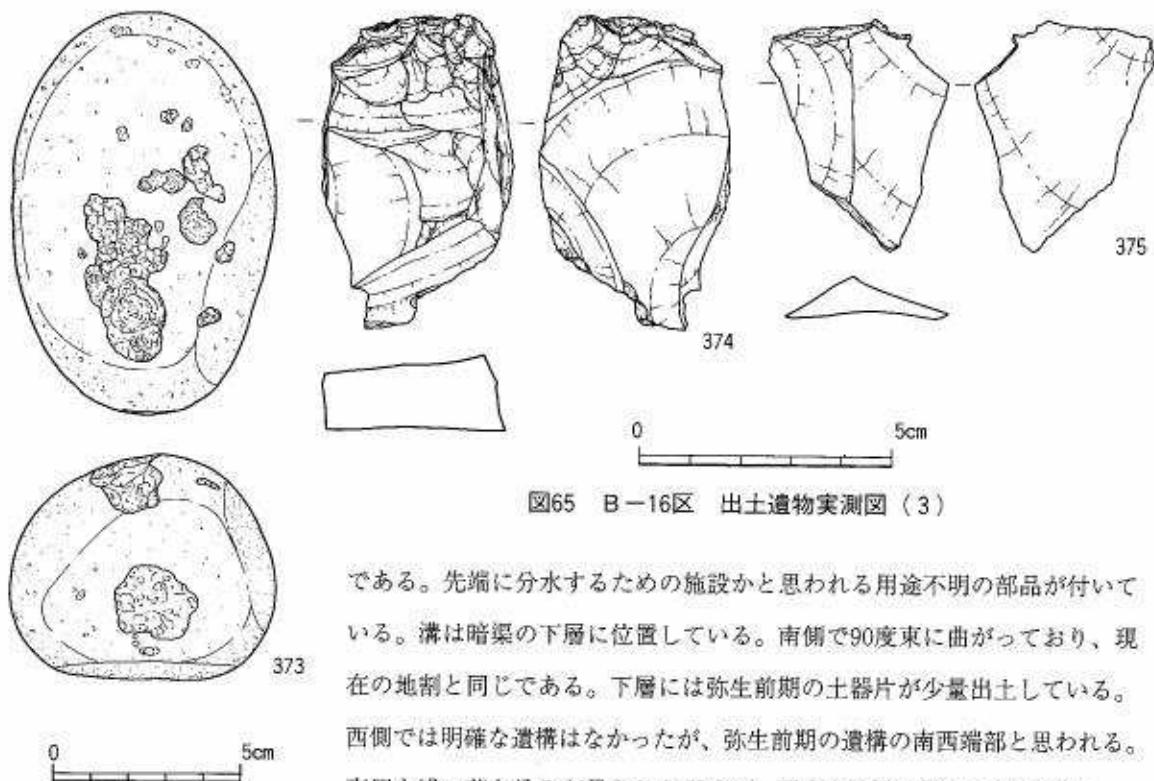


図65 B-16区 出土遺物実測図(3)

である。先端に分水するための施設かと思われる用途不明の部品が付いている。溝は暗渠の下層に位置している。南側で90度東に曲がっており、現在の地割と同じである。下層には弥生前期の土器片が少量出土している。西側では明確な遺構はなかったが、弥生前期の遺構の南西端部と思われる。東側も浅い落ち込みが見られただけで、明瞭な遺構は検出していない。

B-16区

弥生前期の遺構が検出されたB-7区の東側にあたる調査区である。調査区東半は建物基礎などによつて遺構面は残っていないかった。2面の遺構面を調査している。上面は中世後半の遺構で、深い溝を確認している。南北方向の溝で幅0.2~0.4m、深さ0.15mを測る。同じ規模の溝が2条平行して走っている。下面の遺構は弥生前期のものである。幅2.6~3.2m、深さ0.5~0.8mを測る溝で、調査区内で曲折している。平面形がし字形になる溝で、B-7区の溝と関連ある性格の溝であろう。屈曲していることからも人工の溝で、多量の弥生土器などが出土している。方形周溝墓の可能性がある。出土遺物には弥生土器（壺・壺・瓶・蓋）、縄文土器（突帯文）、木器、石器がある。瓶が多いのが特徴的である。ミニチュア壺(354)もある。壺の口縁部は如意形が多い。木器は木製壺で出土例の少ない資料である。残存状態は悪い。

B-17区

B-16区の東側の調査区であるが、弥生時代の遺構面は検出されなかった。B区の遺構の広がりはこの調査区までと考えられる。

C-15~17区

調査面積はやや広い調査区である。成果はほぼ同じで、厚い洪水堆積と旧河道を調査している。幅が広いものもある。磨滅した土師器とサヌカイトが出土している。

C-18区

芦屋川に近い位置の調査区で、芦屋川の長期間にわたる洪水堆積状況が確認されている。上面で近世の土壤化した面を精査したが、遺構は認められなかった。

(渡辺)

(5) 第5回調査の結果

調査番号 2000347

六条遺跡周辺には、阪神・淡路大震災のあと、震災復興事業として土地区画整理事業が計画され、それに先立つ遺跡の確認調査が平成9年度以降実施され、平成11年度までに遺跡の範囲、性格等についてほぼ把握されている。また、事業に伴って遺跡が損壊を受ける部分の本発掘調査も随時実施している。

このたび、東川右岸のいわゆるA地区のうち、遺跡北西部のA-20・21・22区と、遺跡中央西寄りのA-23区とよぶ2箇所において本発掘調査を実施することとなった。調査は、土地の造成に伴うものである。

また、この本発掘調査期間中に10・12街区における擁壁設置工事に伴う工事立会も行った。

本発掘調査箇所は、4街区の南西部（A-20・21・22区）と9街区の南部（A-23区）である。遺構面の上までの機械掘削を行い、人力による遺物包含層の掘削、遺構面の精査等を行った。必要に応じて、写真、図面等の諸記録の作成をし、埋め戻しを行って調査を終了した。

工事立会部分については、機械による掘削時に、隨時、土層堆積状況や遺構、遺物の有無等を確認した。

A-20・A-21・A-22区の遺構

調査は西から順番に、3箇所に分けて実施した。A-20区は139m²、A-21区は235m²、A-22区は165m²で、調査面積の合計は539m²を測る。

盛土あるいは搅乱土の下の基本土層は、上から順に以下のとおりで、これをさらに図66のとおり細分した。

I層：近世以降の水田耕作土 II層：中世遺構面から近世水田までの堆積層

III層：中世以前の堆積層

III層上面において、11世紀末の遺構の切り込みが認められた。この中世遺構面は、わずかに南に低くなる傾斜をもちながら広がるが、後世の水田造成（I層）に伴う削平により、A-21・22区の調査区南半では遺構面が残存していない。なお、A-20区においては本来の生活面より下層の黒色シルト（III-12層）上面で遺構の検出を行った。

検出された遺構は、掘立柱建物1棟、土坑7基、溝1条、柱穴、畑と思われる浅く細い溝などであり、すべて中世のものである。遺構にはわずかに重複が見られるものの、土器の示す時期幅は狭く、11世紀末頃の限定された時期のものといえる。

掘立柱建物は、東西4間（9.6m）、南北4間（8.2m）の規模をもつ縦柱建物であるが、一部柱筋の通らない場所がある。東西方向の柱間は均等ではなく、最も東がやや狭く約2.0m、他は約2.5mである。南北方向の柱間はほぼ均等である。柱掘方の直径の平均は28.6cm、深さの平均は27.5cmである。

土坑のうち、SK02、SK04からは比較的多くの土器が出土した。ともに掘立柱建物と重複する位置にあるが、SK04については建物南東隅の屋内土坑の可能性もある。

掘立柱建物の東に南北方向の溝が1条あり、それ以東には柱穴2基以外に顕著な遺構はなく、平行あるいは直行する形で浅く細い溝が多数検出された。畑等の耕作地として利用されていたことを示すものであろう。

III層上面を面的に調査した以外に、これより下層にみられた黒色シルト（III-12層）上面についても、部分的にはあるが面的な精査を実施した。これはA-20・22区のほぼ全域にみられ、起伏に富んだ地表面であったこと、遺構が認められないことが確認された。さらにいくつかの場所で深掘りを実施し、III-12層に7世紀の土器が含まれることを確認した。

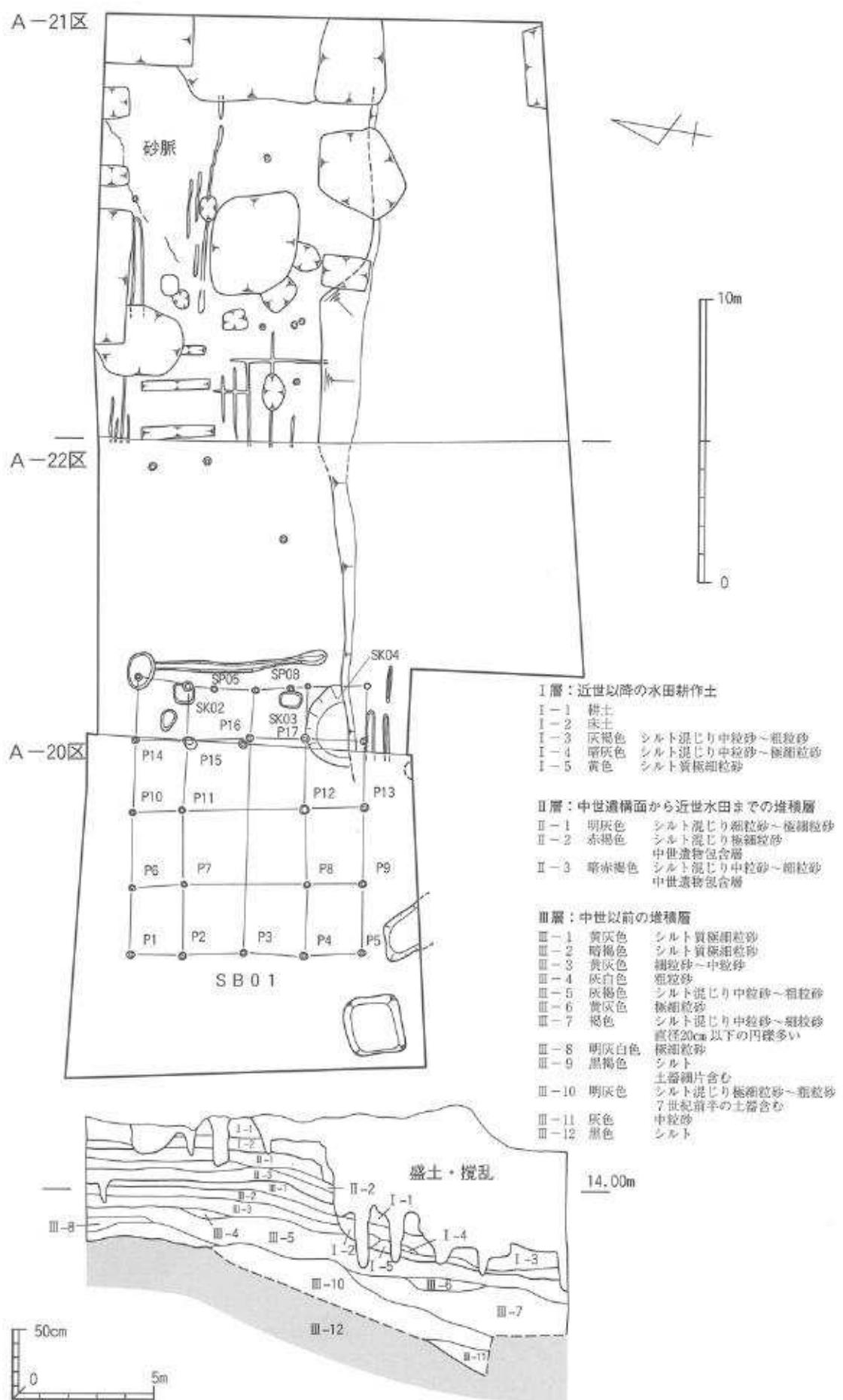


図66 A-20~22区 平面図・土層図

総じて、東川に近接するこの地区は、当該河川の氾濫を頻繁に受け、その供給する洪水砂によって、中世には地形的にはほぼ平坦化し、集落が営まれるようになった。A-20～A22区は、西半に居住地、東半に耕作地をもつ单一の屋敷地の一部にあたることが判明した。

A-23区の遺構

調査区は道路部分とその南に接する宅地部分に分かれる。調査面積131m²である。

盛土、搅乱土の下の基本土層は、上から順に以下のとおりで、これをさらに細分した。

I層：中世以降の堆積層 II層：中世およびそれ以前の堆積層

道路部分は、ガス管付設の際等に搅乱されており、壁面で土層の堆積状況が確認できるほか、辛うじて深い柱穴が1基残存しているのみであった。また、宅地部分では、調査直前にあった住居の基礎工事が遺構面より深く及んでいる。

中世遺構面のうち、この搅乱を免れたのは、道路部分東半と宅地部分の南東部である。これは、中世の地表面が南東方向を流れる東川に向かって低くなる傾斜をもつことによる。

この斜面には、遺物を含む灰色～黒色のシルトが数層堆積しており、10世紀から12世紀頃の遺物を含んでいる。II-1層上面（第1面）とII-6層上面（第2面）において精査を行った。10世紀の遺物は少量であり、第1面は12世紀頃、第2面が11世紀末のものを主体とするようである。前者では柱穴が1基検出されたのみで、後者においては傾斜地形の肩付近に人頭大以下の礫を据えて、溝を構築していることが判明した。

溝は、宅地部分の東辺中央付近から認められ、しだいに深さを増しながら調査区南東隅近くで屈曲し、

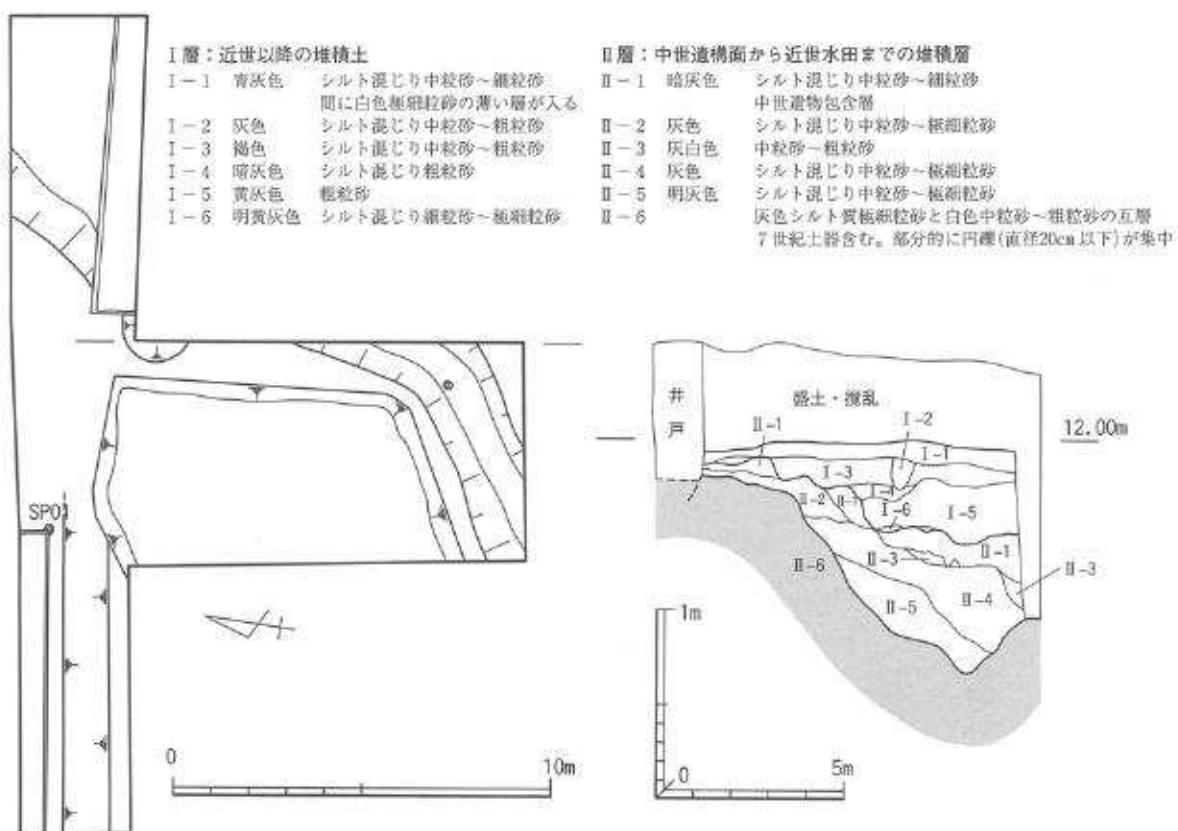


図67 A-23区 平面図・土層図

南西隅から調査区外へ延びる。溝の幅は約200cm、深さ約50cmで、断面形は逆台形を呈している。溝は礫を積み上げて構築され、斜面の低い南側が重点的に施工されているようである。なお、溝内特に東半において礫が多量に認められたため、人為的に埋められた可能性がある。この礫の中には地山である粗粒砂層に食い込むようなものもあったため、本来溝の底にも礫が敷かれていた可能性がある。

溝の構築に使われたこれらの礫は、花崗岩をはじめとする数種からなるが、東川の河原あるいは地山であるⅡ-6層内に含まれるような礫を利用したものと思われる。

この溝は、その上流側が今回の道路部分の調査や前回の調査で検出されていないため、詳細が不明であるが、その方向性からみて、東川に何らかの方法で取り付いていたものと思われる。下流側すなわち西側においては、前回の調査で検出された溝に連続し、密に敷き詰められた礫敷き部分付近まで達していることが分かっている。



図68 A-23区 実測図

これらのことから、溝末端の礫敷きは「洲浜」であり、おそらくその南調査区外に「園池」があり、石組みの溝はこれに引水するための「造水」であった蓋然性が最も高く、全体として平安時代後半の「池庭」を構成するものと思われる。

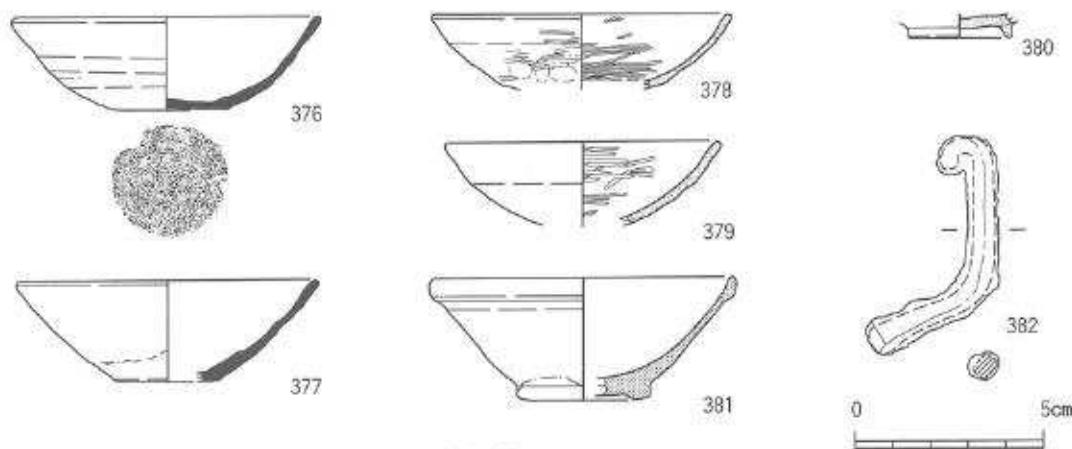
住居に南面する場所に築庭するのが一般的なため、今回の調査区で、居住に関わる遺構が検出される可能性は高かったのだが、先述したように後世の大きな攪乱を受けているため、詳細については明らかにできなかった。ただし、唯一検出された柱穴からは11世紀末頃の東播系須恵器の鉢が出土したため、溝との時期的な同一性が確認でき、先の想定が妥当であることを示している。

また、A-20~22区と同様、中世生活面より下層のII-6層からは7世紀の土器が出土した。

10・12街区擁壁工事立会

幅約2m、総延長約50mにわたる掘削箇所の観察の結果、ほぼすべての箇所において、黒色シルトの数層の堆積が認められたが、それ以外は粗粒の河川性の堆積物のみがみられ、居住に不適な条件にあったことを示す。シルト層上面で水田畦畔や柱穴などの遺構は検出されなかった。遺物は、12街区擁壁の黒色シルト層上面より弥生時代と思われる土器の小片が数点出土したのみである。

SB 01



SP 05



SP 08



SK 02

SK 04

包含層

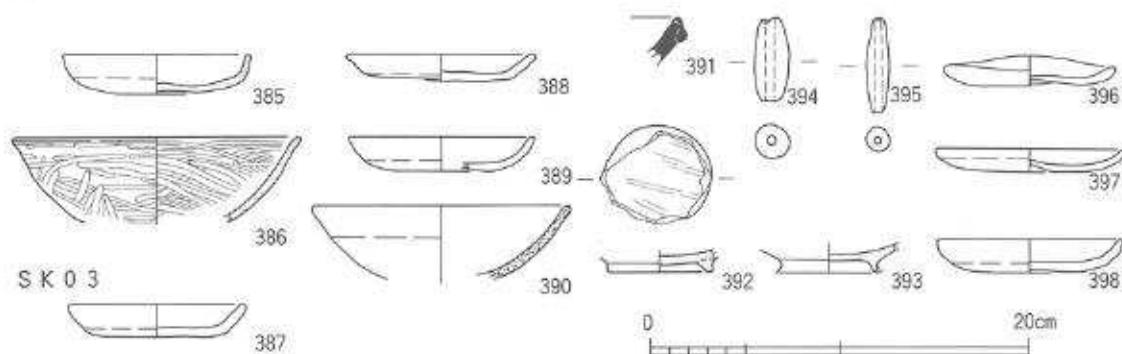


図69 A-20~22区 出土遺物実測図(1)

A-20・A-21・A-22区出土遺物

S B01・S P05・S P08

376・378・380はS B01のP17から、377は同P07から、379・381は同P05から出土したものである。383・384はそれぞれS P05、S P08から出土し、この柱穴もS B01を構成する可能性が高く、一括して報告する。

須恵器椀は、376は体部が底部付近で丸みをもつが、他のものは直線的な体部と小さな底部をもつ。後者は第II期第2段階（森田1995）の特徴を示すが、376・383が底部内面にわずかな段をもつなど古相をとどめている。

瓦器椀378・379は、口縁部がわずかに外反し、端部を丸くおさめる。体部外面はユビオサエが目立ち、口縁部を中心にヘラミガキが施される。380は底部の破片であり、断面台形の高台がつく。和泉型II期（尾上・森島・近江1995）のものと思われる。

白磁碗381はN-1a類（山本2000）に分類される。玉縁は大きく、高台は幅広で削り出しは浅い。

鉄釘382がP17から出土している。頭部を折り返したもので、体部の断面は5×8mmの方形を呈する。

S K02

385は瓦器小皿である。体部は短く直立する。外面にはいわゆる粘土板結合法を示す継ぎ目が明瞭に残っている。386は瓦器椀である。口縁部はわずかに外反し、端部を丸くおさめる。体部外面にもヘラミガキは比較的多く施されている。和泉型II期の所産であろう。

S K03

387は土師器小皿である。底部外面にはユビオサエが残り、口縁部は回転ナデ仕上げである。

S K04

388・389は土師器小皿である。底部外面にはユビオサエが残り、口縁部は回転ナデ仕上げである。390は黒色土器椀である。器壁の剥離が激しいが、内面のみ黒色を呈するタイプであろう。391は口縁部が上下に肥厚した須恵器鉢である。第II期第2段階の特徴を示すものである。392・393は瓦器椀の底部である。高台はしっかりした断面三角形あるいは細いが外方に踏ん張る形態のものである。394・395は管状土錐である。

包含層

396～398は搅乱土内等から出土した土師器小皿である。手づくねによる成形であり、底部外面にはユビオサエが残り、口縁部は回転ナデ仕上げである。396・397はひずみが大きい。

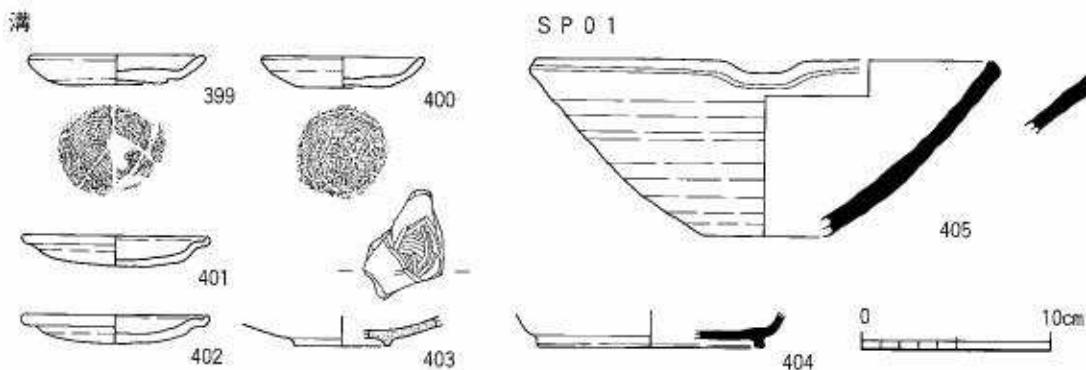


図70 A-23区 出土遺物実測図

A-23区出土遺物

溝

399・400は土師器小皿であり、底部の切り離しは回転糸切りによる。401・402はいわゆる「ての字状口縁」をもつBタイプ（伊野1995）の土師器皿である。器壁の厚さは2mmと3mm、口径は9.6cmと9.8cmである。法量の規格が約10cmのものに限られてくる11世紀末頃の所産と考えられる。403は瓦器椀の底部である。高台の断面形は台形を呈する。404は須恵器杯Bの底部片である。高台の断面形は正方形に近い。混入品と考えられる。なお図化しなかったが、軽石が数点出土した。最大のものは4.0×6.4×9.0cmである。

柱穴

405はS P 01から出土した須恵器鉢である。口縁端面が外側に傾斜するもので、端部がわずかに上方に

II層

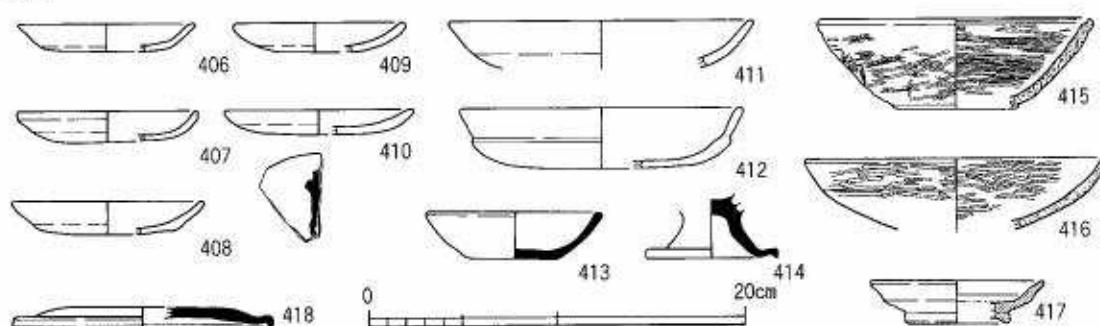


図71 A-23区 包含層出土遺物実測図

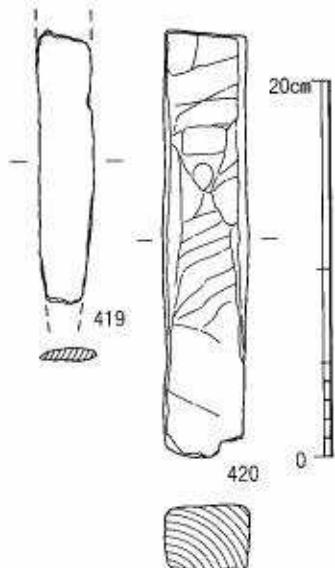


図72 A-23区 出土木器

つまみ上げられる。

包含層

溝の最上層にあたるII-1・2層から多くの土器が出土している。406～410は土師器小皿であり、いずれも底部外面にはユビオサエが残り、口縁部は回転ナデ仕上げである。法量や体部の形状、器壁の色調に差異がみられる。408・409は褐色を呈し、他は灰白色である。410の底部外面には判読不明であるが墨書きが認められる。411・412は土師器皿である。小皿と調整方法は同じであるが、412は口縁部の回転ナデの下端に明瞭な段をもつ。413は須恵器の小皿である。底部の切り離しは回転糸切りによる。414は須恵器の高坏脚部である。7世紀初頭頃の所産であり混入品と考えられる。415は黒色土器の椀である。416は瓦器椀である。417は山茶椀とも総称される灰釉系陶器の皿である（山下1995）。体部内外面にツケガケにより施釉される。外方に踏ん張る高台をもつ。12世紀前半の所産か。418は須恵器杯B蓋である。扁平な天井部をもつ。9世紀代の所産であろう。また、図化できなかったが、A-20～22区と同様、II-6層から7世紀の土器が出土している。

A-23区は、先に園池が検出されたA-14区に北接しており、園池に引水するための造水の一部が検出された。出土土器の検討によれば、造水は11世紀末には使用されており、12世紀前半には埋没したことが

分かる。道路部分において、11世紀末頃の柱穴が発見を免れて検出された。他の遺構の状況については詳細が不明であるが、築庭は住居に南面する場所に行われるのが一般的なため、園池の北側には居住に関わる遺構が展開していたものと思われる。

小結

東川右岸の2箇所の本発掘調査によって、11世紀末を中心とした遺構が認められた。

北側のA-20~22区では、居住地と耕作地が1本の溝で区画された単一屋敷地内部の様相を垣間見ることができた。

南側のA-23区では「造水」や「洲浜」等からなる「池庭」の一部が検出された。12世紀までの庭園検出例は兵庫県下で5例目で、それらは一般に「貴族」あるいは「武家」の住宅に伴うものと評価されている。東川右岸にはいくつかのこのような屋敷地からなる集落があったことが分かり、なかでも「池庭」をもつA-23区の屋敷地は、当地に存在したといわれる「芦屋庄」(文献上の初見は1285年)の成立や構造の検討に際しての貴重な材料ともなろう。

東川右岸では、11世紀末以前には生活の痕跡は確かめられなかった。ただし、中世生活面より下層の粗粒砂層より7世紀の土器が出土したことから、さほど遠くない位置に当該期の埋蔵文化財の包蔵が想定できる。

東川左岸の工事立会結果からは、当該地の工事範囲内には埋蔵文化財は包蔵されないと判断できた。

(甲斐)

参考文献（五十音順）

伊野近富 1995「土師器皿」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

尾上 実・森島康雄・近江俊秀 1995「瓦器椀」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

森田 稔 1995「中世須恵器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

山下峰司 1995「灰釉陶器・山茶椀」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

山本信夫 2000「大宰府条坊跡XV 一陶磁器分類編ー」太宰府市教育委員会

(6) 第6回調査の結果

調査番号 2000348

C地区1ヶ所の調査である。今回の範囲内では、前回までに確認された遺物包含層と同様の地層を確認したが、縄文土器片数点とサヌカイト剥片を1点検出したのみである。遺構は検出できなかった。なお、包含層上位の砂層中から、北側から流れ込んだと考えられる縄文時代（後期から晩期？）の浅鉢の口縁部を1点検出した。

今回の調査範囲では、遺物を数点検出したものの、いずれも原位置をとどめたものではなく、遺構も確認することはできなかったので、前回の確認調査で確認できた縄文時代の集落跡は、この地点まで南に広がらないことが判明した。（山本）

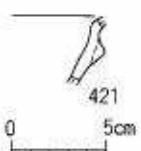


図73 出土遺物

(7) 第7回調査の結果

調査番号 2000376

擁壁工事範囲は重機を使用し、層ごとに工事掘削深度まで下げ、遺構・遺物の確認に努めた。必要に応

じ人力による精査および掘削を行った。

B-18区

調査の結果、遺構・遺物ともに確認できなかった。

B-19区

B区の南端で2号線に接している。調査の結果、水田が確認された。遺物は出土しなかった。

C-20区

調査の結果、水田を確認した。水田層の上層（2層）より、中世段階の土器が出土している。

C-21区

調査の結果、2面の水田を確認した。上層の水田面では人間および動物の足跡を確認した。3層中から土器の細片が出土した。

C-22区

C-21区の東に隣接している。調査の結果、水田と溝を確認した。溝はトレーニング内を南北方向に走り、埋土は疊混じり砂層で、遺物は出土しなかった。今回の調査では、溝が水田の水路として掘られたものか、あるいは洪水によるものか明らかにできなかった。

上層の3層より土器の細片が出土した。

C-23区

調査の結果、水田と溝が確認された。溝は幅0.9m、深さ0.4mで南北方向に走る。溝の機能は明らかではないが、水田に伴う水路の可能性がある。

水田の上層（4層）中より須恵器および中世の土器片が出土している。

(村上)

5. 平成13年度発掘調査の結果

(1) 第1回調査の結果

調査番号 2001011・2001046・2001073

A-25区（図74）

4街区の2に位置し、工事範囲に東西3m×南北3mの調査区を設定した。調査面積は9m²である。盛土あるいは搅乱土の下の基本土層は、上から順に以下のとおりである。

Ⅱ層：黒褐色シルト、Ⅲ層：黒色シルト、Ⅳ層：黒灰色粗砂、Ⅴ層：灰褐色粗砂

Ⅱ層において中世の土器小片、Ⅲ層で縄文晩期の土器小片を発見した。Ⅱ層の下面に遺構は発見出来なかつたが、Ⅲ層の黒色シルト層は南東に落ち込み、この層の下部は細砂から細礫まじりの層であり旧流路と判断できる。なお、遺物は何れも図化出来るものではなかった。

A-26区（図75）

6街区の2に位置し、工事範囲に東西9m×南北8mの調査区を設定した。調査面積は72m²である。

基本堆積土層は、以下のとおりである。

I層：盛土、II層～IV層：黄灰色細砂、V層：茶灰色細砂～粗砂、VI層：茶褐色細砂～中砂、VII層：茶灰色細砂～粗砂、VIII層：茶灰色砂礫、IX層：灰褐色極細砂、X層：灰褐色砂礫

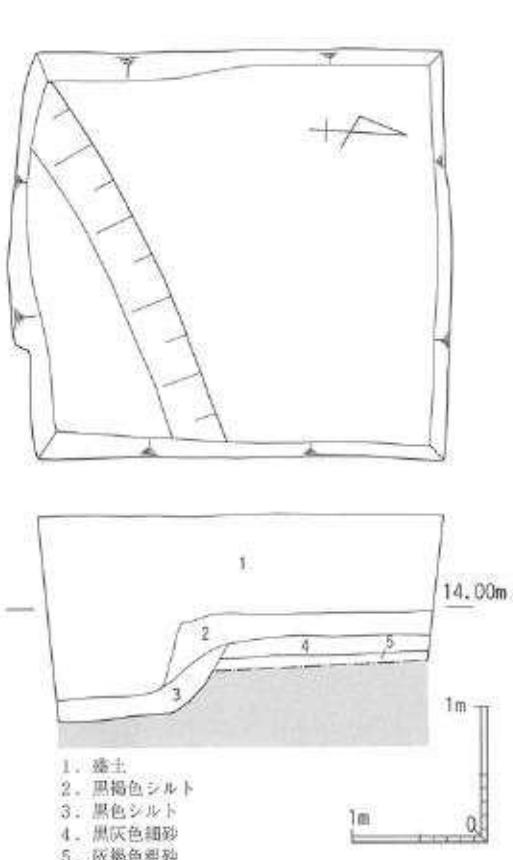


図74 A-25区 平面図・断面図

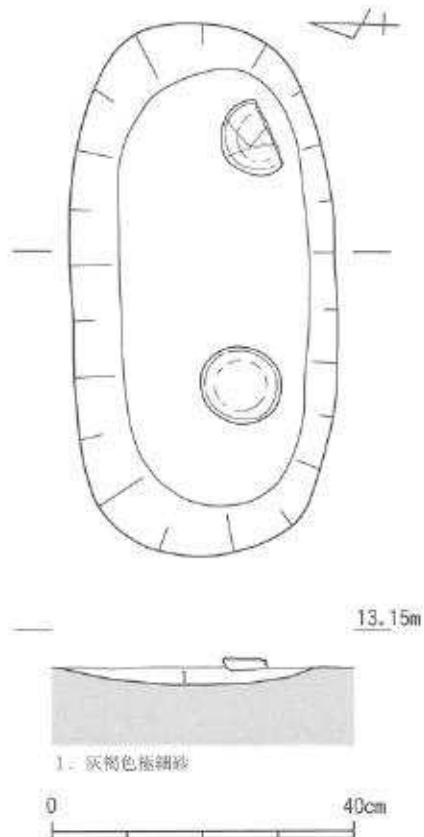


図75 土坑 SK01 平面図・断面図

II～IV層は近世の耕作土、V・VI層は古代末期の遺物包含層である。そして、VI層の上・下面で溝や柱穴等の遺構を検出している。

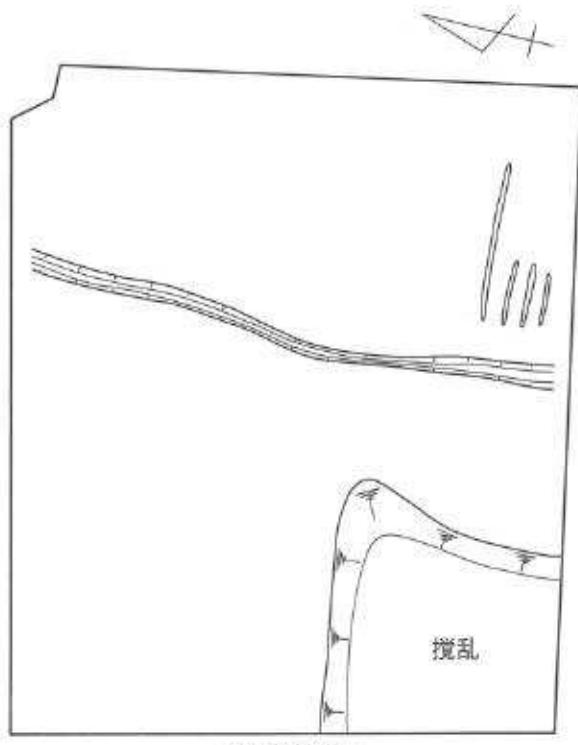
VI層上面（第1遺構面、図76）の遺構には、南北方向の区画溝と畑の跡と思われる浅く細い溝がある。

また、下面（第2遺構面、図76）には30ヶ所の柱穴と土坑、溝がある。この遺構群には若干重複が見られるように土器の示す時期幅も一部古いものを含むが、中心は12世紀後半頃に営まれたものと考えている。

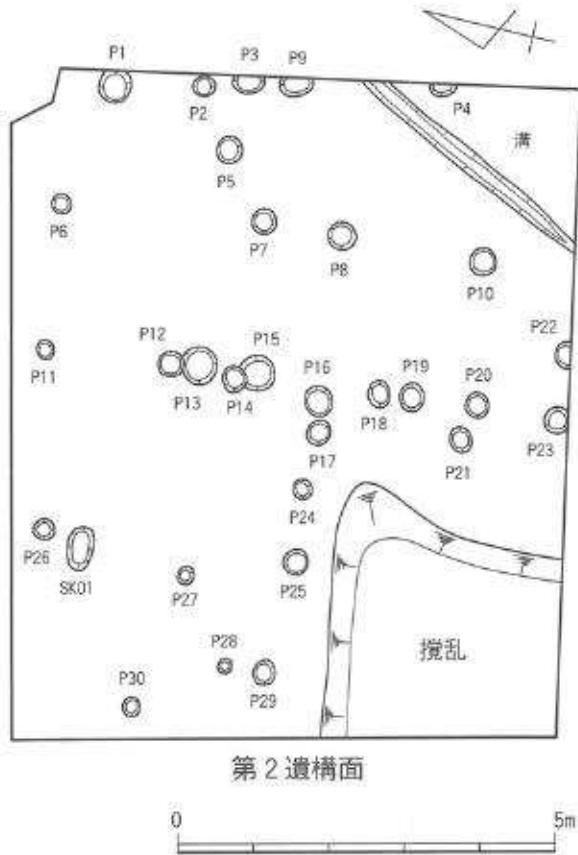
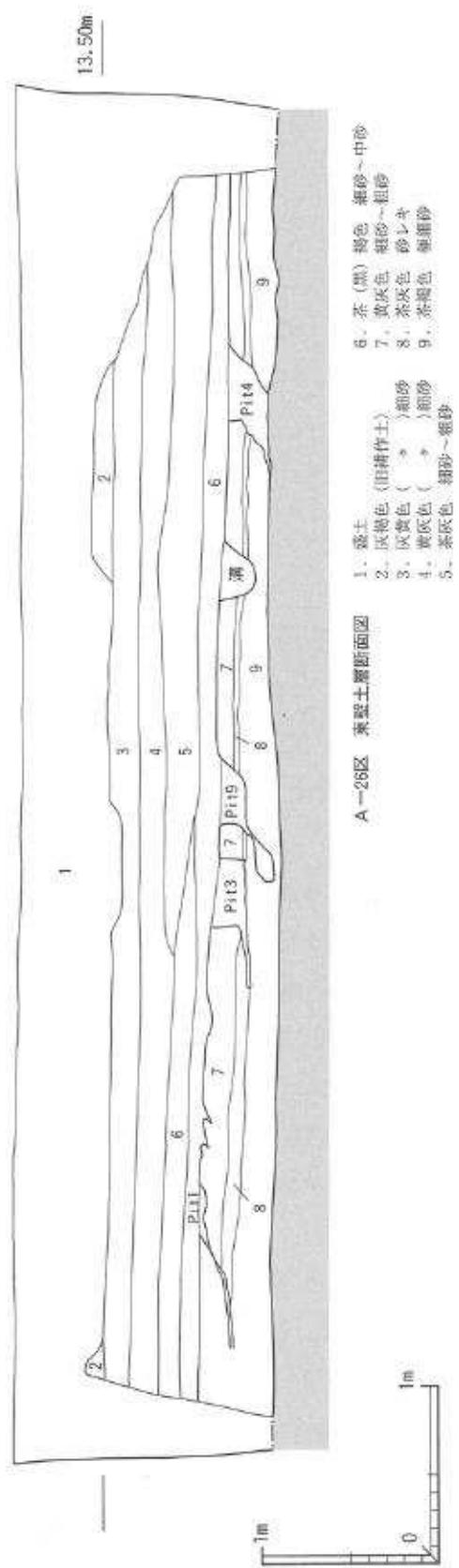
柱穴は掘立柱建物として復元できなかったが、土師皿を持つものがある。また、すべての柱穴を断削った訳ではないが、南北方向に最大70cmの側方移動を起こしていることが明らかになった（第Ⅳ章寒川論文参照）。

土坑SK1（図75）は東西約70cm、南北約35cmの楕円形を呈し、深さは削平のためかわずか2cmである。埋土中には、土師器小皿を2枚持っていた。その他、北東から南西方向の溝が1条ある。長さ約3.5m、幅約25cm、深さ約20cmを測る。柱穴の主軸はほぼ南北方向に並ぶのに対し、約45°振っている。

出土遺物には、土器、瓦、鉄製品がある。図78の422・423は、SK1から出土した土師器小皿である。どちらも体部はナデ仕上げであり、422の底部外面には指オサエが残る。424～429はP03から出土した土師器皿と同小皿である。小皿は体部上半をヨコナデ、下半を指オサエの後ナデたものが多い。429は口縁部に段を有し、端部を直立させる。430はP13から出土の瓦器碗である。内湾する体部に、口縁部を外半させ端部は丸く納める。431はP16から出土の土師器皿である。体部上半はヨコナデ、底部外面には指オサエが残る。432・433はP19から出土の小皿である。432は底部に回転糸切りが見られる。434はP24から、



第1遺構面



第2遺構面

0 5m

図76 A-26区 平面図・断面図

435はP25から出土した小皿である。436~456はそれぞれ第V・VI層の遺物包含層からの出土である。土師器小皿には「ての字状口縁」を持つ（442~446）古いタイプもある。須恵器碗452は体部が直線的になるものの、底部にわずかな段が残る。また、小鉢453も口縁端部を肥厚させるなど古相を留め、須恵器小皿449も伴っている。何れも、底部は回転糸切り。450・451は見込みに圈線を持つ白磁の皿、454は青白磁合子の蓋、12世紀後半のものであろう。その他、丸瓦455と鉄釘456がある。釘は、二本がくっついた状態である。頭部には叩いた痕跡があり、断面は約15mmの方形を呈する。

A-24区

4街区の南東部に位置する。地盤改良範囲に幅2m×長さ4m、東西方向のトレンチを設定した。図78上の3・4層に古代末期から中世初頭の土器片を発見し、人力による精査を行ったが、遺構は認められなかった。A地区の遺跡東北端に当たるのである。なお、下層は細砂から砂礫混じりの層となり、旧流路の堆積と判断される。

出土遺物には、土師器・須恵器・瓦器などがある。図79の457は瓦器碗で、断面台形の高台がつく。体部外面は指オサエが残り、内面はヘラミガキを施す。

B-20区

16街区の西辺に位置する。道路拡幅部に幅1m×長さ4m、南北方向のトレンチを設定した。石組護岸の溝を確認し、西へ幅を1m拡張している。溝は幅2m以上、深さ0.8mで南北方向に流れる。溝埋土及び掘方内の遺物から、近世以降の水路と考えられる。また、第6層は石組以前の素掘り溝の護岸と判断できる。時期は明らかでないが、石組溝に近い年代と考えている。

出土遺物には、石組溝からの陶磁器片・瓦片がある。図の458・459は丸瓦である。

B-21区（確認調査）

13街区の東辺に位置する。道路拡幅部に幅1m×長さ3m、南北方向のトレンチを設定した。洪水砂の下層で黒褐色シルト層を確認したが、遺構・遺物とも発見出来なかった。なお、その下層は中砂から細礫を含む旧流路である。

B-22区（確認調査）

10街区の東辺に位置する。道路拡幅部に幅1m×長さ4m、南北方向のトレンチを設定した。約1.6mまで掘り下げたが、遺構・遺物とも確認出来なかった。

C-24区（立会調査）

27街区の南辺に位置する。第3層で中世の土器片を発見したが、遺構は認められなかった。また、下層に黒褐色シルト層（水田土壤）を確認したが、畦畔は発見できなかった。

C-25区（立会調査）

27街区の東辺に位置し、C24区の北に隣接している。黒褐色シルト層（水田土壤）を2層確認したが、ここでも畦畔を確認できなかったことから、旧流路内に堆積したシルト層なのかも知れない。なお、隣りのトレンチで確認していた中世の土器包含層は、現水路によって削平され残っていない。

C-26区（立会調査）

34街区の北側中央部に位置する。素掘り溝を確認した。溝は幅2m以上、深さ0.8mで南北方向に流れ。無遺物で年代は明らかでないが、層位・方向等からB-20調査区の溝と同年代のものと考えている。

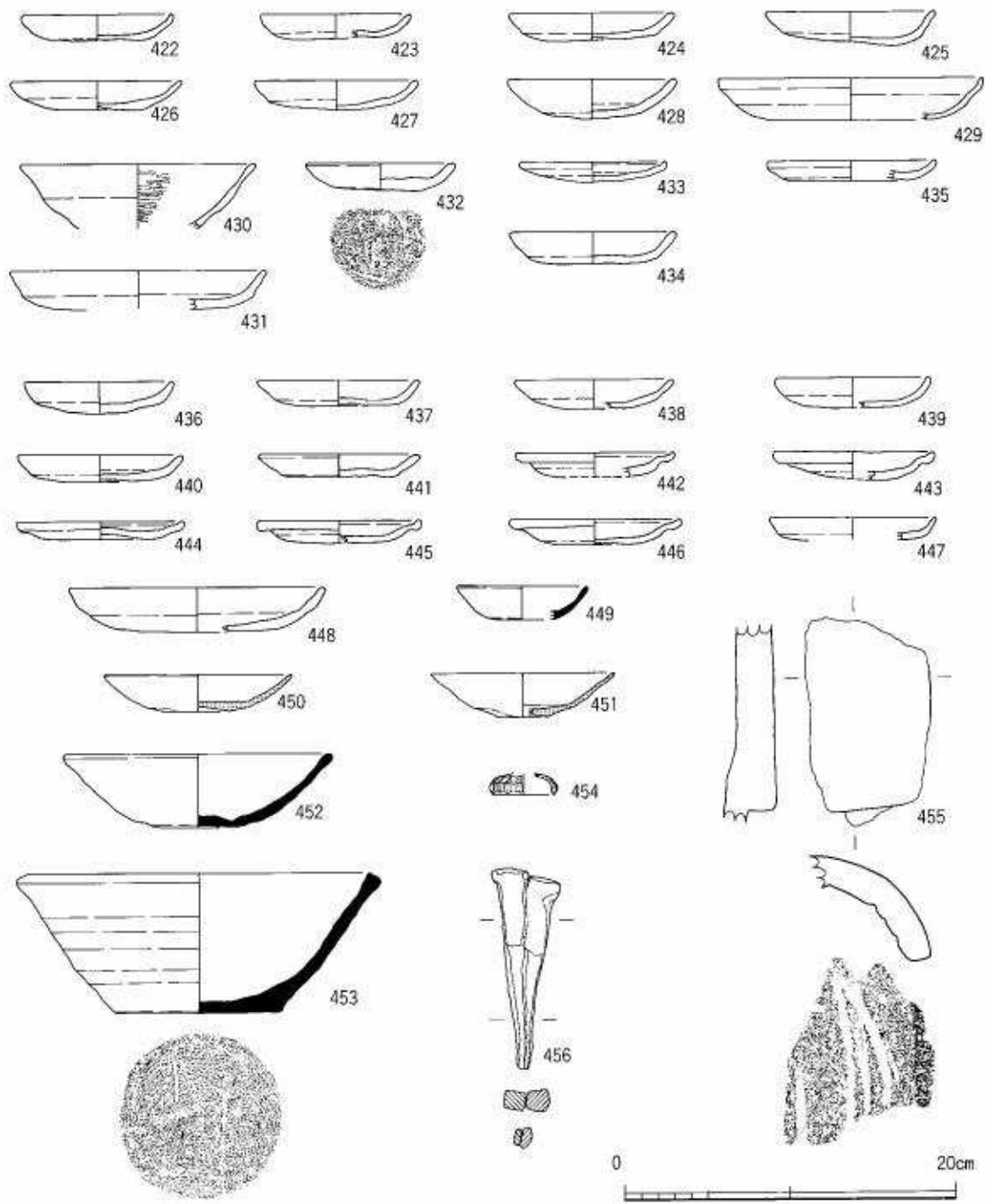


図77 A-26区 出土遺物実測図

C-27区（立会調査）

34街区C-26区の東に位置する。現地表下約1mの灰黒色層まで掘り下げたが、遺構・遺物とも確認できなかった。

参考文献

中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」 真陽社 1995

(大平)

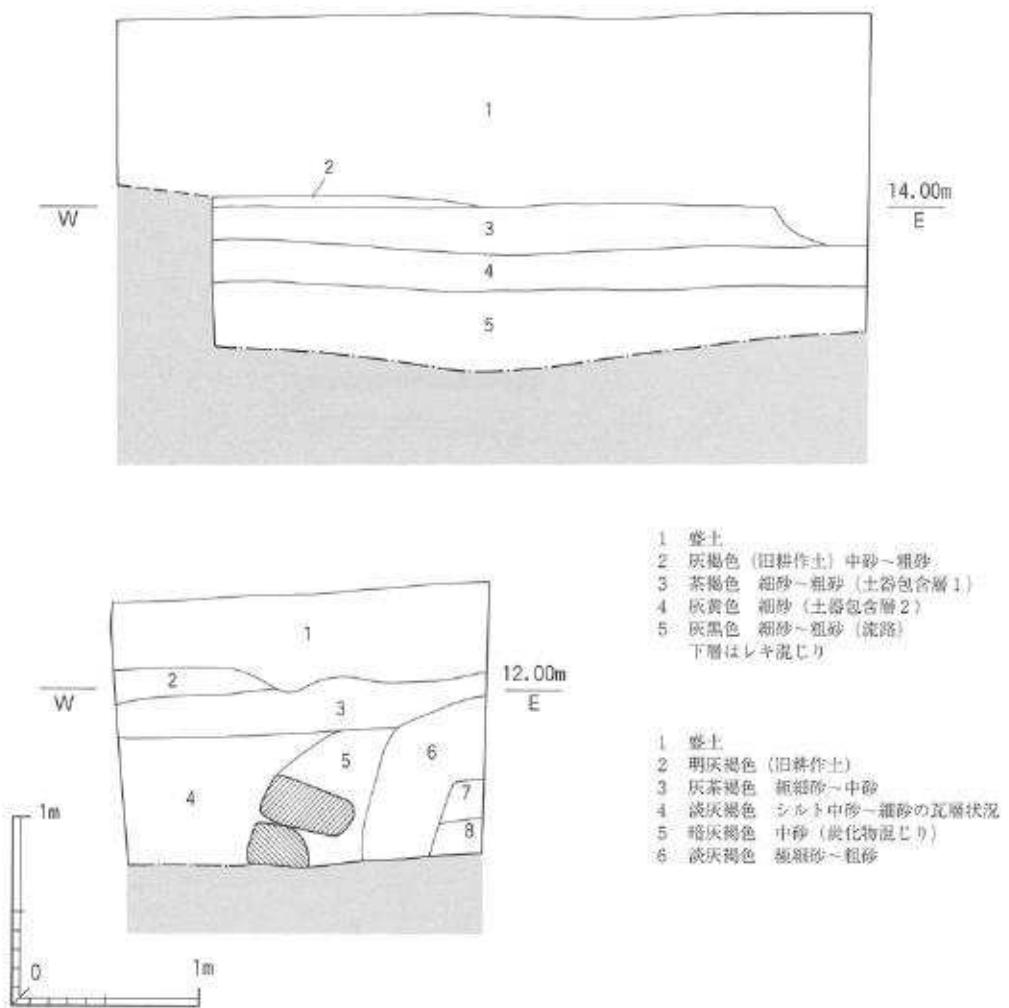


図78 (上) A-24区 北壁断面図・(下) B-20区 北壁断面図

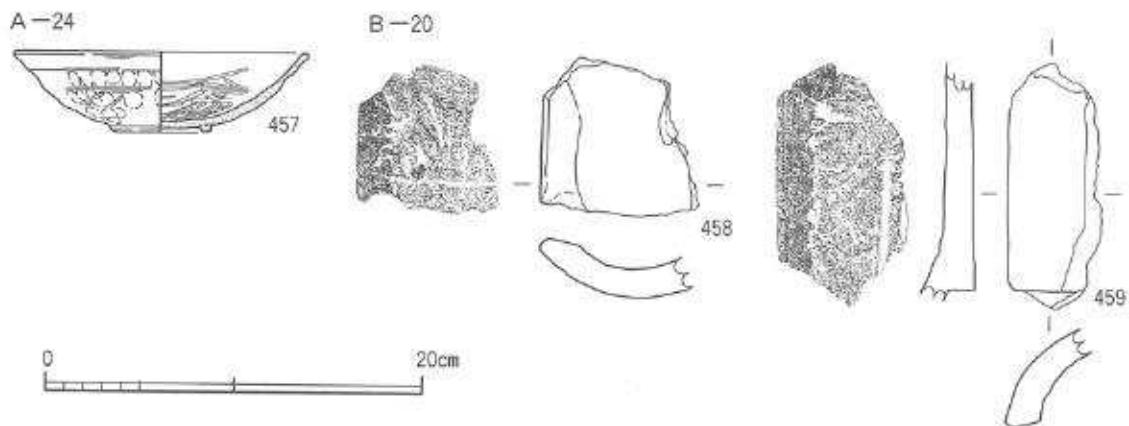


図79 A-24区・B-20区 出土遺物実測図

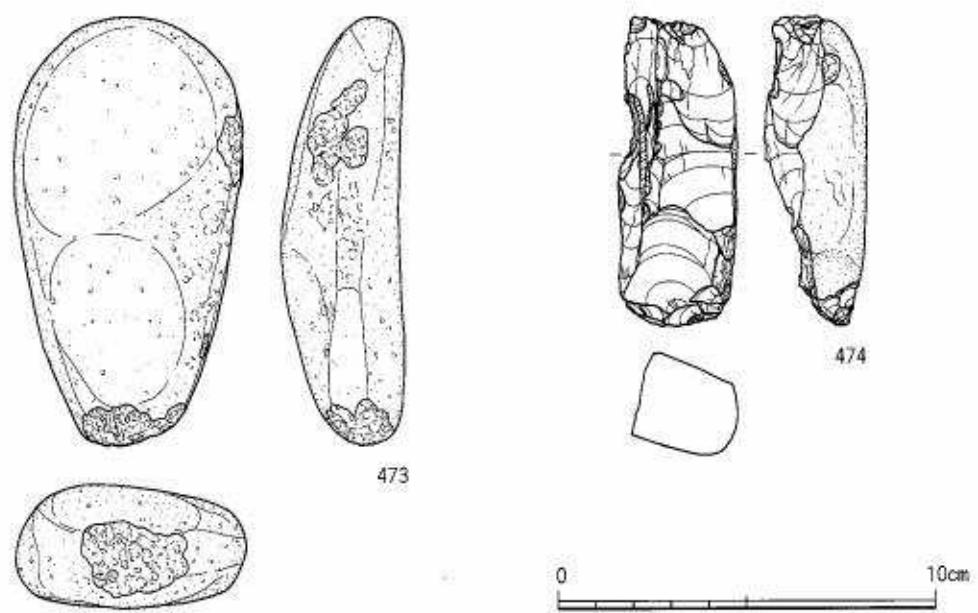
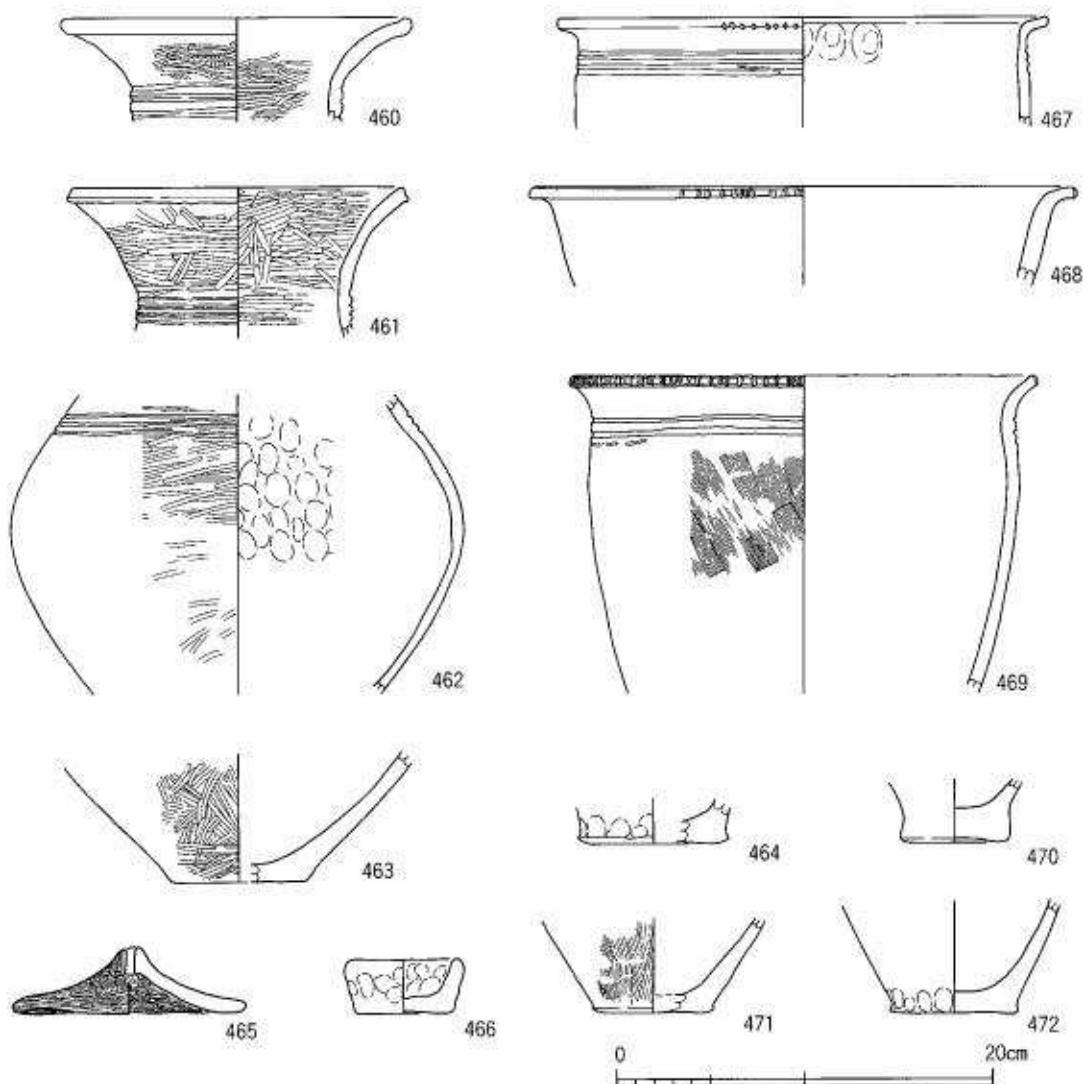


図80 B-23区 出土遺物実測図

(2) 第2回調査の結果

調査番号 2001125

調査は工事によって掘削される範囲内に試掘坑を設定しておこなった。各試掘坑ともにパワーシャベルによって掘削し、土層の観察・遺物・遺構の有無の確認を行った。

C-27区

平成10年度に縄文土器が出土したのとほぼ同様の土層を示していたが、遺物・遺構は全く認められなかつた。土層はシルト・細砂・細礫の互層の中に黒色のシルトが大きく堆積していた。

流水による堆積物であり、堆積物・流路方向などは平成12年度の調査区とほぼ似通った状況であった。

C-28・29区

工事による掘削の及ぶ深度まで掘削して確認した。その結果、旧耕作土褐色のシルト混じりの細砂層であった。遺物・遺構は全く認められなかつた。
(小川)

(3) 第3回調査の結果

調査番号 2001126

調査は工事によって掘削される範囲内に試掘坑を設定しておこなった。各試掘坑ともにパワーシャベルによって掘削し、土層の観察・遺物・遺構の有無の確認を行った。

A-27区

家屋建築のための支持基盤層が軟弱なため、土地改良のための工事であった。調査地は前回の調査地（平成13年4月23日実施）のA-25区に隣接している。土層状況は前回と同じであったが、遺構・遺物は全く認められなかつた。

B-23区

調査位置は16・17街区の境界から、西部4号線の南端へと続く擁壁建設地にあたる。（B-16・17区の南側）調査着手時には既存の污水管の撤去が行われており、また壁面には崩落防止の工事が施されていた。このため現地表から約1m下の標高11.8mまでの間の土層状況は不明である。掘削は擁壁の下部構造が造られる標高11.2mの深さまで行った。

調査の結果、今回の調査区のほぼ中央部において約4.5mにわたって黒色のシルト層がU字状に堆積していた。中より弥生時代前期の壺・甕の土器が出土した。周辺の層状は細砂から小礫を中心とする自然堆積層であった。
(小川)

(4) 第4回調査の結果

調査番号 2001044

地盤改良が必要な地点1ヶ所の調査を行った。個人住宅用地の改良が必要な24m²について調査を実施した。

B-24区

B調査区の東端に位置しており、弥生前期の遺構が検出した（B-7区他）東側にあたる。層序は、盛土・近現代堆積土（耕土他）・暗褐色粗～中砂・黒色シルト・地山となっている。包含層が2面あり、ここ2面で精査したが、下層面で旧河道を検出しただけである。暗褐色粗～中砂に少量の中世遺物を含んでいる。包含層は古墳時代のもので、上層の包含層には須恵器を含んでいるが、下層包含層には含んでおらず土師器だけである。それゆえに旧河道は古墳時代前期のものである。旧河道は小さいもので南北方向に流れている。幅は0.6～0.7mで深さは0.3mを測る。
(渡辺)

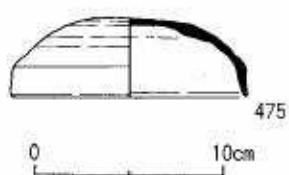


図81 出土遺物

(5) 第5回調査の結果

調査番号 2001227

B-25区

調査地点は、国道2号線津知交差点の北東部にあたり、平成12年度に調査されたB-15区の南側及び、平成13年度に調査されたB-20区の東側に接している。調査面積としては、245m²と他の調査地点と比べても広い範囲の調査となつたが、残土置き場の問題から調査範囲を東西に2分割して調査をおこなつた。検出できた遺構面は1面のみであり、薄い砂質の包含層の下面で検出できたが、包含層を掘り抜いた近世以降の土坑状のゴミ穴やコンクリート製の井戸やレンガ積みの集水井も同一面で検出している。検出で

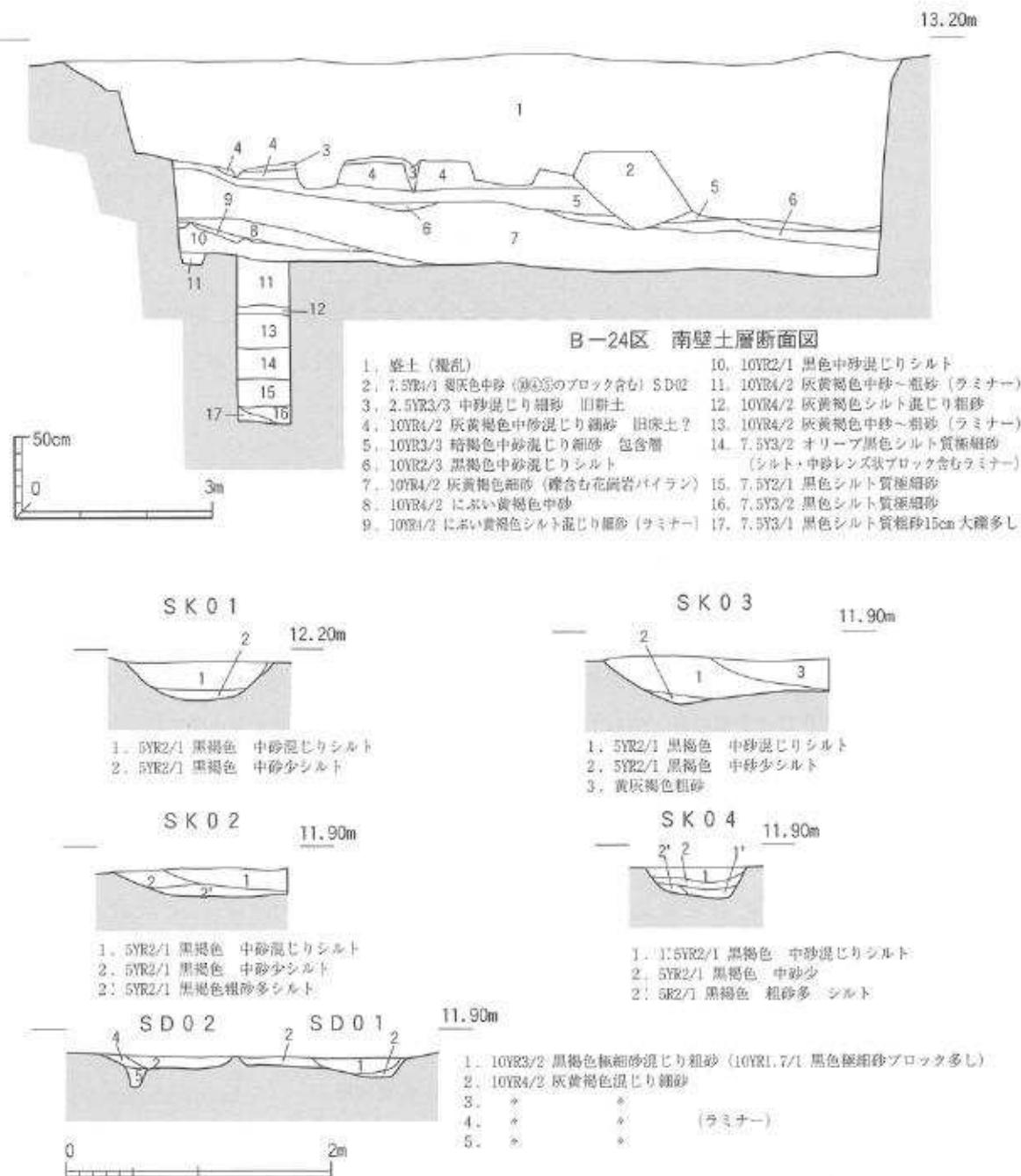


図82 B-25区 平面図・土層図

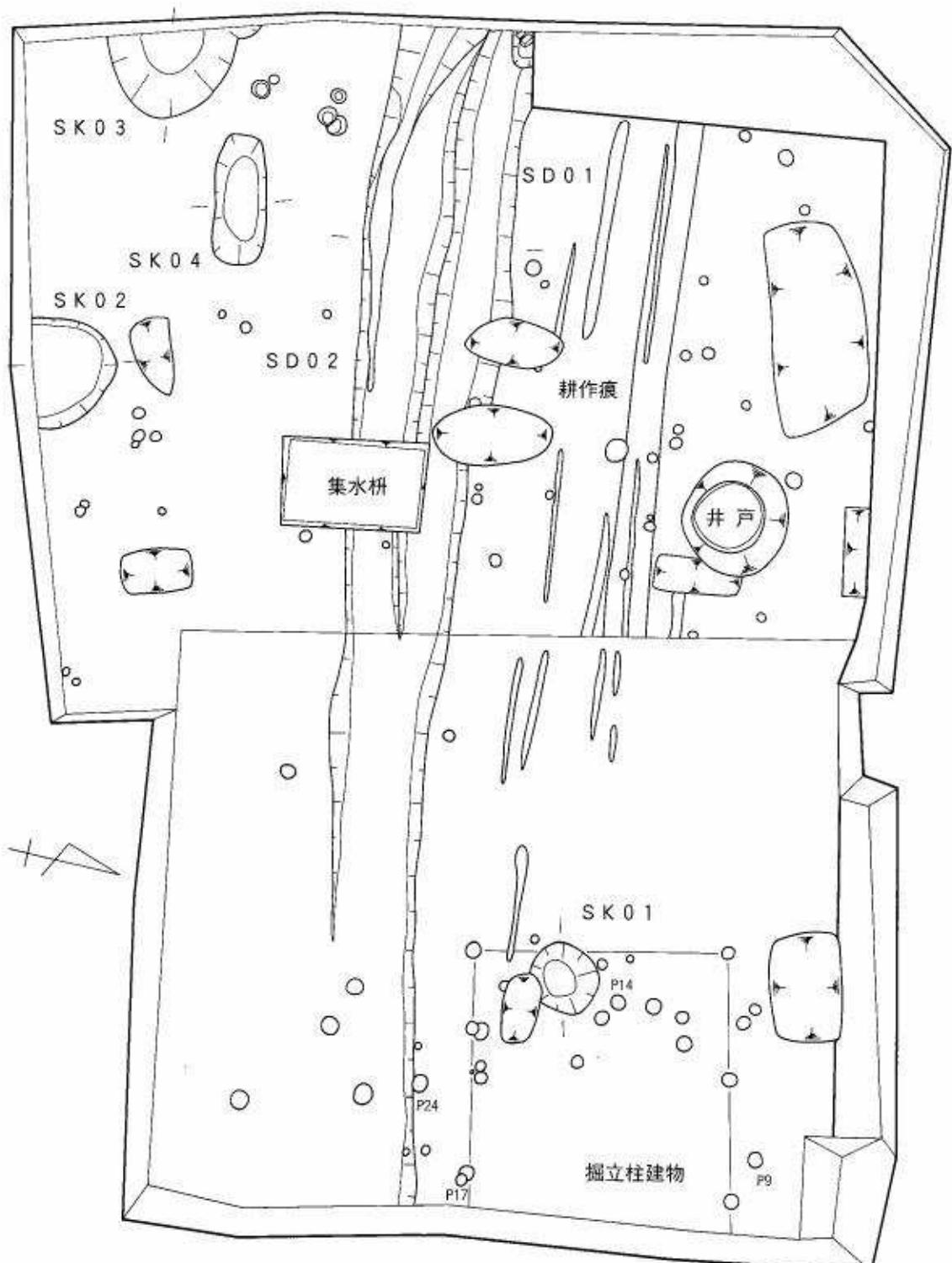


図83 B-25区 平面図

きた遺構には、溝・土坑・柱穴等がある。3ヶ所でさらに2m近くの深さまで掘削して断ち割り調査をおこなったが、下層からは遺構・遺物包含層は検出されなかった。

溝には、調査範囲のはば中央を東西に横切るSD01とSD02がある。SD01はSD02を切って北側に設けられており、SD02を踏襲するものであろう。この溝を境にして南北に二つの区画に分かれており、南側が低くなる。溝の北側では細く浅い溝状の条溝が数条検出され、鋤跡等の耕作痕と思われる。このSD01・02は西流してB-20区の調査で検出された石組みを伴う溝へと向かっている。石組みの裏側の一部を検出することができたが、SD01が切り込んでおり、新しくなるようである。SD02は西端部では水流によって底が抉られており、水路として利用されていたことが窺われる。SD01は図化できる遺物は出土していないが、近世以降の所産と考える。また、SD02からも時期を特定できる遺物は出土していないが、鎌倉時代頃までの遺物を含む包含層を切り込んでいることから、中世以降の所産と考える。耕作痕の埋土もSD02と同質であることから、SD02は中世以降の畑作等に伴う水路としての機能が考えられる。

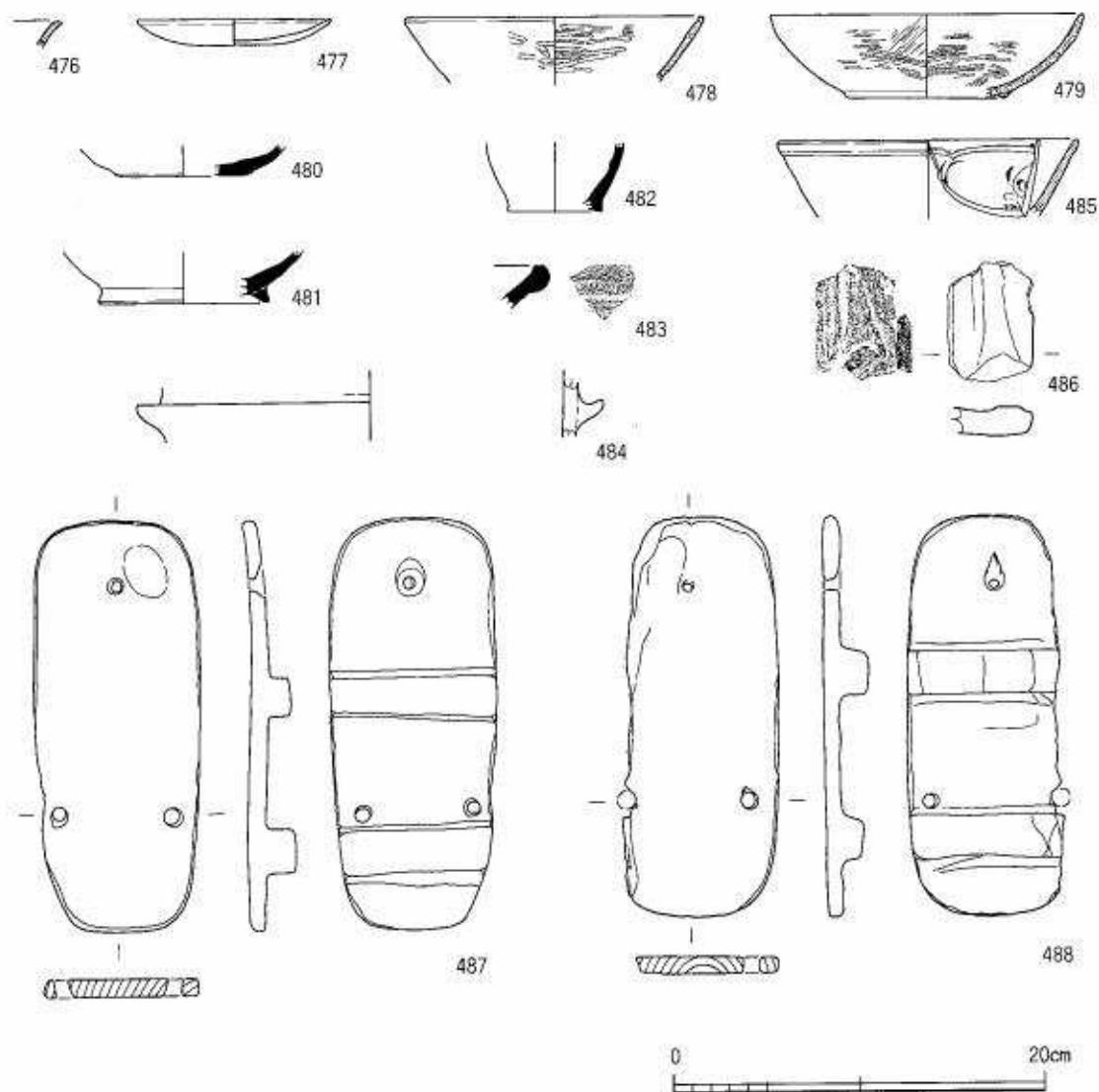


図84 B-24区 出土遺物実測図(1)

土坑は4基あり、SK01は直径約1.1m、深さ約0.3mの円形の平面形を呈するものである。SK02・03の全容は不明であるが、深さが0.2~0.4m程度のものである。SK04は長円形の平面形を呈しており、深さは0.3m弱である。

粗砂混じり極細砂面で検出されたこれらの土坑と柱穴の一部の埋土は黒褐色シルト質のもので、遺物は全く出土しなかった。本調査区の東側に接しておこなわれたB-27区の調査では同様の土層から弥生時代前期の土器や石器が出土している。

褐色中砂質の埋土をもつ柱穴は、直径20cm以下、深さ30cm以下のものがほとんどである。東半部の柱穴からは縁釉陶器・瓦器・土師器などの土器が出土したが、ほとんどの柱穴からは遺物の出土はなかった。東半部の柱穴は柱通りを揃えたものがあり、掘立柱建物の一部を構成するものと考えられる。

遺物

476はP14埋土出土の縁釉陶器である。小片であるため器形、法量等不明であるが、口縁部が屈曲していることから、輪花模・皿の可能性がある。直線的な体部から口縁端部がわずかに外反する。釉薬はオーリープがかかった黄色から灰色を呈しており、胎土は土師質である。

477はP9埋土出土の土師器皿である。1/2弱の残存率で口径10.3cm、器高1.4cmを測る。手づくねで作られており、内外面はナデ成形、口縁部はヨコナデを施し、口縁部上面は強いナデにより浅く窪む。胎土は緻密である。

478はP24埋土から出土した黒色土器椀である。小片であるが、口径15.8cmを復原した。直線的に開く体部から丸く納める口縁部に続く。口縁部内面はヨコナデによりわずかに窪む。その下から横方向のヘラ磨きによる暗紋が施されており、底部近くは斜め方向になる。内面は黒色を呈している。外面にも横方向の暗紋が観察できる。外面は灰白色から橙色を呈している。

479はP17の柱根抜き取り穴出土の黒色土器椀である。体部の1/6程度残存しており、口径16.6cm、器高4.5cm、底径8.8cmを測る。低い貼り付け高台から内湾しながら大きく開く体部から細く納める口縁部へと続く。内面底部付近は縦方向のヘラ磨きによる暗紋、体部上面は横方向の暗紋を施す。外面には縦方向から横方向の暗紋を施す。内外面とも黒褐色を呈している。

480は灰色中砂出土の須恵器椀あるいは杯底部である。回転ヘラ切りの底部から大きく開く体部へと続く。器壁は厚い。

481は包含層出土の須恵器椀底部である。小片であるが底径9.7cmを復原した。外側に大きく張った貼り付け高台から、内湾しながら大きく開く体部へと続く。

482は須恵器小型壺底部である。糸切りの底部からわずかに屈曲して直立気味に立ち上がる体部へと続く。

483は灰色中砂包含層出土の須恵器である。大型製品の口縁部であり、丸く肥厚させた端部の上面をわずかに窪ませ、外面には櫛描き波状紋を施している。

484は包含層出土の土師器羽釜のつば部分である。わずかにすすぐ付着している。

485も灰色中砂包含層出土の青磁椀で1/6ほど残された口縁部の径は15.9cmを復原する。内面に劃花紋を施す。

486は包含層出土の丸瓦片である。玉縁の隅部分のみが残されており、凹面に布目压痕が見られる。側面周辺はケズリが施されている。

487・488は土坑状のゴミ穴出土の下駄一足である。近世以降のものである。親指が当たったと思われる痕跡から487が左用、488が右用と推測できる。共に針葉樹板目材を用いて、歯の部分まで一本で作られている。2条ある歯は後方に偏って作り出されており、磨耗が顕著である。特に487では前の歯が、488では後ろの歯がより磨り減っている。また、両者とも歯の左側が偏って磨耗している。更に先端部の磨耗も顕著である。鼻緒の孔は全て円形で、後方のものは後ろの歯の前方にはほぼ均等に穿たれている。前方の孔は中央からやや内側に寄った位置に穿たれており、487では特に下面側を大きく抉っている。

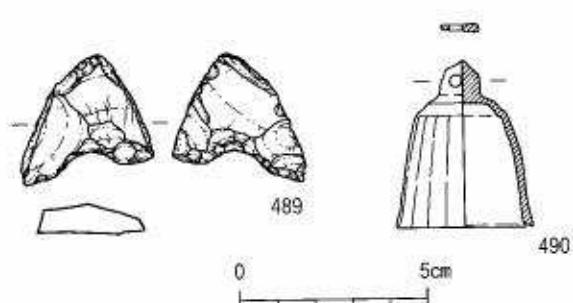


図85 B-24区 出土遺物実測図（2）

489はサヌカイト製の楔形石器である。長さ約3.4cm、幅約3.5cm、厚さ約0.8cm、重さ約8.2gを測る。凹基式の石鎌様の平面形態をなすが、縁辺部の調整は全周には及ばず、凹部のみが顕著で、一部には自然面を残す。

490は攪乱土出土の鈴である。近代以降のものであろう。分析はしていないが、青銅製の鋳造品であり、口径3.6cm、器高4.4cmを測る。外面は縦方向の面取りを施す。鉢は扁平な断面を呈し、宝珠形の偏った位置に円孔を穿つ。

（別府）

（6）第6回調査の結果

調査番号 2001235

調査区（B-26区）の基本層序は、上層より2時期の整地層、黄褐色砂混じりシルト（第1層）、暗褐色シルト質細砂（第2層）、黒褐色・黄色ブロック礫混じりシルト（第3層）である。遺物包含層は第1層の水田土壤層と第2層で、第3層が遺構検出面である。

調査の結果、第3層上面より中世段階の柱穴2基（P1・P2）と2条の溝（SD01・02）を確認した。これらの遺構は、調査区東側に集中しており、西側は近現代の流路や井戸のみで古い段階の遺構はなかった。

柱穴は2基確認した。直径30cm前後の円形の掘り方で、深さは40cm前後である。柱穴からは直径20cm前後の柱痕を確認している。柱穴は2.2mの間隔で南北方向に並んでおり、建物に伴う柱穴の可能性がある。柱穴の時期は明確でないが、柱穴P1より中世段階の土師器小皿が出土している。

溝はSD01とSD02が確認された。SD01は東西方向に延びる幅40cm、深さ15cm前後の溝である。溝の西端は後世の攪乱により破壊されている。

SD02は南北方向に延びる小溝である。溝の中央付近で東方向に分岐し、T字形をしている。溝の南北部分は幅20~30cmと狭小で、深さは5cmと浅い。両溝からは、土師器片が少量出土している。

中世段階の遺構は調査区の東側に集中し、西側部分には広がらないことが判明した。狭小な調査範囲のなかで判断することは危険ではあるが、中世段階の掘立柱建物跡が存在する可能性が高い。

当地区から出土した遺物には、土器と石器がある。土器は細片が多く遺存状況は悪い。図化できた土器はわずかに2点のみである。

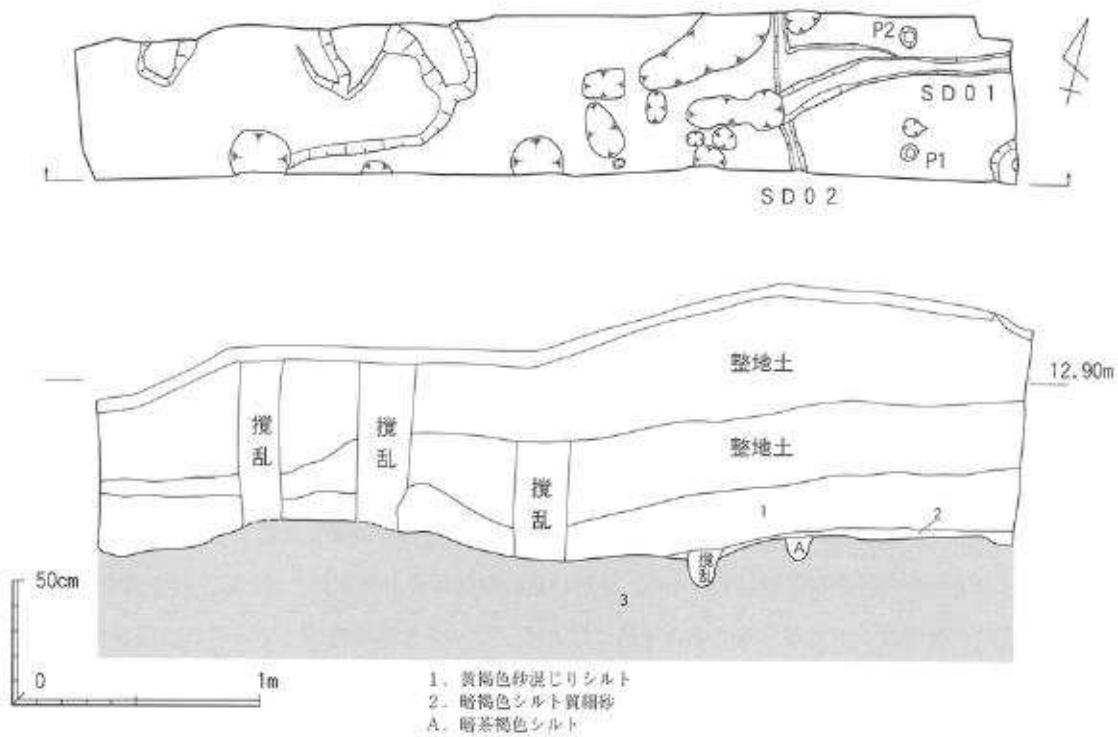


図86 B-25区 実測図

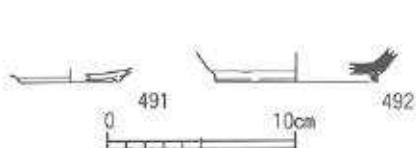


図87 B-25区 出土遺物実測図（1）

491は包含層（第2層）より出土した。高台をもつ土師質椀の底部破片である。高台のつくりは小さく、断面形は三角形を呈する。内外面ともに摩滅が著しく、調整は不明である。底部径は復元値で5.4cm、残存する高さは0.7cmである。土師質ではあるが、器形から判断して瓦器の可能性がある。

492は、S D02埋土中より出土した杯Bである。高台径は、復元値で8.5cm、残存する高さは、1.8cmである。

493は、サスカイトの二次加工のある剥片である。下端には自然面が残り、左右の側縁には小さな加工痕が認められる。長さ5.8cm、幅6.0cm、厚み0.9cm、重さ34.1gである。包含層（第2層）より出土している。

（村上）

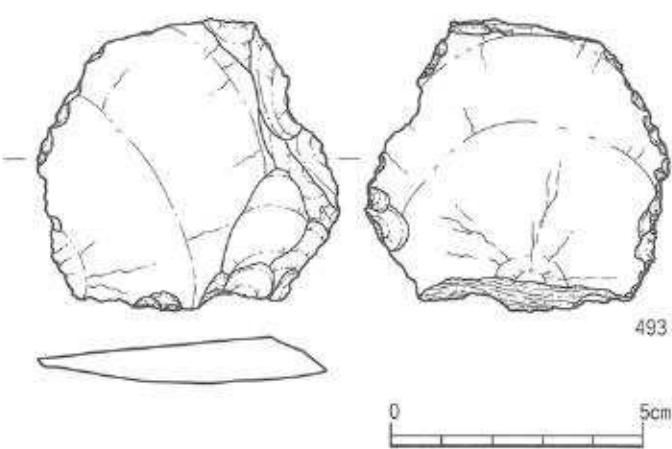


図87 B-25区 出土遺物実測図（2）

6. 平成14年度本発掘調査の結果

六条遺跡の最終年度となる予定だった年度の調査である。基本的には事業地内の公團施工部分の調査を実施した。当初計画されていた街路の調査は僅かで、地盤改良やそれに伴う擁壁工事部分の調査が多くを占めた。4つの地区のうち、A地区だけは前年度までに調査を終了し、南西隅の字六条部分の立会い調査を行っただけである。それ以外のB～D地区において調査を実施した。B地区で6ヶ所、C地区で13ヶ所、D地区で3ヶ所の計22ヶ所の調査を行った。

調査方法は前年度までと同じである。原則的に遺構面上面まで機械掘削し、その下面について面精査とともに人力掘削を行った。各壁面と遺構面の検討を行った。掘削深度は各トレンチによって異なっている。排土は横置きし、調査終了後埋め戻し作業も実施した。基本土層も同じである。

B-27・28区

調査時期が異なったことから、区名を別にしているが隣接地なので併せて報告する。北側・西側は搅乱が激しかったことから調査を実施していない。遺構は複数時期にまたがるが、面としては1面で調査した。弥生時代前期の遺構は土坑5基と落ち込み6基、溝4条、ピット8基を確認している。27区SK01は土器棺墓で甕を逆さにして使っている。上部が削平されているが1個体の甕棺であろう。復原できなかつたが494と495は同一個体と思われる。SK04は木棺墓の可能性のある土壤で、東側に小口穴状の小土坑を有する。落ち込みは性格がわかるものはない。SD04からは石鎌が出土している。深さ7cmと浅い南北方向の溝で南側に続いている。SD03はB-27区から延びてくる自然流路の可能性が高い溝である。北側から南側に深くなっている。ST01は木棺墓の可能性がある土坑である。南北1.4m、東西0.8mの隅円長方形を呈している。底面は平坦で、深さは12cmを測る。弥生前期土器片が出土している。

掘立柱建物跡は2棟検出している。主軸方向が僅かに異なっており、SB01が1時期古い建物である。SB02は12世紀後半の遺構と考えている。溝(SD01・02)も同時期の遺構である。2基の大型のピットが検出されているが、近世の遺構である。

B-29・30区

ともに遺構面は2面確認された。上面の遺構は近世の暗渠である。下面では遺構面は確認されたが、遺構は検出されなかった。遺構面上部に包含層も存在している。包含層から鎌倉時代の遺物が出土している。

B-31区

B-30区の南側に位置する2.5×10m東西方向のトレンチである。搅乱が激しく、東側の3m近くしか遺構面は残存していない。さらに北側も基礎によって損壊している。残存部にからうじて礎石状の石材が3点とピットが1基検出されており、その間に須恵器・瓦器・土師器が出土している。石材は20cm四方の小型の石材である。すべて地元の六甲花崗岩である。ピットは径30cmで深さ45cmを測るもので、柱痕跡は認められず、柱根を抜き取ったものと思われる。

B-32区

B地区の中央部西端にあたる地点で、約3×25mの東西トレンチである。新しい街路(23号線)部分に相当する。上層は盛土とやや厚い洪水堆積物に覆われている。遺構面は2面検出しているが、レベル的には大きな差はなく、数cmの差だけである。上面の遺構はガス管などで大きく損壊を受けており、からうじて耕作痕と思われる溝を検出しただけである。断面で噴砂を確認している。遺構面は他地点と同じ中世末

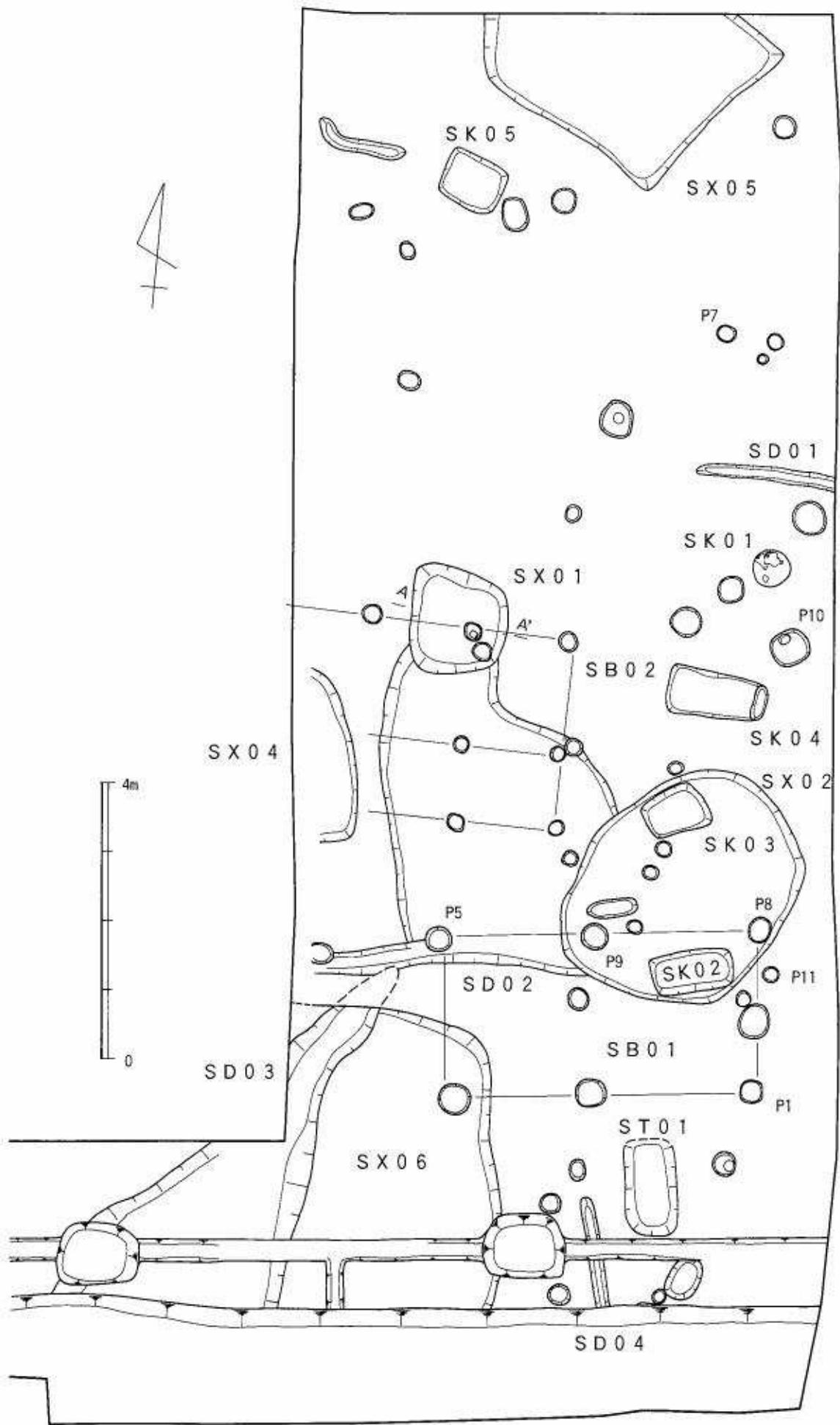


図88 B-27・28区 平面図

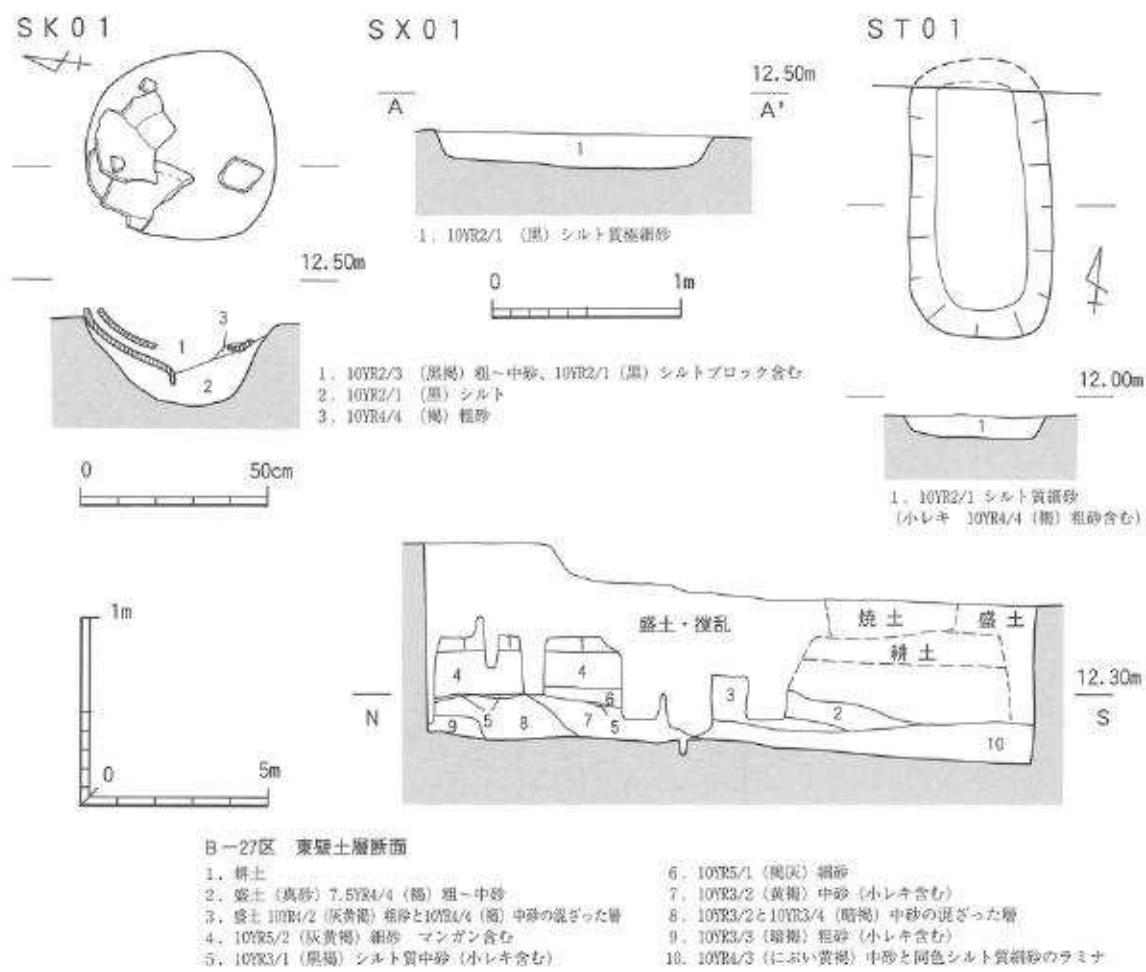


図89 B-27・28区 遺構実測図・土層図

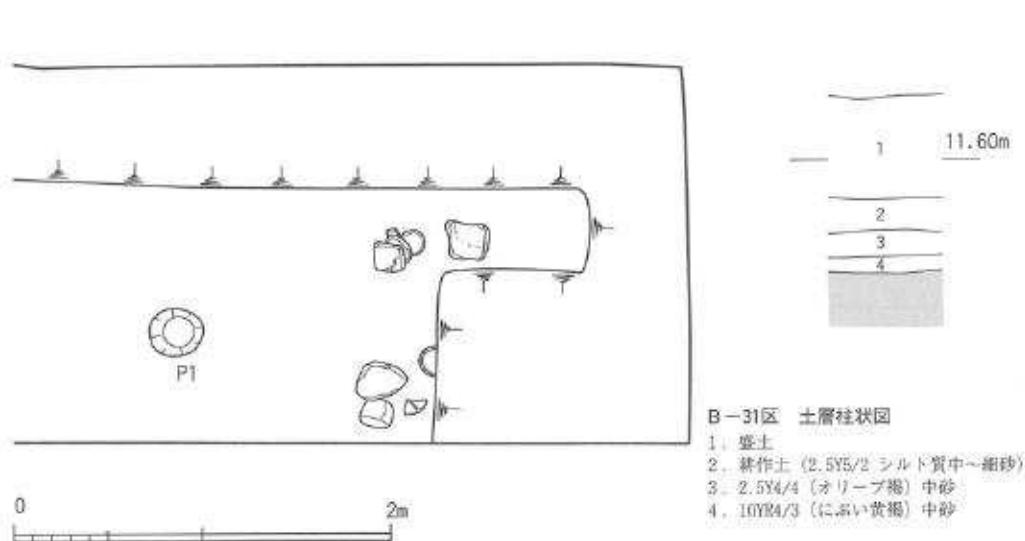
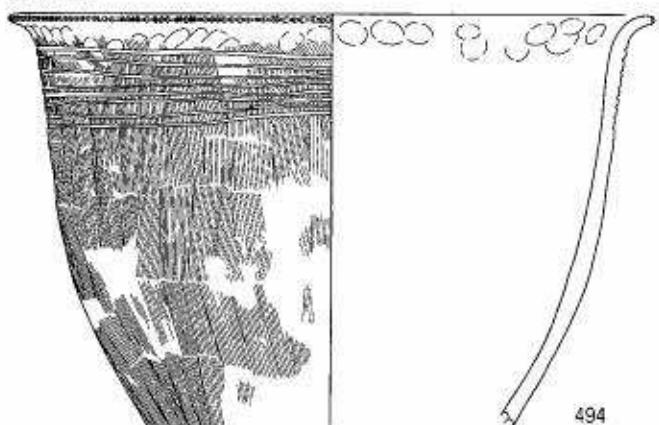
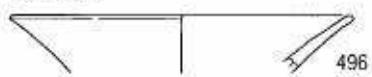


図90 B-31区 実測図

SK 01



SK 02



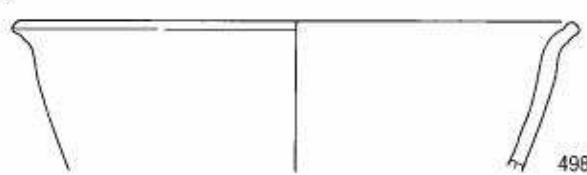
496

SB 01



497

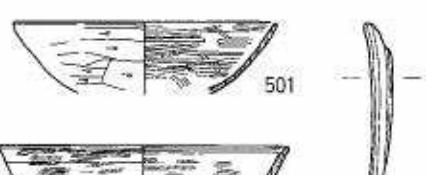
P 7



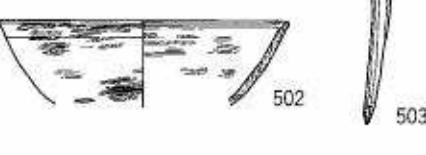
498



499



501



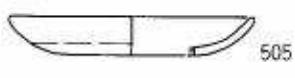
502

503

P 10



500



505



506

SD 01



507



508



509

0

20cm

図91 B-27区 遺物実測図

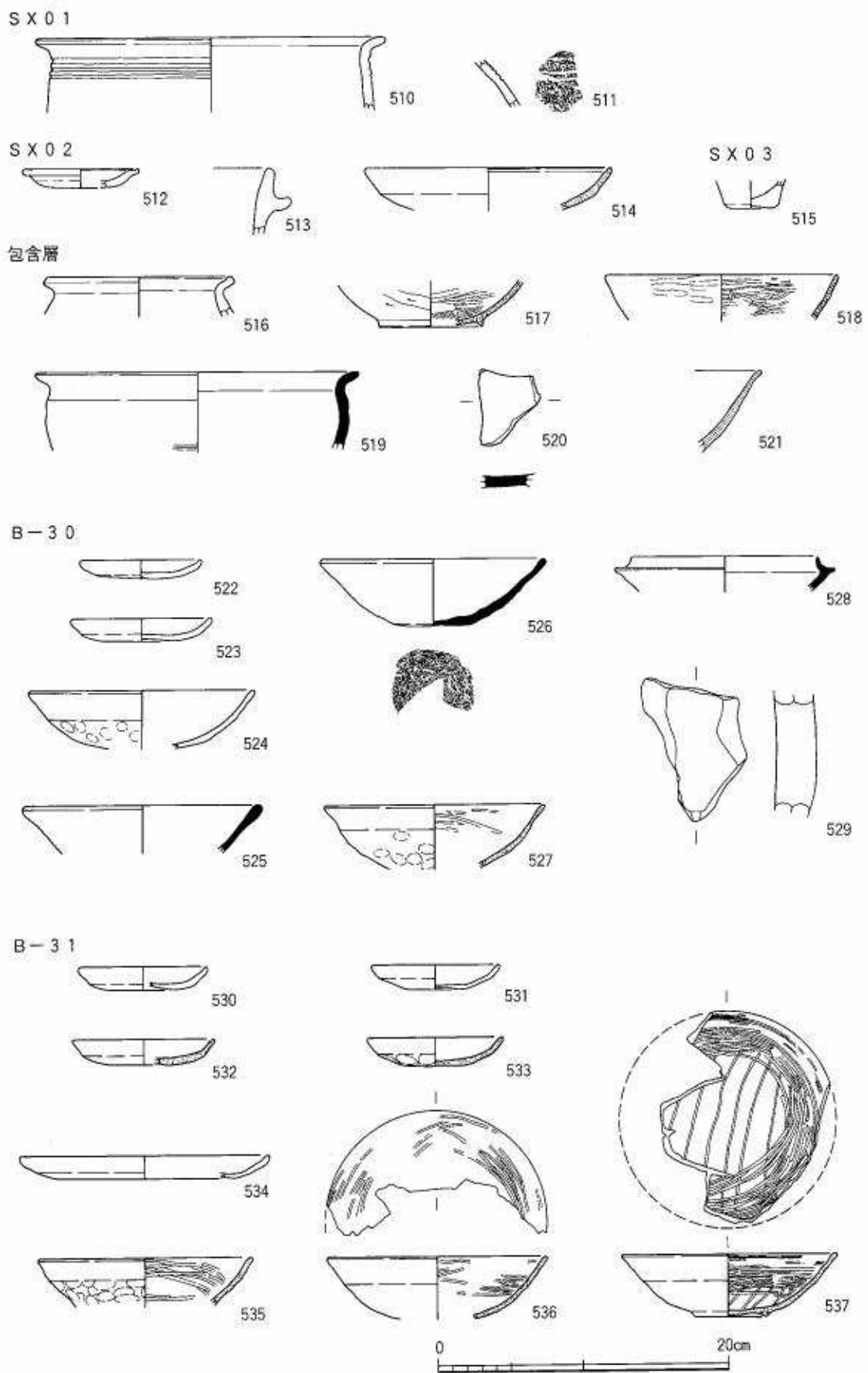


図92 B-27~31区 遺物実測図

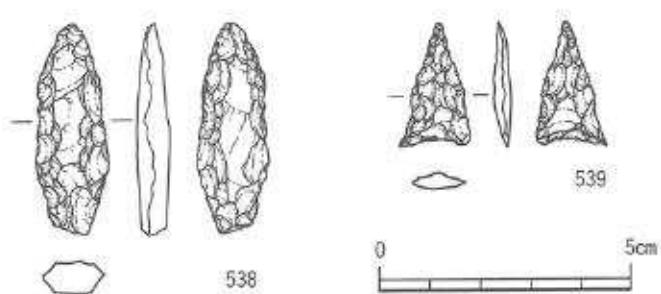


図93 B-27区 石器実測図

から近世にかけての遺構と思われる。下面の遺構は、旧河道だけである。南北方向に走るもので、幅9m確認している。部分的にシルトと砂の互層になっており、相当期間流路となっていたことが想定される。B-11区などで検出している河道と同じ大型の旧河道で、弥生時代前期遺構面の西端とも思われる。

C-30~35、38~42区

地盤改良の基礎部分の狭長な調査区で、成果はほぼ同じである。近世遺構面の下に黒色シルト層が広がっているが、明確な遺構は確認されていない。部分的に断面で噴砂を確認している。

C-36・37区

隣接地点で、近世の遺構が主に検出された。石組みの暗渠が北東から南西方向に蛇行して築かれている。花崗岩の角の取れた礫が多く使われている。南北方向の溝と柵跡（調査区西端で、西に延びる可能性あり）が確認されている。

D-2~4区

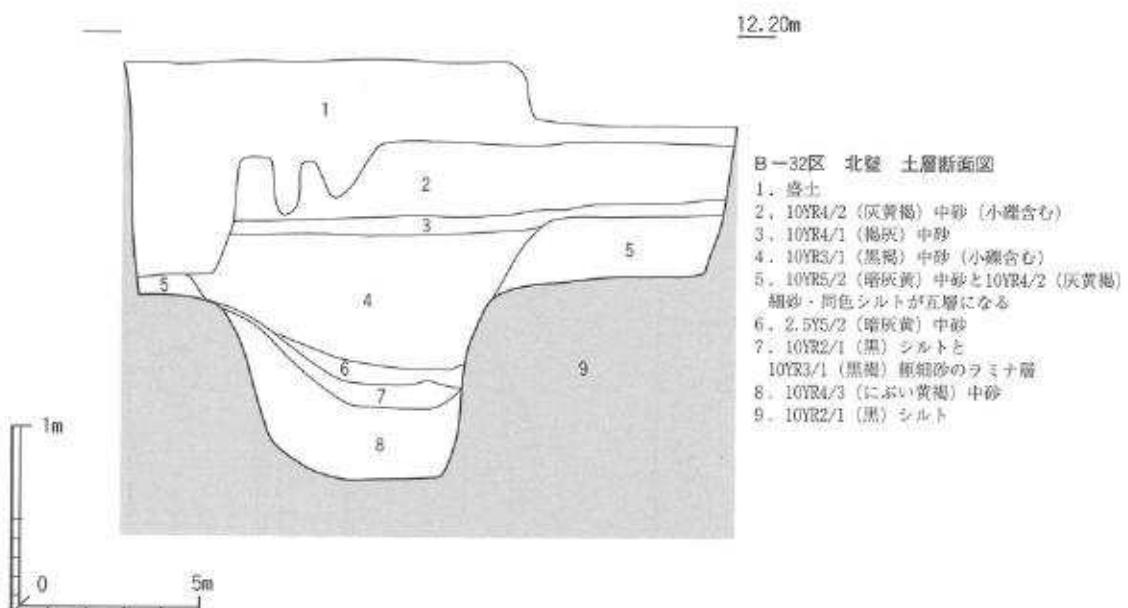


図94 B-32区 土層断面図

とともに明確な遺構は検出されず、安定した面も調査できなかった。須恵器、土師器、陶磁器が出土。



C-37区 南壁柱状図

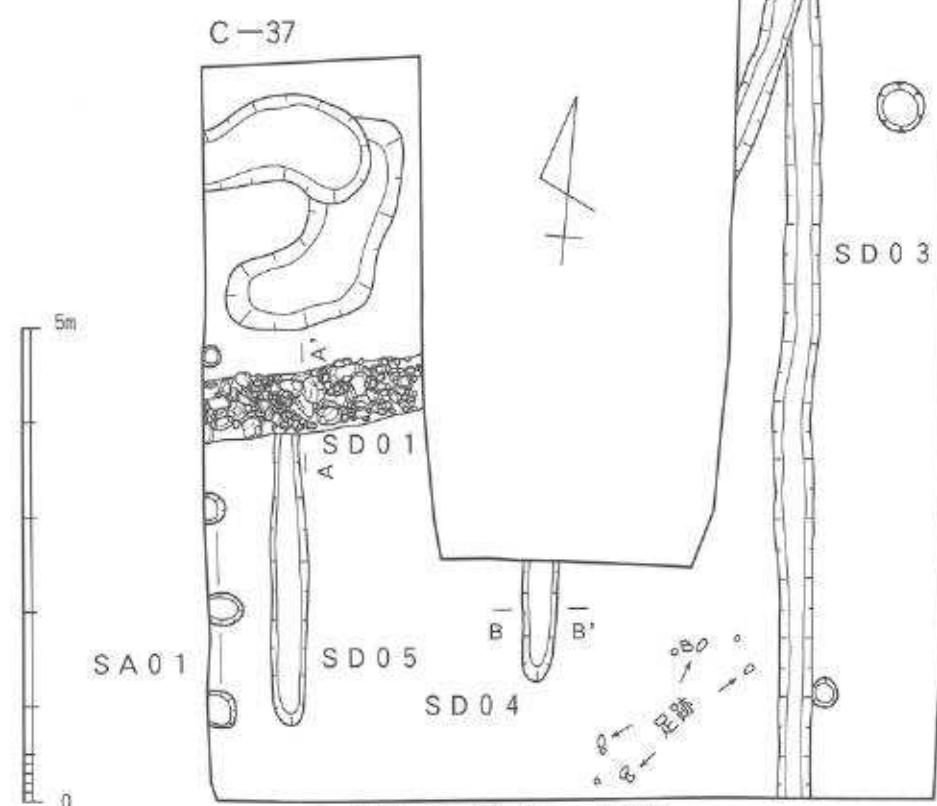
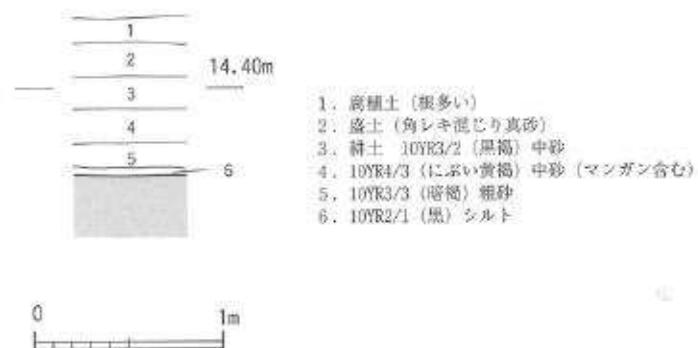


図95 C-36・37区 平面図

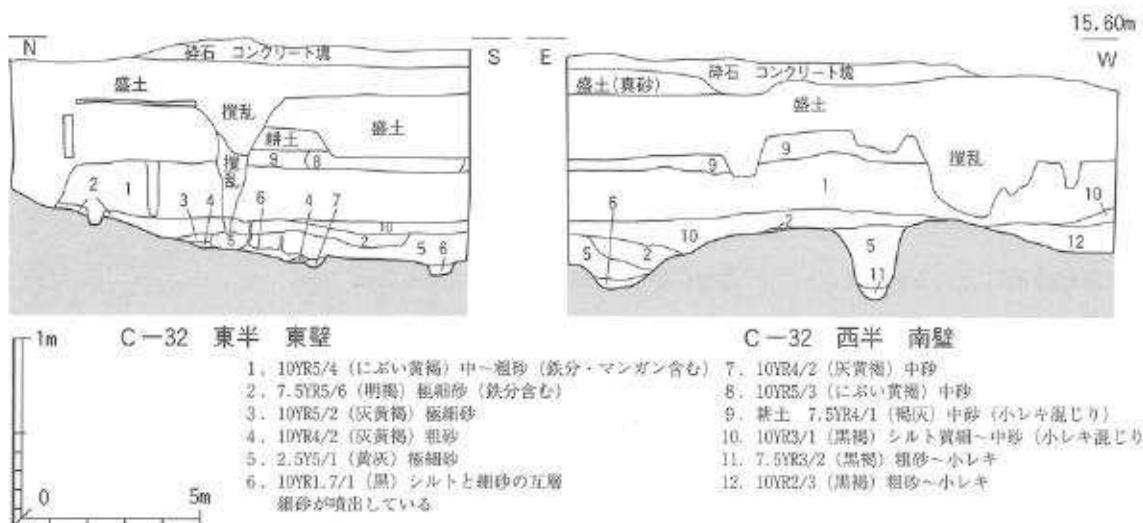


図96 C-32区 土層断面図

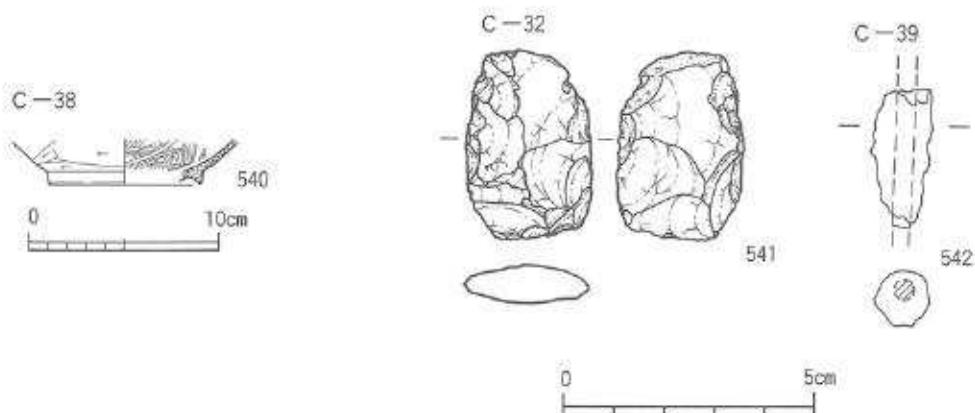


図97 C-32・38・39区 出土遺物実測図

IV 六条遺跡で検出された地震の痕跡

産業技術総合研究所主任研究員 寒川 旭

I. はじめに

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が発掘調査した、芦屋市清水町の六条遺跡において、遺構が変形された痕跡が認められたが、大地震に伴う激しい地震動によって生じた可能性が高いので、概要を紹介したい。

II. 遺構の変形

今回の調査において、遺構が上下に分割されて水平方向に変位した痕跡が複数の遺構について認められた（図1）。

まず、図2（写真1・2）について、説明の便宜上、地層をI～VI層に区分した。I層は近世の水田耕作土、II層はシルト層、III層は粗粒砂を含むシルト層（II・III層は中世の遺物を含む）、IV層は粗粒砂を含むシルト層、V層は極細粒砂～シルト層、VI層は礫（最大径10cmの花崗岩由来の亜円礫を含む）～粗粒砂層である。また、IV層とV層の間にレンズ状に堆積した砂層は、図の中～左が細～極細粒砂、右が最大径5mmの礫を含む粗粒砂で構成されている。



写真1 遺構3+9の変形（遠景、寒川撮影—以下同じ）

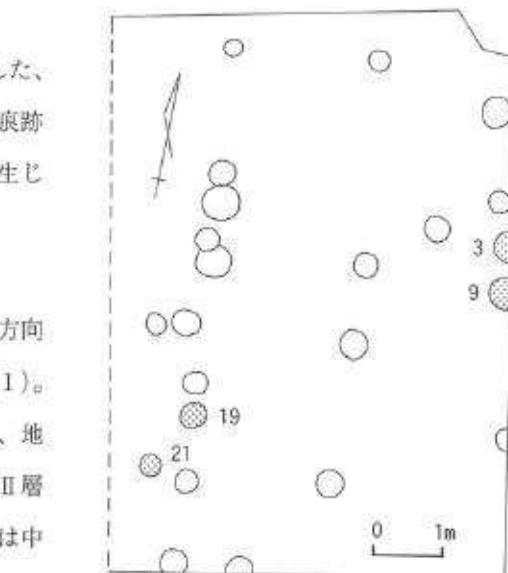


図1 位置図

調査区の東半分における遺構の分布（兵庫県教育委員会作成の図を簡略化）を示した。アミで示したのが、本稿で図示した遺構で、数字は遺構の番号（六条遺跡における通し番号）ある。



写真2 遺構3+9の変形（近景）

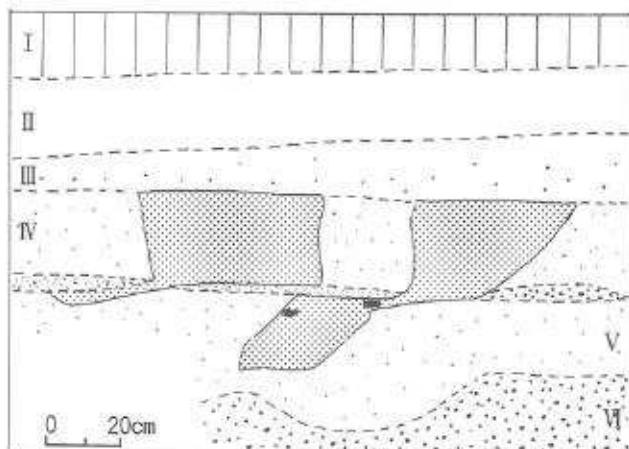


図2 遺構3+9の変形

アミで示したのが遺構の埋土、ドットの大きさは砂・礫の大きさを表現している（図3・4についても同じ）。図の左方向がN12°Wである。

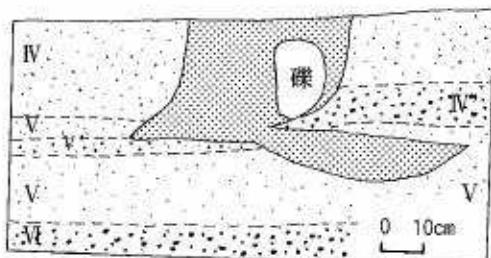


図3 遺構21の変形

図の右方向がN 20° Wである。

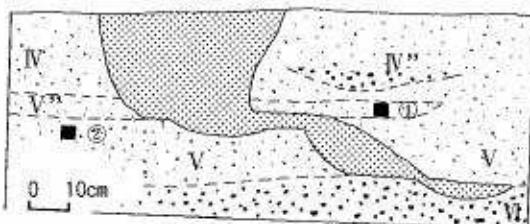


図4 遺構19の変形

図の右方向がN 10° Wである。図中に■で示したのは、粒度分析試料の採取位置。

図中でアミで示した2基の遺構について、左側の遺構3が最下部、右側の遺構9が中央で切断され、いずれも、上側の部分が図の右方向（南）へ向かって相対的に移動している。移動（変位）量は、遺構3の左端で27cm、遺構9の左端・右端ともに28cmとなり、いずれも27~28cmの変位量になる。

図3では、発掘調査の過程で、図1のI~III層に相当する地層が取り除かれており、IV~VI層を示した。層相は図1とやや異なり、IV層は礫（最大径1.2cmの花崗岩由来の亜円礫）をわずかに含む細~極細粒砂層である。IV層の下部に礫（最大径5mm）~粗粒砂層が見られIV'層とした。V層は極細粒~細粒砂層で、一部にレンズ状に含まれる粗~細粒砂層をV'層とした。VI層は最大径30cmの花崗岩由来の亜円礫を含む砂礫層である。

ここでも、遺構21が下部で切断され、図の左（S 20° E）方向に向かって上側が相対的に移動しており、変位量は遺構の左端で30cm、右端で41cmとなる。

図4でも、IV~VI層に区分され、IV層が粗粒砂を含む細粒砂層で、一部で礫（最大径8mm）~粗粒砂からなるIV"層を含んでいる。V層も粗粒砂を含む細粒砂層で、上端部にレンズ状に極細粒~細粒砂層（V"層）をふくんでいる。VI層は最大径12cmの亜円礫を含む砂礫層（亜角礫も少し含む）である。

ここでは、遺構19が2カ所で切断され、いずれも、図の左（S 10° E）方向に向かって上側が相対的に移動している。まず、V"層の下端に沿って約17cmの変位、ついでV層とVI層の境界に沿って約18cmの変位が生じている。

図5は、遺構19が変位した位置に堆積しているV"層とV層に関する粒度分析結果を示したものである。日本港湾協会（1789）にしめされた、砂の液状化しやすさの分類で見るといずれもAの「特に液状化の可能性あり」という範囲に入っている。

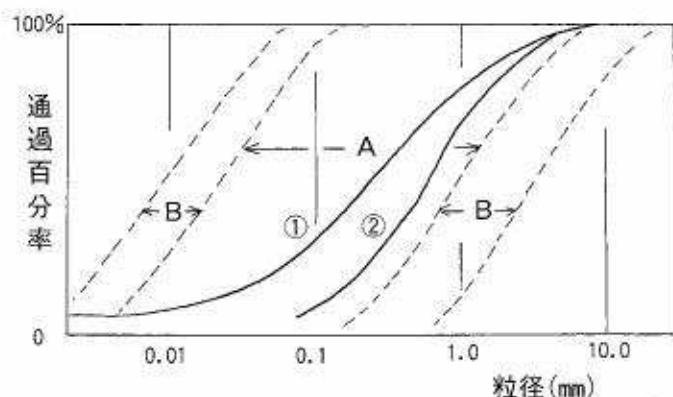


図5 砂層の粒度分析結果

試料の採取位置は図4に示した。Aは「特に液状化の可能性あり」、Bは「液状化の可能性あり」とされている（日本港湾協会、1979）

III. 考 察

六条遺跡における今回の調査区において、本稿で示した遺構の他、多くの遺構で同じような変形が認められている。これらはすべて、ほぼ水平に近い滑り面に沿って、遺構の上部が相対的に南方向へ移動する形になっている。寒川（2001b）で示したように、激しい地震動に伴って表層地盤が一定方向に向かってずれ動いた「側方移動」の痕跡と考えられる。遺構19・21では地層の境界に沿って、遺構3・9ではレンズ状に堆積した砂層や砂礫層に沿って変位が生じており、地層が上下に不連続になった位置で滑り動いたものと思われる。

遺構の埋土には、いずれも12世紀末から13世紀初頭にかけての遺物が含まれており、13世紀より後の大地震によって生じたものと考えられる。このように限定された年代で、当地域に激しい地震動を与えるものとして、1596（文禄5・慶長元）年9月5日に生じて京阪神・淡路島地域に激しい地震動をもたらした慶長伏見地震があげられる。図2においては、Ⅰ層とⅡ層の間が地震発生の年代になるので、当時の地表面から深さ約70cmの位置を境にして、上の地盤が滑り動いたことになる。

伏見地震は、大阪平野の北縁に沿う有馬-高槻構造線活断層系や、淡路島の東浦・野田尾・先山の各断層が活動して引き起こしたことが判明しているが、六甲山地南麓でも多くの地震跡が検出されており（寒川、2001a；寒川他、1999；阪神・淡路大震災と埋蔵文化財シンポジウム実行委員会編、2001：図6）、六甲断層系も活動した可能性が高い。

この遺跡から西に約6kmの位置にある神戸市東灘区の住吉宮町遺跡でも、奈良時代後期の井戸が上下に分断されて、上半分が南に1.9m移動した痕跡が認められており（写真3）、当遺跡と同様な地変が生じたものと思われる。芦屋市内でも、芦屋廃寺金堂跡の地割れ跡の解析結果から、この寺が伏見地震で倒壊した後に廃寺になった可能性が高いことがわかった（寒川他、2001）。また、寺田・業平の各遺跡でも液状化現象の痕跡が検出されている。



写真3 神戸市住吉宮町遺跡における井戸枠の変形
(神戸市教育委員会が発掘)



写真4 志紀遺跡における杭の切断
(大阪府教育委員会が発掘)
杭が上下に切斷されて、約20cm食い違っている。この遺跡の112本の杭の大半が、上半分が南に移動するような変形を受けている。

IV. まとめ

六条遺跡において、遺構が上下に分断されて、水平方向に移動した痕跡が多く認められた。これは、当時の地表面から1mたらずの深さにおいて、地層の境界に沿って滑り動いたもので、激しい地震動の産物と思われる。

このような変形を与えた地震として、1596年の伏見地震が考えられる。地盤が横方向に動いた側方移動の事例は、八尾市の志紀遺跡（大阪府教育委員会、1993：写真4、古墳時代初頭の南海地震による可能性大）、富山県福岡町の石名田木舟遺跡（富山県文化振興財團埋蔵文化財事務所編、2001：1858年の飛越地震による可能性大）でも認められているが、今後、大地震に伴う地盤災害の軽減を考える上での貴重な資料になるであろう。

本稿をまとめるに当たり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の大平茂氏には、遺構や遺物の年代を始め、多くのご教示を頂きました。心よりお礼申し上げます。

文 献

- 阪神・淡路大震災と埋蔵文化財シンポジウム実行委員会編（2001）震災を越えて。エピック社、208p.
- 大阪府教育委員会編（1993）志紀遺跡発掘調査概要Ⅲ、63p.
- 寒川 旭（2001a）地震 なまずの活動史。大巧社、173p.
- 寒川 旭（2001b）遺跡で検出された地震痕跡による古地震研究の成果。活断層・古地震研究報告、1、287-300.
- 寒川 旭・森岡秀人・竹村忠洋（2001）芦屋庵寺建物基壇と関わる地震痕跡。日本考古学、12、135-146
- 寒川 旭・菅本宏明・斎木 巍・内藤俊哉・藤井太郎（1999）阪神・淡路震災以降に神戸市内で検出された地震の痕跡。日本考古学協会第65回総会研究発表要旨、161-164.
- 富山県文化振興財團埋蔵文化財事務所編（2001）石名田木舟遺跡発掘調査報告書、924p.

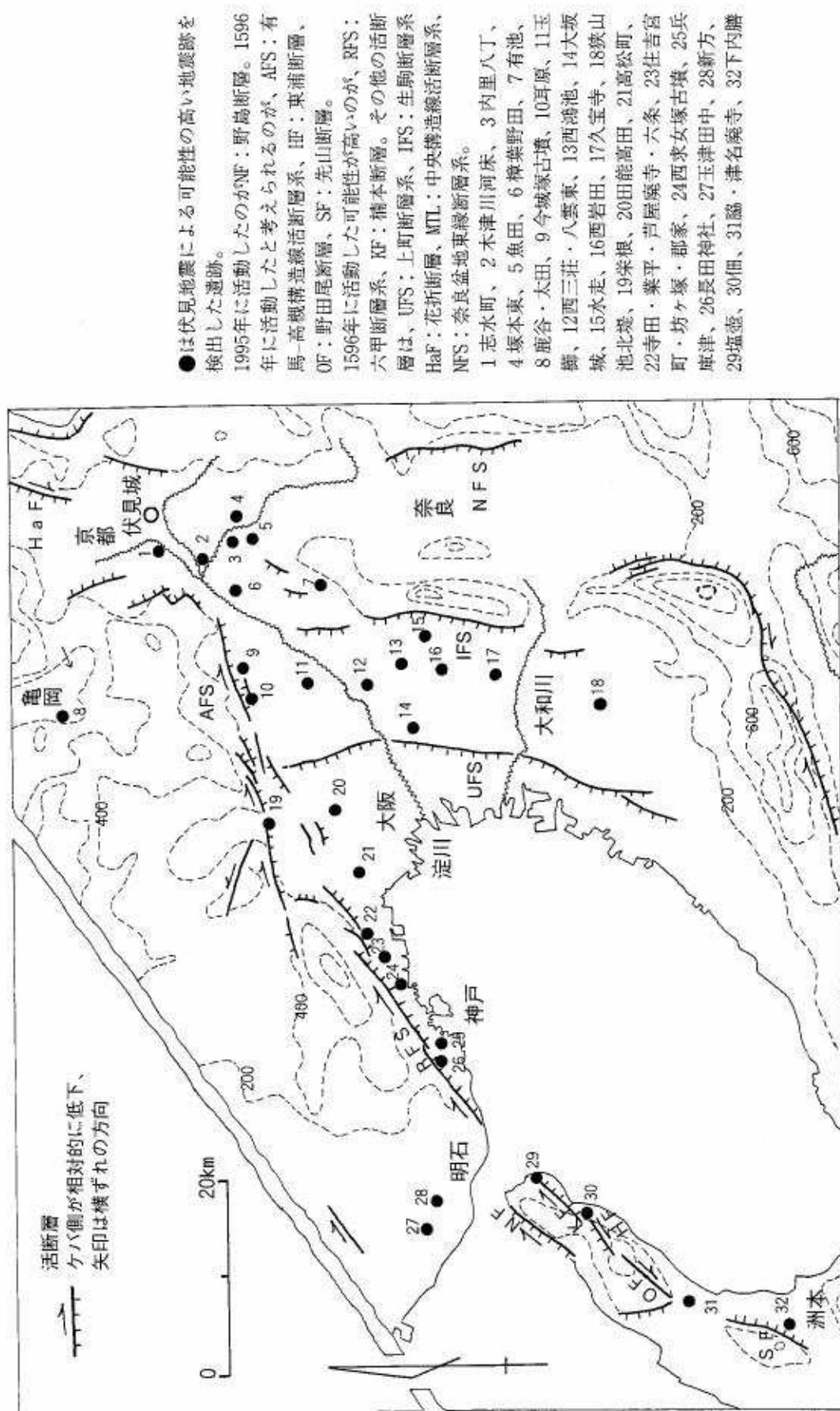


図6 大阪平野周辺の活断層と伏見地震の痕跡を検出した遺跡（寒川, 2001aより）

V おわりに

6カ年にまたがる六条遺跡の調査は、一応終了した。震災復興に伴う都市基盤整備公団施工の再開発が一段落しただけで、これから住宅建設等の工事などが行われるはずで、活力ある新しい街に生まれ変わるものと期待される。1995年1月17日午前5時46分から8年も経ったことになる。震災復興のために埋蔵文化財の専門職員も多数応援に兵庫県に来て戴いた。平成9年度に震災復興事業の1つとして文化財補助金で六条遺跡の範囲確認調査を手掛けたのが、震災から2年半過ぎた夏である。兵庫県岡田、岐阜県三輪両氏が担当者として調査が開始された。芦屋西部の再開発予定地域は震災の被害の甚大なところで、まだまだ傷跡が残されたままであった。ブルーシートもまだ目立つ中でその隙間に確認グリッドを設置したもので、大まかな遺跡範囲が確定した。翌年から支援職員もすべて帰任され、兵庫県の担当職員の調査に戻ったが、何人かの復興調査専従職員は配置されていた。トレント調査で遺跡範囲が決定し、西からA・B・C区と呼称し、翌平成11年度から4カ年で街路部分を中心に本発掘調査を実施した。総面積は5600m²余りになっているが、幅1mの狭長な調査区も多々あり、今までのニュータウン建設などの県・公団間の委託調査としては異例で、六条遺跡以降大きな変化となった。小面積の調査でも、細かく地面の下を調査すると、ミクロの視点で地形の変化が看取され、大きな成果を得た。それを略述する。

1. 出土遺物は縄文時代晚期から近世・近代までのものがあるが、時期的に差がある。縄文土器は黒色シルト層（礫混じり）の上面で確認され、C区西側を中心まとまって出土しているが、少数ではあるがA区でも確認されている。
2. 弥生時代前期の遺構はB区中央から東側にかけて検出されている。南側の低位段丘面の地形変換点近くで墓域になっている。方形周溝墓と思われる遺構2基と土器棺墓1基、木棺墓の可能性が高い土壙を1基検出している。B区北側の旧河道からも土器は出土しており、広範囲な遺跡の広がりを想像させる。前期新段階を中心とするが、古い時期も含まれている。東灘区北青木遺跡よりやや古いかもしれない。突帯文土器も1点ある。前期の木器の出土も注目される。遺跡例が少ないこともあるが、それでも木製壺や弓・ねずみ返しは興味深い。木製壺は県下で2遺跡3例目である。ねずみ返しとすれば初例になる。
3. 弥生時代中期の土器は出土していない。前期の単純遺跡と考えられ、移動したものと思われる。後期になると、出土遺物量が増加していく。北側に同時期の遺跡が多数あることから、旧河道に含まれるのは当然かもしれないが、周辺の遺跡群の一部として遺跡の規模を拡大させたことは確実である。
4. 古墳時代にかけても、六条遺跡内では遺物は検出されるものの、性格の明らかな遺構は検出されていない。旧河道と溝が調査されている。ただ、その面に多数の足跡が検出されている。活動の場として当時の人々が息吹いているのは確かである。旧河道に平行に走る溝は、水田経営の上で必要なものだったかもしれない。
5. 奈良時代も古墳時代と変化のない状況であるが、奈良時代末ごろから平安時代はじめになるとC区に遺構が築かれるようになる。A区でも竈などの遺物が出土している。A区での芦屋市教育委員会の調

査地点から銅帯が出土しているのも、六条遺跡の性格を表すものである。森岡秀人氏はC区あたりを芦屋驛家の推定地とされている。瓦の出土や遺構の検出は、その兆しを示すものとして注目される。ただ、西側は洪水堆積物が厚く広く存在していることから、C区北東部の狭い範囲にのみ、驛家などを求める地域が限られているのではなかろうか。

6. 平安時代後期になると、遺構が増加しはじめる。遺跡全体に生活痕跡が窺われるようになる。14世紀にかけて盛行する。特に調査面積の広いこともあるA区は、遺跡の内容が他区よりは詳しくわかっている。園池を伴う集落で、A区東側を旧東川用水があり、この部分を遺跡の東端としている。A区北側には北西から南東方向の土石流が見られ、これによって地形が安定したものと思われ、遺構が営まれはじめたと思われる。掘立柱建物跡が7棟検出されている。規模は通常のもので、傑出したものはない。

7. 池跡は特記される遺構である。出土遺物も京都系の土師器皿が多くあり、その性格を示している。ほぼ近い時期に六条遺跡周辺で池が築かれている。他の例では神戸市北区二郎宮の前遺跡は作法通りの本格的なものであり、神戸市西区玉津川中遺跡は大規模な池である。神戸市兵庫区祇園遺跡は福原京関連の池で、すべてランクが異なっている。池の形状は不定形で遺水と排水部が想定される程度で構造は不明だが、遺物は祇園遺跡と共通するものがある。墨書き器も数点出土している。

8. 池跡の南側に接して築かれた可能性のある柱穴から3枚の蘇民将来札が出土している。文字は同文で「蘇民将来公子孫宅也」と記されている。2枚は重ねて柱穴沿いに頭部を下にして入れられていた。他の1点は離れていたが、本来は重ねていたかもしれない。柱穴掘り方でも根固めの石の下に入れられた遺物である。兵庫県内では6遺跡9例目である。

9. 調査地各地点で地震の痕跡を確認している。同域で噴砂を検出しているが、A-25区では掘立柱建物跡の柱穴が地震によってずれた例を調査できた。第IV章で寒川旭氏に玉稿を賜ったので参照ください。すべて伏見地震によるものと思われる。

10. 江戸時代から近代にかけても各地点で遺構が検出されている。洪水痕跡と耕作地として利用されていたようである。溝状のスキ溝と半月形の痕跡がある。その後、屋敷地と変化したようで近世～近代の礎石建物跡も調査している。礎石に刻印が刻まれている。

このように縄文晩期以降現代に至るまで綿々と歴史の痕跡があきらかになった。今後、この1つ1つについて考究できればと思っているが、取り敢えず最低限の事実提示にとどまることが惜しまれる。これから、周辺の調査例も含めて検討戴ければ幸いである。

震災後の再開発を中心とする調査で六条遺跡の内容も明らかになりつつある。これからは、遺跡範囲が広いこともあり、性格が異なることからも、A地区を六条遺跡、B地区を清水町遺跡、C・D地区を前田町遺跡と呼称していることをご了解戴きたい。県・市の報告書などでそのように記載するであろうが、今回報告した六条遺跡と同じ遺跡であるので、混同なきようお願いします。本報告刊行時には、再開発事業も終わりになろうとしているが、震災復興事業は端緒であり、六条遺跡の検討・研究もこれから行われるものと期待もし、また担当者として自分にも課したいと思っている。両方ともに、順調な発展を望むものである。

(渡辺)